鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)

── 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ ──

農業開発総合センター遺跡群Ⅰ（第1分冊）

KUBOMINOUE
窪見ノ上遺跡

TATEISIGAHARA
建石ヶ原遺跡

KUSATO
古里遺跡

NISHIHARA
西原遺跡

第2分冊
FUKIAGEKONAKABARU
吹上小中原遺跡
UMAMEGURI
馬廻遺跡
SANTANMUTA
三反牟田遺跡

第3分冊
図版編

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査前風景（東上空から）

建石ヶ原遺跡空中写真

カラー図版２

古里遺跡空中写真

吹上小中原遺跡空中写真

吹上小中原遺跡 4 号住居跡土器出土状況

窪見ノ上遺跡出土縄文時代早期土器一括

吹上小中原遺跡土器溜り出土土器一括

カラー図版 4

吹上小中原遺跡 4 号住居跡内出土土器一括

目　次

巻頭カラー

1　調査前風景（東上空から）
2　建石ヶ原遺跡空中写真
3　古里遺跡空中写真
4　吹上小中原遺跡空中写真
5　吹上小中原遺跡４号住居跡土器出土状況
6　窪見ノ上遺跡出土縄文時代早期土器一括
7　吹上小中原遺跡土器溜り出土土器一括
8　吹上小中原遺跡４号住居跡内出土土器一括

第１分冊

第Ⅰ章　調査の経過
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第Ⅲ章　層位
第Ⅳ章　窪見ノ上遺跡
第Ⅴ章　建石ヶ原遺跡
第Ⅵ章　古里遺跡・西原遺跡

第２分冊

第Ⅶ章　吹上小中原遺跡
第Ⅷ章　馬廻遺跡
第Ⅸ章　三反牟田遺跡

第３分冊

図版編

第１分冊目次

序文
報告書抄録
例言

第Ⅰ章　調査の経過 ……1
　第１節　調査に至るまでの経過 ……1
　第２節　調査の組織 ……1
　第３節　調査の経過 ……4
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 ……7
　第１節　遺跡の位置 ……7
　第２節　周辺遺跡 ……8
　　１　吹上町 ……8
　　２　金峰町 ……8
第Ⅲ章　層位 ……11
第Ⅳ章　窪見ノ上遺跡 ……12
　第１節　調査概要 ……12
　　１　遺跡の立地及び調査概要 ……12
　　２　遺跡の層序 ……14
　第２節　発掘調査の成果 ……16
　　１　旧石器時代の調査 ……16
　　２　縄文時代早期の調査 ……16
　　（１）遺構 ……16
　　（２）遺物 ……16
　　３　縄文時代前・中・後期の調査 ……112
　　（１）遺構 ……112
　　（２）遺物 ……112
　　４　中・近世の調査 ……115
　　（１）遺構 ……115
　　（２）遺物 ……115
　第３節　小結 ……116
第Ⅴ章　建石ヶ原遺跡 ……120
　第１節　調査概要 ……120
　　１　遺跡の立地及び調査概要 ……120
　　２　遺跡の層序 ……120
　第２節　発掘調査の成果 ……123
　　１　旧石器時代（Ⅷ～Ⅶ層）の調査 ……123

（1）遺構 ……123
（2）遺物 ……124
2　縄文時代早期（Ⅴ～Ⅳ層）の調査 ……128
（1）遺構 ……128
（2）遺物 ……131
3　縄文時代前期～晩期(Ⅲ～Ⅱ層)の調査 ‥143
（1）遺構 ……143
（2）Ⅲ～Ⅱ層の遺物 ……143
4　弥生時代～古代（Ⅲ～表層）の調査 ‥‥160
（1）遺構 ……160
（2）弥生時代の遺物 ……160
（3）古墳時代の遺物 ……161
（4）古代の遺物 ……161
5　中世（Ⅱ層～表層）の調査 ……163
（1）遺構 ……163
（2）遺物 ……169
第3節　小結 ……169
付編　科学分析結果報告 ……175
第Ⅵ章　古里・西原遺跡 ……181
第1節　古里遺跡 ……181
1　遺跡の立地及び調査概要 ……181
2　遺跡の層序 ……181
3　発掘調査の成果 ……185
（1）縄文時代の調査 ……185
①　調査の概要 ……185
②　遺物 ……185
（2）古墳時代の調査 ……191
遺物 ……191
（3）中世の調査 ……192
①　調査の概要 ……192
②　遺構 ……192
③　遺物 ……205
第2節　西原遺跡 ……210
1　遺跡の立地 ……210
2　調査の概要 ……210
第3節　小結 ……210

挿図目次

第1図　農業開発総合センター内遺跡群Ⅰ図 ‥‥‥7
第2図　周辺遺跡図（吹上町・金峰町）……10
第3図　模式柱状図 ……11

窪見ノ上遺跡

第1図　窪見ノ上遺跡位置図（1／25,000）……12
第2図　周辺地形図及びグリッド図 ……13
第3図　土層断面図1 ……14
第4図　土層断面図2 ……15
第5図　Ⅴ層遺構配置図 ……17
第6図　集石遺構1 ……18
第7図　集石遺構2 ……19
第8図　集石遺構3 ……20
第9図　集石遺構4 ……21
第10図　集積遺構内出土遺物1 ……22
第11図　集積遺構内出土遺物2 ……23
第12図　Ⅴ層遺物出土状況 ……24
第13図　Ⅰ類土器・Ⅲ類土器分布状況 ……25
第14図　Ⅰ類土器1 ……27
第15図　Ⅰ類土器2 ……28
第16図　Ⅰ類土器3 ……29
第17図　Ⅰ類土器4 ……30
第18図　Ⅰ類土器5 ……31
第19図　Ⅰ類土器6 ……32
第20図　Ⅰ類土器7 ……33
第21図　Ⅰ類土器8 ……34
第22図　Ⅰ類土器9 ……35
第23図　Ⅰ類土器10 ……36
第24図　Ⅰ類土器11 ……37
第25図　Ⅰ類土器12 ……38
第26図　Ⅰ類土器13 ……39
第27図　Ⅰ類土器14 ……40
第28図　Ⅰ類土器15 ……41
第29図　Ⅰ類土器16 ……42
第30図　Ⅰ類土器17 ……43
第31図　Ⅰ類土器18 ……44
第32図　Ⅰ類土器19 ……45
第33図　Ⅰ類土器20 ……46
第34図　Ⅱ類土器1 ……50
第35図　Ⅱ類土器2 ……52
第36図　Ⅲ類土器1 ……53
第37図　Ⅲ類土器2 ……54
第38図　Ⅲ類土器3 ……55

第39図　Ⅲ類土器４ ……56
第40図　Ⅲ類土器５ ……57
第41図　Ⅲ類土器６ ……58
第42図　Ⅲ類土器７ ……59
第43図　Ⅳ類土器１ ……61
第44図　Ⅳ類土器２ ……62
第45図　Ⅴ類土器１ ……63
第46図　Ⅴ類土器２ ……64
第47図　Ⅴ類土器３ ……65
第48図　Ⅴ類土器４ ……66
第49図　Ⅵ類土器 ……68
第50図　Ⅶ類土器１ ……70
第51図　Ⅶ類土器２ ……71
第52図　Ⅶ類土器３ ……72
第53図　Ⅶ・Ⅷ類土器 ……73
第54図　縄文時代早期出土石器１ ……75
第55図　縄文時代早期出土石器２ ……76
第56図　縄文時代早期出土石器３ ……77
第57図　石鏃の分類図 ……78
第58図　石鏃分析・分布図 ……79
第59図　縄文時代早期出土石器４ ……80
第60図　縄文時代早期出土石器５ ……81
第61図　縄文時代早期出土石器６ ……82
第62図　縄文時代早期出土石器７ ……83
第63図　縄文時代早期出土石器８ ……85
第64図　縄文時代早期出土石器９ ……87
第65図　縄文時代早期出土石器10 ……88
第66図　縄文時代早期出土石器11 ……89
第67図　縄文時代早期出土石器12 ……90
第68図　縄文時代早期出土石器13 ……91
第69図　縄文時代早期出土石器14 ……92
第70図　縄文時代早期出土石器15 ……94
第71図　縄文時代早期出土石器16 ……95
第72図　縄文時代早期出土石器17 ……96
第73図　縄文時代早期出土石器18 ……97
第74図　縄文時代早期出土石器19 ……98
第75図　縄文時代早期出土石器20 ……99
第76図　縄文時代早期出土石器21 ……100
第77図　縄文時代早期出土石器22 ……101
第78図　縄文時代早期出土石器23 ……102
第79図　縄文時代早期出土石器24 ……103
第80図　縄文時代早期出土石器25 ……104
第81図　縄文時代早期出土石器26 ……105
第82図　縄文時代早期出土石器27 ……106
第83図　縄文時代早期出土石器28 ……107
第84図　縄文時代早期出土石器29 ……108
第85図　縄文時代早期出土石器30 ……109
第86図　Ⅸ類土器 ……111
第87図　Ⅹ類・Ⅺ類土器 ……112
第88図　Ⅱ・Ⅲ層出土石鏃 ……113
第89図　Ⅲ層出土石器 ……114
第90図　古道遺構 ……115
第91図　中世・近世遺構配置図 ……115

建石ヶ原遺跡

第１図　建石ヶ原遺跡位置図（１／25,000）……120
第２図　周辺地形図及びグリッド図 ……121
第３図　遺跡土層断面図 ……122
第４図　土坑 ……123
第５図　Ⅶ層遺構配置図 ……123
第６図　Ⅶ層遺物出土状況 ……125
第７図　旧石器実測図１ ……126
第８図　旧石器実測図２ ……127
第９図　縄文早期土坑 ……128
第10図　縄文時代早期遺構配置図 ……128
第11図　縄文時代遺物出土状況 ……129
第12図　Ⅰ類土器 ……132
第13図　Ⅱ類土器 ……133
第14図　Ⅲ類土器１ ……134
第15図　Ⅲ類土器２・Ⅳ類土器 ……135
第16図　Ⅴ類土器 ……136
第17図　Ⅵ類土器 ……137
第18図　Ⅶ類土器 ……138
第19図　縄文時代早期出土石器１ ……140
第20図　縄文時代早期出土石器２ ……141
第21図　縄文晩期遺構（溝状遺構） ……144
第22図　Ⅷ類土器１ ……146
第23図　Ⅷ類土器２ ……147
第24図　Ⅸ類土器 ……148
第25図　Ⅹ類土器 ……149
第26図　Ⅺ類土器 ……150
第27図　Ⅻ・ⅩⅢ類土器 ……151
第28図　ⅩⅣ類土器 ……152
第29図　ⅩⅤ類土器 ……153
第30図　縄文前期～晩期出土石器１ ……156
第31図　縄文前期～晩期出土石器２ ……157
第32図　縄文前期～晩期出土石器３ ……158
第33図　縄文前期～晩期出土石器４ ……159
第34図　古墳時代遺構配置図 ……160
第35図　古墳時代住居 ……161

第36図　弥生～古墳時代土器及び古代の須恵器 ‥162
第37図　弥生時代石器 ……162
第38図　中世溝状遺構１ ……164
第39図　中世溝状遺構２ ……165
第40図　中世溝状遺構３ ……166
第41図　中世溝状遺構４ ……167
第42図　中世溝状遺構５～９ ……168
第43図　中世溝状遺構10 ……169
第44図　中世溝状遺構11 ……170
第45図　中世溝状遺構12 ……171
第46図　中世方形周溝（墓）及び遺構内出土遺物 172
第47図　集石遺構 ……173
第48図　中世集石遺構配置図 ……173
第49図　中世白磁・青磁 ……174
付図１　縄文晩期遺構及び遺物出土状況
付図２　中世遺構配置図

古里・西原遺跡

第１図　古里・西原遺跡位置図（１／25,000）‥‥181
第２図　周辺地形図及びグリッド図 ……182
第３図　土層断面図 ……183
第４図　古里遺跡全遺物出土状況図 ……184
第５図　縄文時代遺物出土状況（掲載分）……186
第６図　縄文時代早期・前期出土土器 ……187
第７図　縄文時代晩期出土土器 ……188
第８図　縄文時代出土石器１（石鏃・石核）……189
第９図　縄文時代出土石器２（砥石・打製石斧）‥189
第10図　古墳時代出土土器 ……191
第11図　古墳時代遺物出土状況（掲載分）……191
第12図　中世遺構配置図 ……193
第13図　中世遺物出土状況（掲載分）……194
第14図　１号掘立柱建物跡 ……195
第15図　３号掘立柱建物跡 ……196
第16図　４号掘立柱建物跡 ……197
第17図　５号掘立柱建物跡 ……198
第18図　６号掘立柱建物跡 ……199
第19図　９号掘立柱建物跡 ……200
第20図　10号掘立柱建物跡 ……201
第21図　12号掘立柱建物跡 ……202
第22図　溝状遺構及び断面図 ……204
第23図　中世出土遺物１ ……206
第24図　中世出土遺物２ ……207
第25図　中世出土遺物３ ……208
第26図　中世出土遺物４ ……209

第２分冊　小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田遺跡

第３分冊　図版

第２分冊目次

第Ⅶ章　吹上小中原遺跡 ……1
第１節　調査概要 ……1
１　遺跡の立地及び調査概要 ……1
２　遺跡の層序 ……1
第２節　発掘調査の成果 ……6
１　旧石器時代の調査 ……6
（１）遺構 ……6
（２）遺物 ……6
２　縄文時代草創期の調査 ……8
３　縄文時代早期の調査 ……14
４　縄文時代前期の調査 ……40
５　縄文時代後期の調査 ……52
６　縄文時代晩期の調査 ……55
７　弥生時代の調査 ……77
（１）遺構 ……77
（２）遺物 ……77
８　古墳時代の調査 ……82
（１）遺構 ……82
（２）遺物 ……123
９　古代の調査 ……138
（１）遺構 ……138
（２）遺物 ……138
10　中世の調査 ……139
（１）遺構 ……139
第３節　小結 ……150
第Ⅷ章　馬廻遺跡 ……152
第１節　調査概要 ……152
１　遺跡の立地及び調査概要 ……152
第２節　発掘調査の成果 ……152
第３節　小結 ……153
第Ⅸ章　三反牟田遺跡 ……159
第１節　調査概要 ……159
１　遺跡の立地及び調査概要 ……159
第２節　発掘調査の成果 ……159
第３節　小結 ……159

※２分冊挿図目次及び３分冊の図版目次は，各分冊に記載。

序　　文

鹿児島県は，「鹿児島県総合基本計画」に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として鹿児島県農業開発総合センターを建設することとしました。鹿児島県立埋蔵文化財センターは，建設事業に先立って，平成８年から８年間にわたって埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

この報告書は農業開発総合センター建設予定地内に存在する24遺跡の内，吹上町に所在する７遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって，旧石器時代から中世までの各時代の遺構・遺物が発見されています。窪見ノ上遺跡では，縄文時代早期前葉の良好な資料と石斧製作の痕跡ではないかと思われる資料が出土しています。吹上小中原遺跡では，縄文時代早期の石槍が３本まとまって出土する石斧埋納遺構や，古墳時代の集落跡から畿内系初期須恵器が出土するなど貴重な情報が得られています。また，建石ヶ原遺跡では，縄文時代晩期の道の跡と思われる遺構や中世の方形周溝墓が発見され，古里遺跡では，中世の集落（掘立柱建物跡12棟）と溝状遺構が発見されています。

この調査の成果が地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助になれば幸いです。

最後に，調査に御協力をいただいた県農政部農業開発総合センター整備事務局をはじめ，金峰町・吹上町の関係部局，そして発掘調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年３月

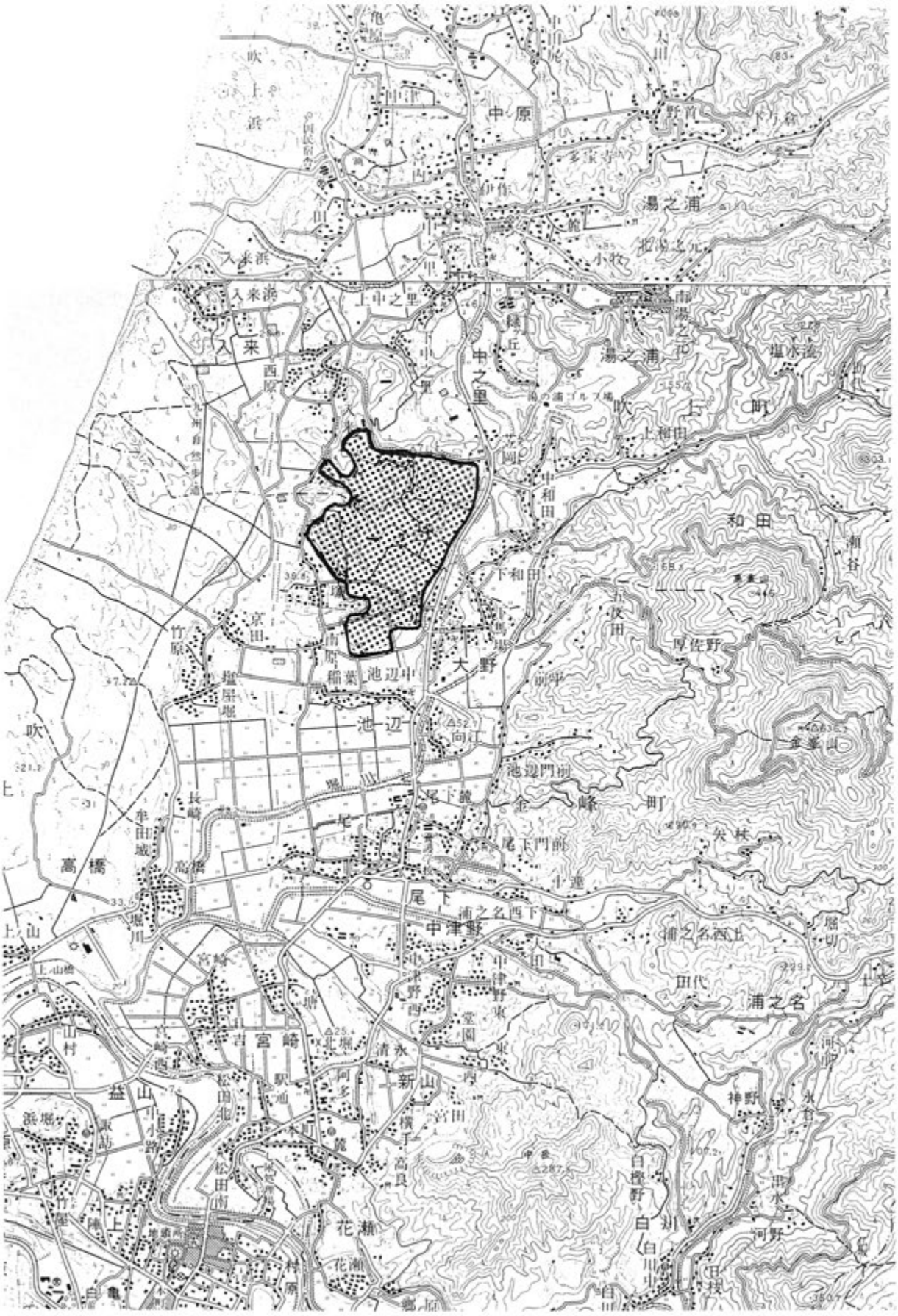
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　木　原　俊　孝

報告書抄録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたーいせきぐん　　くぼみのうえいせきほか
書名	農業開発総合センター遺跡群Ⅰ（窪見ノ上遺跡外）
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	83
編著者名	中村耕治・岩屋高広・廣　栄次・松下建生・川元禎久
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175－1　　℡0995－48－5811
発行年月日	2005年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
くぼみのうえ 窪見ノ上	かごしまけん 鹿児島県	46367	34-84-0	31°29′13″	130°20′30″	2003.5~2003.9	35.490	農業開発総合センター建設
たていしがはら 建石ヶ原	ふきあげちょう 吹上町		34-120	31°28′43″	130°21′06″	1999·2000	19.000	
くさと 古里			34-119	31°28′43″	130°21′03″	1999·2000	15.160	
にしはら 西原			34-104-0	31°28′43″	130°21′00″	2000		
ふきあげこなかばる 吹上小中原			34-105-0	31°29′03″	130°21′09″	2000·2001	28.000	
うまめぐり 馬廻			34-107-0	31°29′01″	130°20′34″	2001	31.930	
さんたんむた 三反牟田			34-106-0	31°29′09″	130°20′41″	1999	31.960	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
窪見ノ上		旧石器時代		剥片	
		縄文時代			
		（早期）	集石・集積7基	石鏃・石槍・石斧・スクレイパー・磨石・石皿・岩本式土器・前平式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・中原式土器・押型文土器	
		（前期）		曽畑式土器	
		（中期）		春日式土器	
		（後期）		指宿式土器	
建石ヶ原		旧石器時代	土坑・ブロック5基	マイクロブレイド·三稜尖頭器	
		縄文時代			
		（草創期）		土器・石鏃	
		（早期）		前平式土器·石坂式土器·桑ノ丸Ⅲ類土器	
		（後期）		指宿式土器	
		（晩期）	溝状遺構	入佐式土器	
		古墳	竪穴住居跡1基		
		中世	方形周溝墓	金具	
			硬化面・溝		
古里		縄文時代			
		（晩期）			
		中世	掘立柱建物跡12棟	土師器·須恵器·陶磁器·滑石製石鍋	
			溝状遺構		
西原		縄文時代			
吹上小中原		旧石器時代	落し穴	細石刃・細石核・剥片	
		縄文時代			
		（草創期）	集石・石鏃製作跡	土器・石鏃・叩き石	
		（早期）	石槍埋納遺構・集石	前平式土器·吉田式土器·石坂式土器	
		（晩期）		桑ノ丸Ⅲ類土器	
		弥生時代		入佐式土器・石斧・石鏃	
		古墳時代		高橋式土器·山之口式土器·松木薗式土器	
			竪穴住居跡7基・土坑・土器溜り	初期須恵器·成川式土器·鉄斧·砥石	
		古代			
		中世		土師器・須恵器	
馬廻		縄文時代	掘立柱建物跡9棟	陶磁器	
		（早期）			
三反牟田		縄文時代		石坂式土器・桑ノ丸式土器	
		（後期）			
			石器製作跡？	石鏃	



農業開発センター遺跡群位置図（1/5,000）

例　言

1　本報告書は，鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，平成８年度・９年度に確認調査，平成10年度から平成15年度までの間，鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局の依頼を受けて，鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査主体となって実施した。

3　報告書作成事業は，平成15年度は発掘調査と併行して実施し，平成16年度は整理作業だけを実施した。

4　農業開発総合センター建設に伴う発掘調査対象遺跡は，吹上町・金峰町に24遺跡が存在しているが，本年度は，吹上町に所在する７遺跡について報告することとした。

5　挿図番号・表番号・遺物番号については，各遺跡毎の通し番号とした。また，本文・挿図・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図毎に示している。

7　報告書中のレベル数値はすべて海抜絶対高である。

8　遺跡における遺構等の実測は発掘担当者が行なったが，一部は実測委託も行なった。

9　遺物復元・実測・製図等の整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。また，一部の石器の実測・製図については，実測委託をした。

10　本報告書の編集は，中村耕治・岩屋高広・廣　栄次・松下建生・川元禎久が行い，遺物・遺構の実測・製図は遺跡を分担してそれぞれで実施した。執筆分担は以下のとおりである。また，写真撮影については横手浩二郎・西園勝彦の協力を得た。

第Ⅰ章　発掘調査の経過	中村　耕治
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境	中村　耕治
第Ⅲ章　層位	中村　耕治
第Ⅳ章　窪見ノ上遺跡	岩屋　高広・廣　栄次
第Ⅴ章　建石ヶ原遺跡	川元　禎久
第Ⅵ章　古里遺跡・西原遺跡	松下　建生
第Ⅶ章　吹上小中原遺跡	中村　耕治
第Ⅶ章―３節―５（中世）	松下　建生
第Ⅶ章　小中原遺跡の石器	立神　次郎
第Ⅷ章　馬廻遺跡	中村　耕治
第Ⅸ章　三反牟田遺跡	中村　耕治

11　吹上小中原遺跡は金峰町所在の小中原遺跡と区別するために所在地の吹上町の吹上を付して遺跡名とした。ただし本文中では小中原遺跡として記述した部分が多くある。

12　遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示活用する計画である。

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

県農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は，「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として，鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置郡吹上町・金峰町地区（吹上町大字入来・中之里・湯之浦・和田及び金峰町大字大野・代表地番日置郡金峰町大野諏訪前2935－1番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は，本事業に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課以下文化財課）に照会を行なった。これを受けた文化財課は平成6年11月に分布調査を実施した。その結果，事業区域内の対象面積 1,347,900㎡に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて，県農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果，対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし，調査は埋文センターが担当することとした。

確認調査は，平成8年度・9年度に実施した。確認調査の結果，24遺跡（約10,000㎡）が存在することが明らかになり，建築物予定地及び圃場整備により削除される部分等について記録保存のための本調査を実施することとなった。

第2節　調査の組織

平成8年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　吉元　正幸
調査企画　〃　次長兼総務課長　尾崎　進
〃　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑　勝洋
〃　調査課長補佐　新東　晃一
〃主任文化財主事兼第二調査係長　立神　次郎
調査担当　〃　文化財主事　肱岡　隆夫
〃　文化財研究員　有馬　孝一
〃　文化財研究員　橋口　勝嗣
事務担当　〃　主事　前屋敷裕徳
〃　主事　追立ひとみ

平成9年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　吉元　正幸
調査企画　〃　次長兼総務課長　尾崎　進
〃　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑　勝洋
〃　調査課長補佐　新東　晃一
〃主任文化財主事兼第二調査係長　立神　次郎
調査担当　〃　文化財主事　東　和幸
〃　文化財研究員　山崎　克之
事務担当　〃　主事　前屋敷裕徳
〃　主事　追立ひとみ

調査指導
H.9.12.5　鹿児島県考古学会長　河口　貞徳
H.10.1.26　鹿児島短期大学学長　三木　靖
H.10.1.29　鹿児島大学法文学部教授　上村　俊雄
H.10.2.17　鹿児島大学工学部教授　土田　充義

平成10年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　吉永　和人
調査企画　〃　次長兼総務課長　尾崎　進
〃　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑　勝洋
〃　調査課長補佐兼第一調査係長　新東　晃一
調査担当　〃　文化財主事　中村　耕治
〃　文化財主事　藤﨑　光洋
〃　文化財主事　東　和幸
事務担当　〃　主査　前屋敷裕徳
〃　主査　政倉　孝弘

〃　主事　溜池　佳子

調査指導
鹿児島県考古学会長　河口　貞徳
鹿児島大学法文学部教授　上村　俊雄
鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
鹿児島経済大学　中村　明蔵
国立歴史民俗博物館助教授　設楽　博巳
鹿児島県立博物館学芸主事　成尾　英仁

平成11年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　吉永　和人
調査企画　〃　次長兼総務課長　黒木　友幸
〃　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑　勝洋
〃　調査課長補佐兼第一調査係長　新東　晃一
調査担当　〃　主任文化財主事　中村　耕治
〃　文化財主事　寺師　孝則
〃　文化財主事　藤﨑　光洋
文化財研究員　山崎　省一
〃　文化財研究員　横手浩二郎
事務担当　〃　総務係長　有村　貢
〃　主事　溜池　佳子

調査指導
H.10.10.17　鹿児島大学工学部教授　土田　充義
H.10.11.17　鹿児島大学法文学部教授　上村　俊雄
H.10.11.24　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
H.12.11.8～9　ラ・サール学園教諭　永山　修一
熊本県城南町教育委員会　清田　純一

平成12年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井上　明文
調査企画　〃　次長兼総務課長　黒木　友幸
〃　主任文化財主事兼調査課長　新東　晃一
〃　調査課長補佐　立神　次郎
〃　主任文化財主事兼第一調査係長　青﨑　和憲
〃　主任文化財主事　中村　耕治
調査担当　〃　主任文化財主事　中村　耕治
〃　文化財主事　西郷　吉郎
〃　文化財主事　山崎　省一
〃　文化財研究員　横手浩二郎
〃　文化財調査員　西　吾意子
事務担当　〃　総務係長　有村　貢
〃　主事　溜池　佳子

調査指導
H.13.3.5　鹿児島大学法文学部教授　上村　俊雄
H.13.1.23　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
H.13.3.14～15　東海大学文学部教授　織笠　昭
H.13.1.17　鹿児島女子短期大学講師　大西　智和

平成13年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井上　明文
調査企画　〃　次長兼総務課長　黒木　友幸
〃主任文化財主事兼調査課長　新東　晃一
〃　調査課長補佐　立神　次郎
〃主任文化財主事兼第一調査係長　青﨑　和憲
〃　主任文化財主事　中村　耕治
調査担当　〃　主任文化財主事　中村　耕治
〃　文化財主事　寺師　孝則
〃　文化財主事　湯之前　尚
〃　文化財主事　西郷　吉郎
〃　文化財主事　高見　憲次
〃　文化財調査員　栗山　葉子
〃　文化財調査員　森田　裕之
〃　文化財調査員　坂元　恒太
事務担当　〃　総務係長　前田　昭信
〃　主事　池　珠美

調査指導
H.14.1.16　鹿児島大学名誉教授　五味　克夫
H.13.10.11～12　福岡大学人文学部教授　小田富士夫

H.14.1.17～18　大谷女子大学文学部教授
中村　浩
H.13.10.4　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝

平成14年度

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井上　明文
調査企画　〃　次長兼総務課長　田中　文雄
〃　調査課長　新東　晃一
〃　調査課長補佐　立神　次郎
〃主任文化財主事兼第一調査係長
池畑　耕一
〃　主任文化財主事　中村　耕治
調査担当　〃　主任文化財主事　中村　耕治
〃　文化財主事　湯之前　尚
〃　文化財主事　西郷　吉郎
〃　文化財主事　富山　孝一
〃　文化財主事　森　雄二
〃　文化財研究員　桑波田武志
〃　文化財調査員　坂本佳代子
事務担当　〃　総務係長　前田　昭信
〃　主事　池　珠美
調査指導
H.14.12.16～17　立命館大学文学部教授
矢野　健一
H.14.11.7　鹿児島大学教育学部教授　森脇　広
H.14.8.8　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
H.12.12～13　熊本大学　助教授　小畑　弘己

平成15年度（整理作業）

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　木原　俊孝
調査企画　〃　次長兼総務課長　田中　文雄
〃　調査課長　新東　晃一
〃　調査課長補佐　立神　次郎
〃主任文化財主事兼第一調査係長
池畑　耕一
〃　主任文化財主事　中村　耕治
調査担当　〃　文化財主事　湯之前　尚
〃　文化財主事　日髙　正人
〃　文化財主事　森　雄二
〃　文化財主事　岩戸　孝夫
〃　文化財主事　廣　栄次
〃　文化財研究員　長﨑慎太郎
整理担当　〃　主任文化財主事　中村　耕治
事務担当　〃　総務係長　平野　浩二
〃　主事　池　珠美
調査指導
H.16.11.18　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
H.16.1.28　鹿児島大学助教授　中村　直子
H.16.2.12～13　別府大学文学部教授　橘　昌信

平成16年度（整理作業）

事業主体　鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　木原　俊孝
作成企画　〃　次長兼総務課長　賞雅　彰
〃　調査課長　新東　晃一
〃　調査課長補佐　立神　次郎
〃主任文化財主事兼第一調査係長
池畑　耕一
〃　主任文化財主事　中村　耕治
作成担当　〃　調査課長補佐　立神　次郎
〃主任文化財主事兼第一調査係長
池畑　耕一
〃　主任文化財主事　中村　耕治
〃　文化財主事　岩屋　高広
〃　文化財主事　廣　栄次
〃　文化財主事　松下　建生
〃　文化財研究員　川元　禎久
事務担当　〃　総務係長　平野　浩二
〃　主事　竹ノ内有里
報告書作成検討委員会　H16.12.27　所長他9名
報告書作成指導委員会　H16.12.21　調査課長他8名
企画担当　東　和幸・横手浩二郎

指導者・協力者

H17.2.21　鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
H17.2.13　鹿児島大学助教授　橋本　達也

第３節　調査の経過

平成６年の分布調査の結果に基づいて平成８年度から確認調査を始め平成９年度からは本調査も開始した。

平成８年度は，平成８年10月21日より平成９年３月24日までの約６か月間実施した。主に農業大学校建設予定地に係る西原遺跡・古里遺跡・建石ヶ原遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡と調整池造成工事に係る宗円堀遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡，耕種試験場の管理・研究棟建設予定地の馬塚松遺跡・諏訪牟田遺跡・諏訪脇遺跡に関して31箇所のトレンチを設定して確認調査を行なった。その結果，旧石器時代，縄文時代草創期・早期・前期・晩期，古代の遺物や遺構が認められた。ただ，昭和30年代に大規模な圃場整備事業が行なわれ，上層部の遺物包含層が削除されている部分があることも確認された。

平成９年度は，平成９年６月23日より平成10年３月27日までの10か月間実施した。平成８年度の確認調査の補充で買収の済んでいる畑地を対象に 150箇所のトレンチ調査及び耕種試験場本館・研究棟建設予定地の馬塚松遺跡，農業大学校予定地の諏訪牟田遺跡，耕種試験場畑地予定地の大門口遺跡について一部本調査を実施した。確認調査の結果，広範囲に遺跡が広がることが判明した。また，馬塚松遺跡では中世～近世の掘立柱建物跡や道の跡が検出され，諏訪牟田遺跡では古代の溝状遺構・掘立柱建物跡が検出された。

平成10年度は，農業大学校の予定地を中心に平成10年４月24日から平成11年３月26日までの11か月間実施した。諏訪前遺跡は研修棟及び削平される圃場部分，建石ヶ原遺跡は学生寮及び削平される圃場部分，古里遺跡は講堂等関連施設の本調査である。

また，それまでに用地買収が未了であった尾ヶ原遺跡・三反牟田遺跡・窪見ノ上遺跡について確認調査を実施した。諏訪前遺跡では，縄文時代早期の集石遺構が検出され，縄文時代晩期の埋設土器・柱列・掘立柱建物跡（１間×１間）・土坑等の遺構が検出され，おびただしい土器や石器に混ざって緑色の石で作られた玉類（丸玉・管玉・勾玉）も出土している。また，弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居３基も検出されている。１号住居からは竜（ドラゴン）を描いた土器片も出土している。建石ヶ原遺跡では，旧石器時代，縄文時代草創期・早期・前期・後期・晩期，弥生時代，古墳時代，中世等各時期の遺物が出土している。遺構としては，縄文晩期で道の跡ではないかと思われる浅い溝１条，古墳時代で竪穴住居１基，中世で方形周溝墓１基等が検出されている。確認調査を実施した尾ヶ原遺跡・窪見ノ上遺跡・三反牟田遺跡についても遺物の出土が見られ遺跡の存在が確認された。

平成11年度は，農業大学校予定地及び掘削部分の本調査を平成11年４月20日から平成12年３月24日までの11か月間実施した。諏訪前遺跡は研修棟の建設予定地である。10年度と同様縄文時代早期・晩期が中心であるが縄文時代中期・後期の遺物も見られた。諏訪前遺跡の調査については11年度で終了した。諏訪牟田遺跡は研修棟・園池・幹線道路部分の調査である。縄文時代草創期・早期・晩期，弥生時代終末から古墳時代初頭の磁器，古代，中世の各時期の遺構遺物が出土している。縄文時代草創期では礫群が検出され，早期では集石遺構６基も検出されている。晩期では，深鉢を埋めた埋設土器が３基，柱列11基が検出され，玉類も出土している。古墳時代の竪穴住居跡は２基検出され，諏訪前遺跡の住居と同時期と思われる。古代および中世では，溝状遺構・掘立柱建物跡が検出されている。遺物では「王」もしくは「玉」の字が書かれた青磁も出土している。建石ヶ原遺跡は幹線道路が国道 270号線と交差する取付部の調査である。縄文時代早期・晩期の遺物が出土するが，ここでは，旧石器時代の遺物が主で，マイクロブレイド・チップ・フレイク・三稜尖頭器が出土している。古里遺跡は教育管理棟・食堂・体育館・武道館等の建設予定地の調査である。縄文時代晩期の遺物が出土しているが量は少ない。中世では，掘立柱建物跡12棟が検出され陶磁器も出土している。西原遺跡は幹線道路部分の確認調査である。トレンチ３か所を設定し２か所から縄文時代の遺物が出土したが遺物包含層に影響がないことと遺物が少ないため本調査は実施しなかった。小中原遺跡は農業大学校の果樹試験場のための調査である。一部縄文時代早期の遺物が出土したが，古墳時代・中世が主である。また，北側の台地先端部については削平されるため下層確認を実施したが，旧石器・縄文時代早期の遺物が確認された。古墳時代では竪穴住居跡３基と土坑２基が検出され，中世では掘立柱建物跡２棟，溝状遺構１条が検出された。頭無迫田遺跡は１号調整池に伴い削平が予定されるための調査である。縄文時代早期の遺

物が多く，集石遺構５基も検出された。

平成12年度は農業大学校の果樹園・飼料畑と耕種試験場の畑地による削平部分，幹線道路（削平）部分を中心に平成12年４月24日から平成13年３月27日までの11か月間実施した。吹上小中原遺跡は昨年の引き続きであるが，旧石器時代の遺物や落し穴・縄文時代草創期の集石遺構・石器製作跡，縄文早期の石槍埋納遺構など古い時代の調査が特筆される。また，昨年に引き続き古墳時代の竪穴住居跡や中世の堀立柱建物跡が検出され，竪穴住居７基，掘立柱建物跡９棟が検出された。４号竪穴住居跡からは在地の成川式土器と共に初期須恵器が出土し，成川式土器の編年の指標となるものと思われる。大門口は耕種試験場の研究茶園部分で削平を受ける部分を調査し，下層については随時トレンチを設けて確認した。縄文時代晩期が主であり，柱穴列24基，掘立柱建物跡（１間×１間）10棟，土坑５基が検出された。中世から現代までの遺構・遺物も見られるが，双魚文の描かれた中世の青磁，近世の溝状遺構，今も残っている諏訪神社の参道へ向かっている昭和30年代までの道などが特筆される。また，年度末に縄文時代の玦状耳飾りも出土している。

諏訪脇遺跡は幹線道路部分の調査である。縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物が出土している。宗円堀遺跡も幹線道路部分の調査である。縄文時代晩期の柱穴列３基と遺物が検出されている。また，一部に旧石器時代の包含層が確認され，調査の結果ナイフ形石器の石器製作跡の可能性が高いものである。馬廻遺跡は農業大学校の研究畑部分の調査である。調査予定地域は基盤の岩盤が露出するなど遺物包含層の残存する部分は少なかったが，縄文時代早期の良好な資料が得られた。市堀遺跡・頭無迫田遺跡は隣接する遺跡である。いずれも耕種試験場の研究畑部分である。縄文時代晩期の柱穴列・掘立柱建物跡（１間×１間），中世の掘立柱建物跡・竪穴遺構などが検出されている。尾ヶ原遺跡はこれまで杉林・雑木林のため確認調査が出来なかった範囲についての確認調査を実施した。トレンチを14か所設定したが，ほとんどのトレンチより旧石器時代から縄文時代・古墳時代・古代の遺物が出土し，ほぼ全面に遺跡が広がることが判明した。

平成13年度は，農業大学校関連および耕種試験場関連の削平部分を中心に平成13年５月７日から平成14年３月26日まで実施した。馬塚松遺跡は耕種試験場の本館建設予定地で，縄文時代早期・晩期，弥生時代前期の掘立柱建物跡（２間×２間），中世の掘立柱建物跡15棟・溝状遺構等が検出されている。大門口遺跡は研究茶園の予定地で，前年度に引き続いて調査したものである。縄文時代早期・晩期が出土している。尾ヶ原遺跡は農業大学校の飼料畑予定地である。縄文時代早期の集石遺構，晩期の集石遺構，弥生時代中期の小児用合口壷棺，古墳時代の竪穴住居跡８基など豊富な資料が得られた。神原遺跡は支線道路で削平される部分の調査である。遺物は縄文早期・晩期が少量出土しただけであったが，古代の溝状遺構が検出され，溝の中から須恵器・土師器がまとまって出土している。小中原遺跡は，整地作業終了後に設計変更があり急遽調査したものである。旧石器，縄文時代早期の遺物が出土している。諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡は道路拡張に伴う調査である。縄文時代晩期の遺物が出土している。諏訪牟田遺跡は，耕種試験場の本館及び付帯施設建設予定地で，縄文時代早期・晩期（柱穴列），中世（掘立柱建物跡）の遺構・遺物が出土している。中尾遺跡は圃場整備で削平される部分の調査である。縄文時代草創期・早期・晩期の遺物が出土しているが，草創期では隆帯文土器に伴って，集石遺構５基，落し穴４基，連穴土坑13基など注目される遺構が多く検出された。南原内堀遺跡も圃場整備で削平される部分の調査である。縄文時代草創期・早期の遺物が出土している。

平成14年度は，耕種試験場関連の削平部分を中心に平成14年５月７日から平成15年３月20日まで実施した。桜谷遺跡は研究水田予定地で，旧石器時代のブロック１基，縄文時代草創期のブロック１基，早期の集石遺構35基，石器製作跡１基，晩期の土坑３基，弥生時代中期の竪穴住居跡１基などが検出された。

荒田遺跡も研究水田予定地で，旧石器時代（ナイフ形石器文化期のブロック１基，細石器文化期のブロック２基），縄文時代草創期のブロック１基，早期の集石遺構32基が検出されている。馬塚松遺跡は主作道建設部分の調査で，縄文時代早期・晩期の遺物が出土している。神原遺跡は病中付帯施設建設予定地の調査で，旧石器時代の礫群９基，縄文時代草創期の礫群４基，晩期の掘立柱建物跡（１間×１間）３棟，柱穴列２基，土坑２基，中世の古道１条等が検出されている。諏訪脇遺跡は研究畑予定地で，縄文時代早期の遺物，晩期の掘立柱建物跡８棟・柱穴列14基，古代から中世の溝

状遺構12条，掘立柱建物跡10棟，竪穴遺構２基が検出されている。宗円堀遺跡は園芸花キ畑予定地で，旧石器時代（ナイフ形石器文化期のブロック３基・礫群・細石器文化期のブロック１基・礫群），縄文時代早期の集石遺構，晩期の土器集中域などが検出されている。

平成15年度は農業大学校・耕種試験場の畑地で削平部分を中心に平成15年５月６日から平成16年２月８日まで実施した。窪見ノ上遺跡では縄文時代早期前葉の良好な資料と，石斧製作の痕跡ではないかと思われる資料が得られた。南原内堀遺跡では農業開発総合センター遺跡群では数少ない縄文時代中期の遺物や晩期の埋設土器が出土している。市堀遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出され，頭無迫田遺跡では旧石器時代の遺物と落し穴が検出されている。また，頭無遺跡では平成14年度に神原遺跡で検出された古代の溝の延長部分が検出された。また，鹿児島県立埋蔵文化財センター（国分市）において報告書作成のための整理作業も開始した。

平成16年度から本格的に整理作業に入り，吹上町に所在する窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡・吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田遺跡の報告書を刊行することとした。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

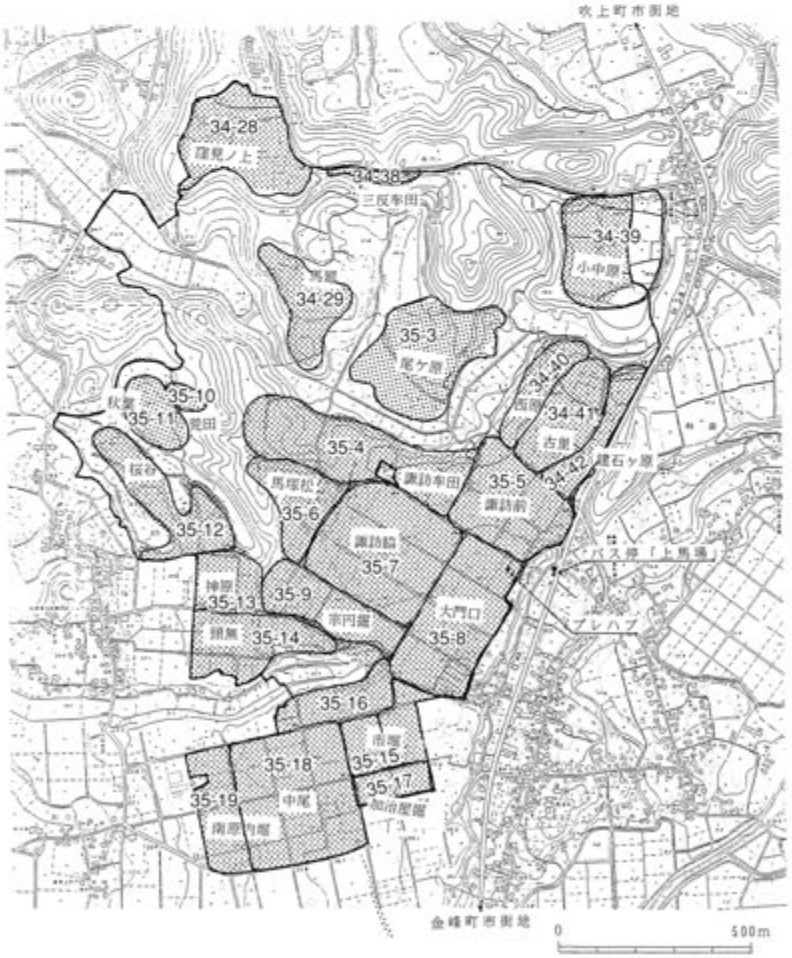
第１節　遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は日置郡金峰町大野と吹上町和田・中之里・入来にまたがって計画され敷地面積180haと広範囲におよぶものである。

金峰町は日置郡の最南部を占め，北側は吹上町，東から東南部にかけては川辺町・鹿児島市，南側は万之瀬川を隔てて加世田市と接している。また，西側は吹上浜によって東シナ海に面する。金峰山がほぼ中央にそびえ，東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また，万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し，谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては，縄文時代の阿多貝塚，弥生時代の高橋貝塚・松木園遺跡，古墳時代の中津野遺跡が知られているが，近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で，持躰松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

吹上町は日置郡南部の中心的な位置を占め，北は日吉町，東は鹿児島市，南は金峰町に接し，西は吹上浜によって東シナ海に面する。東部の金峰山地から西へシラス台地，低地，海岸砂丘と続く地勢は金峰町と同様である。また，永吉川・小野川・伊作川・堀川により開析された谷と台地を形成している。その台地上に遺跡が存在する。代表的な遺跡としては，縄文時代の黒川洞穴遺跡，弥生時代の入来遺跡，古墳時代の華塾里遺跡・辻堂原遺跡などがある。

南薩地域は，鹿児島県内でも遺跡の多い地域で，考古学の調査がいち早く行なわれている。特に金峰町・吹上町は前述のように鹿児島県を代表するような遺跡が目白押しである。農業開発総合センター建設の予定地も広大な台地の中に大小の開析谷が入り込み遺跡の立地条件としてふさわしい地形をなしている。そのため，旧石器時代から近世まで幅広い時代の遺跡が24か所も存在する。各遺跡についてはそれぞれで詳述することにする。



第１図　農業開発総合センター内遺跡群位置図

第２節　周辺遺跡

１　吹上町

吹上町側は主に農業大学校の計画地であるが，大字入来に窪見ノ上遺跡・馬廻遺跡，大字中ノ里に三反牟田遺跡・吹上小中原遺跡，大字和田に建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡が存在し，旧石器時代から縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世とほぼ全時期にわたる。

吹上町はこれまでに約100か所の遺跡が知られている。その中には，黒川洞穴のように縄文時代晩期の標識遺跡となっているものある。

旧石器時代の遺跡は多くはないが，ナイフ形石器文化の塚ノ越遺跡，ナイフ形石器文化と細石器文化の岩之元遺跡が知られている。縄文時代の遺跡は，山間部やシラス台地上に存在する。黒川洞穴は縄文時代前期の轟式土器から晩期の夜臼式土器まで長期に及んでいる遺跡で晩期の黒川式土器の標識遺跡である。今木場遺跡は押型文土器や曽畑式土器など早期から前期の遺跡である。前述の塚ノ越遺跡では縄文時代草創期・早期の遺物が出土している。また，白寿遺跡では縄文時代後期の市来式土器が見られる。

弥生時代の遺跡は多くはないが，弥生時代前期の土器も見られる。入来遺跡では，弥生時代中期の環濠や甕棺が発見されている。古墳時代は遺跡数も増加し，辻堂原遺跡で見られるように竪穴住居跡が100基を超す集落があり，集落を取り巻くような溝も検出されている。古代～中世の遺跡はまだ未調査のためか少ないようである。近年伊作城跡の調査が行なわれその一端があきらかになりつつある。

２　金峰町

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが，大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。その中に大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡・市堀遺跡・中尾遺跡・南原内堀遺跡・加冶屋堀遺跡とほぼ全域にわたって遺跡が存在する。また，旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町も古くより発掘調査が行なわれ，県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で，人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡であるが，現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の夥しい遺物が出土している。その中には，南島との交流をうかがわせる遺物（南島系の土器）も見られる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で，籾痕の認められる土器片が出土し，早くから稲作が行なわれていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡に後続するものであるが，弥生時代前期の土器（高橋式）と共に籾痕のある土器片・柱状抉入石器・ノミ形石器・磨製石鏃・磨製石剣・石鎌・石包丁等出土しており，稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また，貝塚を形成することや南海産のゴホウラ貝が出土することから，海洋性に富んでおり南島と北部九州などとの中継地としての位置付けも重要視されている。

下小路遺跡では，鹿児島県では数少ない合口甕棺が発見され，弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。松木薗遺跡は，限られた範囲の調査であるが，弥生時代後期の大溝（幅４～５ｍ・深さ３ｍのＶ字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また，溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。中津野遺跡からは，弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では，持躰松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており，南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。荒平古窯跡群は県内でも数少ない古代の須恵器窯で，生産遺跡の研究上欠かせないものである。

周辺遺跡地名表（吹上町）

	遺跡名	所在地	時代
1	馬場園	伊作	古墳
2	吹上高校	今田	弥生
3	窪園ノ上	〃	古墳・古代
4	小牟田ノ上	〃	古墳・古代
5	今田	〃	弥生
6	西園	〃	弥生
7	瑞松庵跡	〃	旧石器
8	鳥越坂	〃	縄文・古代
9	今田B	〃	弥生前期
10	今井ヶ島	〃	縄文・古墳
11	柧ヶ峯	中原	古墳・古代
12	黒瀬戸	〃	縄文後期
13	大園B	入来	縄文早期･弥生中期･古墳
14	山迫	〃	古墳
15	塚ノ越	〃	旧石器・縄文早期
16	内門堀	〃	縄文早期
17	川路堀	〃	
18	川路堀B	〃	縄文・古墳・中世
19	春見松	〃	古墳
20	小堀	〃	縄文早期
21	下堂見	〃	縄文早期
22	中屋ヶ崎	〃	古墳
23	野中田	入来	古墳
24	甚五堀	〃	古墳・古代
25	小緑	〃	縄文前期
26	入来	〃	弥生
27	松崎	〃	縄文早期
28	窪見ノ上	〃	縄文早期・中期
29	馬廻	〃	縄文早期
30	三石城跡	湯之浦	中世
31	寺田	〃	弥生・古墳
32	湯之浦山上	〃	縄文早期
33	剣壇塚	中之里	弥生・古墳
34	宮坂	〃	弥生・古代
35	宮坂B	〃	古墳・中世
36	前原	〃	古墳
37	白寿	〃	縄文後期･弥生前期･中期
38	三反牟田	〃	縄文後期
39	小中原	〃	旧石器・縄文早期・古墳
40	西原	和田	縄文・古墳
41	古里	〃	縄文晩期・中世
42	建石ヶ原	〃	縄文早期・晩期・中世
43	天ヶ城跡	〃	中世
44	田中城跡	中和田	中世

周辺遺跡地名表（金峰町）

	遺跡名	所在地	時代
1	塚山	大野	古墳
2	大塚	〃	古墳
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期･弥生･古墳
4	諏訪牟田	〃	縄文・古墳・古代・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期
6	馬塚松	〃	縄文晩期・中世・近世
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世
8	大門口	〃	縄文早期・晩期
9	宗円堀	〃	旧石器・縄文早期・中世
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期
11	秋場	〃	旧石器
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代
14	頭無	〃	縄文早期・古代
15	市堀	〃	縄文早期・中世
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世
17	加冶屋堀	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期
20	南原外堀	〃	古墳・古代
21	原口	〃	古墳・古代
22	寺下	大野	中世
23	京田	〃	縄文・古墳・中世
24	京田原	〃	古墳
25	鎮守尾	〃	古墳・中世
26	南原A	〃	縄文中期・後期
27	砂漠	池辺	古墳
28	小堀	〃	古墳・古代
29	萩ノ上	〃	古墳
30	地頭堀	〃	古墳・古代
31	塩屋堀	〃	古墳
32	玄同堀	〃	古墳・中世
33	主水堀	〃	弥生・古墳
34	秋葉下	〃	古墳
35	島田	〃	古墳
36	宮園	〃	古墳・古代
37	牟礼ヶ城跡	〃	中世
38	小城田	〃	縄文
39	本寺	〃	古墳
40	前平	〃	縄文・古墳
41	宮の前	〃	縄文・古代

第２図　周辺遺跡図（吹上町・金峰町）（１／25,000）

第Ⅲ章　層位

第３図　模式柱状図

農業開発総合センター予定地は，日置郡金峰町と吹上町にまたがる南北２㎞，東西 1.5㎞の広大な範囲に及ぶ。地形も標高86ｍから13ｍと高低差があり，山・台地・沖積地・開析谷と変化に富んでいる。そのために，それぞれの地点で層位が異なっている。第３図は台地部分の標準的な地層の模式図である。

また，以下の各層の説明も標準的なものであり，各遺跡では微妙な違いがある。詳細についてはそれぞれの遺跡において述べることとする。

Ⅰ層　灰黒色土

現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってⅡ層との区別が可能である。地点によってはａ・ｂ・ｃの３層に細分できる。Ⅰｃ層は黒色に近い色調であるが，３㎜大の白色軽石が混在している。中世から近世初めの層である。Ⅰ層の平均的な厚さは20㎝程度であるが，圃場整備により削除されたり，盛り土されたりしており一定ではない。

Ⅱ層　黒色土

弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが，谷の部分などを中心に良好に残存している。
層厚10～30㎝。

Ⅲ層　黄橙色火山灰土

鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（ＢＰ6400年）とその腐植土である。上位（Ⅲａ層）はⅡ層との漸位層であり，やや黒色をおびる。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包含層である。中位（Ⅲｂ層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（Ⅲｃ層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く，Ⅳ層の黄褐色土との境目が明瞭ではない。層厚30～40㎝。

Ⅳ層　黄褐色土

Ⅲ層と類似するが，より褐色味を帯び，粘質である。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚20～30㎝。

Ⅴ層　黒褐色土

硬質でよくしまる。２～３㎝大の黄橙色のパミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚30㎝。

Ⅵ層　暗黄橙色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰（ＢＰ11,500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15㎝程度堆積している。

Ⅶ層　明茶褐色土

粘質土であるが，火山灰の混入によるザラついた感触を持つ。縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10㎝。

Ⅷ層　茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10㎝。

Ⅸ層　暗茶褐色粘質土

Ⅷ層とほとんど同じ土質であるが，Ⅷ層に比べてやや褐色土味を帯び，シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30㎝。

Ⅹ層　黄橙色シルト質（シラス質）

シラスの腐食したもので，５㎝大の黄色軽石を含む。上位には旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80㎝。

ⅩⅠ層　白色シラス

姶良カルデラ起源のシラス（ＢＰ24,500年）である。近辺の露頭では十数ｍの堆積が見られる。

第Ⅳ章　窪見ノ上遺跡

第１節　調査の概要

１　遺跡の立地及び調査の概要

窪見ノ上遺跡は，吹上町入来字窪見ノ上に所在する。平成10年度に確認調査，平成15年度に本調査を実施した。本遺跡は，農業開発総合センター敷地の北側に位置し，四方に傾斜する丘陵上の台地（標高70ｍ）上に遺跡が広がる。今回，研究果樹園造成に伴う削平部分について，発掘調査を行った。

本遺跡の削平予定地は，台地の２か所に存在する。便宜上１地点・２地点と分けて調査を実施した。この区域は，台地の舌状部分に該当し，西に東シナ海，南に大野原台地から加世田平野までを眼下に見下ろし急激に地形が降下していく地点であり，１地点と２地点の間は谷状を呈している。２地点は工事予定地の一部が茶畑造成時に縄文時代早期の包含層まで撹乱を受けていた。

遺構は，縄文時代早期の集石遺構６基と集積遺構１基，黒色土を埋土とした中世・近世の古道が検出された。

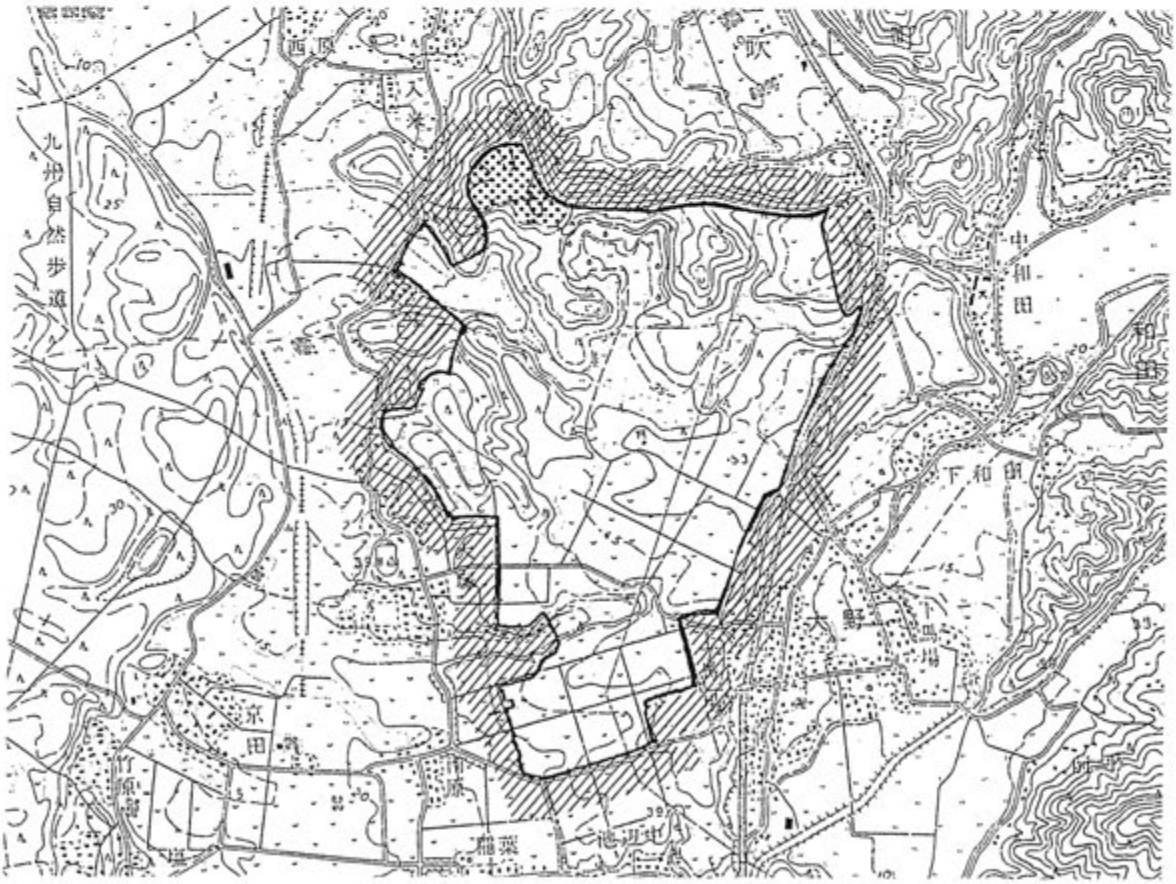
遺物は，１地点の１トレンチのⅨ層から旧石器時代の遺物が出土し，遺物包含層は，１・２地点ともⅣ層，Ⅴ層を中心として縄文時代早期の土器や石器が多量に出土した。

特に，２地点では縄文時代早期の古い段階である岩本式土器が多く出土した。１地点の出土遺物は早期中葉に位置づけられる石坂式土器や押型文土器が多く出土した。２地点の工事予定地はマウンド状の地形をなし，地層の堆積がはっきりしなかった。そのため，早期前葉に位置づけされる岩本式土器が縄文時代草創期・旧石器時代に比定される粘質土層から出土する場合もあった。また，石斧や石斧製作過程ででる剥片が多く出土することから石斧等の石器製作所の可能性が考えられる。

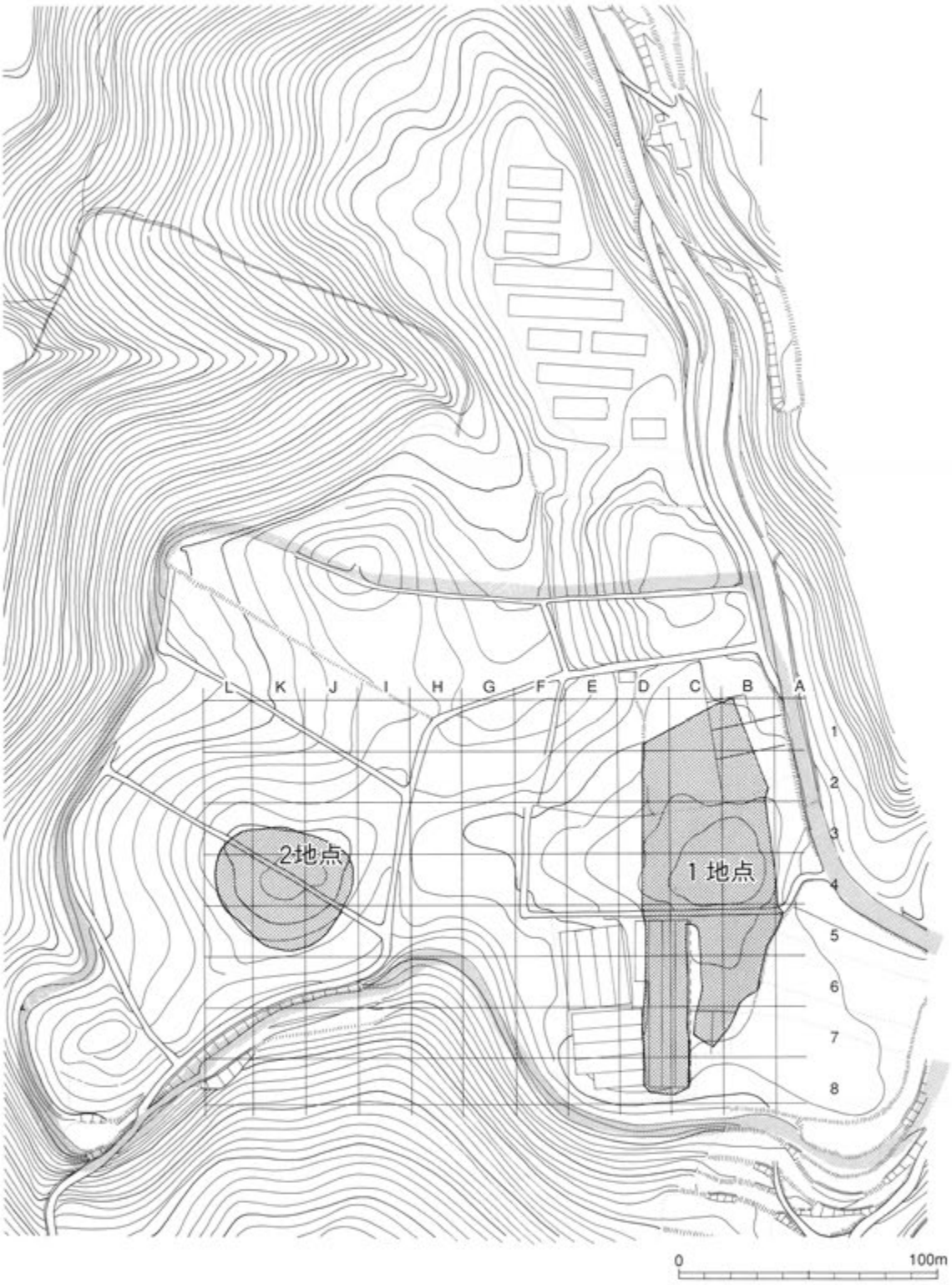
縄文時代の後期については，土器片があまり出土せず，剥片類が多く出土した。中世・近世については，遺物がほとんど検出されず，はっきりとした時期の判断ができなかった。

２　遺跡の層序

窪見ノ上遺跡の土層は，農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同じである。ただし，両地点とも旧石器時代から縄文時代草創期に比定されるⅦ層（チョコ層）直下に安山岩の岩盤があり，シラス層に比定されるⅨ層は確認できなかった。

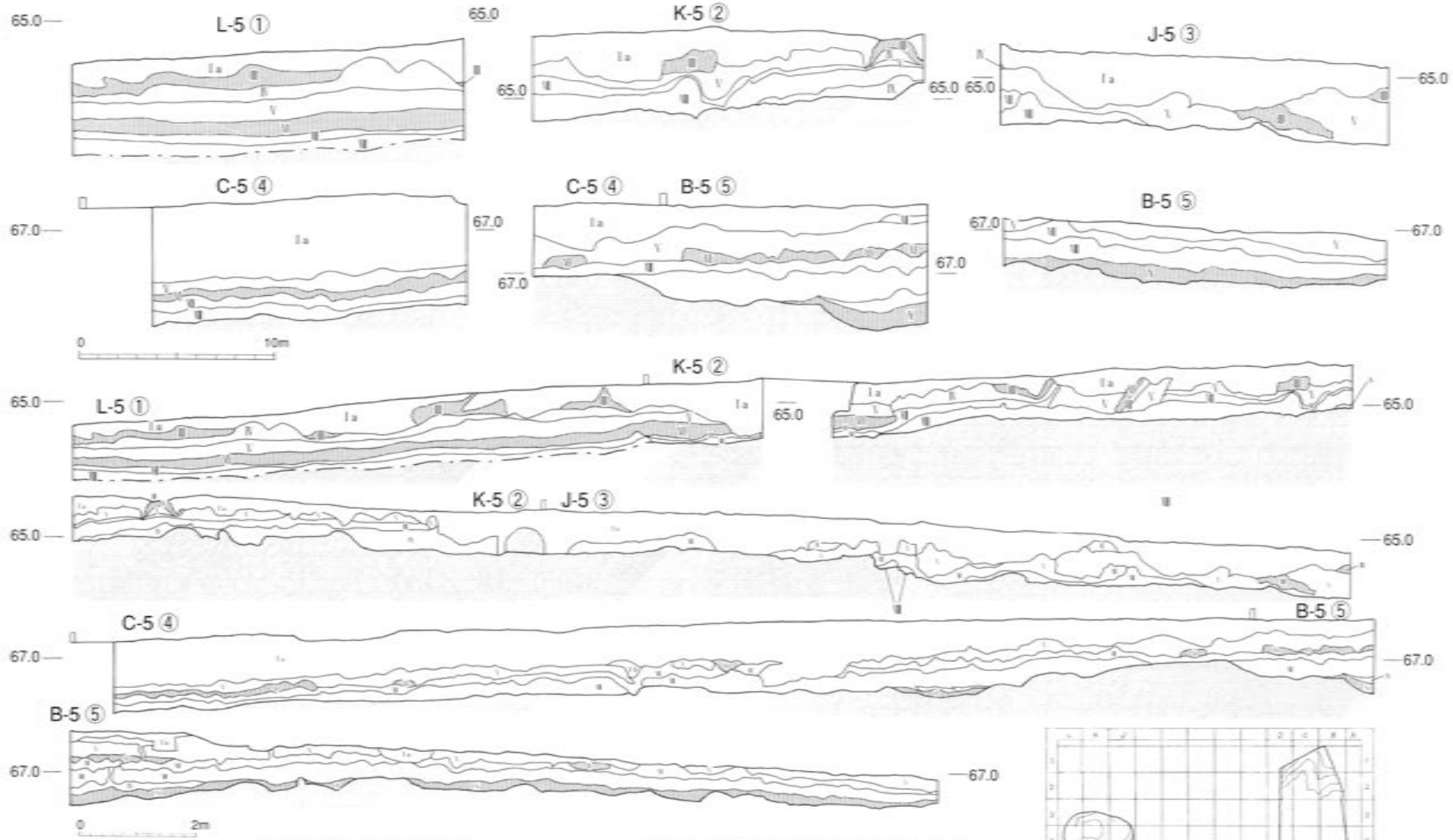


第１図　窪見ノ上遺跡位置図（１／25,000）



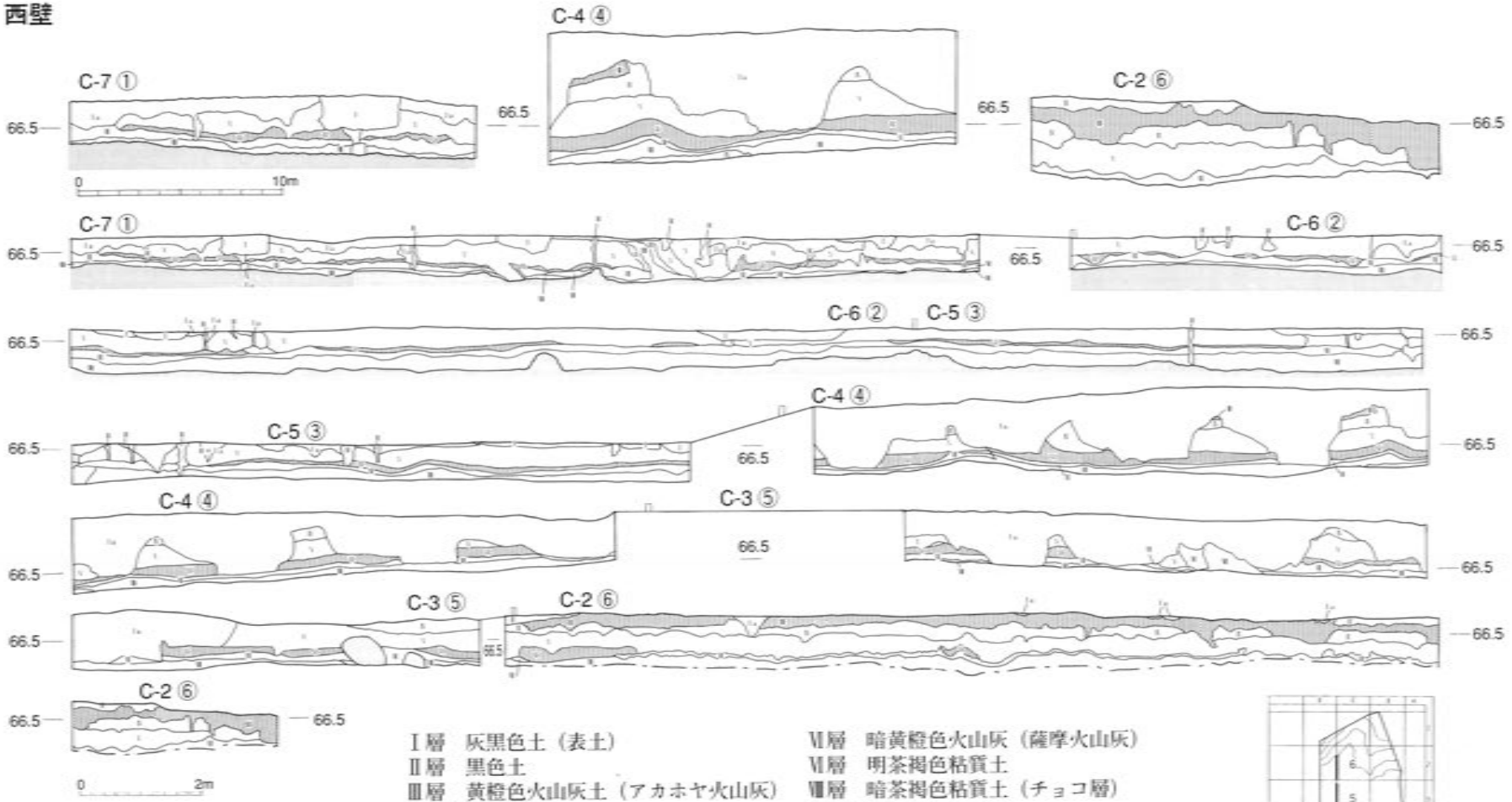
第２図　周辺地形図及びグリッド図

北壁

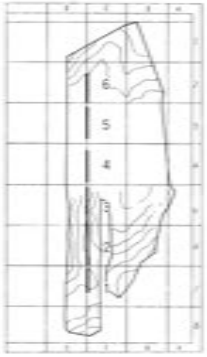


第3図　土層断面図1

西壁



Ⅰ層　灰黒色土（表土）
Ⅱ層　黒色土
Ⅲ層　黄橙色火山灰土（アカホヤ火山灰）
Ⅳ層　黄褐色土
Ⅴ層　黒褐色土
Ⅵ層　暗黄橙色火山灰（薩摩火山灰）
Ⅶ層　明茶褐色粘質土
Ⅷ層　暗茶褐色粘質土（チョコ層）
Ⅸ層　黄橙色シルト層
Ⅹ層　白色シルト層



第4図　土層断面図2

第２節　発掘調査の成果

窪見ノ上遺跡の遺物包含層は，Ⅳ・Ⅴ層とⅧ層の一部で，いずれも旧石器時代及び縄文時代早期に該当する遺構・遺物を包含する層であった。

１　旧石器時代の調査

１地点の１トレンチのⅨ層から旧石器時代の遺物が出土したが，剥片及び砕片であり資料として図化することができなかった。この地域においては，工事による削平が旧石器相当層まで及ばないため協議の上，確認調査で終了した。

２　縄文時代早期の調査

縄文時代早期は，主にⅣ・Ⅴ層出土のものである。しかしながら第２地点においては，Ⅵ層・Ⅶ層が欠除したり，薄かったりし整然としていないため，Ⅷ層からも縄文時代早期の遺物が出土する。特に，Ⅰ類土器とした岩本式土器は，質量共に特筆すべきものがある。

（１）遺構

遺構は，集石遺構が６基検出され，検出順に１～６号とした。ほぼ調査区全区域Ⅴ層上面で検出され，１地点で４基（１～４号），２地点で２基（５・６号），計６基が確認された。どの集石遺構も掘り込みはみられない。他に２地点で集積遺構が１基検出された。

①　１号集石遺構

Ｄ－１区で検出された。118個の石で構成されている。重量は，平均10～150ｇの比較的小ぶりの礫が散逸している。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

②　２号集石遺構

Ｃ－５区で検出された。45個の石で構成されている。10～200ｇの礫が最も多く，最大2,000ｇの礫が数点確認された。

③　３号集石遺構

Ｂ－５区で検出された。42個の石で構成されている。重量は，10～100ｇの範囲が最も多く，安山岩を主に使用している。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

④　４号集石遺構

Ｃ－７区で検出された。85個の石で構成されている。中央部がイモ穴で撹乱され，集石全体を確認することができなかった。検出された礫から僅かな被熱による赤化が確認された。

⑤　５号集石遺構

Ｊ－４区で検出された。130個の石で構成され本遺跡の集石の中で最多量検出された。礫の重量は様々で小ぶりの礫が大半を占めるが，1,000ｇを超す大きな礫が23個も検出された。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

⑥　６号集石遺構

Ｊ－３区で検出された。27個程度の石で構成されている。100～350ｇ程度の礫が散逸されている。

⑦　集積遺構

Ｌ－２区で検出された。16個の石で構成されている。150～350ｇ程度の礫が堆積している。すべての礫が丸みを帯び，砂岩を使用している。被熱を受けておらず調理施設の機能はなかったと思われる。

⑧　集積遺構内出土遺物

集積遺構内出土遺物は，磨石，敲石の12点である。

磨石・敲石類

磨石や敲石・凹石については，１個体に磨面や敲打痕，敲打痕の集中による凹みなど複合的な性格を有する石器が多いので，磨石・敲石類を同一群として取り扱うこととする。これらの石器は使用痕の形態により次のように分けた。

Ⅰ類（第10・11図）

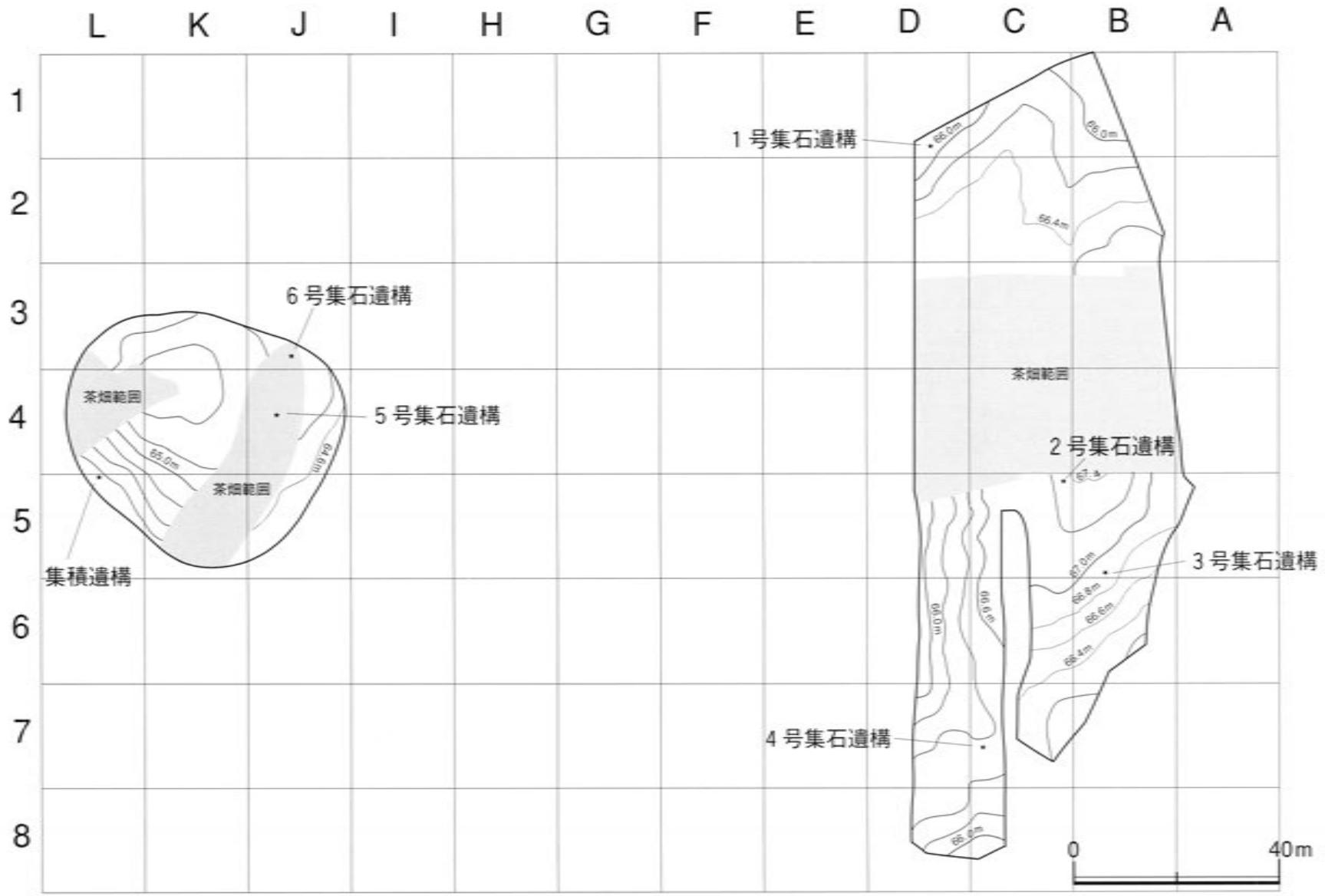
１・２・４～６・９・10は，磨面のみが認められる。１は安山岩製であり，その他は砂岩製である。

多くは上面観も側面観も楕円形に近く左右が対照的な器形を有するが，４は側面観が三角形状の器形である。下面や上端側縁部に磨り痕が明瞭に残される。９は上面にのみ明瞭な磨面が見られる。10は上面観が若干歪みを呈する長軸方向に長い楕円形の器形であり，側面観は上下端部が反っている。弯曲した上面には磨面が見られない。

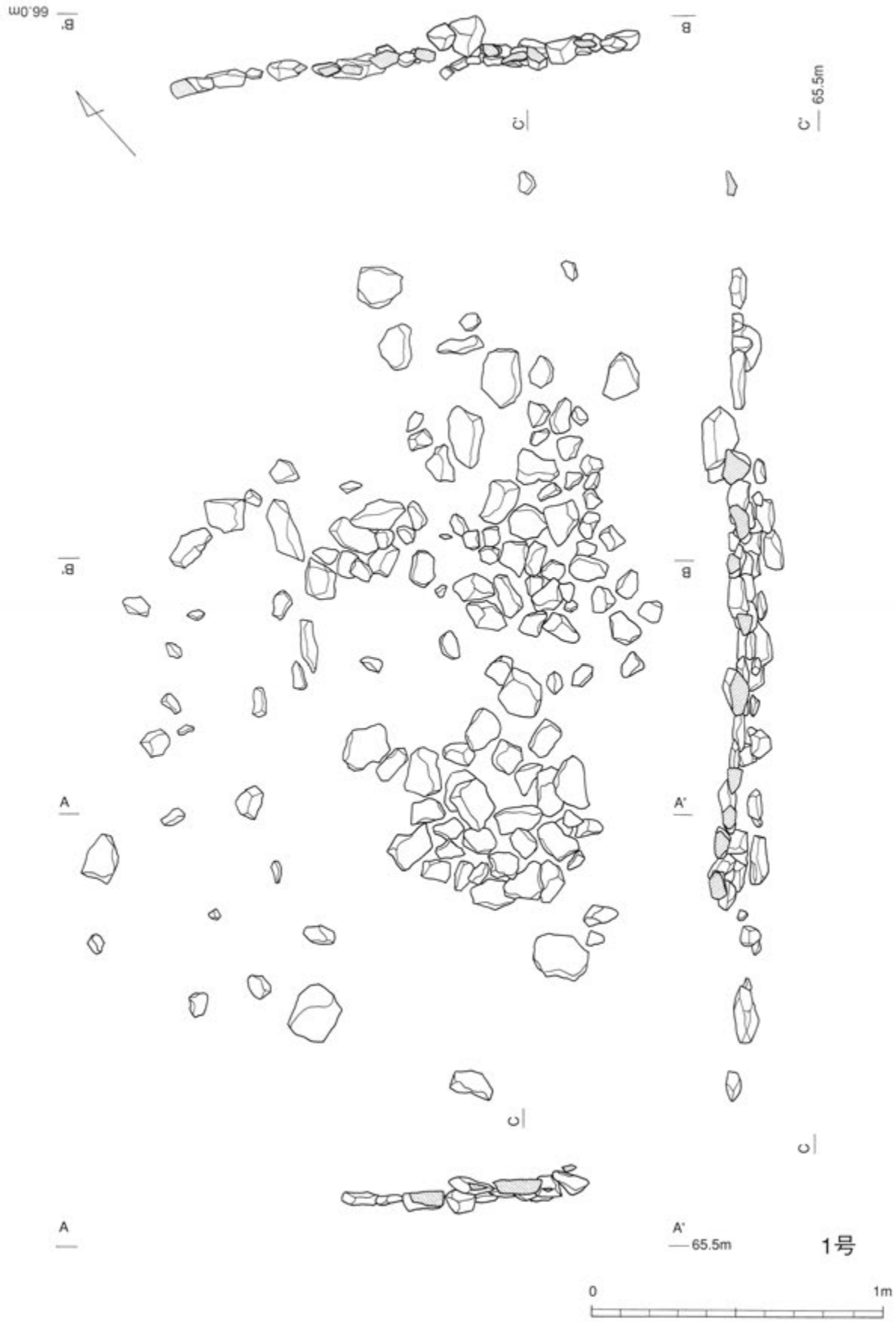
以上の３点を除き，使用痕が残る部位に特徴的な偏り等は確認できない。

Ⅱ類（第10・11図）

３・７・８・11・12は，磨面と敲打痕が認められるものである。

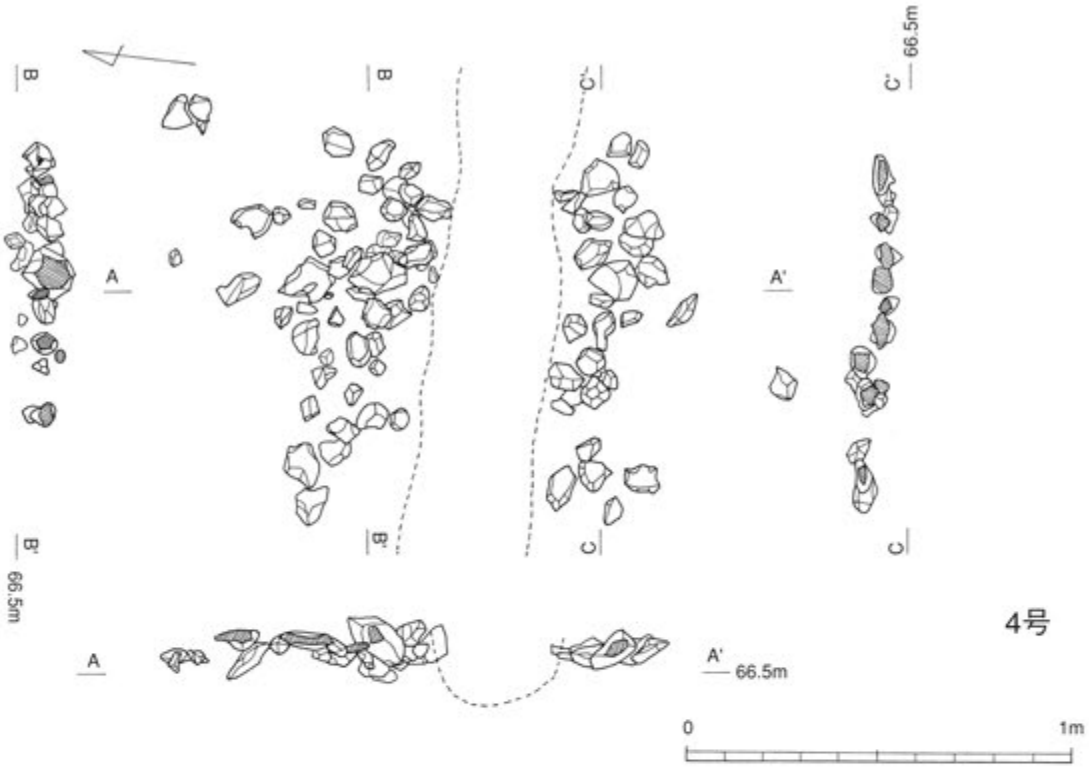

L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
1 号集石遺構
2 号集石遺構
3 号集石遺構
4 号集石遺構
5 号集石遺構
6 号集石遺構
集積遺構
茶畑範囲
茶畑範囲
茶畑範囲
66.0m
66.0m
66.4m
65.0m
64.6m
67.0m
66.8m
66.6m
66.4m
66.6m
64.0m
66.2m
0
40m

第5図　Ⅴ層遺構配置図



第6図　集石遺構1

第7図　集石遺構2

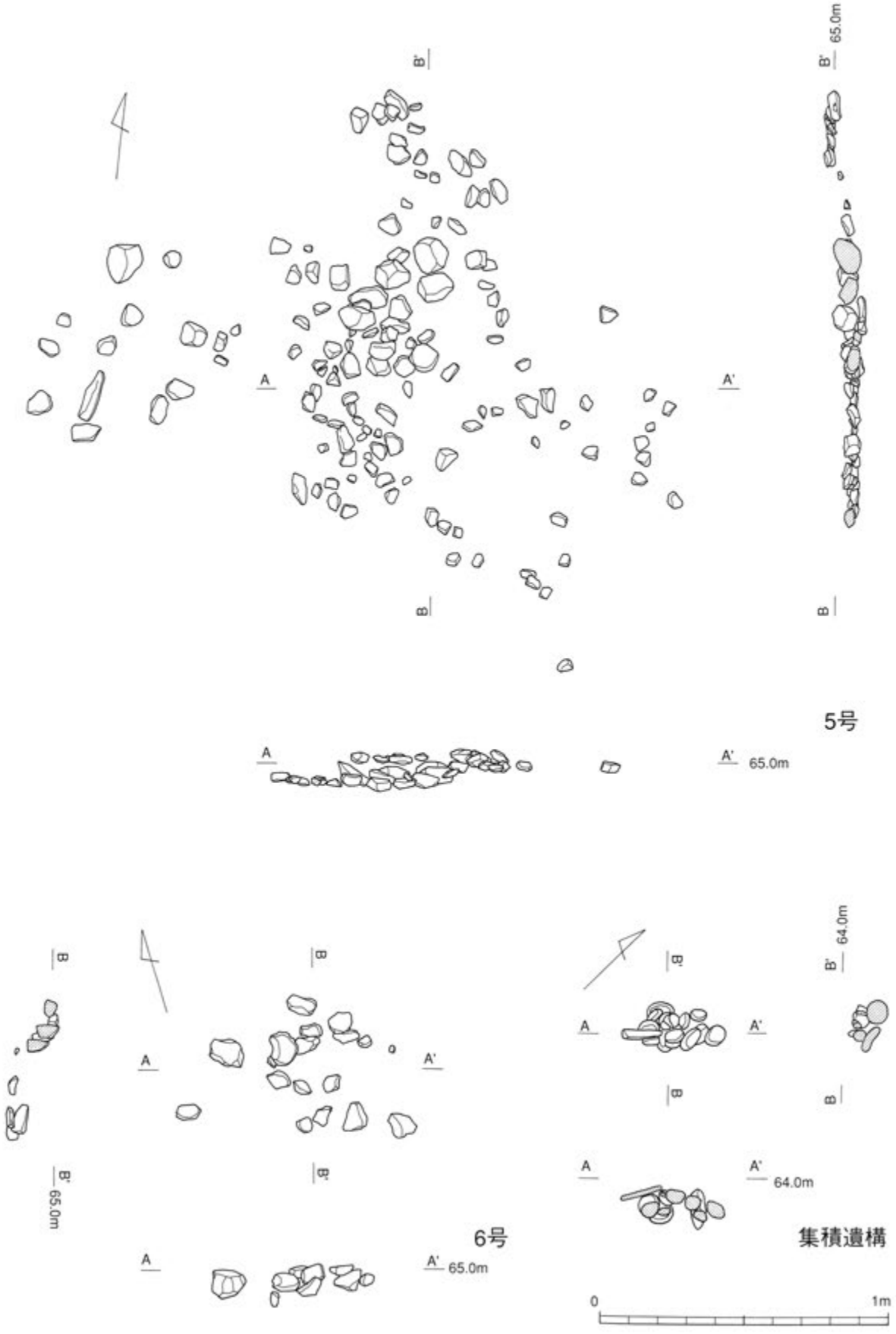


第8図　集石遺構3

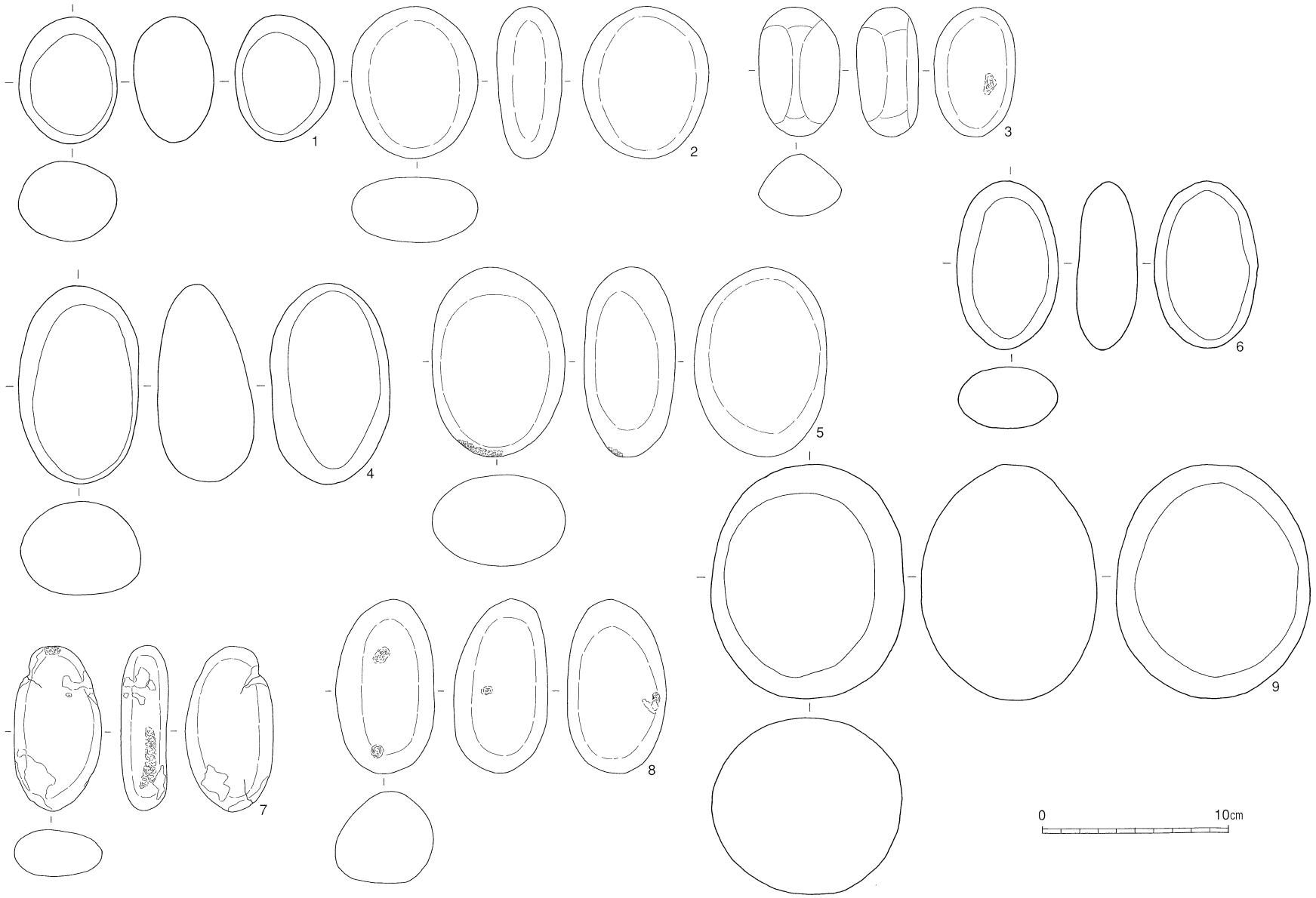
3・12は砂岩製で，7が頁岩製，8は安山岩製である。3は三面体の器形であり，上面側左平坦斜面と上下端側縁部に主要な磨面が確認できる。下面には，1cm幅程度の敲打痕が残る。7は上下両面に磨面，側面に敲打痕を有し，下面中央部には敲打による若干の凹みが確認できる。8は鮮明な敲打痕が上下面に4か所程度見られる。11は棒状を呈し，12は長軸が長い楕円形である。ともに，側縁部には浅い敲きが全周をめぐっている。11の上面下半部には長楕円状の凹みがあり，敲打後に磨った痕跡や縦位に走る擦痕が確認できる。12は，上下端部に明瞭な敲打痕が深く残される。

第1表　遺構内遺物観察表

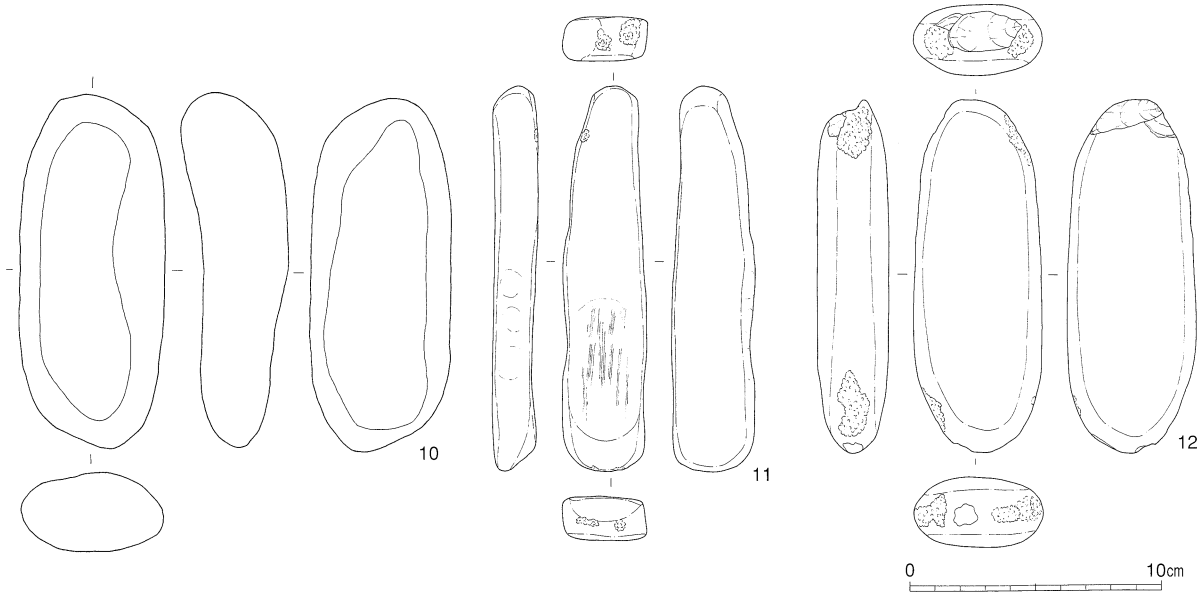
挿図番号	遺物番号	出土区	層位遺構	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第10図	1		ｓｓ7	安山岩	6.8	5.25	4.2	190	磨石
	2		ｓｓ7	砂　岩	8.4	6.8	3.5	250	磨石
	3		ｓｓ7	砂　岩	7.0	4.4	3.4	140	磨石
	4		ｓｓ7	砂　岩	10.6	6.5	4.9	485	磨石
	5		ｓｓ7	砂　岩	10.8	7.2	5.0	480	磨石
	6		ｓｓ7	砂　岩	9.0	5.5	3.3	228	磨石
	7		ｓｓ7	頁　岩	8.9	4.7	2.5	142	磨石
	8		ｓｓ7	安山岩	9.4	5.4	5.0	345	磨石
第11図	9		ｓｓ7	砂　岩	12.5	10.3	9.4	1450	磨石
	10		ｓｓ7	砂　岩	14.0	5.7	3.3	420	磨石
	11		ｓｓ7	砂　岩	15.5	3.3	1.8	150	磨石
	12		ｓｓ7	砂　岩	14.1	5.2	2.8	290	敲石



第9図　集石遺構4・集積遺構



第10図　集積遺構内出土遺物１



第11図　集積遺構内出土遺物２

（２）遺物（第14～89図）

遺物は，土器，石器が出土した。遺物は，可能な限り全点ドット方式による取り上げを目指した。

土器（第14～54図）

本遺跡において出土した土器は11種類に分類され，縄文時代早期相当の土器がほとんどである。

Ⅰ類土器（第14～53・86・87図）

Ⅰ類土器は早期前葉の遺物であるが，もっとも多く出土した一群である。

本報告書ではⅠ類土器を口縁部の文様形態から７分類し，以下に詳述する。

Ⅰ― a類土器（第14～19図）

この類は，口唇部キザミ目の下部に横位の二枚貝腹縁部による刺突を２～４条めぐらしている一群である。完形品は13のみで，14・28は胴部下半部及び底部を欠く。

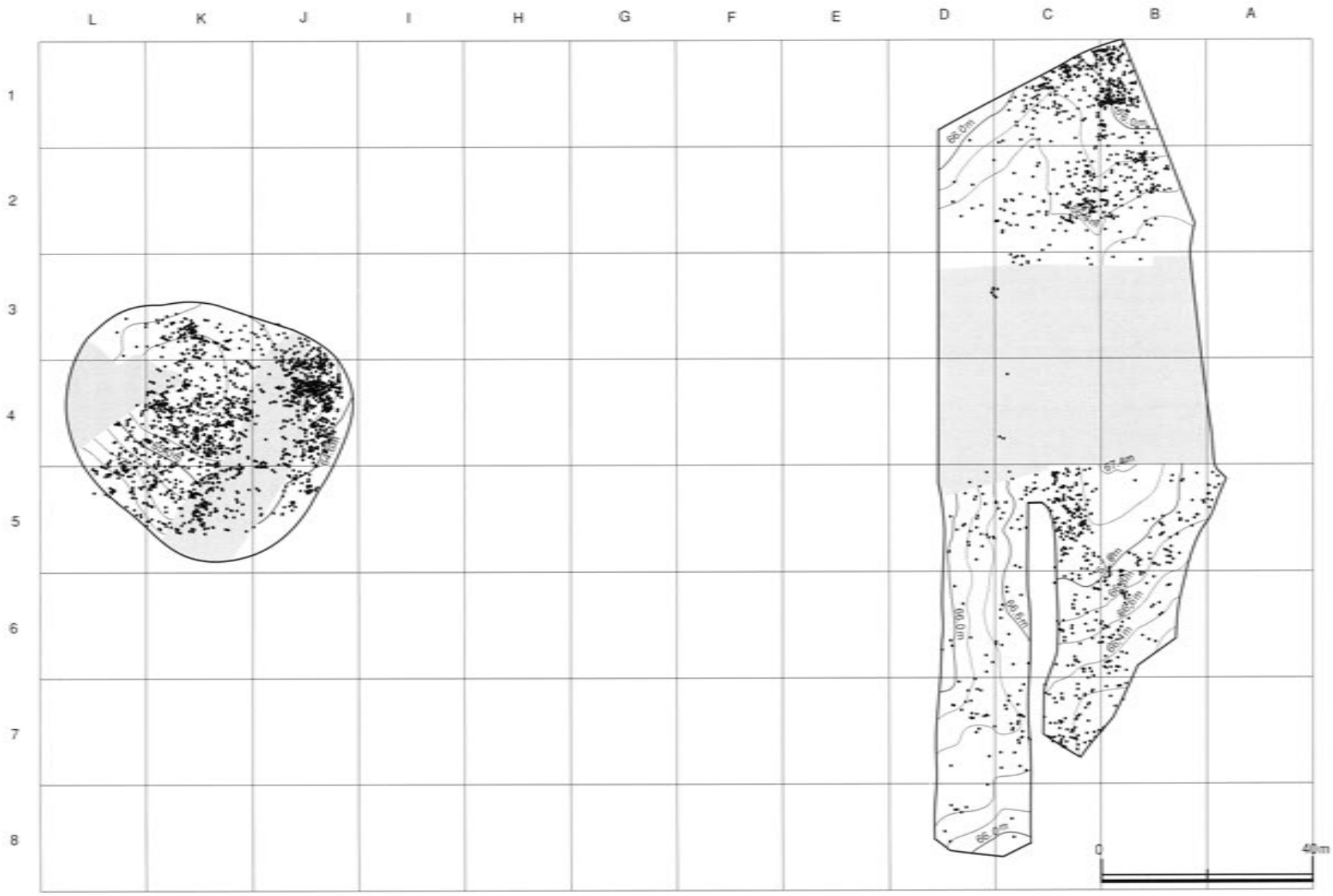
14～25は，口唇部外面に二枚貝の殻頂部を押圧したキザミ目を有する。13・26～64は，口唇部外面に貝殻や篦状工具による縦位のキザミ目を有する。大半は口唇部の段差も大きくなく，胎土に含まれる礫も極少であるが，30・35・38は他に比して口唇部外面から内面に向けての傾斜が極めて大きく，径７㎜程度の礫をはじめとして礫を多く含むなど特徴的であり，同一個体の可能性が高い。他には16・30・34・35・47が径５㎜程度の礫を含むなど目を引く。14は内外面ともに全面的に丹と思われる赤色顔料の着色が施され，36については内面に逆Ｌ字状の丹の着色が確認できる。

Ⅰ― b類土器（第20図）

この類は，口唇部キザミ目の下部に，縦位の二枚貝腹縁部による刺突をめぐらす一群である。

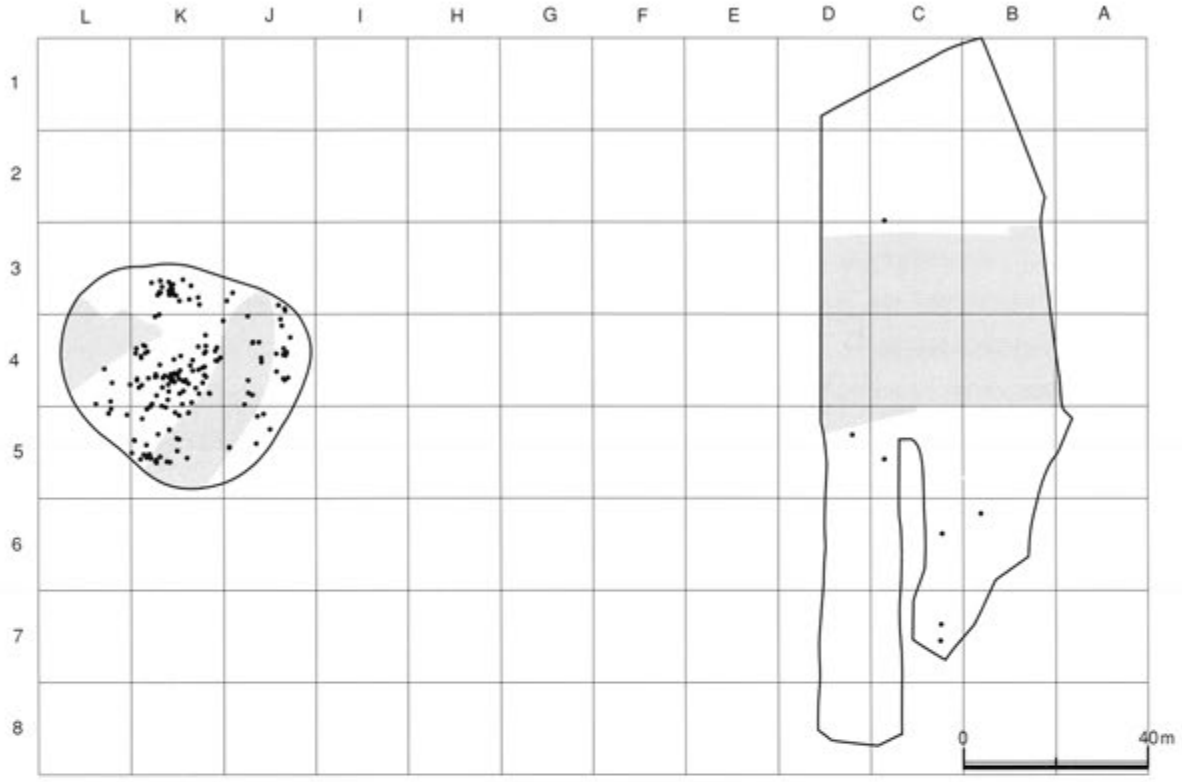
67は底部を除きほぼ完形品に近い形で出土している。口唇部にキザミ目を持たないのが71と74の２点である。71の口唇部断面観が隅丸状を呈しているのに対して，74は口唇部上面が擦切状に平坦面を有している。いずれも，口唇部外面下位の文様が縦位の貝殻刺突文であることから，本類に分類した。65・66は，口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し，67～70・73・74は，口唇部外面を貝殻や篦状工具によって刺突している。これらが縦位の刻みであるのに対して，72は刻みを口唇部外面側と内面側から交互に施している。

口唇部下位の文様については，ほとんどが一段の縦位の貝殻刺突であるが，69と71は幅１㎝程度の縦位の刺突を横高２段めぐらしている。69は３㎜幅程度の狭幅の密な施文であるが，71は８㎜程度の広幅であり斜め方向からの深めの刺突が特徴的である。65・66は丁寧なケズリ調整を施してあるが，胎土には径６㎜程度の礫が含まれる。文様等も含めて酷似し同一個体とも思われるが，器厚が若干異なり断定はできない。

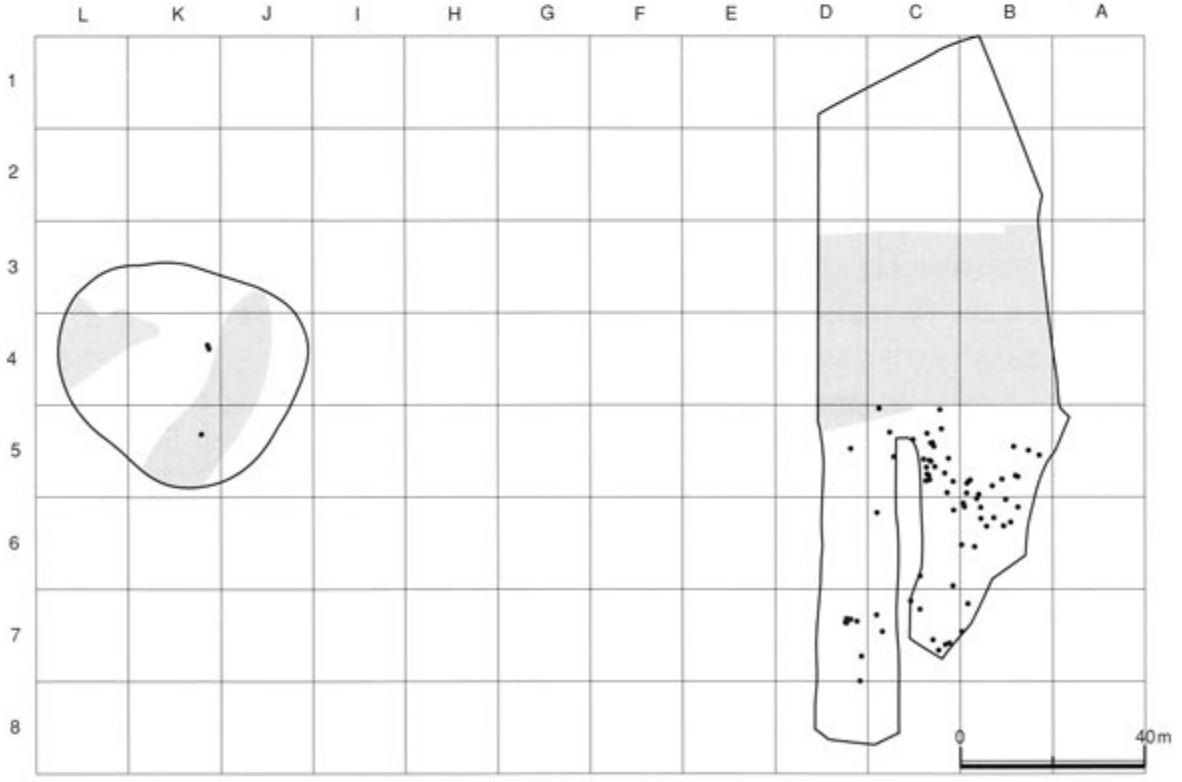


第12図　Ⅴ層遺物出土状況

Ⅰ類土器



Ⅲ類土器



第13図　Ⅰ類土器・Ⅲ類土器分布状況

Ⅰ—c類土器（第21・22図）

この類は，口唇部キザミ目の下部に，縦位の二枚貝腹縁部による刺突をめぐらし，その下部分に横位の1条の貝殻刺突を施文する一群である。完形品は78の1点のみである。

75～78については，口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し，79～83については，口唇部外面に貝殻や篦状工具によって縦位の刺突を施してある。ほとんどが，縦位施文下には1条の横位貝殻刺突がめぐっているが，75・76は口唇部外面側から貝殻による刻みを施した後，内面側から指による押圧で丁寧に調整を施してある。75～77は口唇部下位の文様形態や外面調整が酷似しているが，75・76は口唇部の段差がほとんどないのに対して，77は明瞭に段差を有しており，この3点が同一個体かどうかは定かでない。本類のほとんどは，縦位の貝殻刺突文直下に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしているが，83のみ2条の刺突文が確認される。

胎土については，本類資料が少なく断定はできないが，82・86・87・90・92など小礫を多数含む資料数の割合が高い。

Ⅰ— d類土器（第23図）

この類は，口唇部キザミ目の下部に，斜位の二枚貝腹縁部による刺突文をめぐらす一群である。

93は口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し，94～103は口唇部外面を貝殻や篦状工具によって斜位に刺突している。101のみ口唇部刻みを有しないが，口唇部下位の斜位の貝殻刺突の施文形態により，本類に分類した。ほとんどが一定方向に傾斜する斜位の施文であるが，96は上位左下がりと下位右下がりの刺突文を組み合わせたくの字状の施文構成である。

胎土については，94・100に小礫が確認できる程度で，特に礫の包含が特徴的な資料は確認できない。

Ⅰ— e類土器（第24・25図）

この類は，口唇部キザミ目の下部に，斜位の二枚貝腹縁部による刺突文をめぐらし，その下部分に横位の1条の貝殻刺突文を施文する一群である。

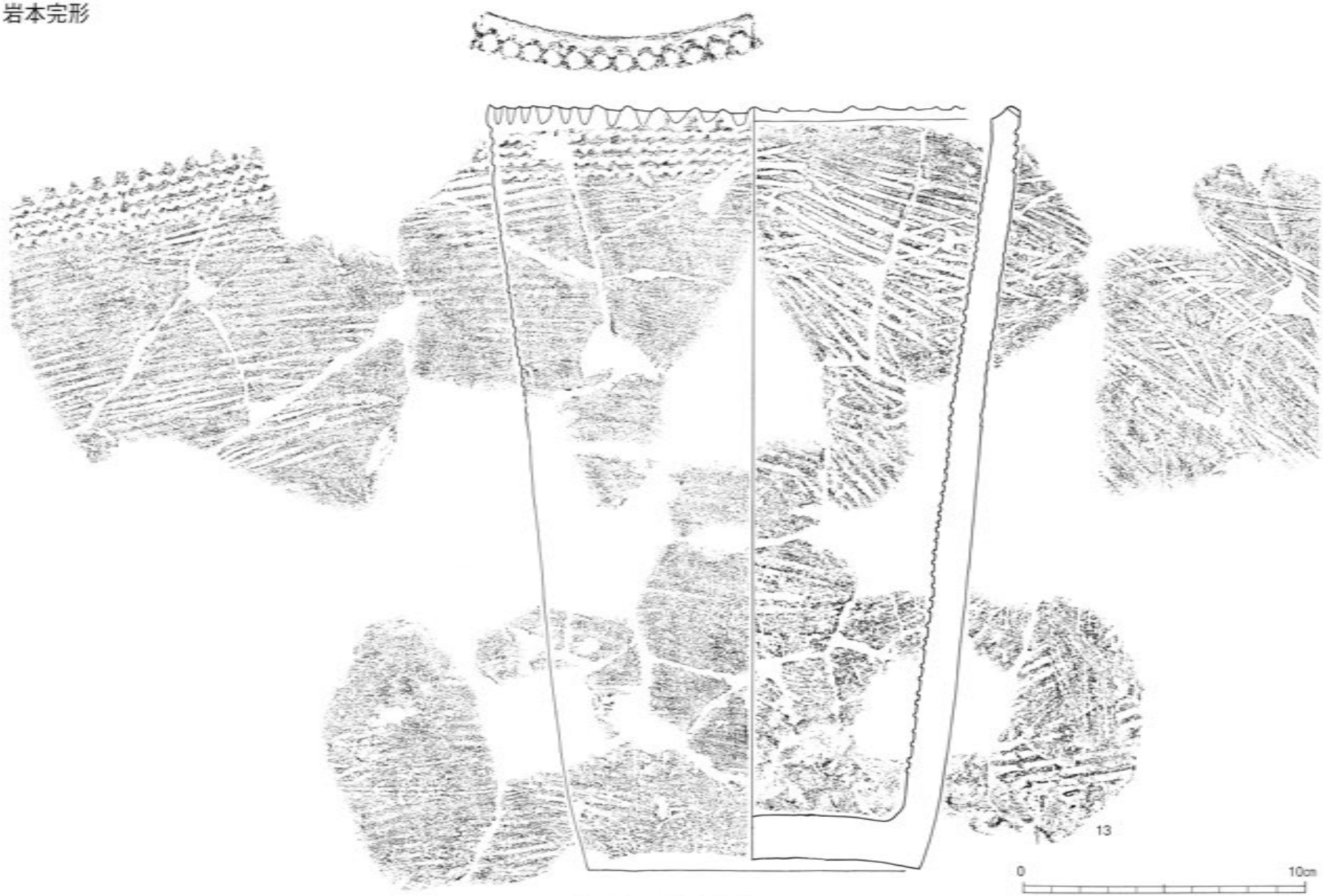
104のみ口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し，それ以外は貝殻や篦状工具による刻み施文であるが，108については刻みが確認できない。ほとんどの資料が，口唇部外面下位に斜位の刺突文を施文後，その下位に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしているが，108は施文帯下位にやや斜位気味と横位の刺突文が2条確認できる。105・112については斜位の刺突施文後，その直上と直下の2か所に横位の貝殻刺突文をめぐらしているのが特筆される。胎土や色調，施文形態から同一個体であろうと想定される。111・113～115・117・118など砂粒や小礫を含む資料が確認できるが，特に113は9㎜程度の大礫が含まれている。

Ⅰ— f類土器（第26図）

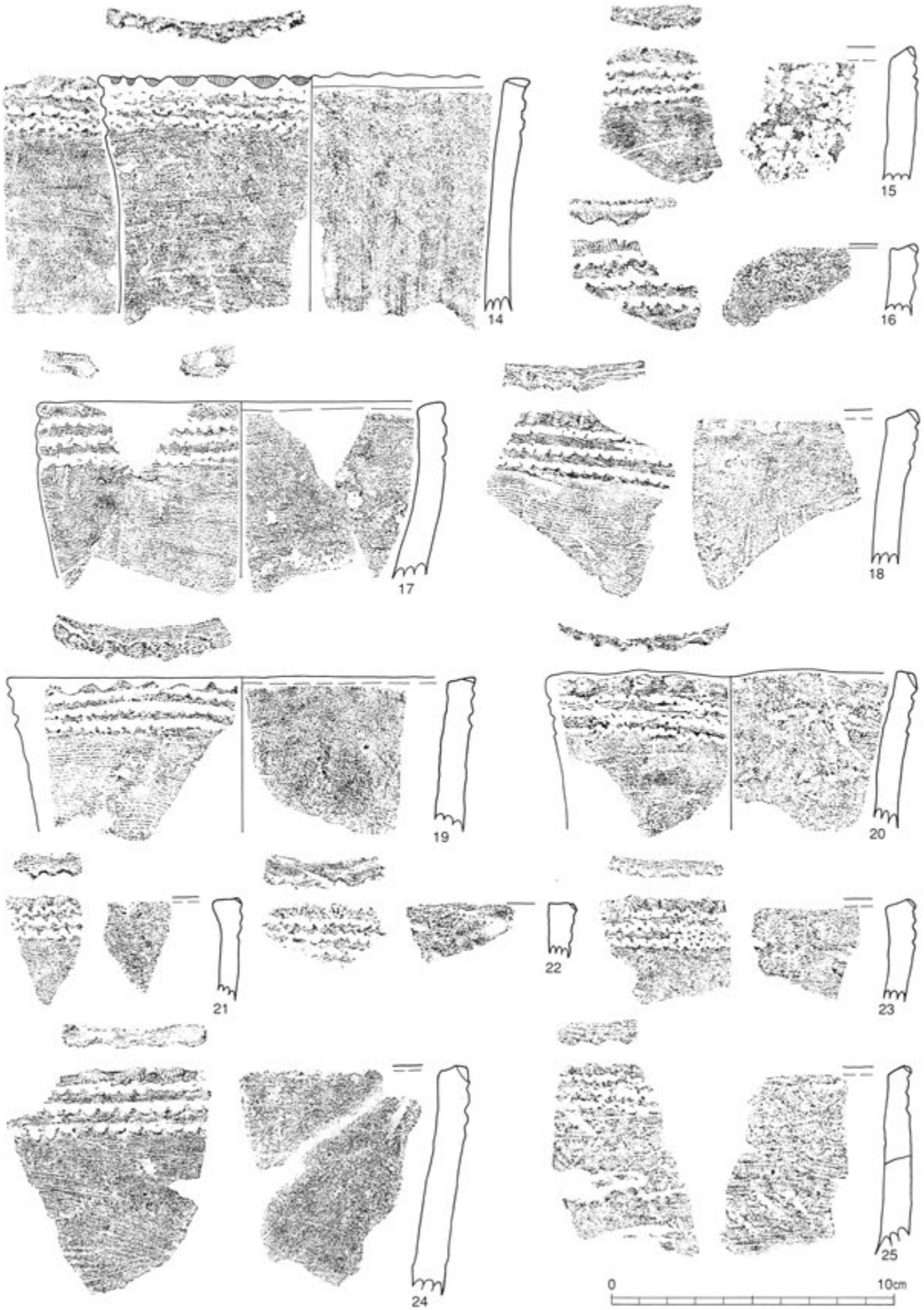
この類は口唇部下位に文様を有するが，その形態が上記のa～e類及び後述g類に属さない一群である。

120は口唇部外端部から直下1㎝幅程度を，貝殻腹縁部による刺突文を縦位に1条めぐらしており，口唇部刻みと口唇部直下の刺突が統合された文様形態である。その結果，口唇部の断面観が口唇部内面側は高く外面側に向けて大きく傾斜する形状を呈しており，この口唇部形状は本資料1点のみ確認されている。また，口縁部断面の外側への肥厚が顕著なのも特徴的である。121・122は施文幅2.5～3㎝程度の縦位の貝殻刺突文と3条の横位貝殻刺突文が交互に施文されている。123は口唇部外面に刻みを施し，その直下に貝殻肋部を縦位に1条刺突しめぐらしてある。124は口唇部外面のキザミ目直下に，貝殻腹縁部を1㎝3㎜程度の間隔で波状に押し引いている。この資料は外面の貝殻腹縁部による条痕調整が明瞭である。

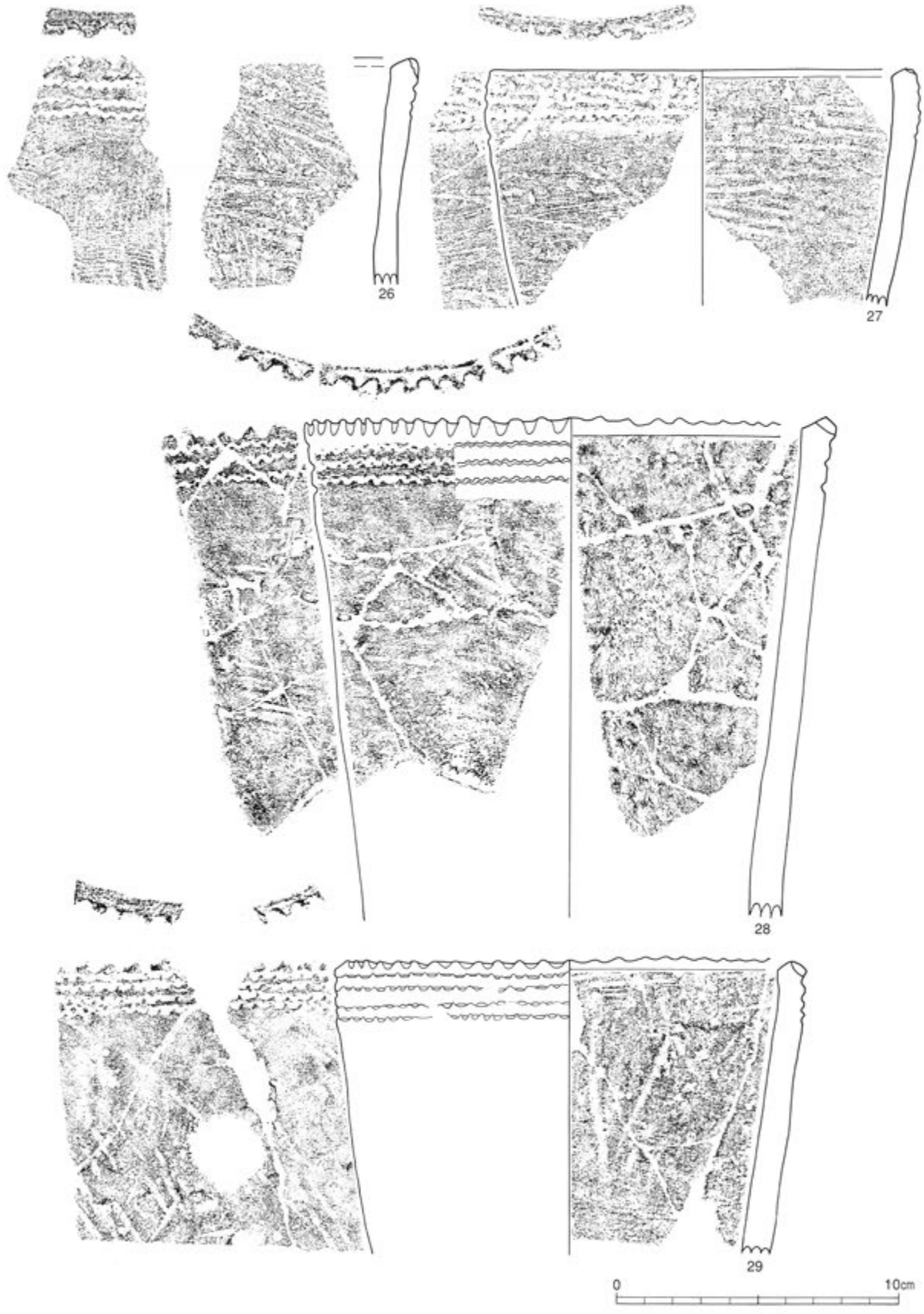
岩本完形



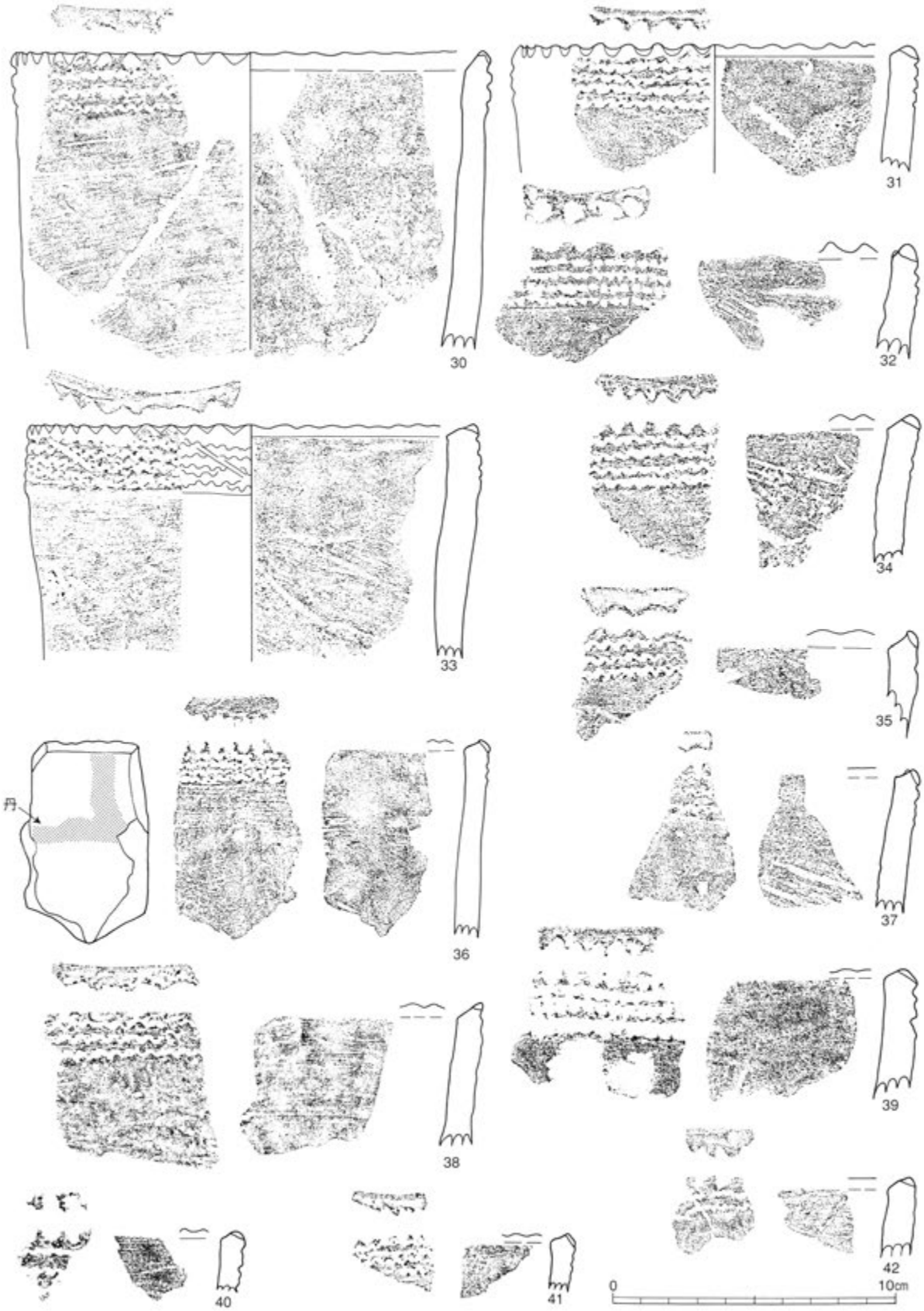
第14図　Ⅰ類土器１



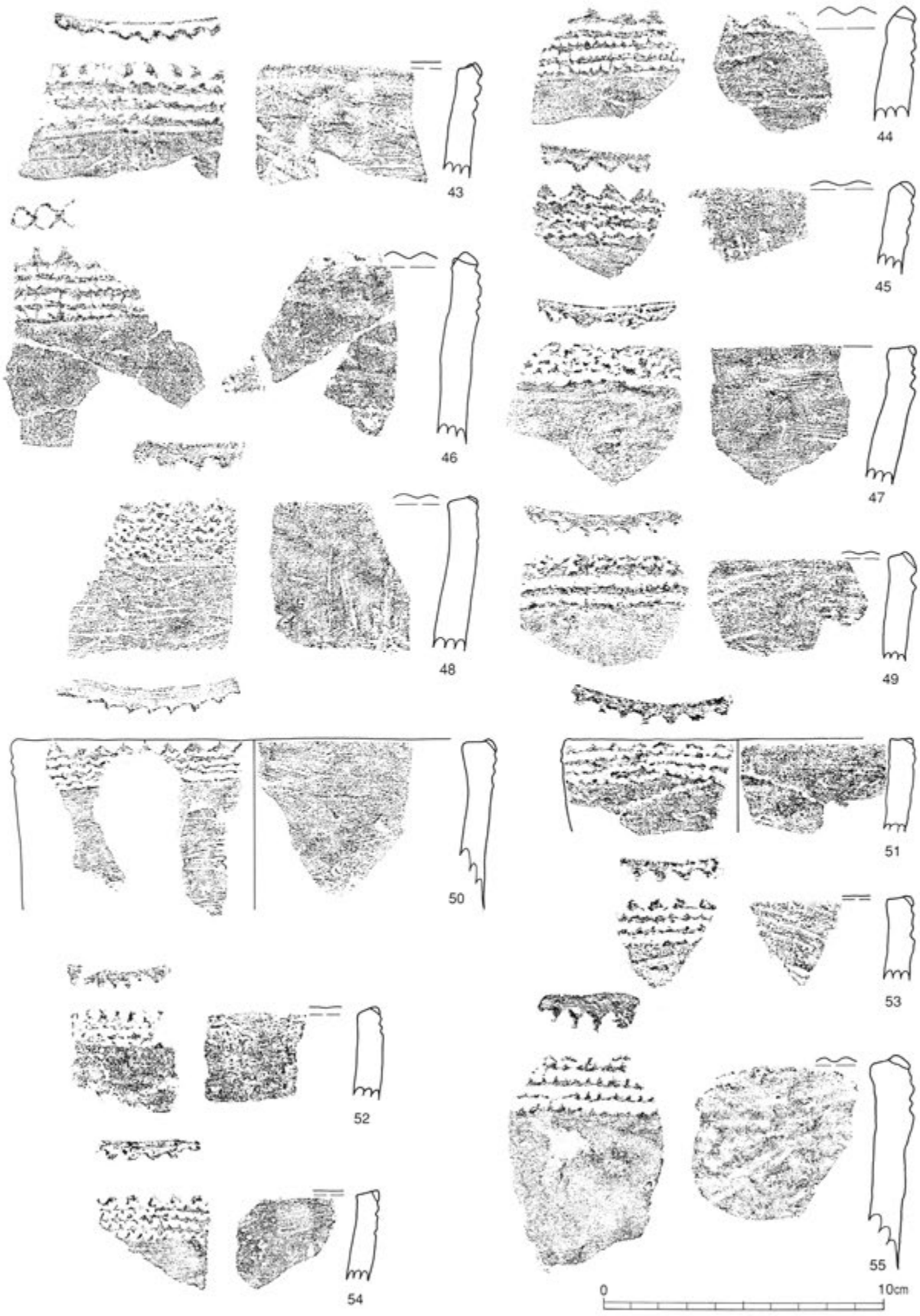
第15図　Ⅰ類土器 2



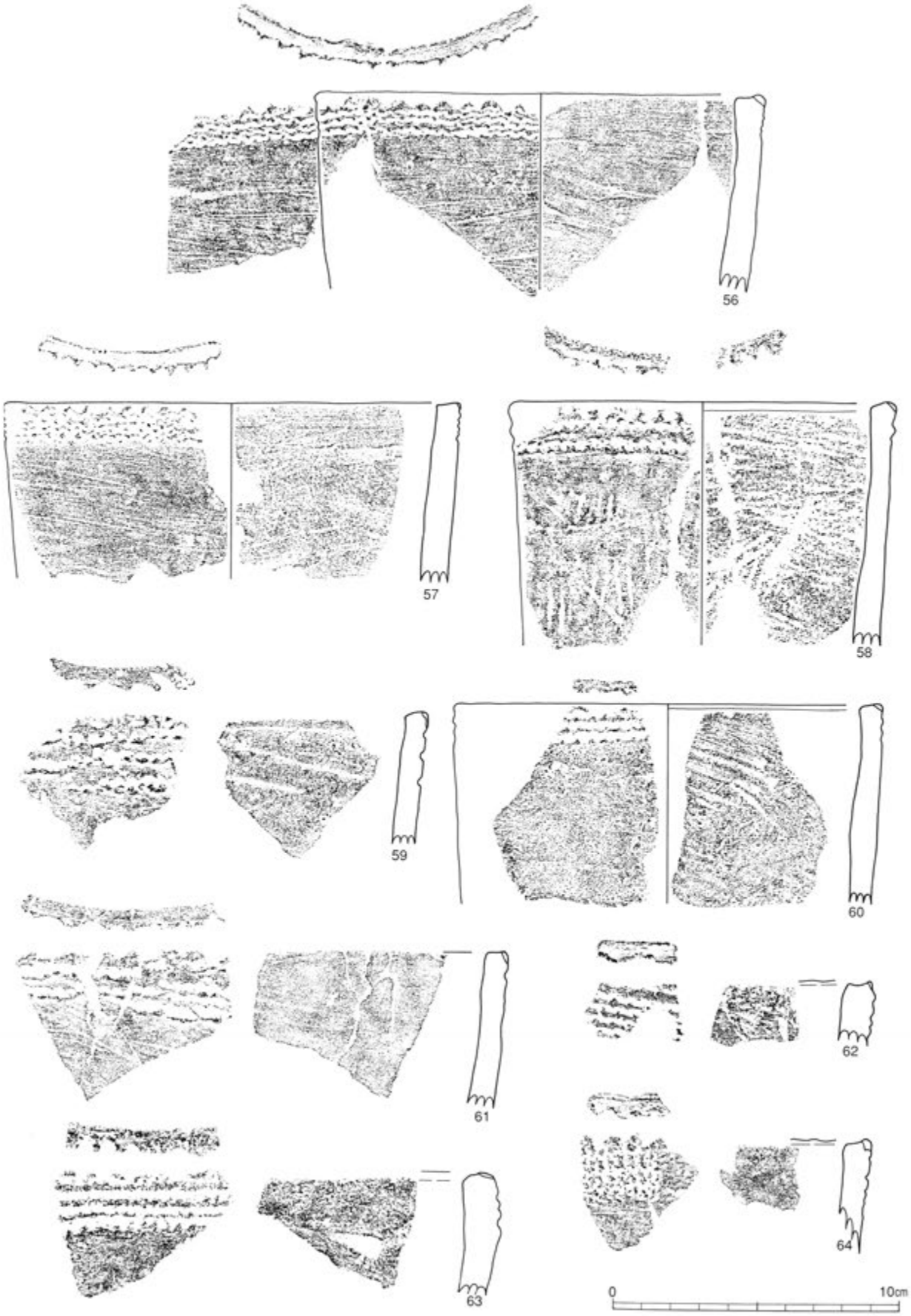
第16図　Ⅰ類土器 3



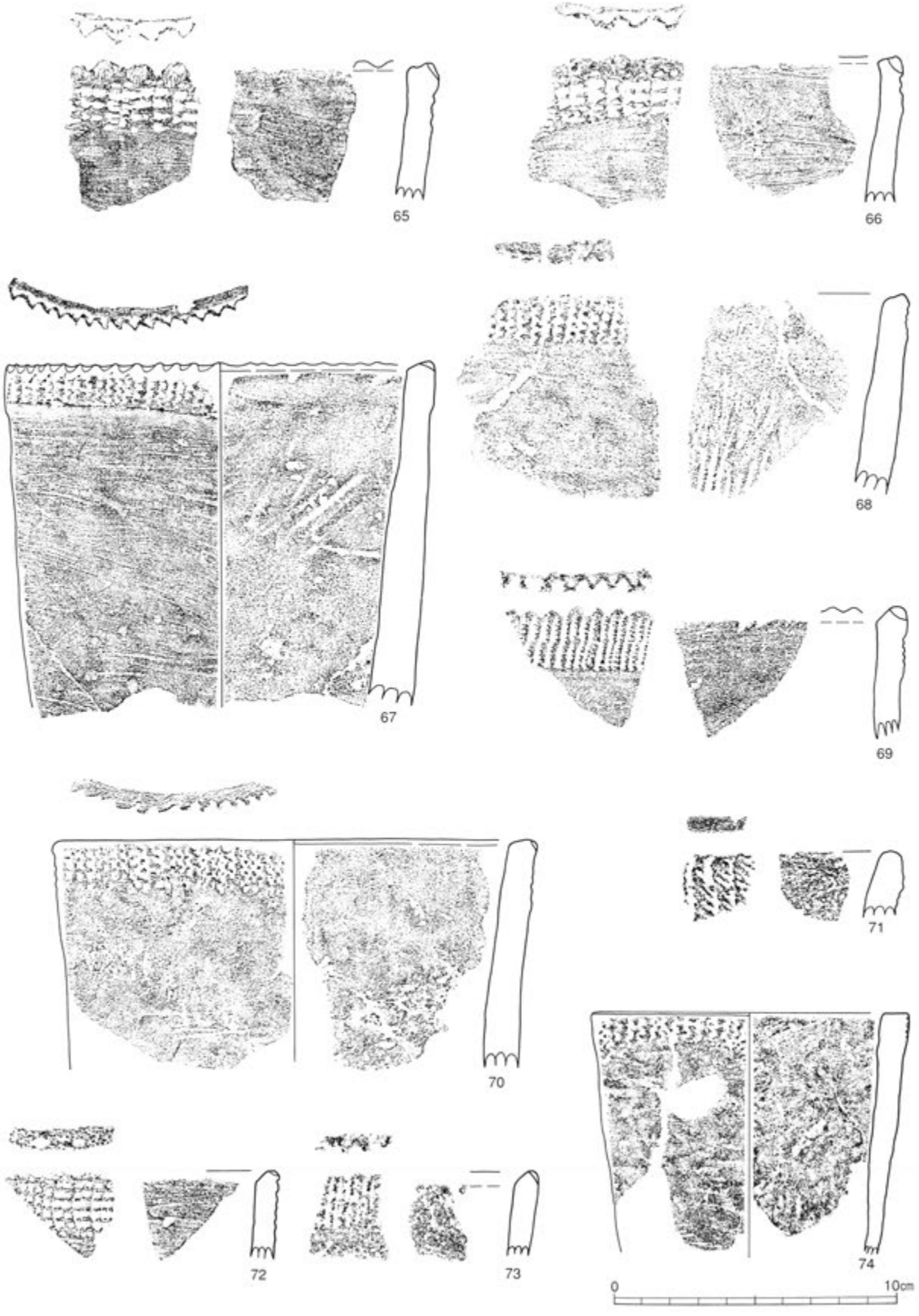
第17図　Ⅰ類土器 4



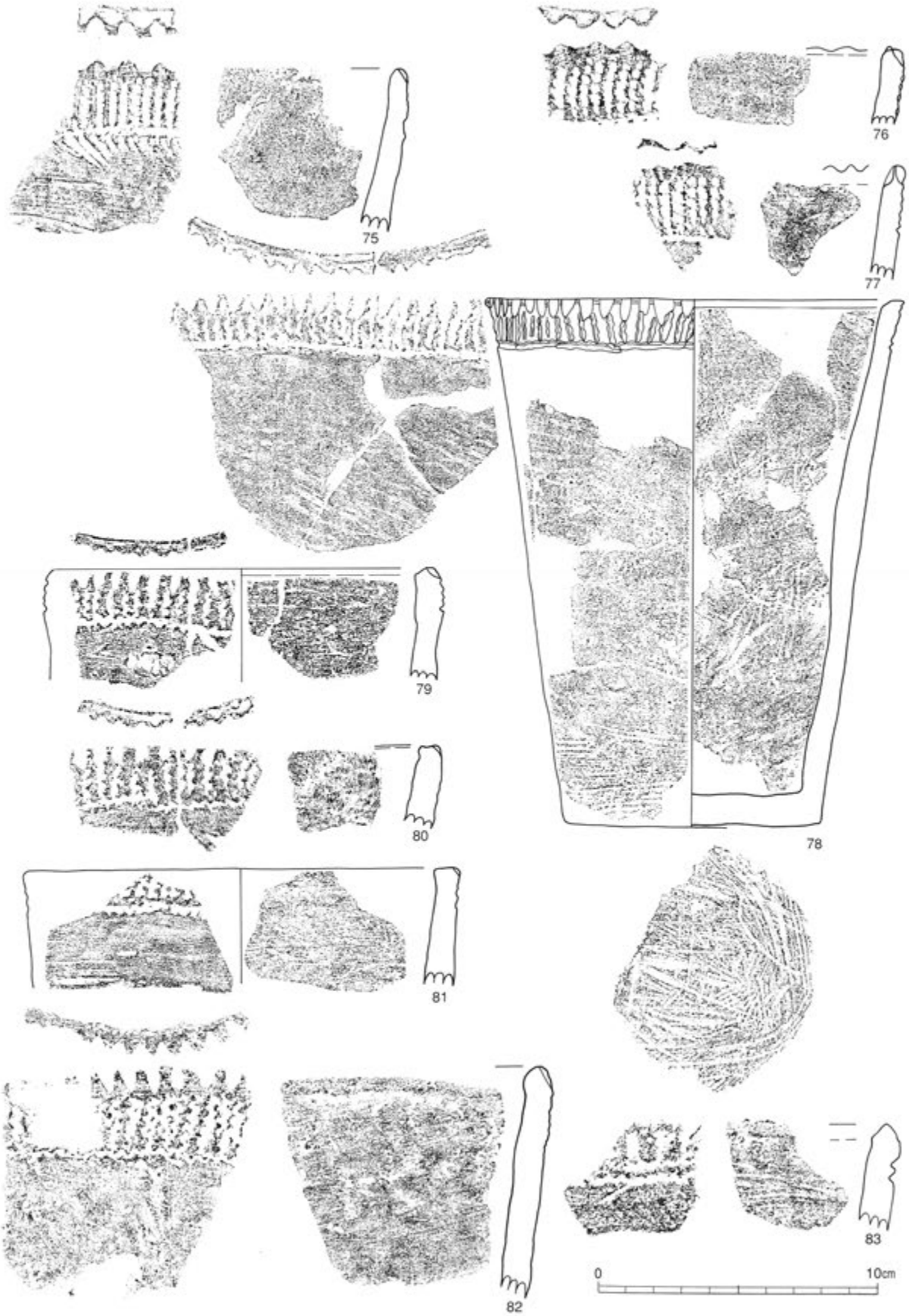
第18図　Ⅰ類土器５



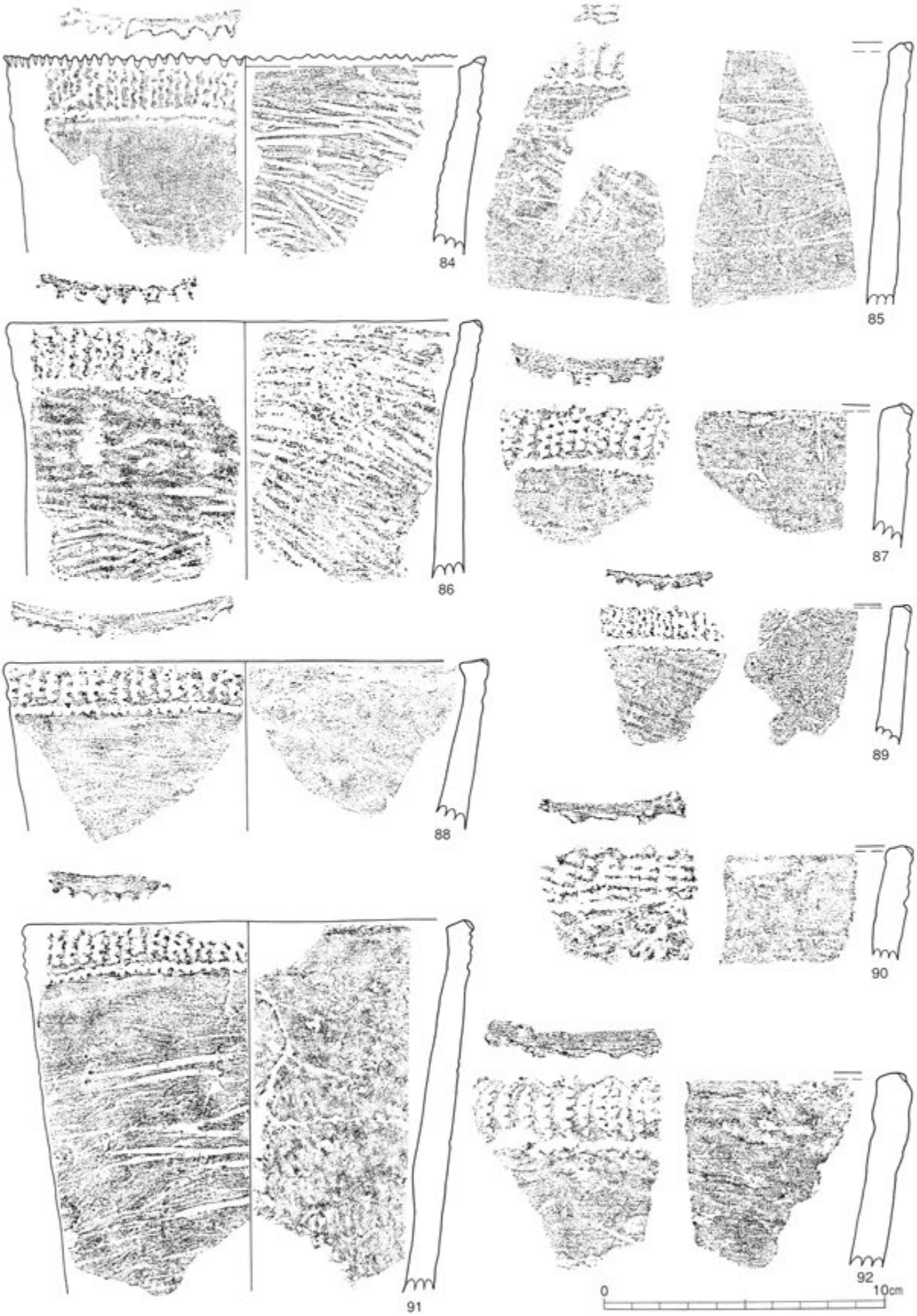
第19図　Ⅰ類土器 6



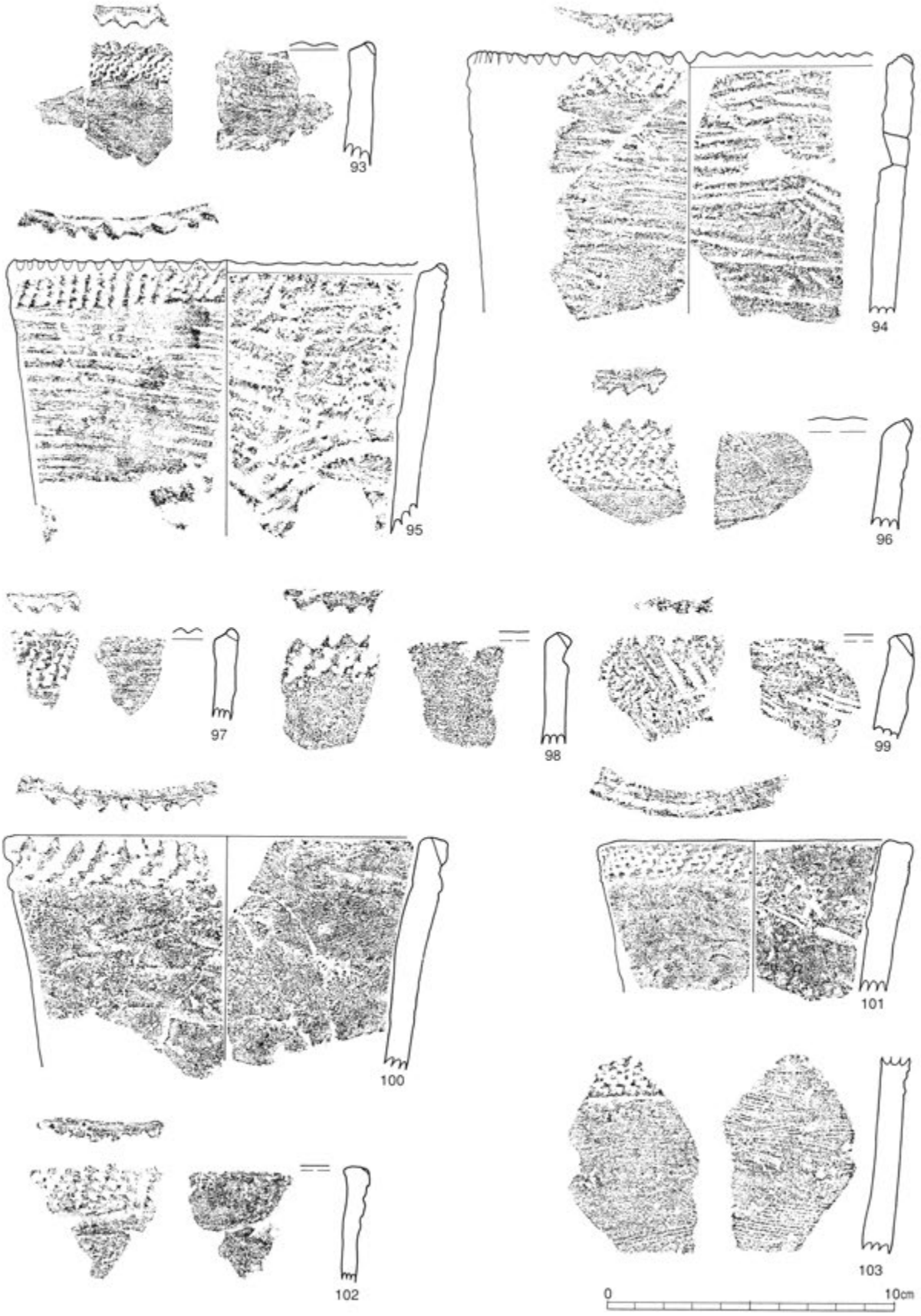
第20図　Ⅰ類土器７



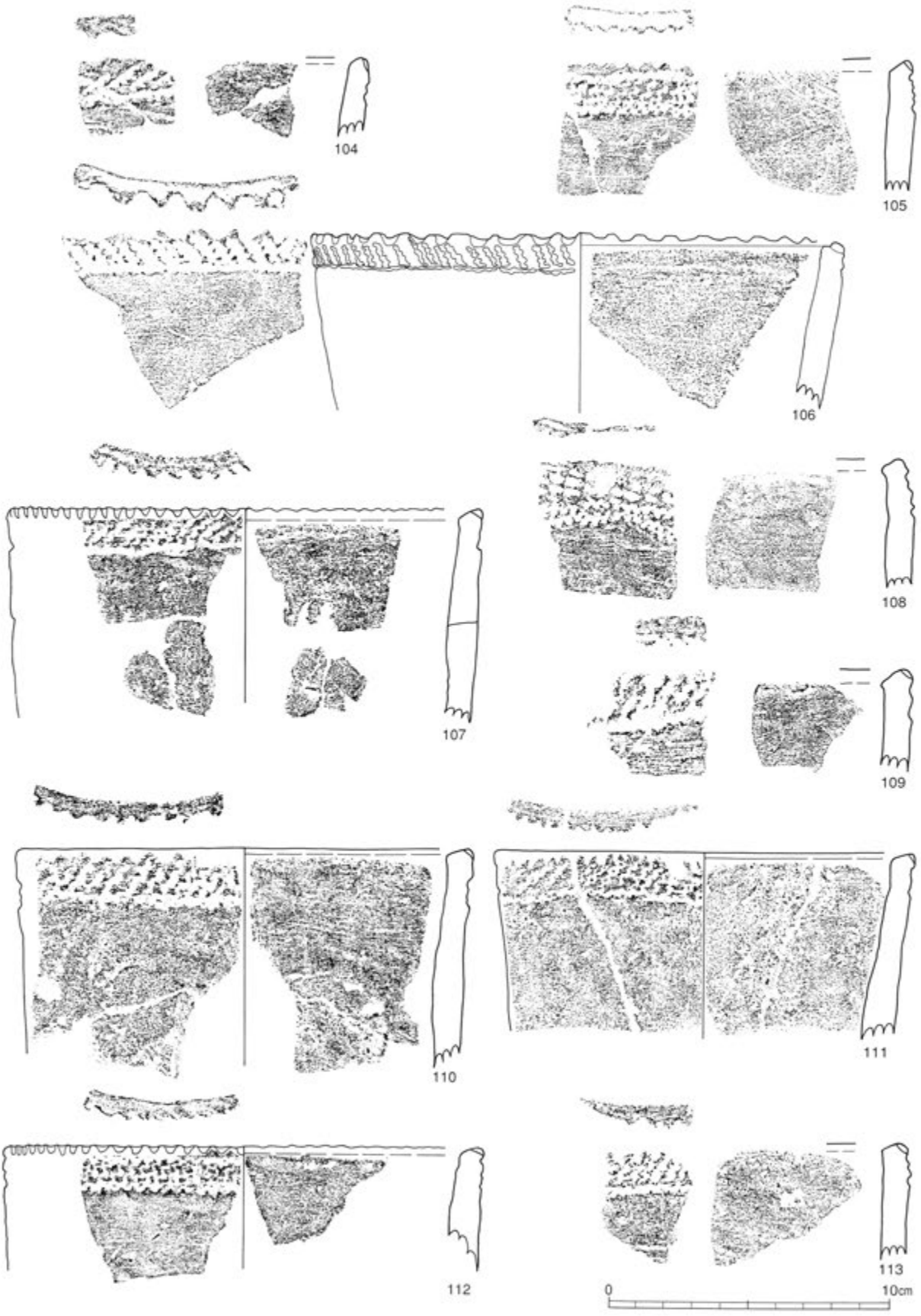
第21図　Ⅰ類土器 8



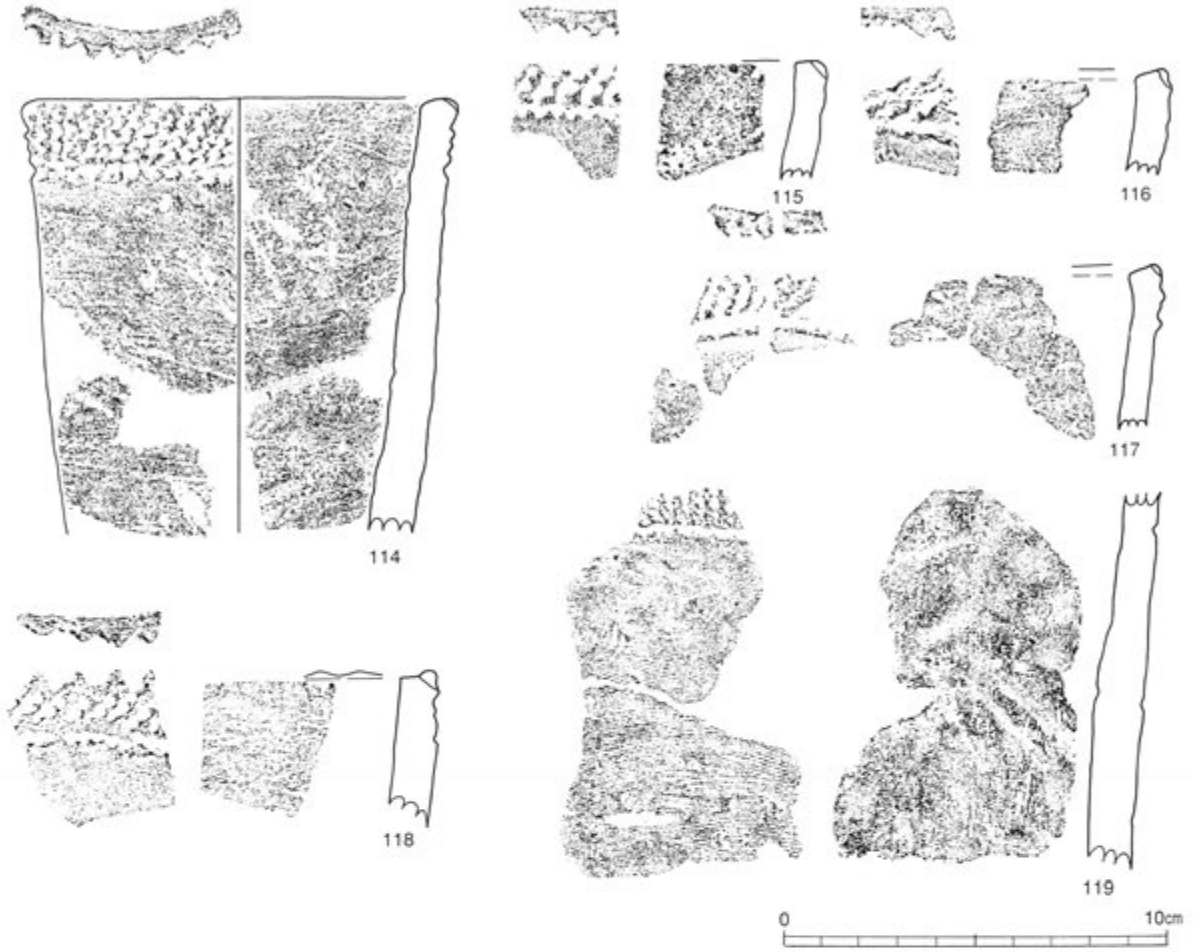
第22図　Ⅰ類土器 9



第23図　Ⅰ類土器10



第24図　Ⅰ類土器11



第25図　Ⅰ類土器12

Ⅰ— g 類土器（第26～33図）

この類は，口唇部下部に文様がないものやキザミ目及び文様の磨耗が激しく，文様形態等確認できない一群である。

125は器面の磨耗が激しく，口唇部の刻みの有無や口縁部文様の有無・形状は確認できない。126は口唇部に刻みを有し，口縁部には文様が存在するようであるが，磨耗が激しく，文様形態は確認できない。127・128は口唇部の刻みや口縁部の文様を有しない。口唇部上面は，矩形状の平坦面を呈している。

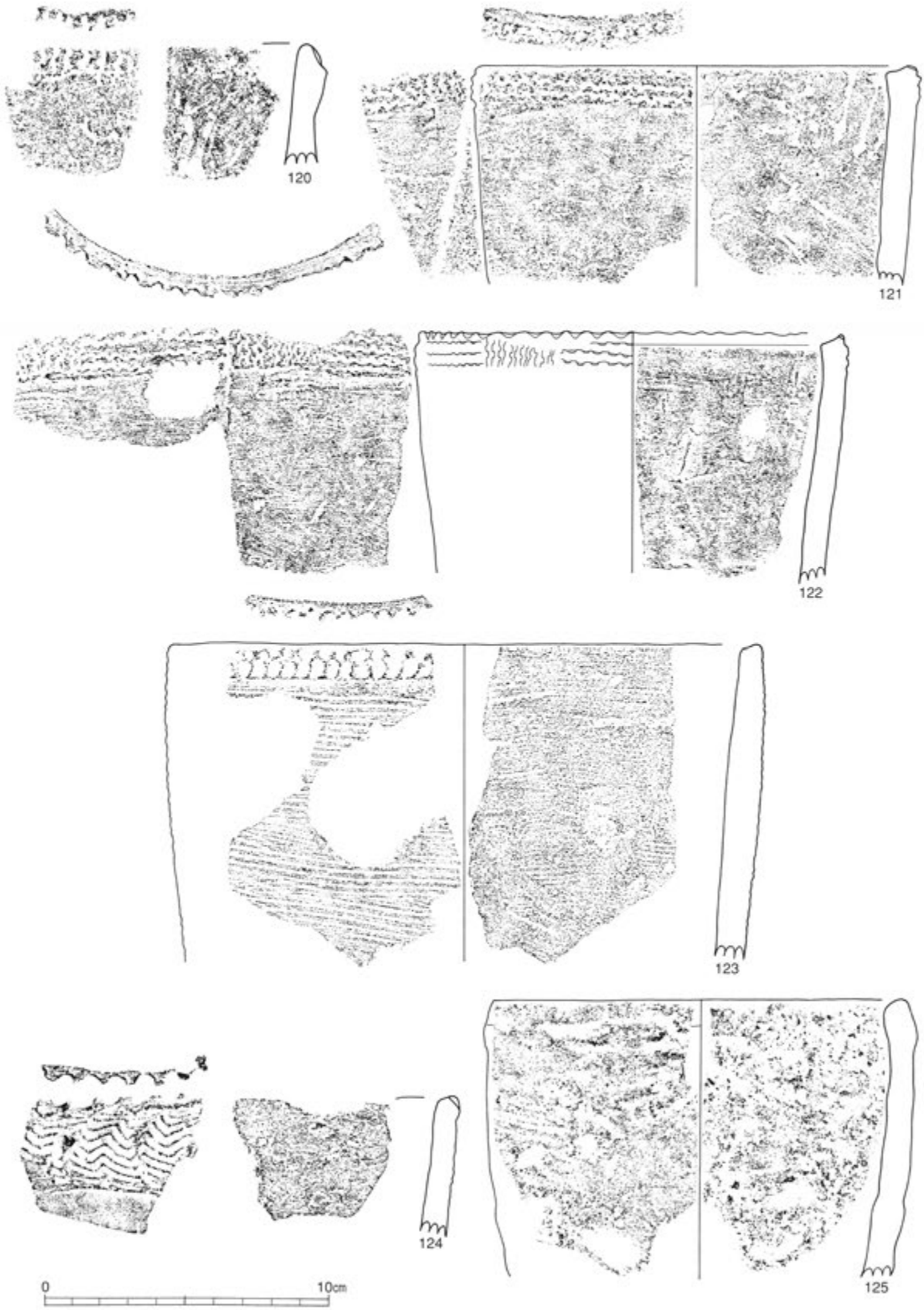
129～164は胴部である。内面の調整については，貝殻条痕後ナデを施してあるのが，131・134・141・145・146・149～151・153・154・157・164である。152は，ケズリと貝殻条痕を施した後，ナデ調整をしている。その他の129・130・132・133・135～140・142～144・147・148・155・156・159～163は，ケズリ後ナデである。155・156については，ハケ目状の丁寧なケズリが見られる。

胎土については，礫が極めて多く含まれるのが，130・131・133・162，次いで多く含まれるのが，153・163である。

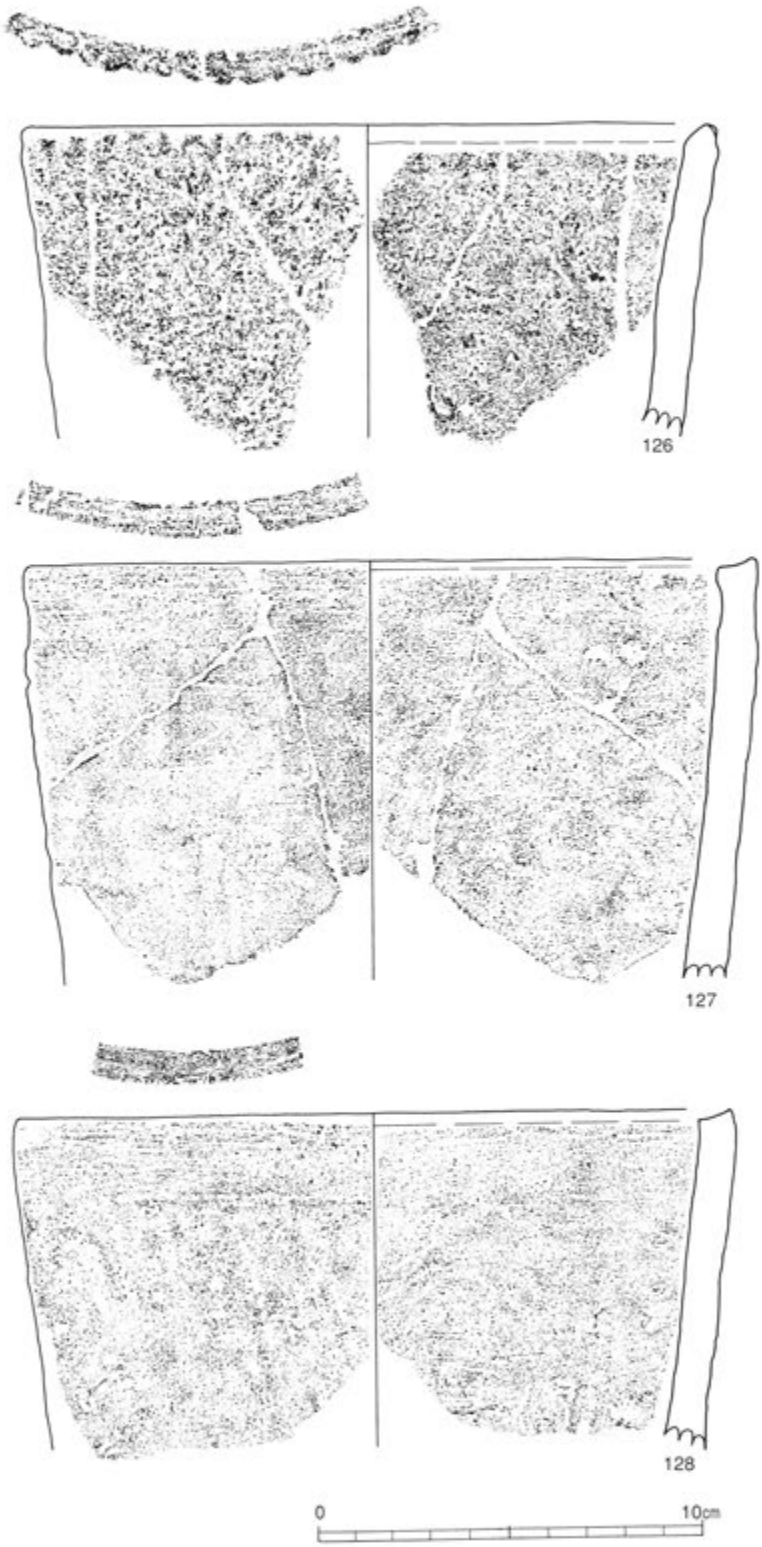
いずれの資料も，胎土に含まれる礫等は極めて少ないが，162のみ１㎝程度の小礫など砂粒や礫が多数含まれる。

165～186は底部である。胴部外面下位部分の施文については，165～172は無文であり，173～178は，底部付近に２～３条程の横位の貝殻条痕が施されている。179～186は，胴部下端付近に縦位の貝殻条痕がめぐらされている。173は、胴部上半部には斜位の貝殻条痕が施され，胴部下半部には横位の条痕が明瞭に残されている。

底部外面の調整については，条痕が施されているのが173・174であり，ミガキが確認できるのが167・170・171・177・178・180～182・185・186である。



第26図　Ⅰ類土器13



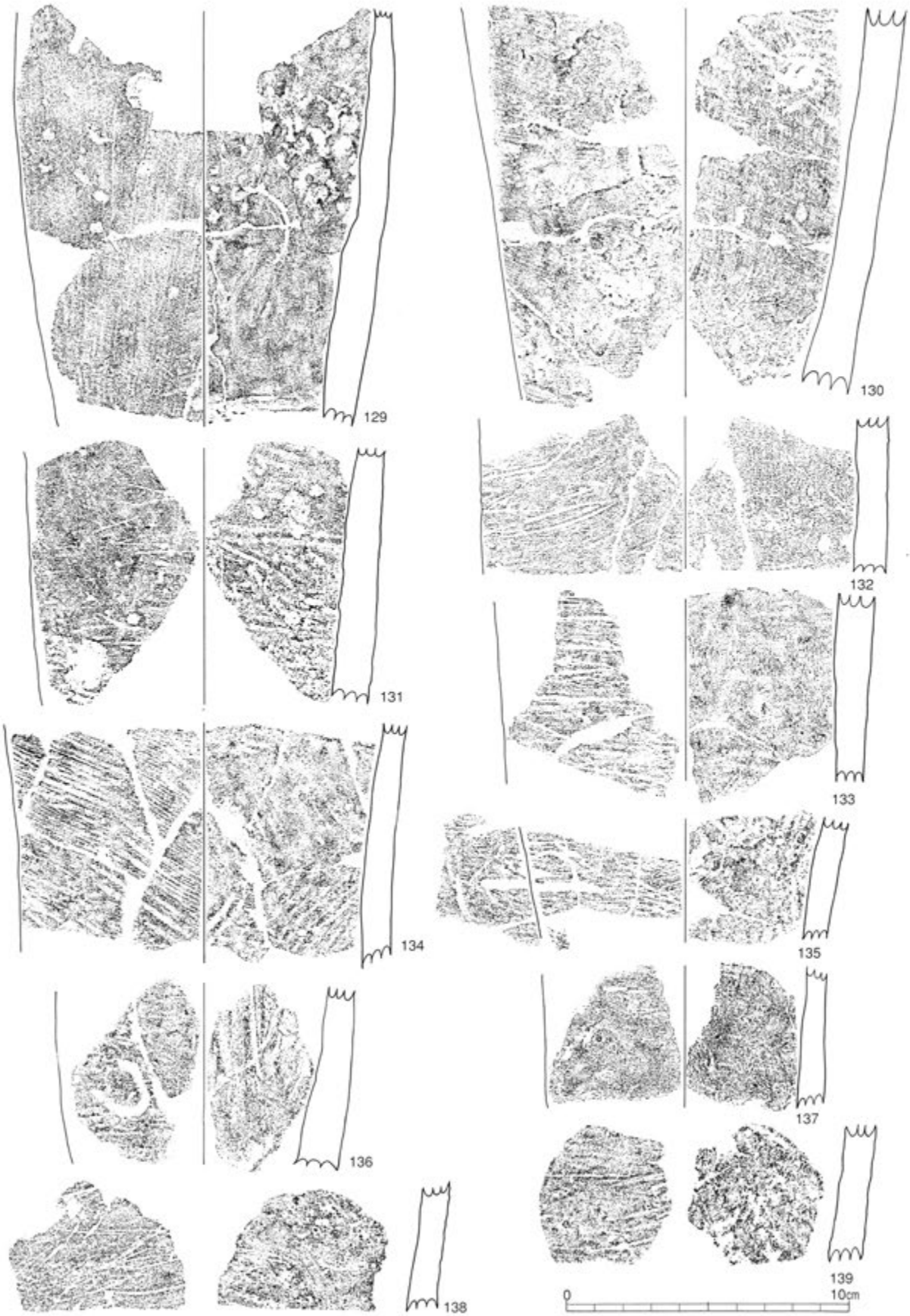
第27図　Ⅰ類土器14

172と177には１～２条の沈線が確認できるが，貝殻条痕によるものか定かでない。171は，底部と胴部の輪積みによる接合の不完全部分が観察できる。また，胴部下端部が，つまみにより若干外側に張り出している。他に170は，底部から１㎝程度上部の胴部外面を横方向にナデ調整した結果，その下部分が外側に張り出している。他の資料には底部の張り出しは見られない。

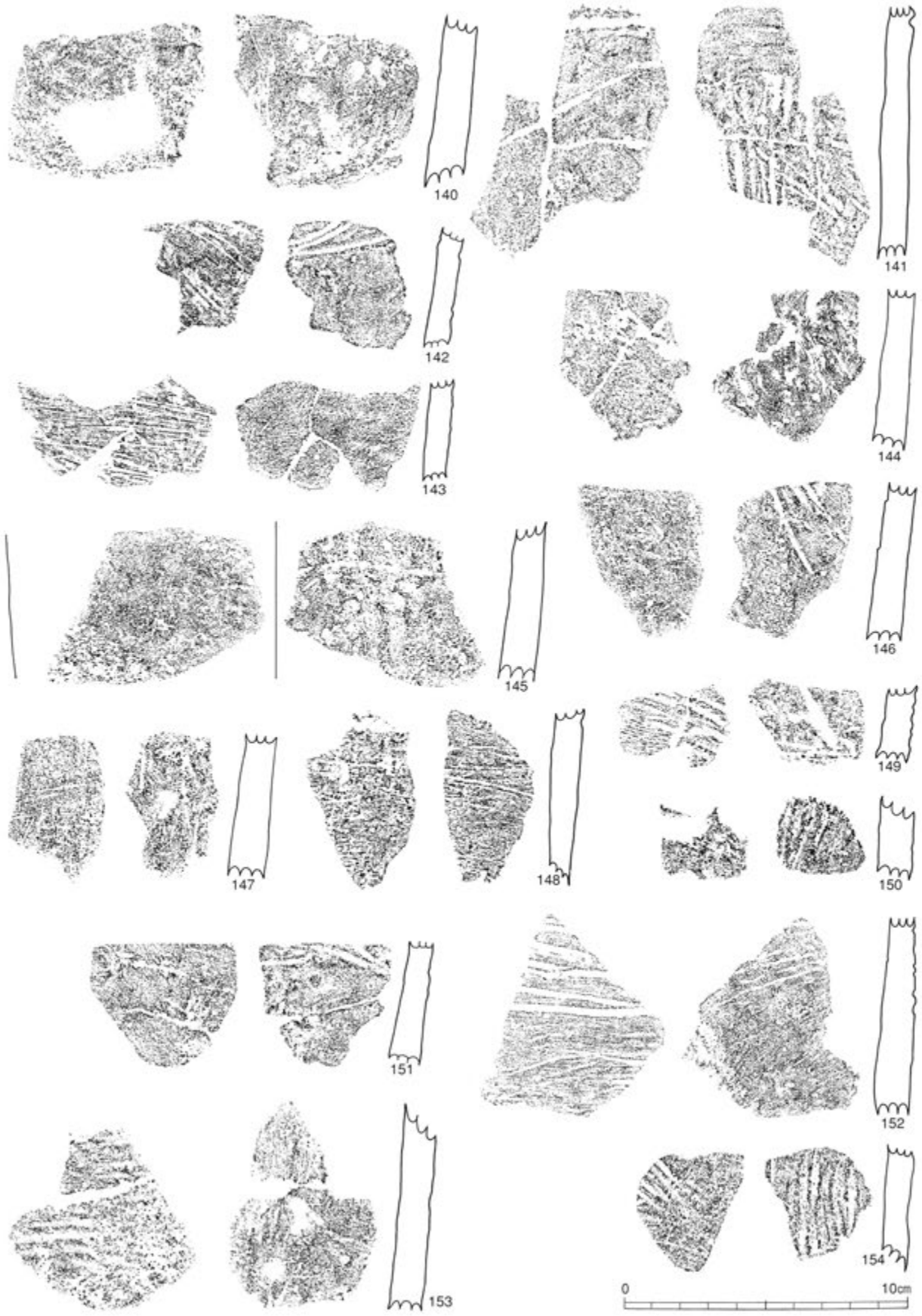
胴部内面の調整については，貝殻条痕を施してあるのが，165・167～169・173～175・178～179・182～185である。167・169は，ハケ目状の丁寧なケズリが見られる。168は胴部の底部に接する面において１㎝２㎜程度の幅の貝殻条痕が横方向にえぐるように施され，173・181は同部分において１㎝程度の幅の縦方向の貝殻条痕がえぐるように施されている。166・170～172・180・181・186は，ケズリ後ナデ調整である。

底部の内面調整については，同心円状の貝殻条痕が確認できるのは，165・167・169・173・175・177～179・181・182・185である。

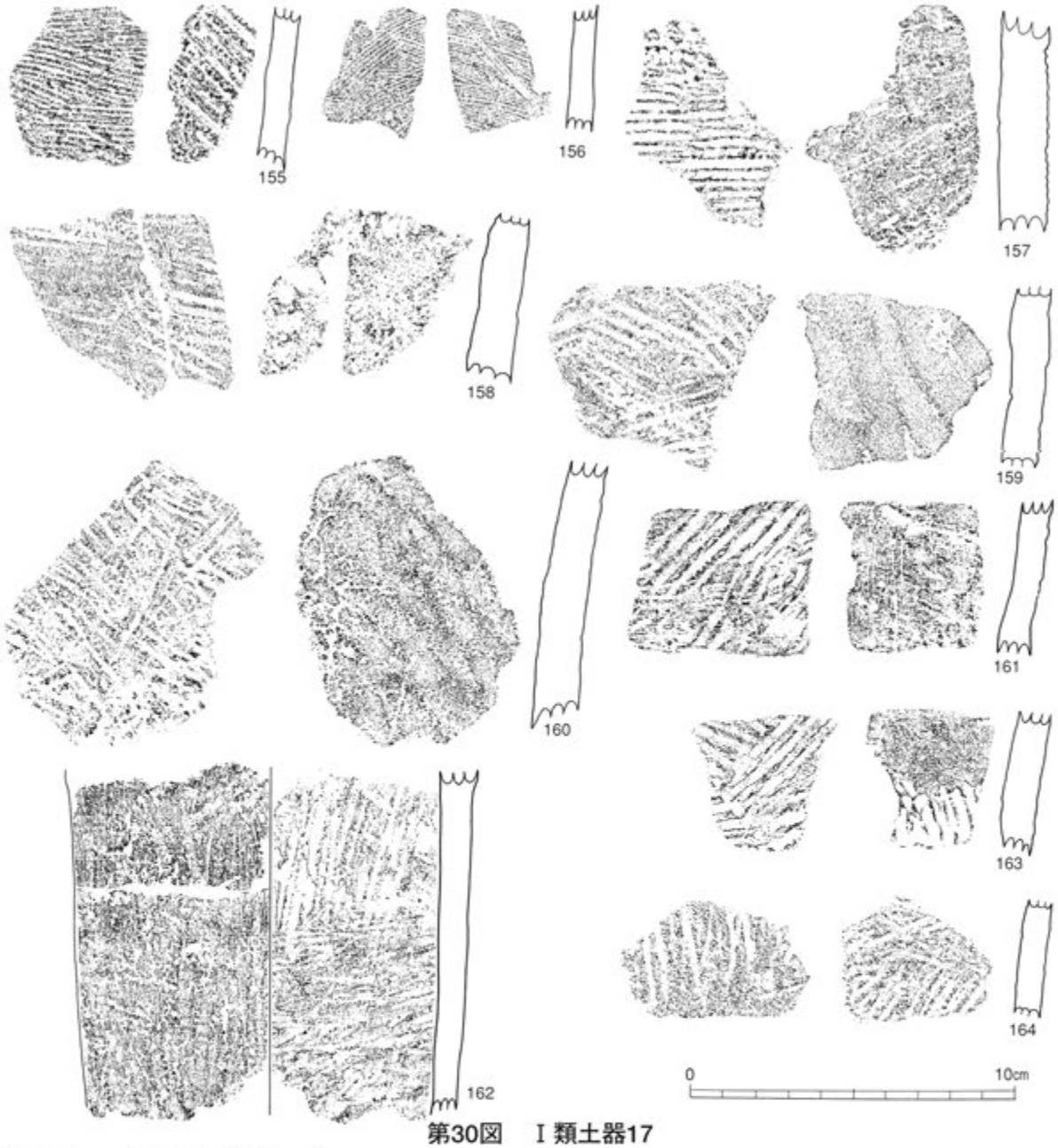
砂粒や小礫が多く含まれるのは，168・170・173・174・179～182・184である。



第28図　Ⅰ類土器15


140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
0
10cm

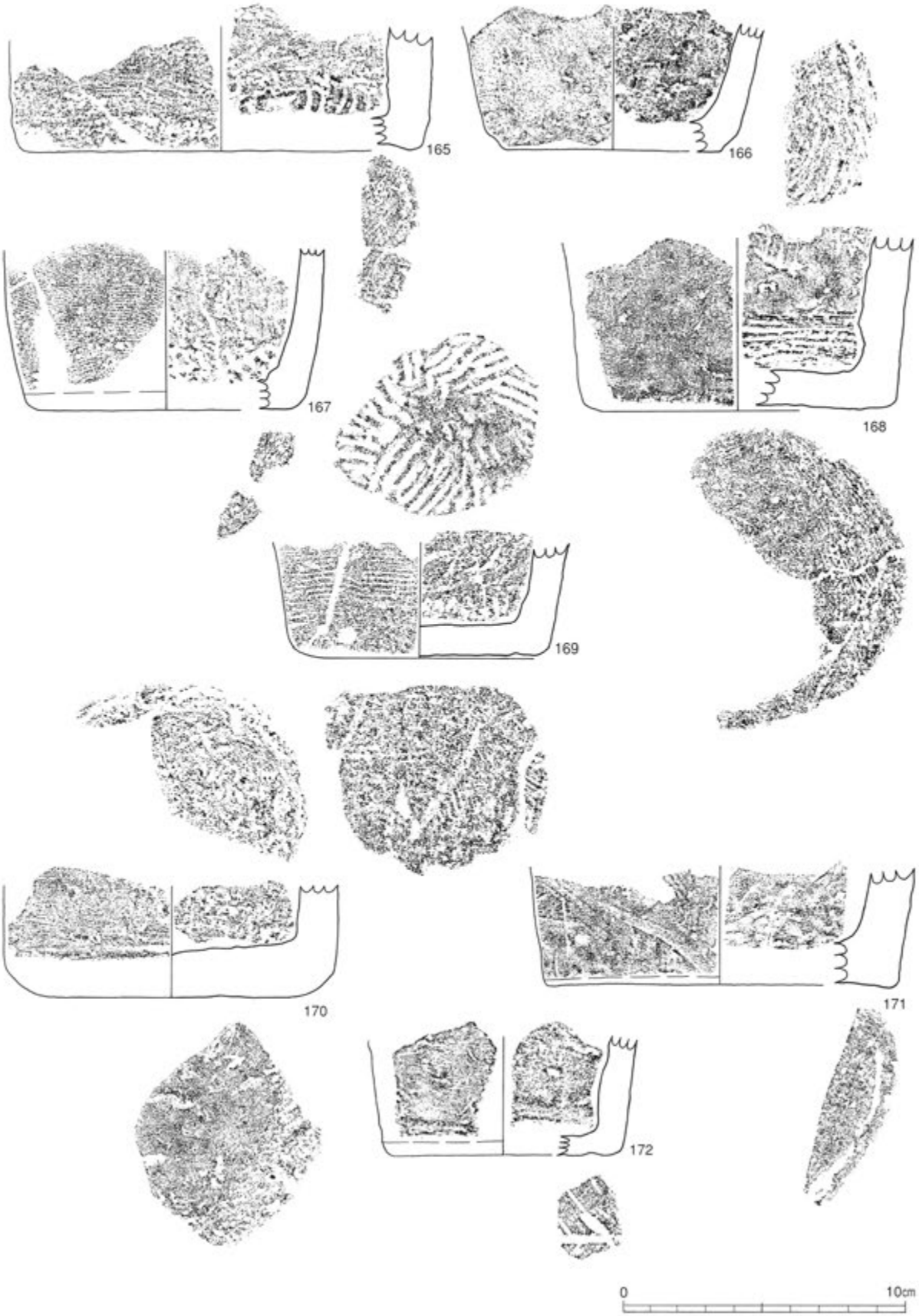
第29図　Ⅰ類土器16



第30図　Ⅰ類土器17

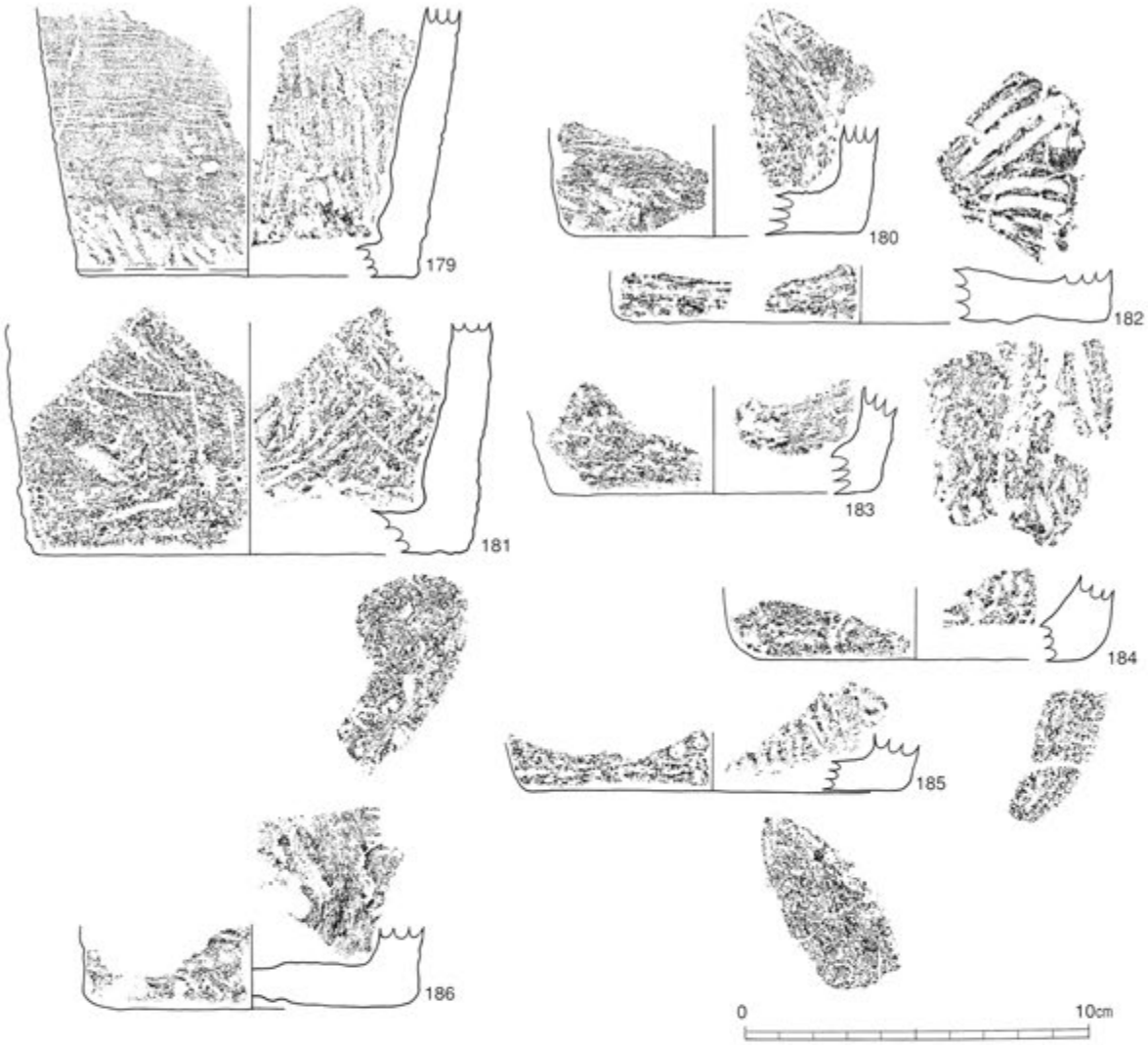
第２表　Ⅰ類土器観察表　1

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第14図	13	K-5	V	橙色	黄色		○	○		良	貝殻刺突文	条痕後ナデ	完形
第15図	14	J-5	V	明赤褐色	橙色		○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	15			黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	16	K-5	Ⅳ	黒褐色	暗灰黄色		◎	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	17	J-3	V	灰黄褐色	灰黄褐色					良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	18	K-4	V	黄橙色	黄橙色			○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	19	K-4	V	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	20	K-4	V	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	21	K-3	V	暗灰黄色	暗灰黄色		○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	22	K-4	V	暗灰黄色	暗灰黄色		○	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	23	K-3	V	橙色	橙色		○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	24	K-5	V	橙色	橙色		◎	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	25	L-5	V	橙色	褐色		○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	



第31図　Ⅰ類土器18

第32図　Ⅰ類土器19



第33図　Ⅰ類土器20

第３表　Ⅰ類土器観察表　2

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第16図	26	J-3	Ⅴ	橙色	橙色					良	貝殻押圧・貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	27	K-4	Ⅴ	橙色	灰オリーブ色					良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	28	K-4	Ⅴ	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	完形
	29		カクラン	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
第17図	30	K-4	Ⅳ	橙色	黄橙色	○	◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	31		カクラン	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	32	K-3	Ⅴ	黄橙色	黄橙色					良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	33	K-5	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	34			黄色	黄色					良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	35	K-4	Ⅴ	灰黄褐色	灰黄褐色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	36	K-4	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	丹
	37	K-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	38	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	39	K-4	Ⅷ	橙色	橙色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	40	J-5	Ⅴ	暗灰黄色	暗灰黄色			○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	41		カクラン	暗灰黄色	暗灰黄色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ	
	42	J-5	Ⅴ	灰オリーブ色	黄色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	

第4表　Ⅰ類土器観察表　3

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第18図	43	J-3	Ⅴ	黄色	黄色					良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	44		カクラン	黄褐色	黄褐色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	45	K-5	Ⅴ	黒褐色	黒褐色					不良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	46	K-3	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	47	L-4	Ⅴ	褐色	褐色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	48	K-4	Ⅷ	灰黄褐色	褐色		◎	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	49	K-4	Ⅳ	橙色	橙色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	50	K-3	Ⅴ	黄褐色	黄褐色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	51	3T	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	52	K-4	Ⅷ	橙色	橙色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	53		Ⅴ	黄橙色	黄橙色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	54			褐色	褐色	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	55			橙色	橙色	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第19図	56	K-3	Ⅳ	橙色	橙色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	57	K-3	Ⅴ	橙色	橙色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	58	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	59	J-4	Ⅴ	黄色	黄色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	60	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄橙色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	61	J-4	Ⅴ	黄色	黄色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	62			明赤褐色	明赤褐色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	63		カクラン	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	64	K-4	Ⅳ	暗灰黄色	黄褐色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第20図	65	J-4	Ⅴ	黄色	黒色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	66	K-5	Ⅴ	黄色	黒色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	67	K-3	Ⅴ	橙色	赤褐色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	68	J-5	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	69	K-5	Ⅷ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	70	K-4	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	71	B-6	Ⅳ	黄色	黄色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	72	J-4	Ⅴ	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	73	K-5	Ⅷ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	74	J-4	Ⅴ	褐色	褐色		○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
第21図	75	J-4	Ⅴ	暗灰黄色	暗灰黄色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	76		カクラン	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	77			黄橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	78	J-4	Ⅳ	橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	79		カクラン	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	80	K-5	Ⅷ	橙色	浅黄色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	81		カクラン	黄橙色	黄橙色		○	○	ガラス	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	82	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	83	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第22図	84	K-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	85	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ	
	86			黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	87	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	88	K-5	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	89	K-5	Ⅷ	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	90	K-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	91	L-4	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	92	K-5	Ⅴ	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第23図	93	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	94			橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	95	K-3	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	96	K-3	Ⅴ	黄橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	97	J-5	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	98	J-3	Ⅳ	黄橙色	黄橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	99			黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	100	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	101	J-3	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	102	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	103	K-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第24図	104	J-4	Ⅴ	橙色	橙色	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	105	J-4	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	106			黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	107	K-5	Ⅷ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	108	K-5	Ⅴ	黄灰色	黄灰色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	109			橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	110	K-4	Ⅷ	橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	111	K-5	Ⅴ	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	112		カクラン	黄褐色	黄褐色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	113	K-3	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	

第５表　Ⅰ類土器観察表　4

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第25図	114	K-4	Ⅴ	褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	115		カクラン	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	116		Ⅴ	橙色	橙色		○	○	ガラス	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	117		カクラン	黄褐色	黄褐色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	118			黄褐色	黄褐色	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	119			橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第26図	120		カクラン	橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	121	K-4	Ⅴ	明赤褐色	明赤褐色	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	122	K-4	Ⅴ	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	123	3T	Ⅲ	橙色	橙色		○	○	ガラス	良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	124	K-5	Ⅷ	褐色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	125	K-5	Ⅴ	明黄褐色	明黄褐色	○	○		ガラス	不良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第27図	126	K-5	Ⅴ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	127	K-5	Ⅳ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	128	K-4	Ⅴ	橙色	橙色			○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第28図	129	K-3	Ⅳ	黄橙色	灰黄色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	130	K-4	Ⅴ	黄橙色	褐色		○			良	ケズリ後ナデ	ケズリ	ハケメ状
	131	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄橙色		◎	○		良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	ハケメ状
	132	K-3	Ⅳ	橙色	褐色	○			ガラス	良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	133	K-4	Ⅷ	橙色	黄橙色		◎	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ナデ	
	134	K-3	Ⅳ	橙色	暗灰黄色	○				良	ケズリ後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	135	K-4	Ⅴ	橙色	黄色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	136	K-5	Ⅳ	橙色	黄橙色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	137	K-4	Ⅷ	褐色	灰黄褐色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	138	K-4	Ⅴ	橙色	黄色					良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	139	K-5	Ⅷ	橙色	黄色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
第29図	140	K-4	Ⅴ	橙色	橙色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	141	J-4	Ⅷ	橙色	灰黄褐色		○			良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	142	K-4	Ⅷ	橙色	暗灰黄色		◎	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	143	K-4	Ⅷ	黄橙色	黄色		○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	144	K-4	Ⅴ	橙色	橙色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	145	K-4	Ⅴ	橙色	橙色		○			良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	146	K-4	Ⅴ	橙色	黄色		○	○		良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	147	K-4	Ⅴ	橙色	黄色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	148	K-4	Ⅳ	橙色	オリーブ黒色		◎	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	149	K-3	Ⅴ	黄橙色	黄橙色	○	○			良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	150	K-4	Ⅴ	橙色	黄橙色		○			良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	151	K-4	Ⅷ	橙色	黄橙色		○	○		良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	152	K-5	Ⅴ	橙色	黄色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	153	K-4	Ⅴ	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	154	K-5	Ⅴ	橙色	浅黄色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
第30図	155	C-3	Ⅴ	褐色	褐色		◎	◎		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	156	K-4	Ⅲ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	ケズリ	ケズリ	ハケメ状
	157	C-5	Ⅳ	赤褐色	暗灰黄色		○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文後ナデ	ハケメ状
	158	K-4	Ⅴ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻条痕文後ナデ		
	159	C-7	Ⅳ	赤褐色	褐色	○	○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	160	C-7	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	161	K-5	Ⅷ	褐色	黄橙色	○	○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	162	K-3	Ⅴ	赤褐色	灰黄褐色	○				良	ケズリ	ケズリ後ナデ	
	163	K-4	Ⅷ	橙色	黄橙色			○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	164	K-4	Ⅳ	黄橙色	褐色		◎	◎		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
第31図	165	K-4	Ⅷ	橙色	灰黄褐色		○	○		良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	166	K-4	Ⅴ	黄橙色	灰黄色		○	○		良	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	
	167	K-3	Ⅳ	橙色	黄橙色		○	○		良	ケズリ後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	168	L-4	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		○	○		良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	ハケメ状
	169	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄色		○			良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	170	D-5	Ⅳ	橙色	橙色		○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	171	C-6	Ⅳ	黄橙色	灰色		○	○		良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	172	L-5	Ⅴ	黄橙色	黄橙色					良	ケズリ	ケズリ後ナデ	
第32図	173	K-4	Ⅲ	橙色	黄橙色		○			良	貝殻条痕文	貝殻条痕文後ナデ	
	174	K-3	Ⅳ	橙色	褐色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	175	J-4	Ⅴ	明赤褐色	暗灰黄色					良	ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	176	K-3	Ⅴ	橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文	
	177	K-4	Ⅴ	橙色	灰オリーブ色		◎	○	ガラス	良	貝殻条痕文後ナデ	ナデ	
	178		カクラン	黄橙色	黄橙色		○	○		良	ナデ	貝殻条痕文	
第33図	179	K-4	Ⅳ	黄橙色	灰黄褐色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文後ナデ	
	180	3T	Ⅳ	黄橙色	灰黄褐色		○			良	ナデ	ケズリ後ナデ	
	181			明赤褐色	黒褐色		○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ナデ	
	182	K-4	Ⅷ	褐色	褐色	○	○		ガラス	良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文	

Ⅱ類土器（第34・35図）

器形については，円筒形は195・199・200，角筒形は192・196・197・202が確認でき，他の土器片については，小片のため器形を確定できない。口縁部の断面観が，187は舌状に丸みを帯び，188と189は平坦面を有する。188は口唇部外端に篦状工具によると思われる縦位の刻みが施されている。184は口唇部の形状から波状口縁を呈すると想定される。188と194は，平口縁と思われるが，披見できる口唇部の土器片が少なく確定できない。

口縁部から胴部に至る文様や調整については，187は左下がりと右下がりの貝殻条痕を菱形状に交差させた後，口縁部に横位の貝殻腹縁による刺突文を非連続的に4条程度施している。188は，全面的に縦位の貝殻条痕を施文後，口縁部に横位の貝殻腹縁による刺突文を2条めぐらしている。胴部には斜位の数条の細沈線が確認できるが，造作意図に基づくものかどうかは不明である。189は，縦位の貝殻条痕のみ確認できる。190・191は斜位の貝殻条痕施文後に貝殻刺突文を縦列に連点状に施文してあり，施文形態より同一個体の可能性がある。192は斜位の貝殻条痕施文後に1㎝幅程度の斜位の貝殻刺突文を縦列に施文させている。193は，斜位の貝殻条痕施文後に，縦位の貝殻刺突文を2条縦走させている。194は縦位の貝殻条痕を施文後に，口縁部に4～5条程の横位の貝殻刺突をめぐらしている。胴部に一部貝殻刺突を縦走させている痕跡が伺える。195は縦位の貝殻条痕施文後に，縦位もしくは斜位の貝殻腹縁による連続刺突文を数条施してある。197・198は同一個体と考えられ，斜位の貝殻条痕施文後に縦位に貝殻腹縁部による連続刺突文を施している。195・196より刺突文の施文間隔が密である。199～201は底部の資料である。199は胴部外面においては，斜位の貝殻条痕施文後に縦位の連続刺突文を施し，底部付近においては微細丁寧な条痕文を2.5㎝幅程度に縦列に施文している。底部内外面ともに丁寧に磨きがかけられている。200～202は底部付近に丁寧な貝殻条痕が施されている。200の底部外面は，丁寧に磨きがかけられている。

第6表　Ⅰ類土器観察表　5

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第33図	183	K-4	Ⅲ	褐色	褐色		○			良	ナデ	貝殻条痕文	
	184	K-4	Ⅴ	橙色	橙色					良	ナデ	貝殻条痕文	
	185			褐色	黄橙色		○	○		良	ナデ	貝殻条痕文	
	186	K-4	Ⅷ	橙色	橙色		○	○		良	ナデ	ナデ	

第7表　Ⅱ類土器観察表

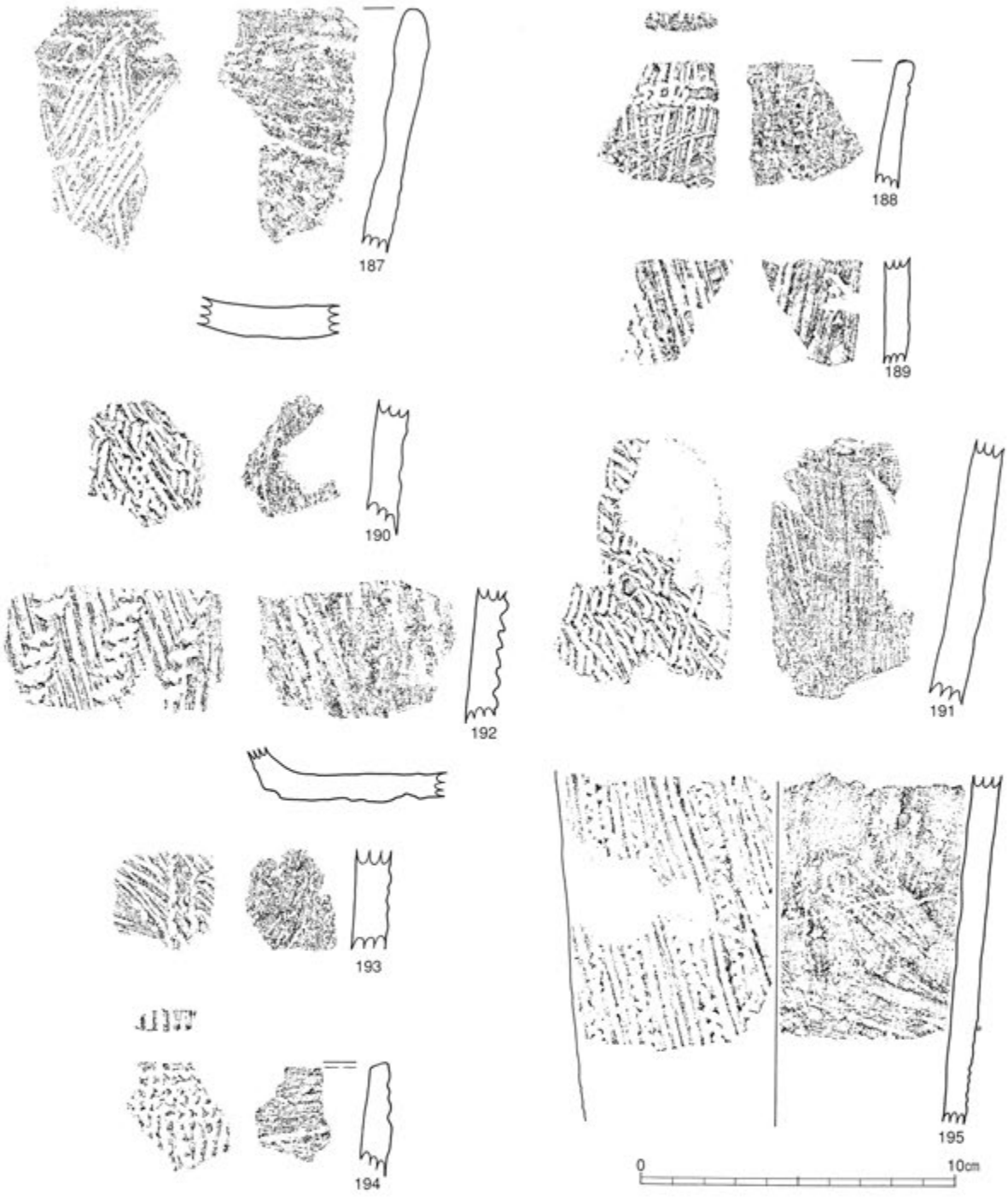
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第34図	187	C-5	Ⅳ	灰黄褐色	灰黄褐色		◎			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	188		Ⅴ	橙色	暗灰黄色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	189	L-4	Ⅴ	暗灰黄色	浅黄色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	190	J-3	Ⅴ	橙色	褐灰色		◎	○		良	貝殻条痕文後縦位刺突	ケズリ後ナデ	
	191	J-4	Ⅴ	橙色	褐色		◎			良	貝殻条痕文後縦位刺突	ケズリ後ナデ	
	192	J-4	Ⅴ	橙色	橙色	○	◎	○	ガラス	良	貝殻条痕文後貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	193	J-4	Ⅴ	赤褐色	黒褐色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	194	J-4	Ⅴ	褐灰色	褐色		○	○		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	195	J-4	Ⅴ	黄褐色	褐色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
第35図	196	J-4	Ⅴ	浅黄色	暗灰黄色					良	貝殻条痕文・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	197	J-4	Ⅴ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	198	J-4	Ⅴ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	縦位刺突	ケズリ後ナデ	
	199	D-8	Ⅳ	赤褐色	暗灰黄色		◎	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	200	J-4	Ⅳ	橙色	橙色		◎			良	沈線文	ナデ	
	201	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		◎	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	202	J-4	Ⅴ	橙色	橙色		○	○		良	沈線文	ナデ	

Ⅲ類土器（第36～42図）

このⅢ類の土器は，口縁部の器形により2群に分類し詳述することとする。

Ⅲ—a類土器（第36～38図）

器形は胴部でわずかに膨らみを帯び，頸部は若干しまり口縁部が大きくもしくは緩やかに外傾する一群である。



第34図　Ⅱ類土器 1

口唇部にキザミ目を有するのがほとんどであるが，203・204・209の3点はキザミ目がない。キザミ目の施文部位は，口唇部上面，口唇部内面側縁端部，外面側縁端部の3か所に類別される。

口縁部の文様については，斜位の貝殻刺突をめぐらせるのが，203～207・209・212・216・218～224であり，くの字状の貝殻刺突文を施すのが208・210，横位の刺突文をめぐらせるのが211・213・215，羽状文を施すのが216・217である。

胴部の文様については，203・207・211・213・214・216が綾杉文で構成されており，205は縦位の貝殻条痕，206は斜位の貝殻条痕が確認できる。

内面の調整については，228は貝殻条痕後ナデを施してあるが，それら以外は，全てケズリ後ナデ調整をしてある。胎土の状態では，礫が極めて多く含まれるのは見受けられない。

Ⅲ―b類土器（第39・40図）

口縁部が直行ないしは山形口縁を有する一群である。大半が平口縁であるが，可能性を含めて228～230・232・234～236は波状口縁を呈していると考えられる。大半の資料が器壁8㎜～1㎝程度で，a類と大きな違いは見られないが，229・230・232・235は薄い部位で5㎜程度と器壁が薄い。

口唇部に刻みを有する資料の割合は，a類に比して少ない。221・222は口唇部上面に1条の列点が横位で施文され，胎土や文様の類似性から同一個体の可能性が高い。228は口唇部上面に縦位の刺突文が施される。232・235も器形や文様，胎土が酷似しているので同一個体と思われ，口唇部上面に貝殻復縁部による1条の列点文が横位で施されている。それら以外の資料については，口唇部上面にキザミ目は確認できない。

口縁部については，220～230は直行し，231～235は口縁部がやや内弯気味で瘤状突起を有し，236は口縁部がやや外反し瘤状突起を有している。

口縁部の文様については，縦位や斜位の貝殻刺突文を1条めぐらせるのが，220～225・227，縦位の刺突を2条めぐらせるのが226，横位の刺突文をめぐらせるのが220，くの字状に貝殻刺突文を施すのが228～230・232である。233・234・236は棒状工具により径5mm程度の列点を2条横方向にめぐらしている。他に，232・233・236は，貝殻羽状文を施文後に，下位部分に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしてある。

胴部の文様については，223～225・227は横位の貝殻条痕，226・228は横位と斜位の条痕，229・230・236は縦位もしくは斜位の貝殻条痕が施されている。232・233は斜位の条痕調整後に左下がりと右下がりの斜位の貝殻刺突文が施文されている。

内面の調整に関しては，228のみが貝殻条痕後ナデを施し，それら以外は，全てケズリ後ナデ調整をしてある。

胎土については，小礫が多く含まれるのは見受けられない。

237～252は胴部である。252は資料中位部分に外側への屈曲が見られ，外反する頸部付近の資料と推察される。指の押圧の痕跡が確認できることから，土器製作過程の一端がうかがえる資料である。

外面調整については，238・249・252の3つのみ縦位の貝殻条痕であり，あとの殆どが二枚貝腹縁による綾杉文である。

内面調整に関しては，250のみが貝殻条痕調整であり，大半はケズリ後ナデの調整である。砂粒や小礫が多く含まれるのは239・252であり，その他については，礫はあまり含まれない。

253～259は底部である。器形について，254及び256はつまみ出しにより，胴部下端部が外に張り出している。255は底部からの下面観が部分的に多角形の様相を呈しているが，縦位の貝殻条痕と横位の貝殻条痕の調整圧が，器形の形状に変化をもたらしたものと考えられる。

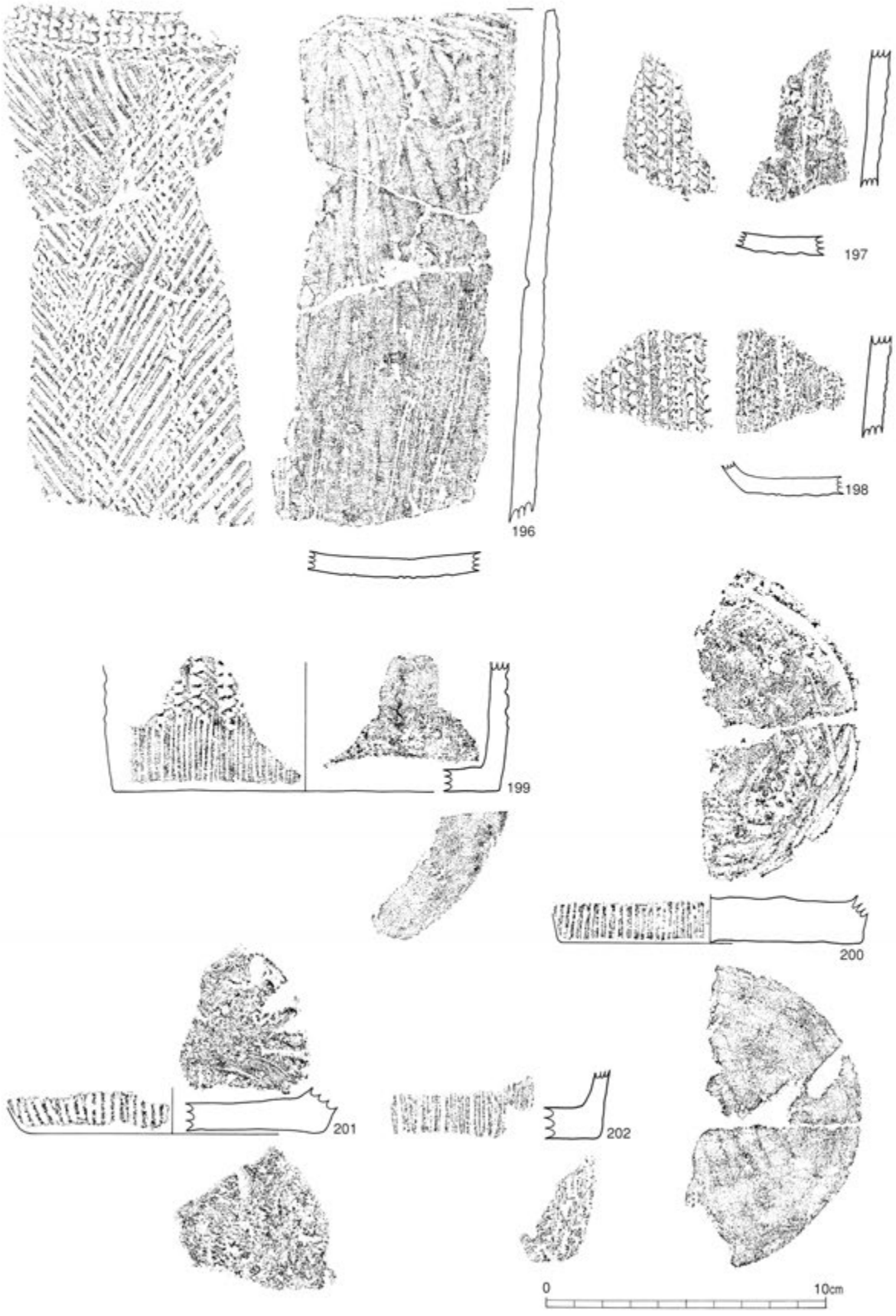
胴部外面調整については，254は斜位及び横位による貝殻条痕を施し，底部付近で縦位の押引状の刻みを施してある。255は，縦位の貝殻条痕と一部胴部下端にて横位による貝殻条痕を施した後，丁寧なナデ調整を施してある。256～258は，斜位や横位の貝殻条痕，259は縦位の貝殻条痕が確認できる。底部外面では，いずれも丁寧にミガキをかけてある。

胴部の内面調整については，258のみが貝殻条痕であり，それら以外はいずれもケズリ後ナデの調整をしてある。底部内面においても，条痕による調整は確認できず，全て指ナデと推定される。

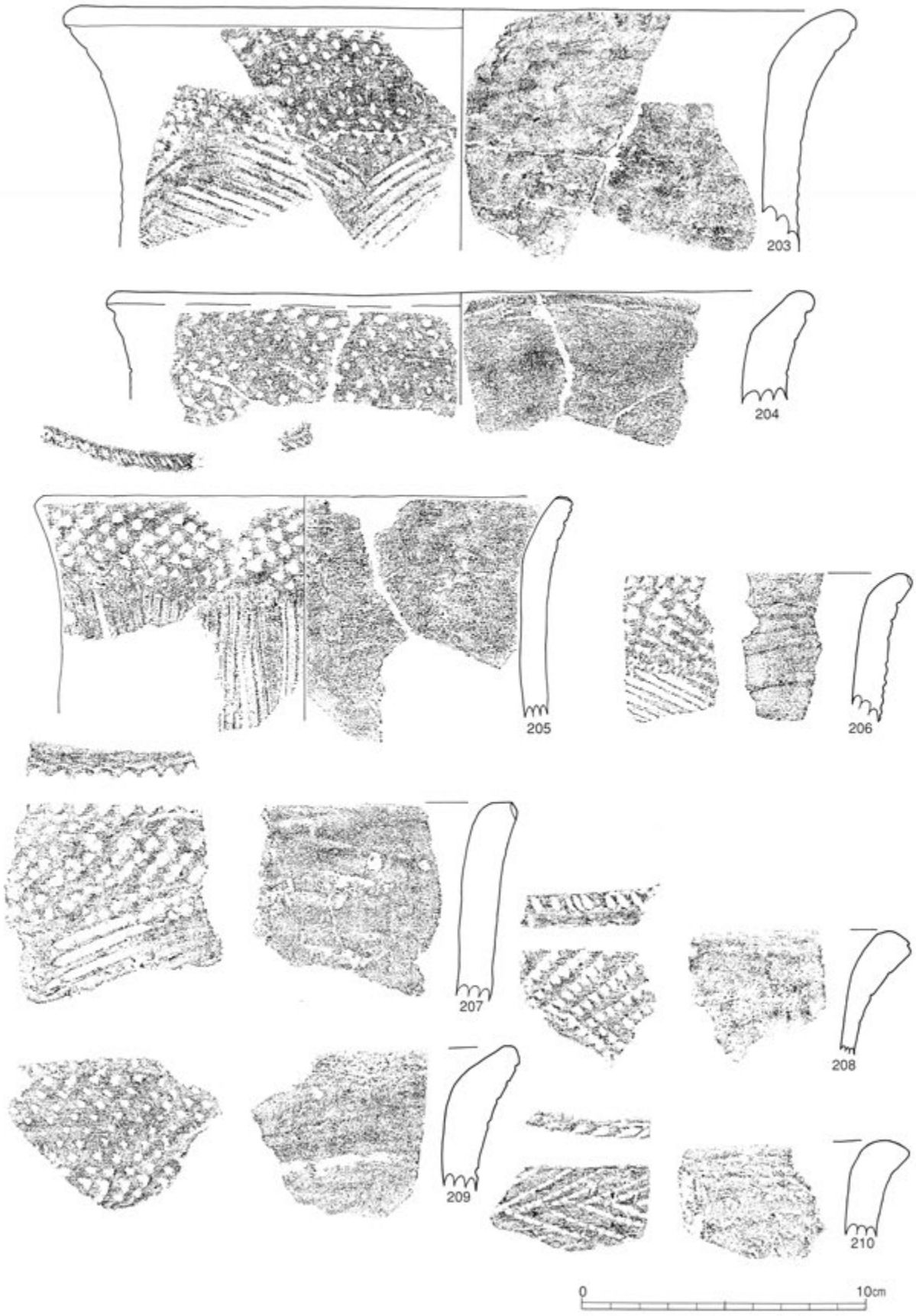
胎土については，小礫が多く含まれるのは257・258の2点のみである。

第8表　Ⅲ類土器観察表1

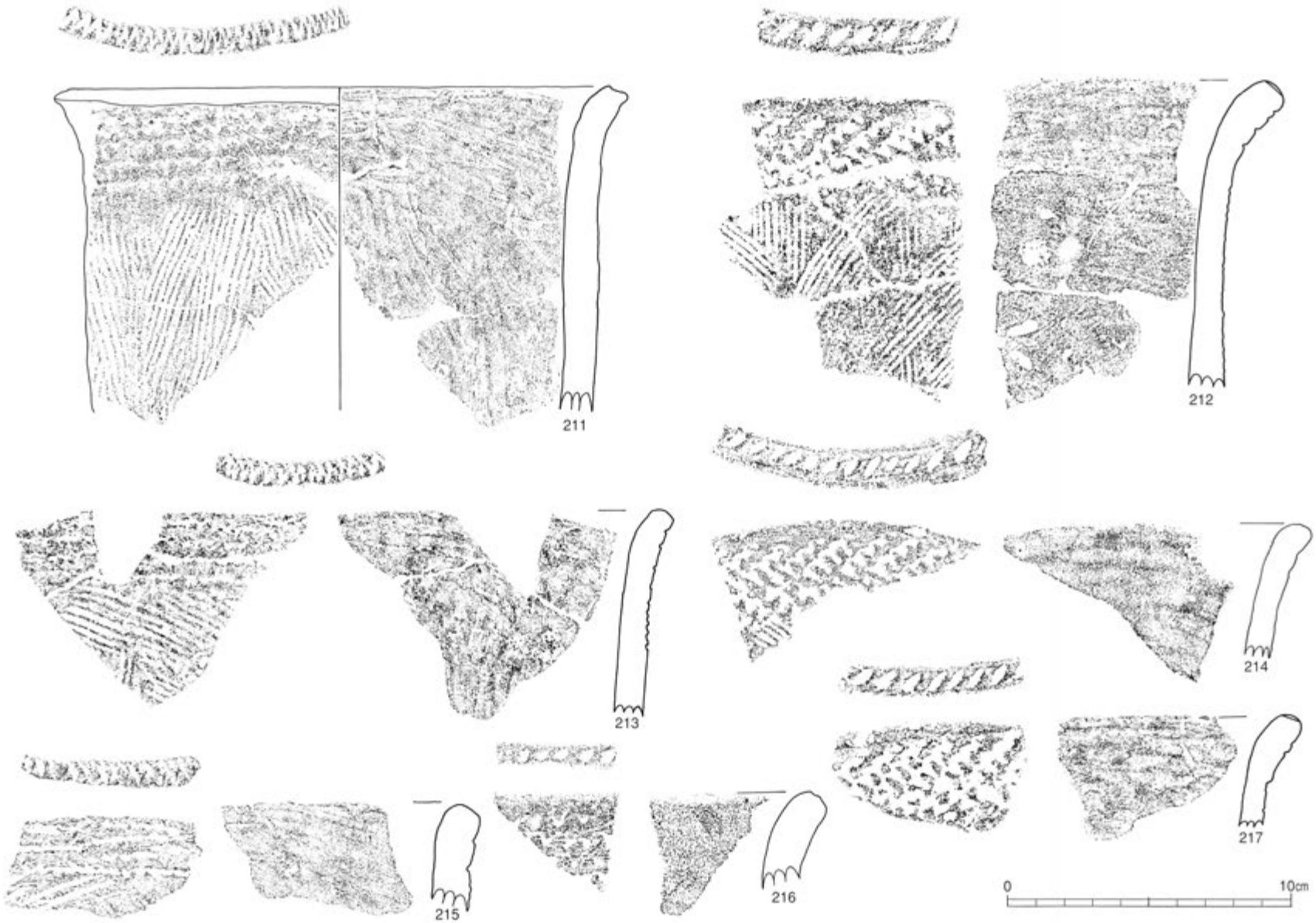
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第36図	203	C-5	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	
	204	B-6	Ⅴ	橙色	褐色		◎	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	205	K-4	Ⅴ	黄色	黄色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	206	C-5	Ⅳ	黒褐色	赤褐色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
	207	B-5	Ⅳ	褐色	褐色		◎			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	208	C-7	Ⅴ	褐色	褐色		◎	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	209			灰黄褐色	灰黄褐色		○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	210	B-7	Ⅴ	黒褐色	赤褐色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	



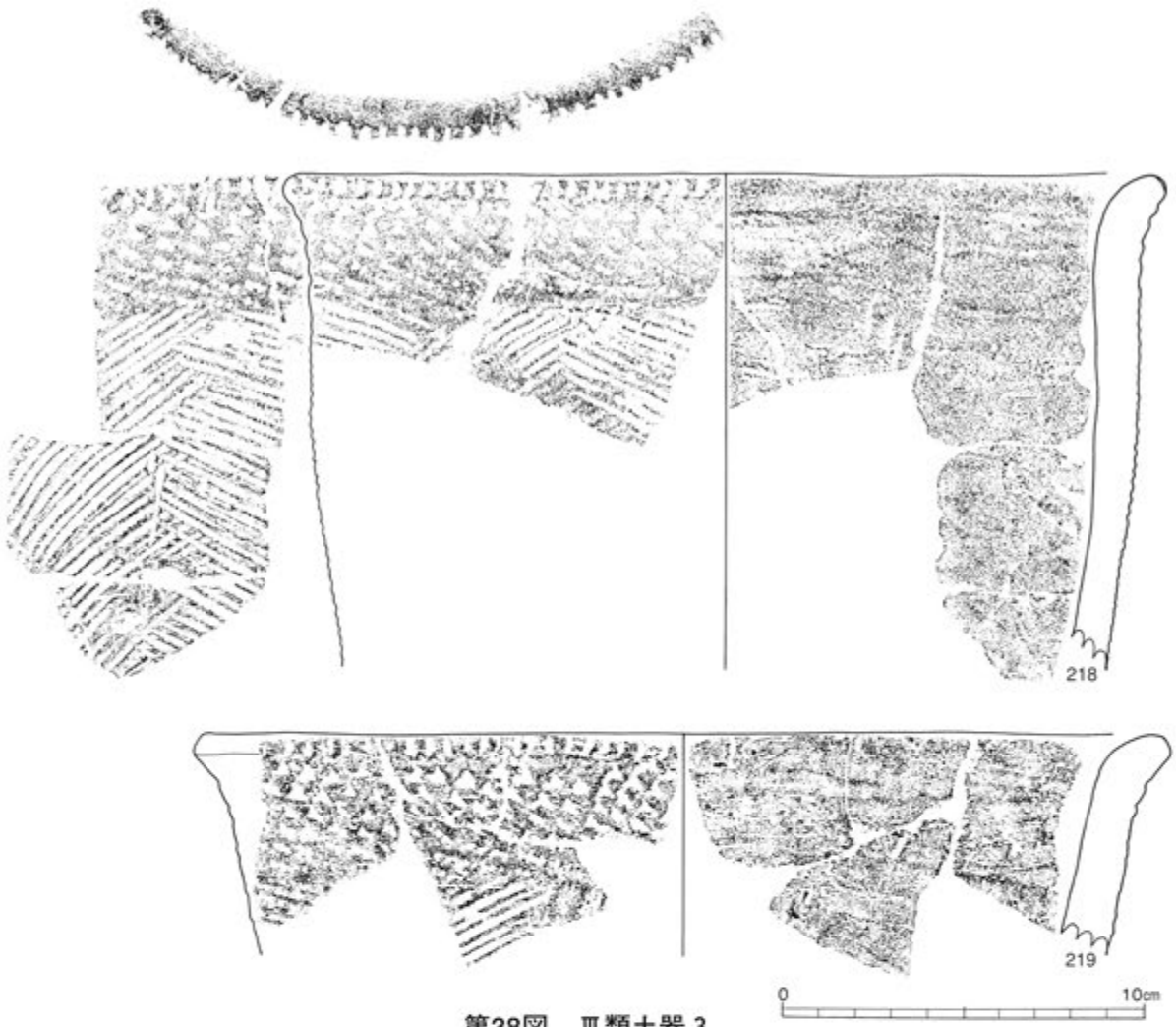
第35図　Ⅱ類土器 2



第36図　Ⅲ類土器 1



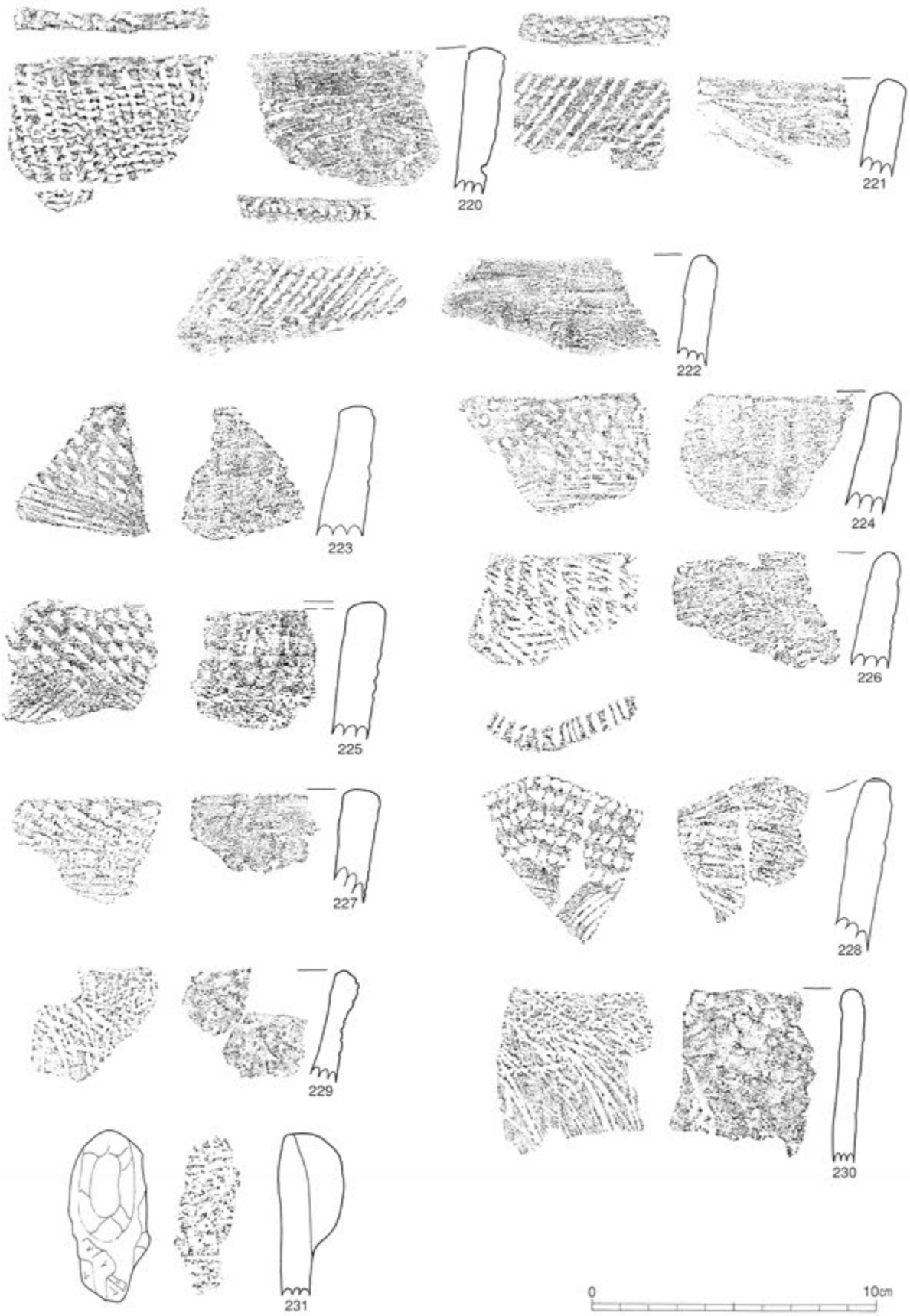
第37図　Ⅲ類土器 2



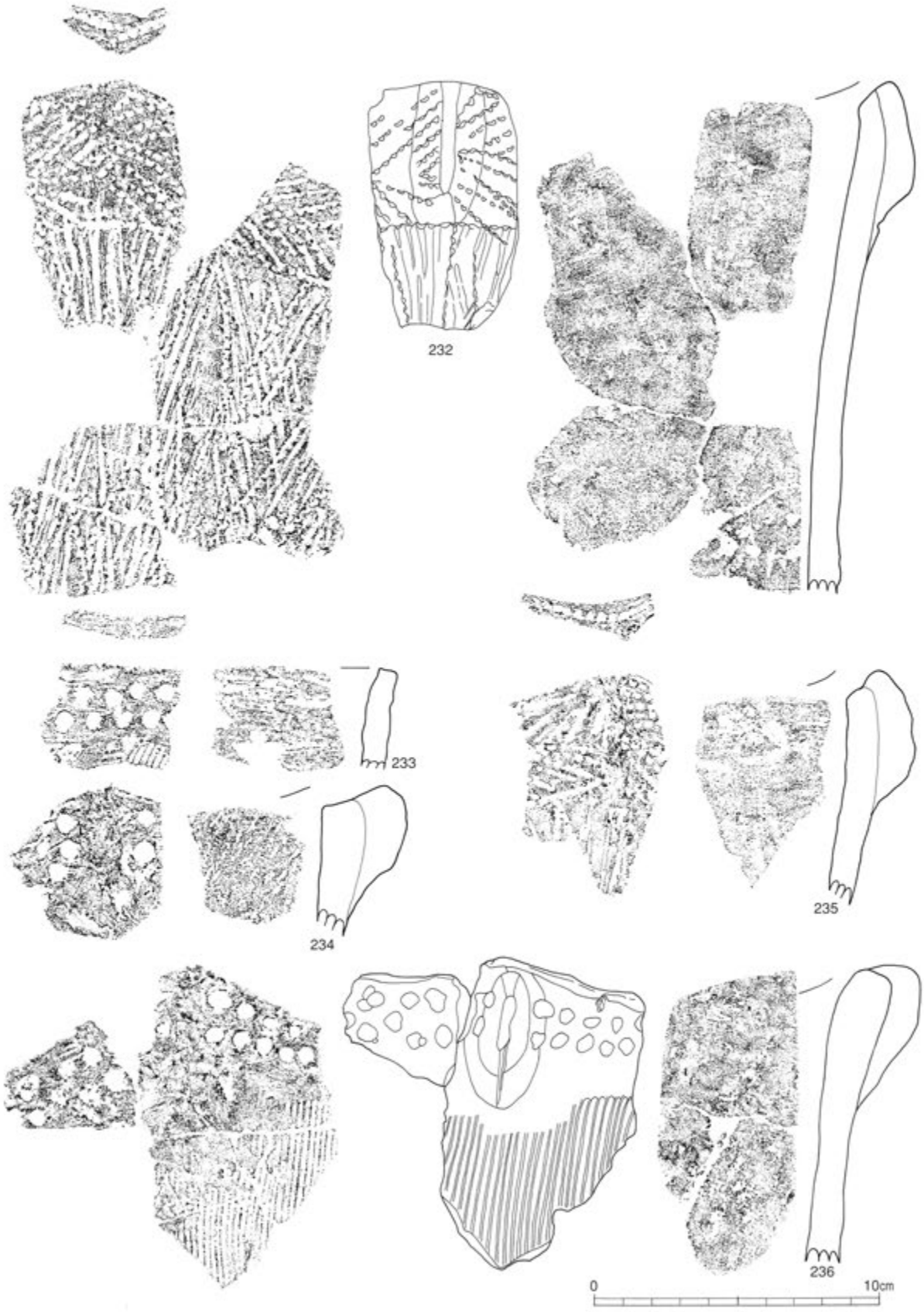
第38図　Ⅲ類土器 3

第 9 表　Ⅲ類土器観察表 2

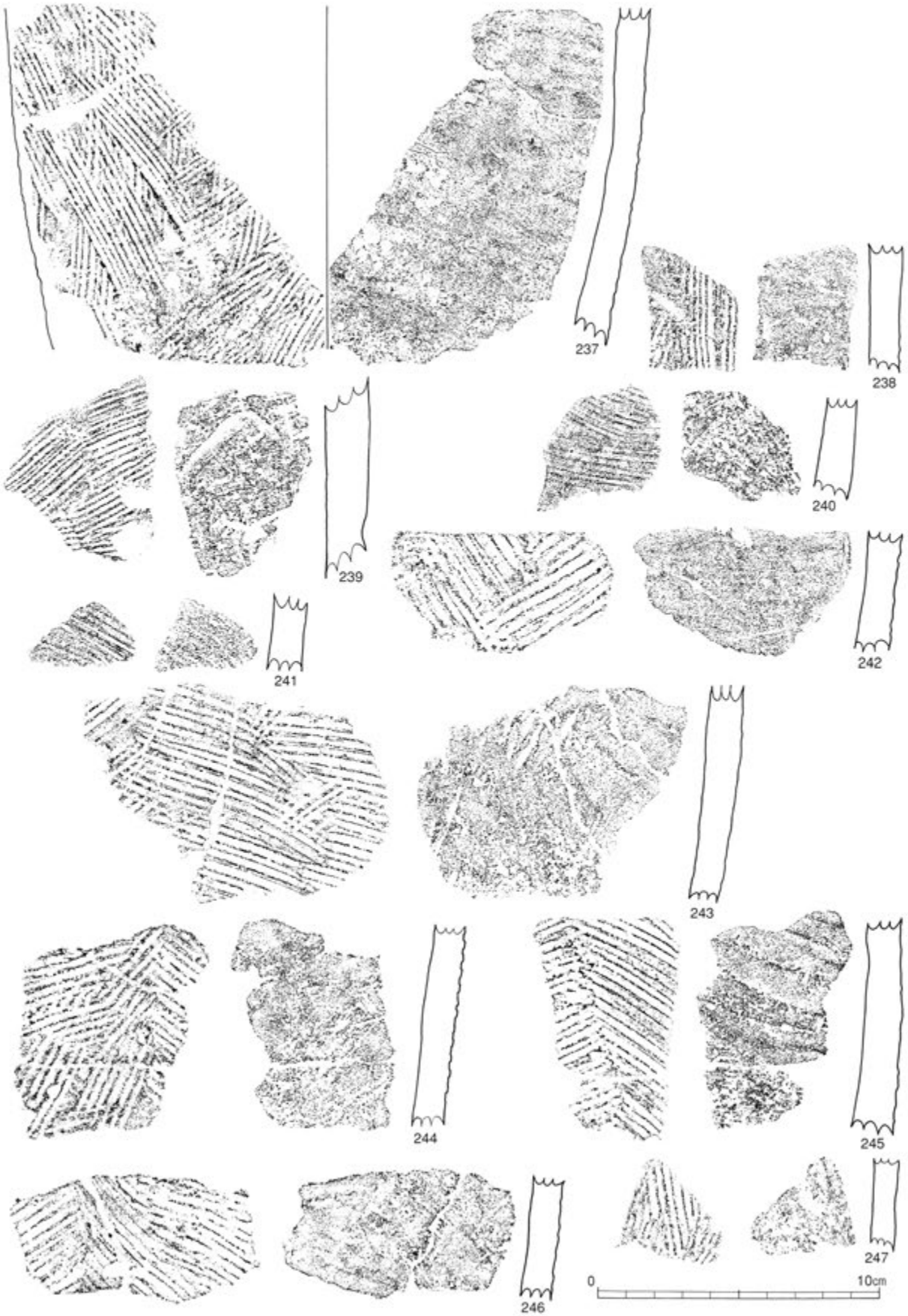
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第37図	211	C-6	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	212	D-7	Ⅳ	明黄褐色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	213	C-7	Ⅴ	黄橙色	褐色		◎	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	214	D-8	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	215	C-6	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	216	B-5	Ⅳ	褐色	褐色		○	○		良	貝殻刺突文後ナデ	ナデ	
	217	D-8	Ⅳ	暗灰黄色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第38図	218	C-5	Ⅳ	褐色	褐色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	219	C-5	Ⅳ	褐色	褐色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
第39図	220	C-5	Ⅳ	赤褐色	黄灰色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	221	B-6	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	222	C-5	Ⅳ	灰黄褐色	灰黄褐色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	223	B-5	Ⅴ	褐色	褐色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	224	B-5	Ⅳ	褐色	褐色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ	
	225	C-5	Ⅳ	褐色	明赤褐色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ	
	226	B-5	Ⅳ	橙色	暗灰黄色		○			良	押引文	ケズリ後ナデ	
	227	B-6	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	押引文	ケズリ	
	228	C-5	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文後ナデ	
	229	C-5	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文		
	230	C-5	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	231			橙色	橙色		○			良			コブつき



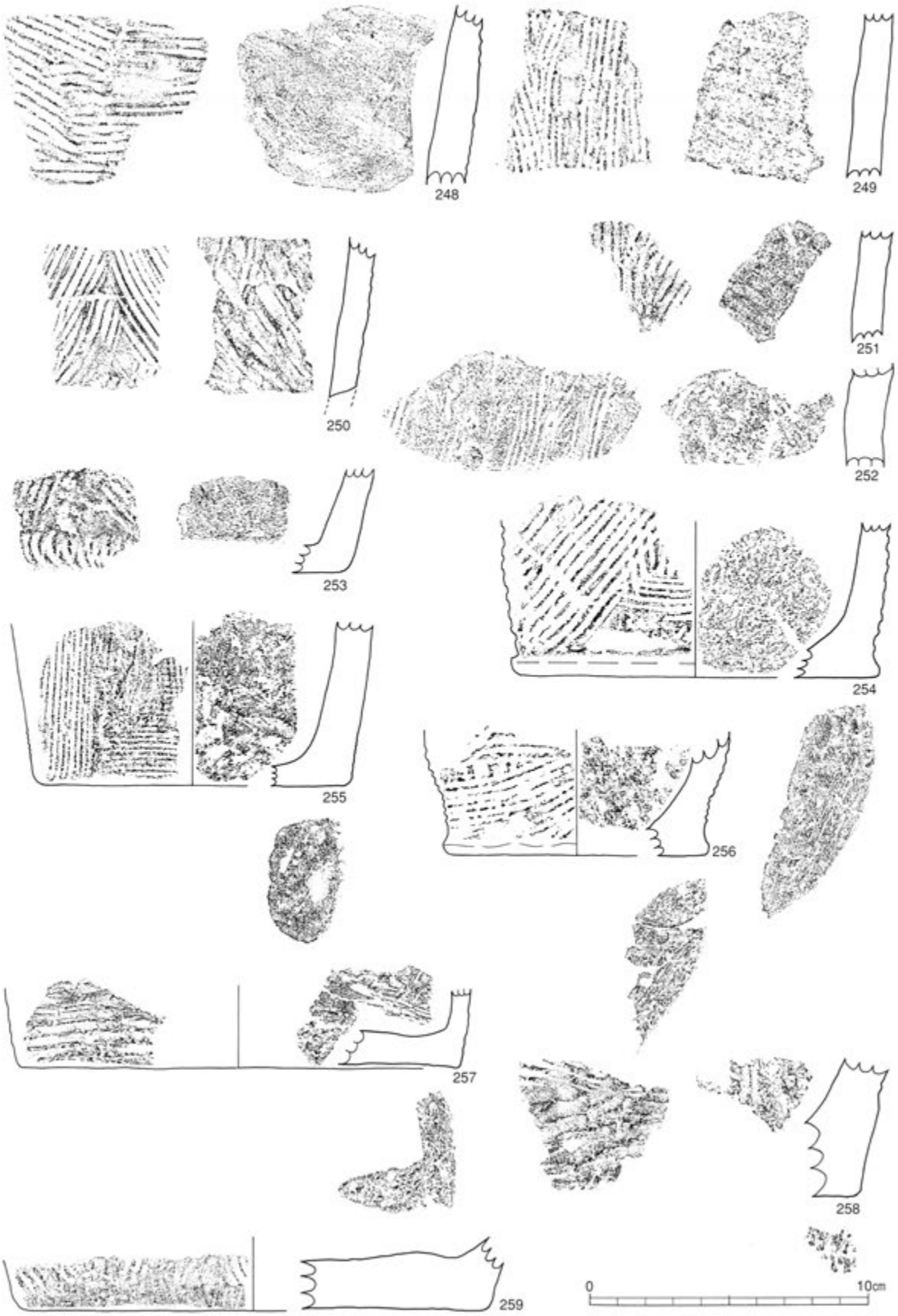
第39図　Ⅲ類土器 4



第40図　Ⅲ類土器 5



第41図　Ⅲ類土器 6



第42図　Ⅲ類土器 7

Ⅳ類土器（第43・44図）

260～262は，施文具として貝殻腹縁部を使用し，左下がりと右下がりの刺突を数条ずつ交互に繰り返すことで，見かけ上，羽状文を呈する。胴部においては，貝殻刺突文により羽状文あるいは鋸歯文を縦位方向に施文している。

完形品は260の１点である。260は，底部から口縁部にかけて広がり気味に立ち上がるが，器形は左右対称でなく立ち上がる角度が左右で異なる。口縁部ではやや内傾する。口縁部には横位の６条の浅くかつ細い丁寧な貝殻刺突文が連続して施され，口縁部直下の左右に相対して長さ15㎝，幅１㎝，膨らみ５㎜程度の横位の突起が添付する。口縁部直下から底部にいたるまで浅く細い丁寧な羽状文が施文されている。１対２穴の補修孔が４㎝５㎜幅の間隔で施されている。261は口縁部が直行ないしわずかに内弯する。平坦面を有する口唇部上を貝殻腹縁部による横位の１条の刺突で施文している。

262は，胴部の資料であり，261より施文間隔が広めである。263～265は同一個体である。263・264は山形の口縁部である。わずかに内弯し，口唇部は内傾する平坦面を有する。Ⅳ類土器としては希少な角筒形である。貝殻腹縁部を使用して，口縁部は横位もしくは若干斜位に刺突し，胴部においては全て同一方向に斜位に刺突している。同一方向に刺突することで，羽状文を呈しない。口縁部に３㎝弱の横位の連続刺突を施文し，胴部には斜位の刺突文を施してある。

内外面は丁寧にミガキやナデが施され，外面の文様も刺突文の間隔が密で丁寧である。

Ⅴ類土器（第45～48図）

この土器群は，文様形態から４つに分類して詳述することとする。

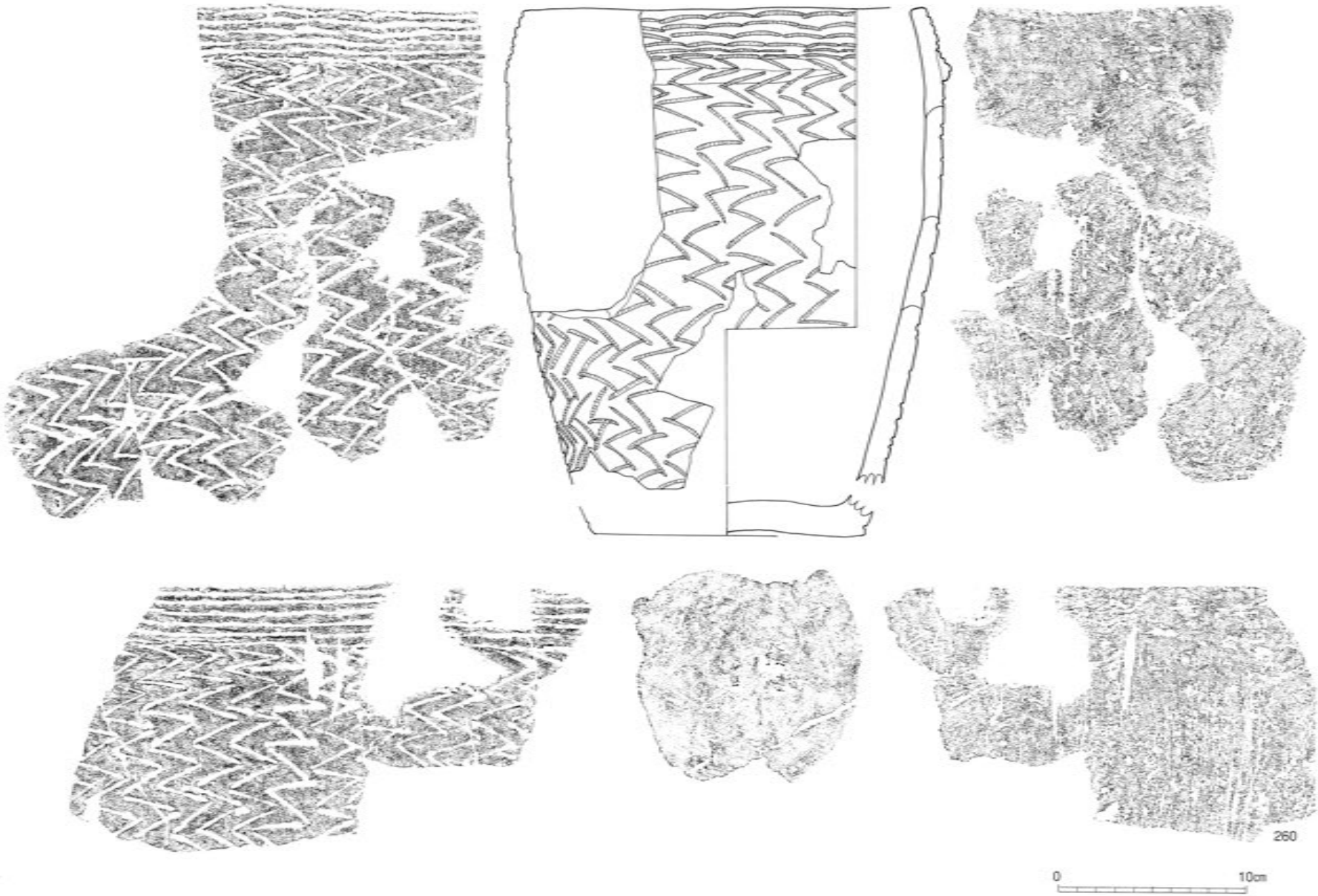
Ⅴ— a類土器（第45図）

この類は，口縁部から胴部にかけて全面同一施文である。貝殻腹縁部により，直線的な条痕を密に施文することで羽状文を呈する一群である。口縁部から胴部にかけて全面的に同一に施文している。いずれも口縁部は直行ないし内弯している。

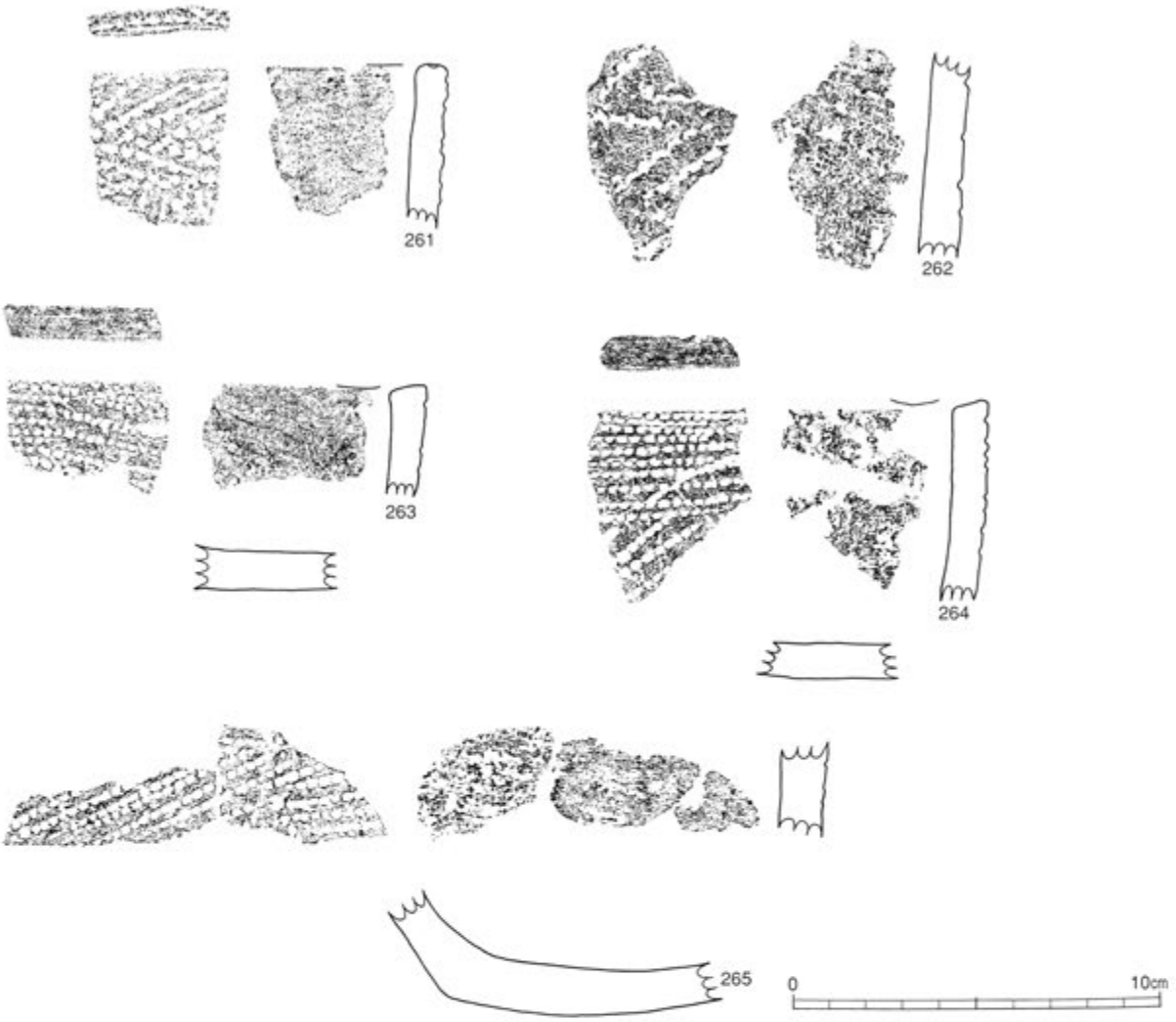
文様については，266・267は貝殻条痕による直線的な羽状文であり，268～270・273は横位及び斜位の条痕である。271には礫が極めて多く含まれ，266・268にも比較的多く含まれている。

第10表　Ⅲ類土器観察表３

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第40図	232	C-5	Ⅳ	黄橙色	黄色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	233	B-6	Ⅳ	赤色	灰オリーブ色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	234	B-6	Ⅳ	赤褐色	暗灰黄色		◎	○		良	刺突文	ケズリ後ナデ	
	235	B-6	Ⅳ	黄橙色	灰白色		○	○		良	刺突文	ケズリ後ナデ	
	236	C-5	Ⅳ	赤褐色	暗灰黄色		◎	○		良	貝殻羽状文・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第41図	237	C-7	Ⅳ	黄褐色	黄褐色		○		ガラス	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	238	C-7	Ⅲ	褐色	黄褐色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	239	B-6	Ⅴ	橙色	灰黄色	○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	240	B-6	Ⅳ	褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	241	C-6	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	242	C-5	Ⅳ	褐色	暗灰黄色		◎			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	243	C-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		◎			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	244	B-6	Ⅳ	橙色	灰黄褐色					良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	245	B-6	Ⅳ	橙色	灰黄褐色		◎		ガラス	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	246	C-5	Ⅳ	赤褐色	黄灰色		◎		ガラス	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	247	B-7	Ⅳ	橙色	暗灰黄色		◎			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
第42図	248	C-6	Ⅳ	浅黄橙色	浅黄橙色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	249	C-5	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	250	B-6	Ⅳ	灰黄色	灰黄色		○			良	貝殻条痕文	貝殻条痕文	
	251	C-7	Ⅴ	浅黄橙色	浅黄橙色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	252	B-5	Ⅳ	橙色	橙色	○	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	253	B-7	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	254	D-7	Ⅳ	黄橙色	暗灰黄色		◎			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	255			橙色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	256	D-8	Ⅳ	黄橙色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	257	K-5	Ⅳ	橙色	橙色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	258	B-5	Ⅴ	赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文	
	259	B-5	Ⅳ	明黄褐色	明黄褐色		◎	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	



第43図　Ⅳ類土器１



第44図　Ⅳ類土器 2

Ⅴ—b 類土器（第45・46図）

この類は，口縁部から胴部にかけて全面同一施文である。貝殻腹縁部により，縦位や斜位・横位によるうねりのある条痕や流水状の条痕を押し引く一群である。271・272・274・278がこの類に該当するが，Ⅴ—a 類と明確に分類できない資料も見受けられる。施文が雑で施文間の隙間が大きい。いずれも口縁部は直行ないし内弯し，小礫が多く含まれている。

Ⅴ—c 類土器（第45図）

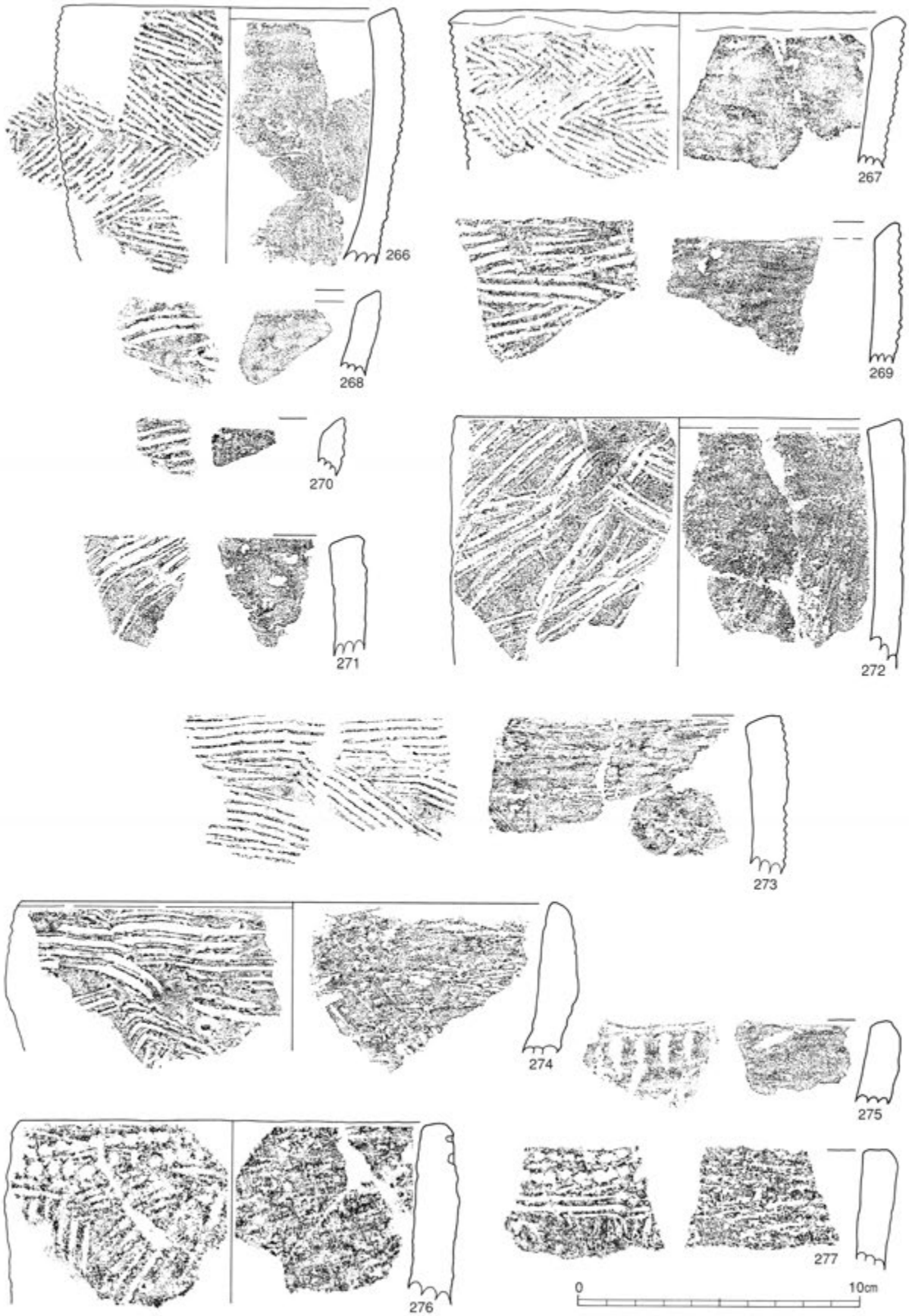
この類は，口縁部に文様帯をもっている一群であり，胴部以下は上記 a ないし b 類に似た施文であり，275～277が本類に該当する。

275は口縁部に貝殻腹縁部による 1 ㎝幅程度の鋸歯状縦位の刺突文を，横方向に連続してめぐらしている。276と277は，口縁部に篦状工具による 2 条の列点文を横方向に連続してめぐらしている。276は磨耗が激しく胴部の文様を確認しにくい状況であるが，口縁部の文様帯や器形，口唇部の調整等の類似性から276と277は同一個体とも考えられる。276と277の文様を合一して考えると，刺突列点文下に 2 ～ 3 条の横位の細めの条痕を施し，その下位部分から胴部にかけて横位や斜位の太目の貝殻条痕を施してあると想定される。

いずれの土器片も，小礫等はあまり含まれない。

Ⅴ—d 類土器（第46図）

この類は，文様を持たない一群で，279・280が本類に該当する。器形や胎土，調整等の酷似性から本類に分類されたものである。



第45図　Ｖ類土器１

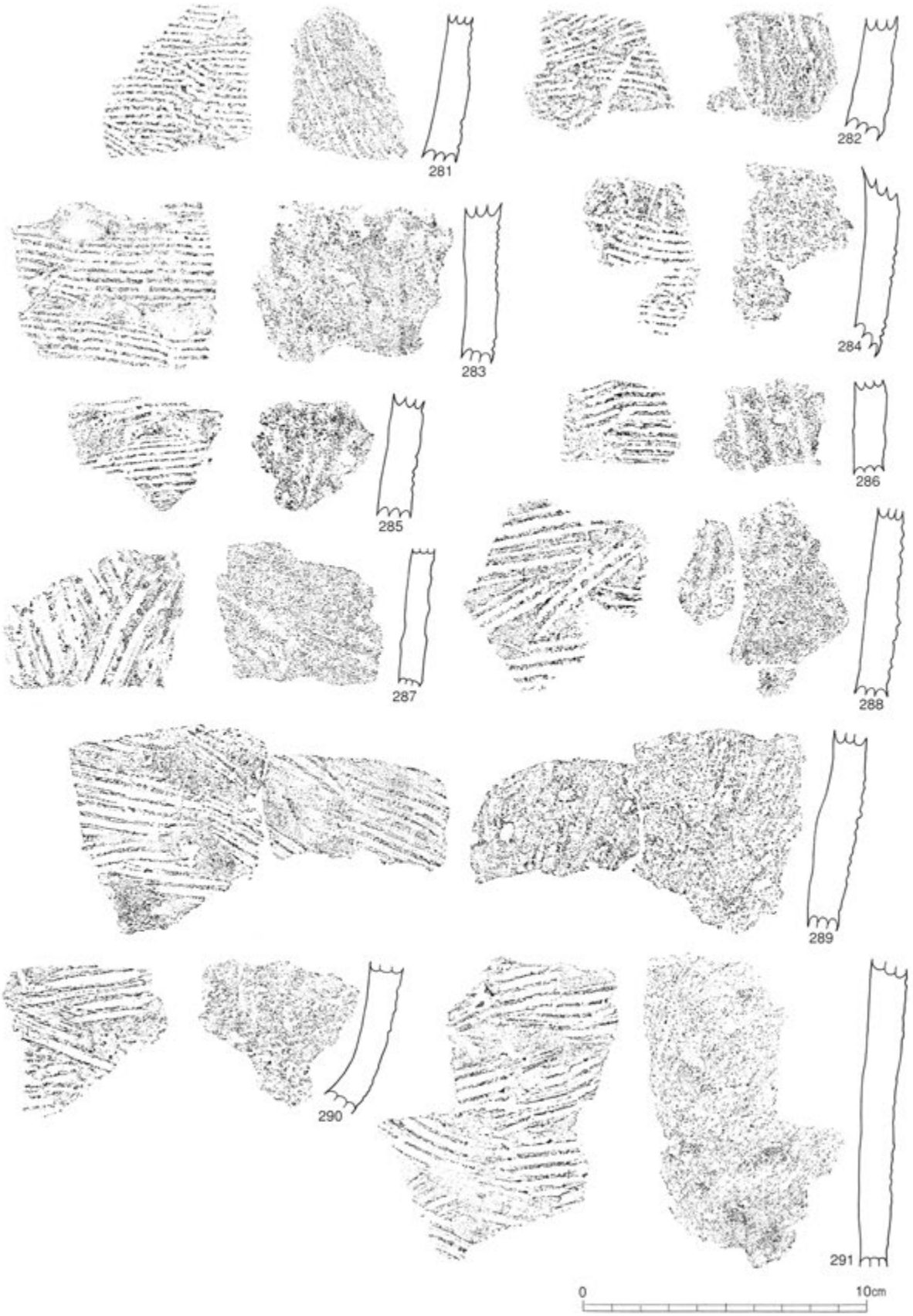
第46図　Ⅴ類土器 2

279は口縁部断面が肥厚しているが，280は口唇部直下の指ナデ整形により口縁部上半部の断面が細くなっている。どちらもヘラケズリ後の指ナデの器面調整痕が顕著に残され，器面の凹凸が大きい。279には礫が多く含まれる。

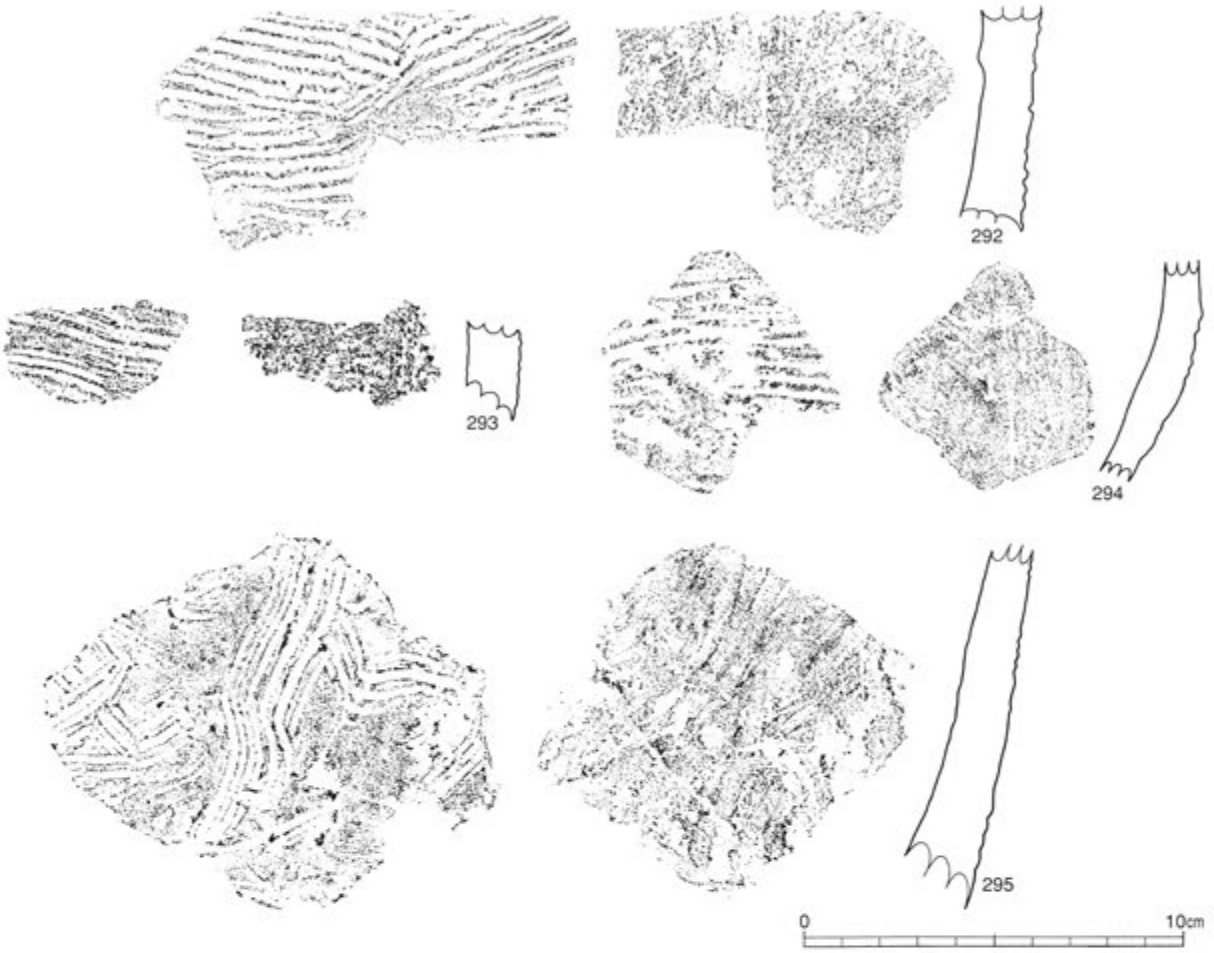
281～295は胴部の資料である。大部分が小片であり，残存する部位で観察できる限りにおいてのみ記述する。

281～286はⅤ—a類の胴部である。いずれも細目の条痕により施文され，直線的である。281・283～285は，一定方向に細い条痕が施される結果，条痕が交差せず羽状文を呈しない。282は，右上がりと右下がりの条痕が資料左側部位で交差しており，羽状文を呈していると思われる。

287～295はⅤ—b類である。いずれもa類土器より太目の条痕により施文され，a類に比して条痕が若干うねりを呈している。287は条痕が大変雑で器面の凹凸も激しく，施文は綾杉文と考えられる。288は，直線的な横位や斜位の5条程の条痕が菱形を構成する。289・291～294は，緩やかな斜位の条痕が接することにより進入角度が小さい綾杉状を形成する。295はうねりの大きい条痕を流水状に施文し，無施文部も大変広い。



第47図　Ｖ類土器３



第48図　Ⅴ類土器 4

第11表　Ⅳ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第43図	260	L-5	Ⅴ	黄褐色	灰オリーブ色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	完形
第44図	261	B-6	Ⅳ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	○	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	262	B-6	Ⅳ	赤褐色	灰オリーブ色		○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	263	A-5	Ⅳ	黄褐色	黄褐色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	264	C-5	Ⅳ	黄褐色	黄褐色		○		金雲母	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	265	D-6	Ⅳ	黄褐色	黄褐色	○	○		金雲母	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	

第12表　Ⅴ類土器観察表 1

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第45図	266	C-6	Ⅳ	赤褐色	暗赤褐色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	267	C-6	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	268	ｶｸﾗﾝ		赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	269	3T	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		◎	◎		良	貝殻条痕文	ナデ	
	270	ｶｸﾗﾝ		赤褐色	赤褐色	○	◎	○		良	貝殻条痕文	ナデ	
	271	C-6	Ⅳ	黄褐色	黄褐色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	272			黄褐色	黄褐色		◎	◎		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	273	C-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色			○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	274			赤褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	275	B-5	Ⅳ	橙色	橙色		○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	276	7T	Ⅳ	浅黄色	浅黄色		◎			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	277		Ⅳ	暗灰黄色	暗灰黄色		◎	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	

Ⅵ類土器（第49図）

296は口縁部から胴部下半部までつながる資料で，口径は31㎝を超える。残存資料から推定すると，底部から胴部にかけてやや膨らみ，胴部から頸部にかけて萎んだ形状が頸部から口縁部に向けて若干外反する器形である。口唇部直下の幅８㎝程度の口縁部文様帯に，８本程度の貝殻条痕が押し引きの名残か小刻みに揺れながら横走し，胴部は無文である。

外面調整については，無文部分はケズリ後ナデの調整を施してある。口唇部や口縁部内面には丁寧な指ナデを施し，胴部内面はケズリ後にナデで仕上げてある。胴部上半は粗いナデであるが，下半部はナデが丁寧である。

胎土の状態は礫が極めて多く含まれ，長さ１㎝程度の大きな礫が数多く確認される。

297と298も基本的には296に酷似した特徴を有しており，いずれかの組み合わせにより同一個体である可能性もある。

Ⅶ類土器（第50～53図）

この土器群は，回転施文具により文様が施されるもので，押型文土器及び撚糸文土器と総称される一群である。文様形態や施文具の違いから３つに分類して詳述することとする。

Ⅶ—ａ類土器（第50・51図）

この類は，楕円押型文の一群であり，299～319が該当する。299～301は口縁部の破片であるが，いずれも裏面に施文がされているのが特徴である。299・300は内面口唇部直下に原体条痕が施され，その下位には楕円押型文が２条～４条横方向に施文されている。301は，内面口唇部直下に約1.5㎝幅の楕円押型文が横方向に施文されている。299・301の口縁部片は，胴部から口縁部にかけて器壁が徐々に薄くなっている。303は先述の299・300から推定して口縁部下部の資料と思われる。貝殻腹縁部もしくは篦状工具により1.5㎝幅の縦位の押し引きが横方向に連続して施してある。

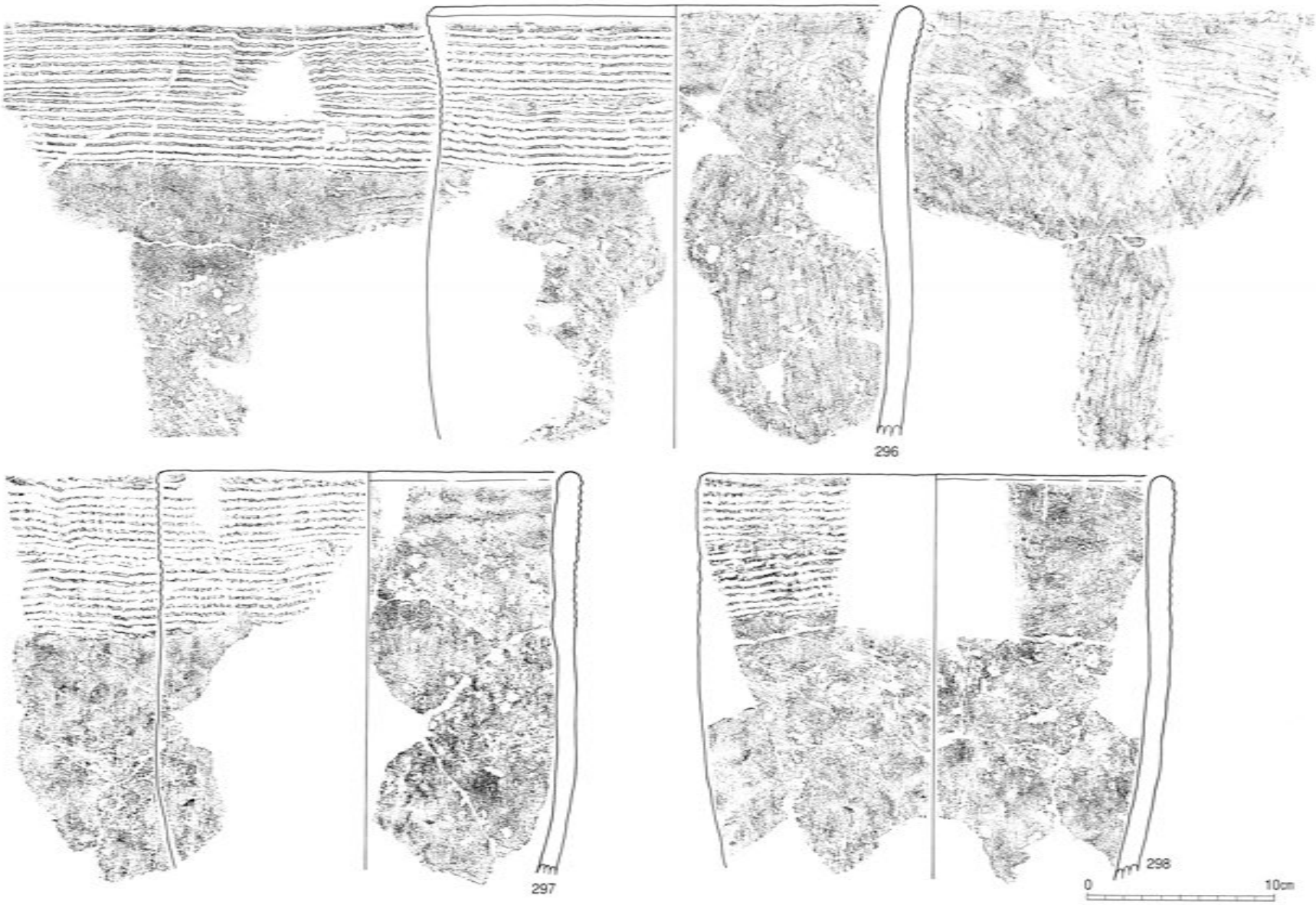
Ⅶ—ｂ類土器（第51・52図）

この類は，山形押型文の一群であり，321～335が該当する。

321は胴部上半部に横方向の施文，下半部に縦方向の施文がされている。322は口縁部が直行し口唇部の断面観が三角形を呈する。口唇部直下から口縁部において原体を横方向に転がし，胴部において縦方向に転がして施文している。口縁部裏面上半部に横方向への押型施文が見られる。323は底部から胴部にかけてつながる資料である。底径９㎝弱で胴部に向けて大きく膨らむが，器形の側面観は左右非対称で歪みを呈する。底部付近はもともと無施文なのか施文後のナデ消しによるものかは定かではない。底部外面には磨きが確認され，底部内面はほとんど平面を有しない。

第13表　Ⅴ類土器観察表２

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第46図	278	D-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	279	C-6	Ⅴ	赤褐色	赤褐色		◎	○		良	無文	ケズリ後ナデ	
	280	C-6	Ⅴ	暗灰黄色	黄色		○	○		良	無文	ケズリ後ナデ	
第47図	281	B-5	Ⅳ	赤褐色	灰褐色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	282	C-6	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	283	B-6	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	284	B-6	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	285	B-6	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	
	286	B-6	Ⅳ	明赤褐色	黄褐色		○			良	貝殻条痕文	ナデ	
	287	D-8	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		○	○	ガラス	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	288	L-5	Ⅴ	橙色	橙色		◎	◎		良	貝殻条痕文	ナデ	
	289	7T	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	290	B-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	291	C-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ナデ	
第48図	292	B-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	293	D-5	Ⅳ	明赤褐色	暗灰黄色		○			良	貝殻条痕文	ナデ	
	294	B-6	Ⅳ	橙色	橙色		◎	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	295	C-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	



第49図　Ⅵ類土器

334は器壁が薄く，口縁部から口唇部にかけて大きく外反している。口縁部から胴部にかけて縦方向に原体を転がしている。口縁部裏面上半部に2㎝幅の横方向への押型施文が見られる。336は胴部から底部にかけての資料であるが，胴部から底部に至るまで縦方向に施文されている。底部周辺側面部分及び底部の表裏面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

Ⅶ— c 類土器（第51図）

この類は，撚糸文土器の一群であり，320の１点のみ出土している。口縁部が大きく外反し，口唇部断面観は舌状を呈する。口縁部内外面ともに撚糸文が右下がりの斜位に施文され，口唇部の平坦面にも撚糸文が確認できる。

Ⅷ類土器（第53図）

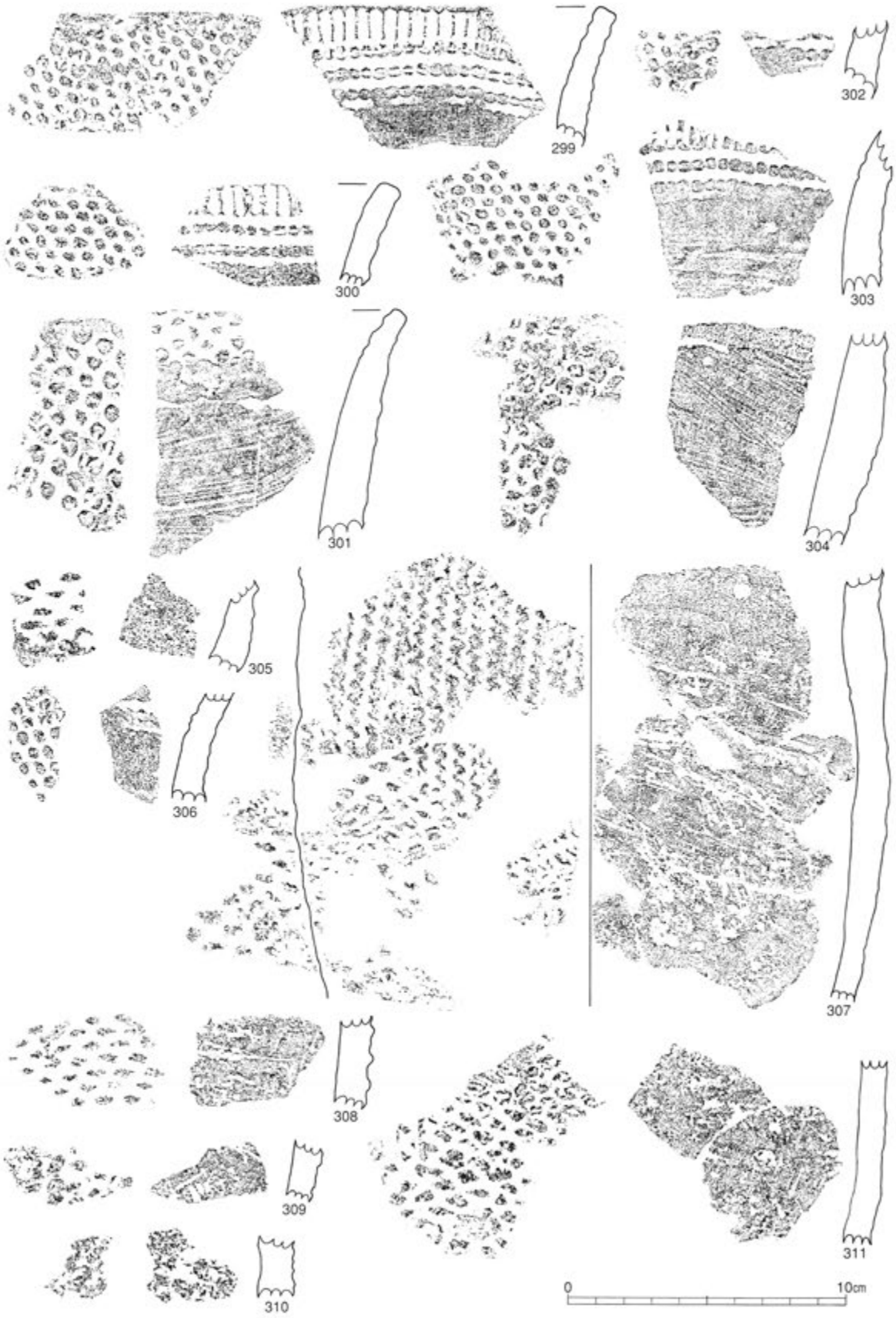
無文土器であるが，出土層がⅣ層のアカホヤ下面であり，底部径が約2.5㎝程度の円形で胴部にかけて大きく膨らむ器形から，早期後葉の土器ではないかと考えられる。底周辺を指ナデしてあるのが確認できる。

第14表　Ⅵ類土器観察表

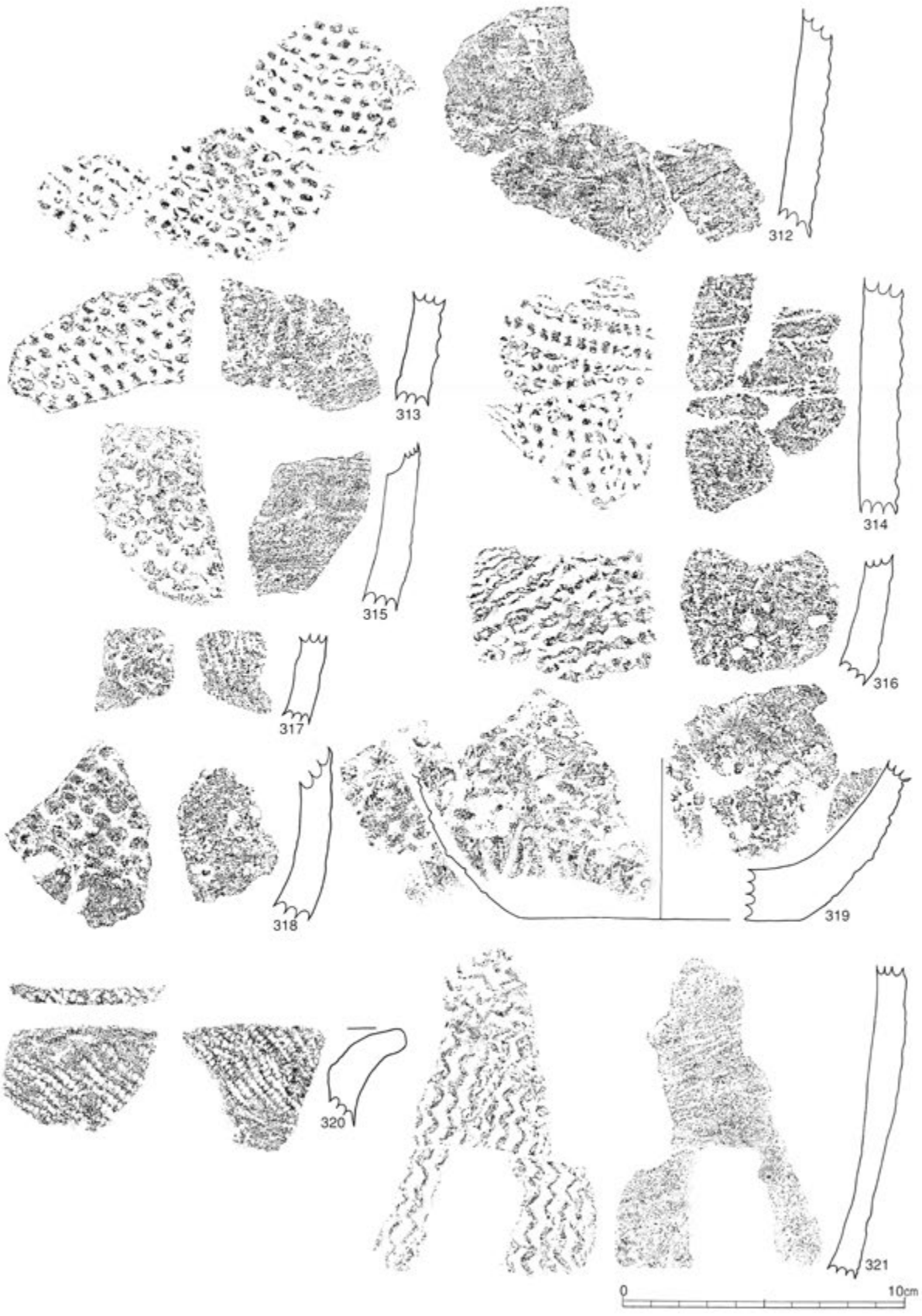
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第49図	296	C-5	Ⅳ	橙色	橙色		◎	◎		良	貝殻条痕文	ナデ	
	297	C-5	Ⅳ	浅黄色	橙色		◎	◎		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	298	C-5	Ⅳ	明黄褐色	黄橙色		◎	◎		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	

第15表　Ⅶ類土器観察表１

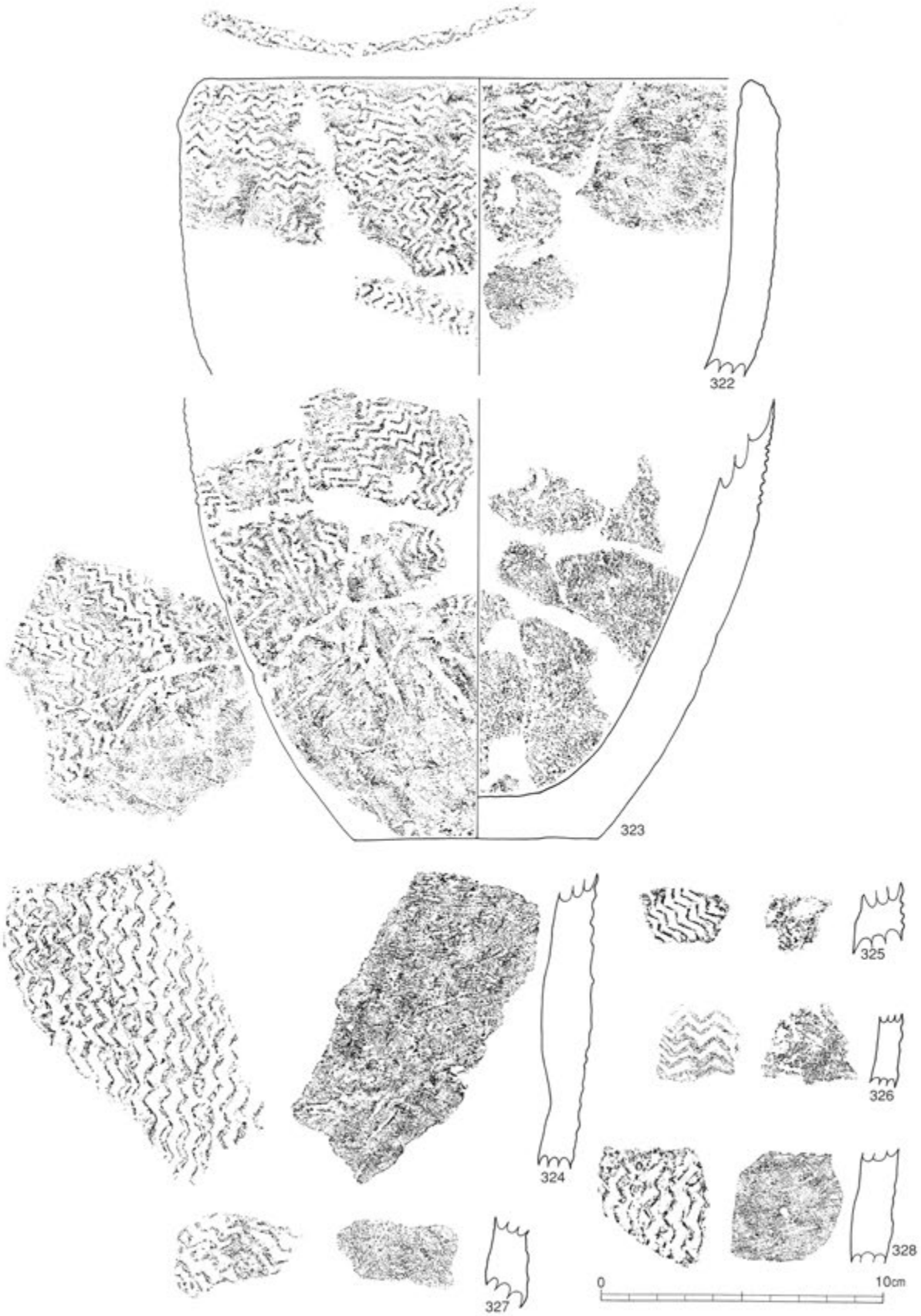
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第50図	299	B-5	Ⅳ	黄橙色	黄色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	300	A-5	Ⅳ	黄色	灰オリーブ色		◎	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	301	C-6	Ⅳ	黄橙色	黄色		◎	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	302	C-5	Ⅲ	黄橙色	黄色		◎	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	303	A-5	Ⅳ	黄褐色	黄褐色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	304			褐色	暗灰黄色		○			良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	305	C-5	Ⅲ	橙色	黄橙色	○	○	○		良	楕円形押型文	ケズリ	
	306	C-5	Ⅳ	黄色	黄色		◎	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	307	C-5	Ⅳ	橙色	橙色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ,上部をナデ	
	308	C-5	Ⅳ	橙色	灰黄褐色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	309	C-5	Ⅳ	橙色	黄褐色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	310	C-5	Ⅳ	黄褐色	黄褐色		◎	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	311	C-5	Ⅳ	橙色	灰黄色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
第51図	312	B-5	Ⅳ	黄橙色	灰黄色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	313	C-6	Ⅳ	橙色	灰オリーブ色		◎	◎		良	楕円形押型文	ケズリ	
	314	B-6	Ⅴ	黄橙色	黄灰色		◎	◎		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	315	B-5	Ⅳ	黄色	灰オリーブ色		○			良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	316	B-6	Ⅳ	黄色	灰オリーブ色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	317	C-5	Ⅳ	橙色	黄褐色		◎	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	318			黄橙色	黄橙色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ後ナデ	
	319	C-5	Ⅳ	橙色	黄褐色		○	○		良	楕円形押型文	ケズリ	
	320		カクラン	橙色	橙色		○	○		良	撚糸文	ケズリ後ナデ	
第52図	321	C-5	Ⅳ	橙色	黄橙色		◎	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	322	J-4	Ⅴ	褐色	灰黄褐色	○	◎	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	323	J-4	Ⅴ	橙色	灰黄褐色					良	山形押型文	ナデ	
	324	B-5	Ⅳ	橙色	褐色		○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	325	カクラン		黄橙色	黄褐色		◎			良	山形押型文		
	326	C-5	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	327	C-5	Ⅳ	橙色	橙色	○	◎	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	328		表土	橙色	黄橙色		○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	



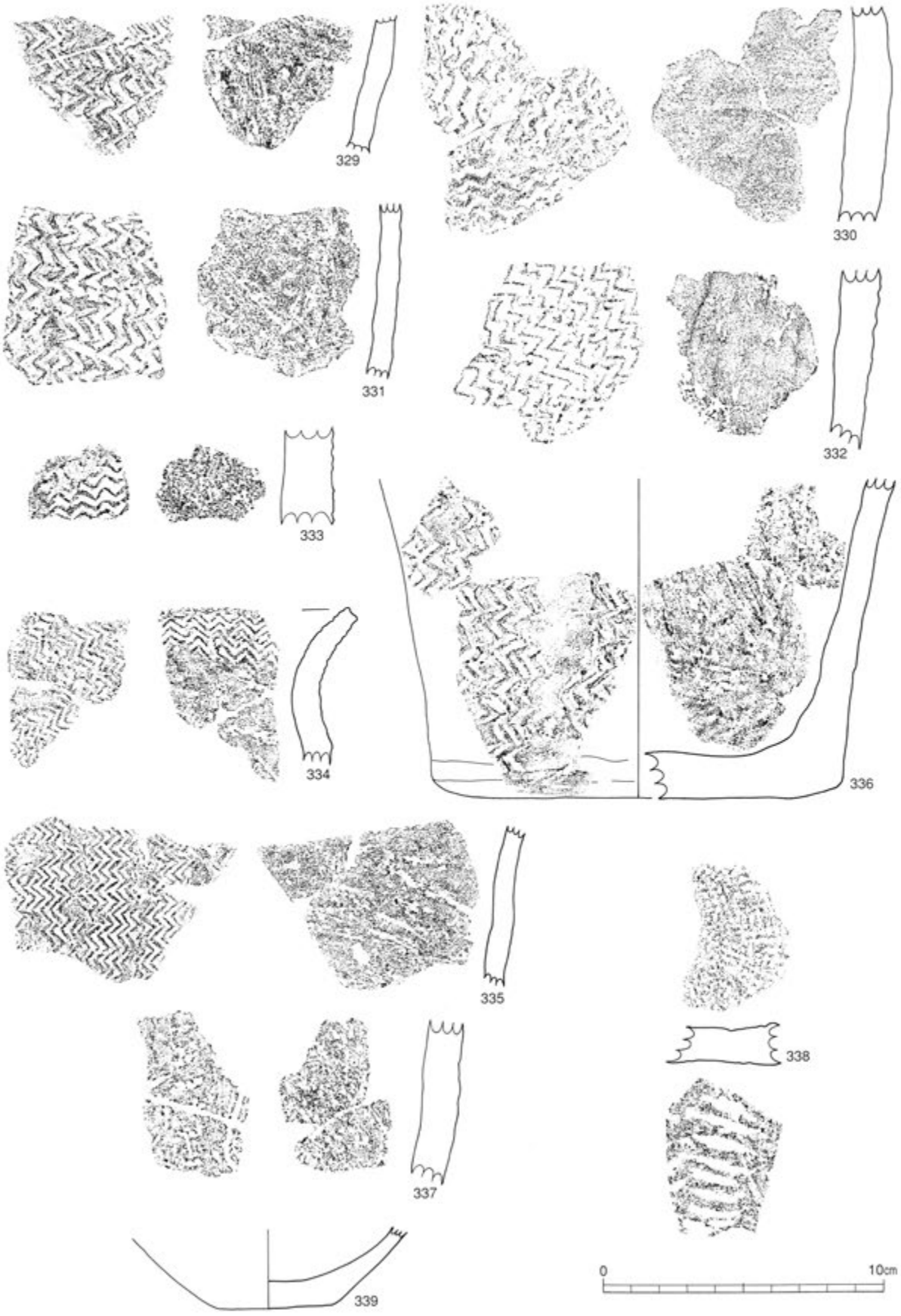
第50図　Ⅶ類土器 1



第51図　Ⅶ類土器 2



第52図　Ⅶ類土器 3



第53図　Ⅶ・Ⅷ類土器

第16表　Ⅶ・Ⅷ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第53図	329	B-5	Ⅳ	赤褐色	赤褐色		○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	330	C-5	Ⅳ	橙色	橙色		○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	331	C-6	Ⅳ	橙色	橙色		○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	332	C-5	Ⅳ	黄橙色	黄色		○	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	333	J-4	Ⅴ	黄色	黄色		◎	○		良	山形押型文	ナデ	
	334	K-4	Ⅳ	黄橙色	暗灰黄色		◎	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	335	K-4	Ⅳ	橙色	暗灰黄色		◎	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	336	B-6	Ⅳ	明赤褐色	明赤褐色		◎	○		良	山形押型文	ケズリ後ナデ	
	337	J-4	Ⅴ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	刺突文	ケズリ後ナデ	
	338	K-4	Ⅴ	浅黄色	暗灰黄色		○	○		良	無文	ケズリ後ナデ	
	339	B-6	Ⅳ	黄橙色	黄橙色		○			良	無文	ケズリ後ナデ	

石器

石器は，土器と同様にⅧ層・Ⅴ層・Ⅲ層上面で出土した。この中でも，Ⅷ層とⅤ層に多く出土する。

石器の大半は2地点からの出土であるが，2地点ではⅥ層及びⅦ層の堆積が薄く，Ⅴ層からⅧ層の土層が不明瞭であったことから，Ⅷ層から出土した石器類についても，縄文時代早期に該当するものと考えられる。

ここでは集石内出土石器とⅧ層の石器，Ⅴ層以下の石器との3つに分けて報告したい。

Ⅷ層出土石器（第54～56図）

Ⅷ層出土遺物は，石槍，スクレイパー，打製石斧，石斧整形剥片，磨石，敲石の29点が出土した。

石槍・スクレイパー（第54図）

頁岩及びホルンフェルスを素材とする。340は扁平な縦長剥片の主要剥離面を上下面に大きく残し，胴部両側縁部を細かく剥離加工し刃部を作出するもので，石槍に類すると考えられる。341は縦長剥片の上面を中心に剥離加工が施される。左側縁部を刃部とし右側縁部を基部とするスクレイパーと考えられる。342は上縁部を基部とし下端部を刃部とするスクレイパーである。刃部周辺を微細な押圧剥離により整形を施してある。343はスクレイパーであろう。上面胴部左側縁部を両面からの細かな押圧剥離により刃部を作出し，右側縁部は主に上面側からの剥離により丁寧に基部を作り出している。

打製石斧（第55図）

Ⅷ層から出土している石斧は5点である。石材は全て頁岩製で上面観が短冊形の形状を呈し，欠損部分も考慮に入れると，本来の長軸幅は10㎝～15㎝程度の大きさの資料が多い。

横長剥片を利用したのは344～346で，縦長剥片を利用したのは348である。明らかに両刃を有すると思われる資料は見られず，346・348については欠損のため，刃部の存在の有無は確認できない。

344は平坦面中央部の膨らみ部分に擦痕が確認できるが，着柄によるものかは定かでない。本類資料の殆どは刃部が丸みを帯びるのに対し，347の刃部は直線的である。刃部の欠損後に，敲打剥離により再度刃部を作出した二次加工製品であることによるものと思われる。胴部側縁部を磨りにより滑らかに仕上げている。

348は周縁部を大まかに剥離整形した後，胴部側縁部に磨りを施している。

石斧整形剥片（第55図）

349～361は，石斧製作過程における整形剥片である。いずれも石材は，頁岩である。

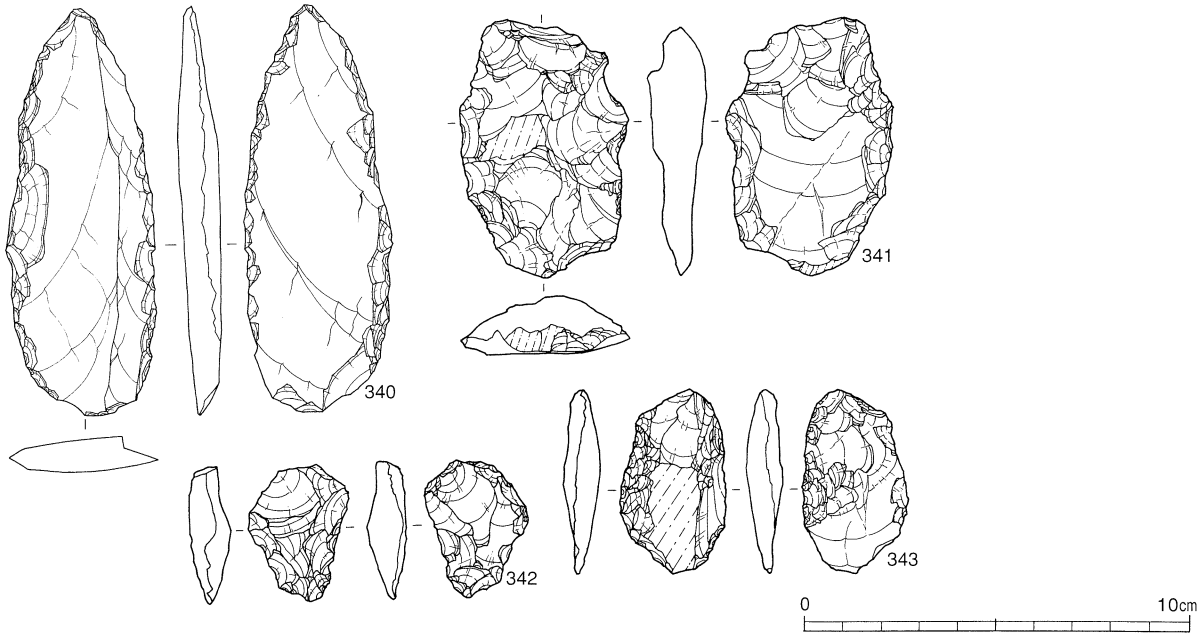
349，354，359は側縁に，350は下縁に剥離調整を施し，スクレイパーとして転用している。353には大小の調整剥離面が確認できるが，刃部形成に至らず，石斧等の製作途中もしくは石核の可能性も考えられる。

磨石・敲石（第56図）

磨石や敲石・凹石については，使用痕の形態により2種類に分類された。

Ⅰ類（第56図）

363は，全面的に磨面を有する。上面観は長楕円に近く若干の歪みを呈し，短軸断面観は三角形状である。右側縁部を中心に全面的に磨面を有する。



第54図　縄文時代早期出土石器１（Ⅷ層出土）

Ⅱ類（第56図）

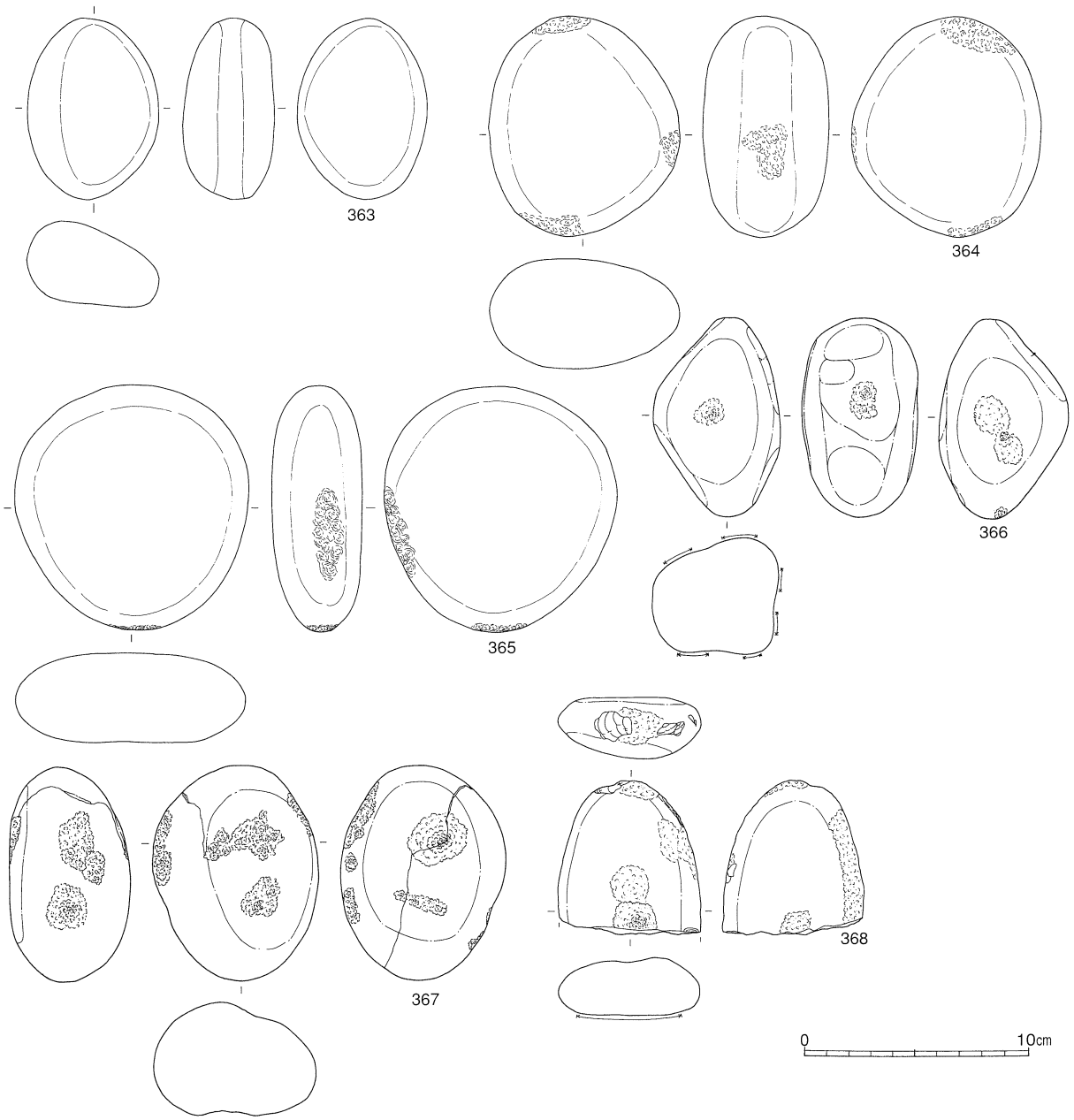
364～368は，全面的に磨面を有し，上下面や側縁部に敲打痕が見られる。概ね楕円形に近似した上面観であるが，366のみ変形した四角形状を呈している。

364にはいずれの平坦面にも磨面があり，側縁部の隅丸の頂部３点に集中して敲打痕が見られる。365は下面のみに磨面があり，側縁部２か所に敲打痕が確認できる。366はどの平坦面にも磨面があり，特に使用頻度が多かった部位に関しては，凹みが明瞭に形成されている。隅丸の長軸両端部２か所には，敲打痕が確認できる。367には全面的に磨面が見られ，側縁部には敲打痕が３か所程度に集中的に残されている。上下面には明瞭な凹みが３か所あり，敲打を受けた頻度が高かったと思われる。368は半分ほど欠損しているが，下面に磨面があり，上面中央部には幅１㎝程度の凹みが隣接して２か所確認できる。側縁部には囲むように敲打痕が残される。

第17表　Ⅷ層内出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第54図	340	K-4	Ⅷ	ホルンフェルス	11.0	3.9	1.0	46.5	石槍
	341	J-5	Ⅷ	頁　岩	6.5	4.3	1.5	44.0	スクレイパー
	342	K-4	Ⅷ	頁　岩	3.5	2.4	1.0	8.1	スクレイパー
	343	K-4	Ⅷ	頁　岩	4.8	2.7	0.9	11.3	スクレイパー
第55図	344	K-4	Ⅷ	頁　岩	14.7	6.4	2.7	282.0	打製石斧
	345	K-3	Ⅷ	頁　岩	13.4	5.9	2.0	210.2	打製石斧
	346	K-4	Ⅷ	頁　岩	5.1	4.4	1.3	38.3	打製石斧
	347	K-5	Ⅷ	頁　岩	10.5	5.9	1.7	136.1	打製石斧
	348	K-5	Ⅷ	頁　岩	9.1	5.9	1.8	127.0	打製石斧
	349	K-4	Ⅷ	頁　岩	8.7	4.5	1.7	53.4	石斧整形剥片
	350	K-4	Ⅷ	頁　岩	5.1	8.9	0.8	32.0	石斧整形剥片
	351	K-4	Ⅷ	頁　岩	6.9	4.0	1.4	24.8	石斧整形剥片
	352	K-5	Ⅷ	頁　岩	5.4	6.4	2.0	62.9	石斧整形剥片
	353	K-4	Ⅷ	頁　岩	11.4	6.6	3.0	202.5	石斧整形剥片
	354	K-5	Ⅷ	頁　岩	9.1	4.8	1.2	19.0	石斧整形剥片
	355	K-5	Ⅷ	頁　岩	4.4	4.8	1.4	33.6	石斧整形剥片
	356	K-4	Ⅷ	頁　岩	7.2	4.3	0.9	20.2	石斧整形剥片
	357	K-4	Ⅷ	頁　岩	8.8	3.2	0.8	29.3	石斧整形剥片
	358	K-5	Ⅷ	頁　岩	6.7	3.3	1.1	26.3	石斧整形剥片
	359	K-4	Ⅷ	頁　岩	9.6	5.4	1.5	65.9	石斧整形剥片
	360	K-4	Ⅷ	頁　岩	6.3	3.6	0.8	17.7	石斧整形剥片
	361	K-4	Ⅷ	頁　岩	6.2	5.7	1.4	52.0	石斧整形剥片
	362	J-4	Ⅷ	頁　岩	6.2	3.8	0.8	22.3	石斧整形剥片

第55図　縄文時代早期出土石器 2 （Ⅷ層出土）



第56図　縄文時代早期出土石器3（Ⅷ層出土）

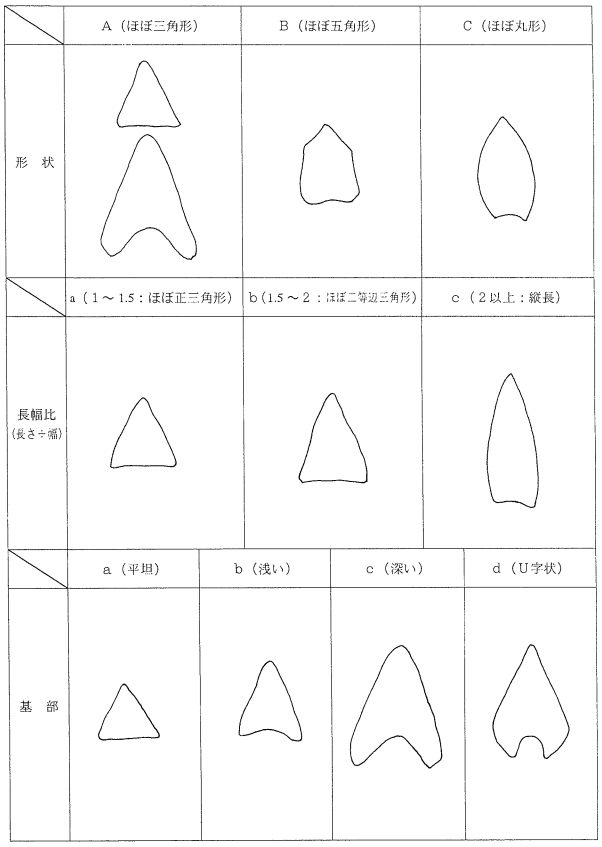
第18表　Ⅷ層内出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第56図	363	B-5	Ⅷ	安山岩	8.4	5.9	3.8	260	磨石
	364	K-4	Ⅷ	安山岩	10.2	8.5	5.0	695	磨石
	365	K-4	Ⅷ	安山岩	11.3	10.3	4.1	750	磨石
	366	K-4	Ⅷ	砂　岩	9.3	5.2	5.4	357	凹石
	367	K-4	Ⅷ	砂　岩	10.0	7.4	5.1	520	凹石
	368	K-4	Ⅷ	砂　岩	7.1	6.3	2.7	173	凹石

石鏃（第59～62図）

石鏃では，磨製石鏃が１点，打製石鏃が63点出土し，これらを図化した。石鏃の形状は，ほとんどが正三角形や二等辺三角形に施され，原型のままで出土したものが多い。他にも五角形で施されているものが８点ある。

石鏃石材分析状況（第58図）から，頁岩が41％で最も多く使用され，次に安山岩，黒曜石が19％である。下記のとおり打製石鏃を類別に細分化したが，類別に定まった石材を使用せず，どの類も多種な石材が使用されている。



第57図　石鏃の分類図

石鏃の出土区ごとの個体数を分析してみると（第58図）B－1やC－1を中心とする1地点の北部や，J－4，K－4とする2地点の中央部がもっとも多い。類別に出土状況を比較したが，特に著しい特徴は見られなかった。

磨製石鏃（第59図）

369は磨製石鏃であり，全体的に丁寧な研磨が施され薄くしてある。

打製石鏃（第59～62図）

打製石鏃は，形状，長幅比，基部を分類図（第57図）のとおり細分し，10類に分類した。

Ⅰ類　A－a－a（第59図）

370～382は，長幅比が1～1.5で形状がほぼ正三角形を呈し，基部は平坦である。

Ⅱ類　A－a－b（第59・60図）

383～395は長幅比が1～1.5で形状がほぼ正三角形である。基部は浅い抉りが施されている。

Ⅲ類　A－a－d（第60図）

396は長幅比が1～1.5で形状がほぼ正三角形である。基部はU字状に施されている。

Ⅳ類　A－b－a（第60図）

397・398は長幅比が1.5～2で形状はほぼ二等辺三角形である。基部は平坦である。

Ⅴ類　A－b－b（第60図）

399・405は長幅比が1.5～2で形状がほぼ二等辺三角形である。基部に浅い抉りが施されている。

Ⅵ類　A－b－c（第60・61図）

406～411は長幅比が1.5～2で形状がほぼ二等辺三角形である。基部に深い抉りが施されている。

Ⅶ類　A－b－d（第61図）

412～414は長幅比が1.5～2で形状がほぼ二等辺三角形である。基部がU字状に施されている。

Ⅷ類　A－c－b，d（第61図）

長幅比が2以上で縦長の二等辺三角形である。415と416は，基部に浅い抉りが施されている。417と418は，基部がU字状に施されている。

Ⅸ類　B全般（第61図）

形状がほぼ五角形を呈している。419は，長幅比が1～1.5であり，基部に浅い抉りが施されている。420と421は，長幅比が1.5～2であり，基部に浅い抉りが施されている。422と423は，長幅比が2以上である。422の基部は平坦であり，423はU字状に施されている。

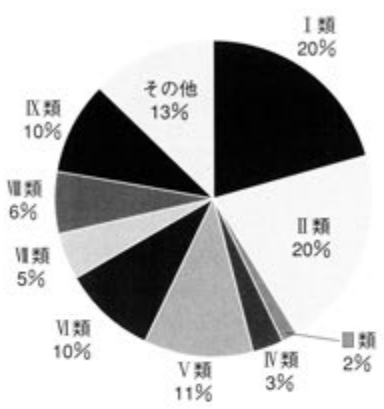
Ⅹ類　その他（第62図）

425～428は，基部が凸状に施されている。

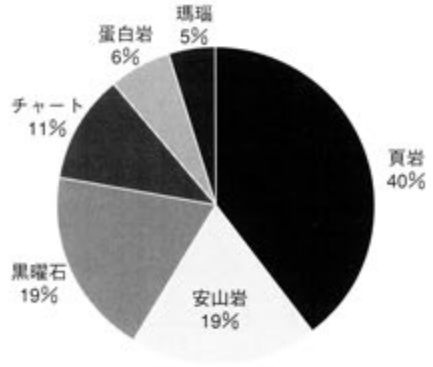
石鏃を分類別に個数の割合を分析してみると，Ⅰ類とⅡ類が最も多く，長幅比が1～1.5の石鏃が全体の5分の2を占めていることが分かる。次に長幅比が1.5～2の石鏃が約3分の1を占めている。

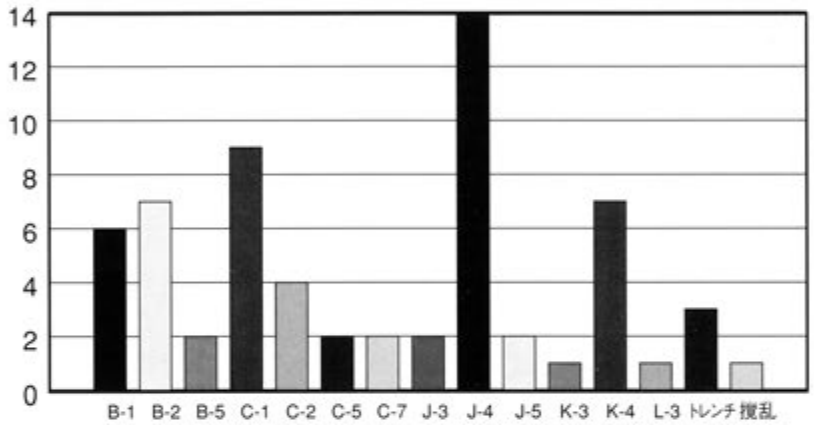
また，基部から分析すると浅い抉りが施されている石鏃が最も多く，Ⅱ類，Ⅴ類，Ⅷ類合わせると全体の3分の1以上を占めている。

打製石鏃類別個体数

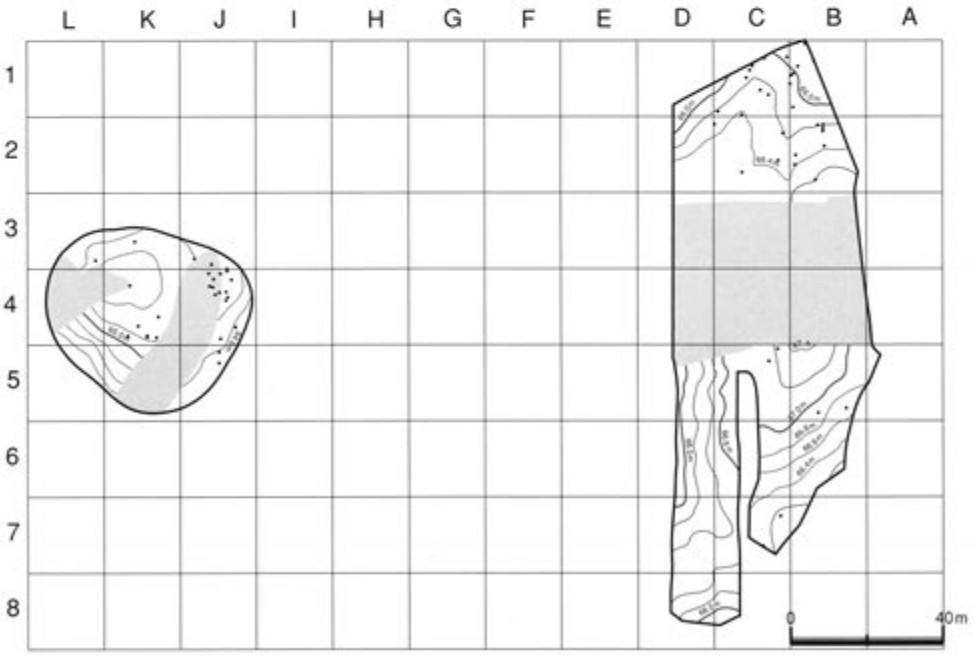


石鏃石材分析図



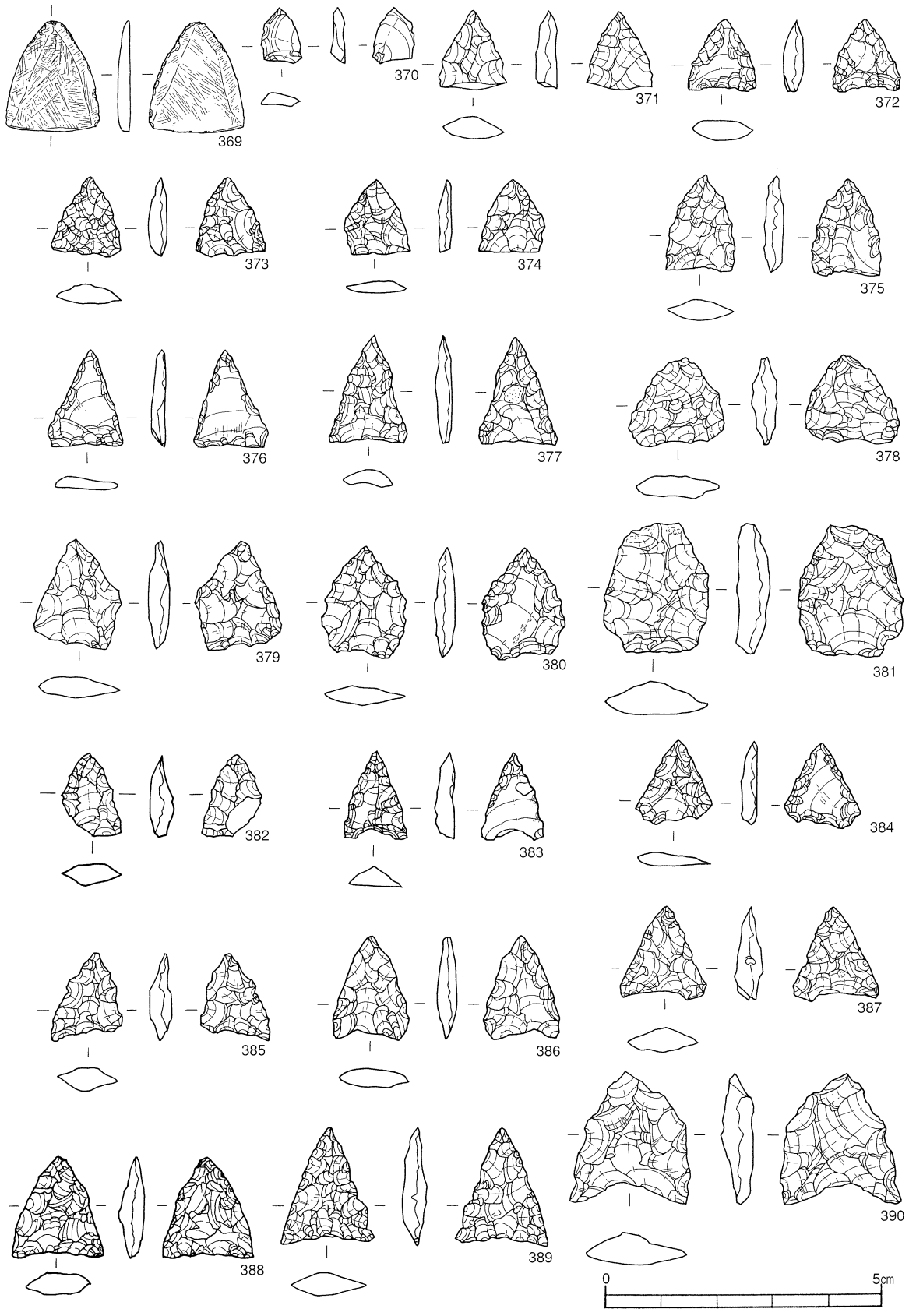


石鏃出土区ごとの個体数

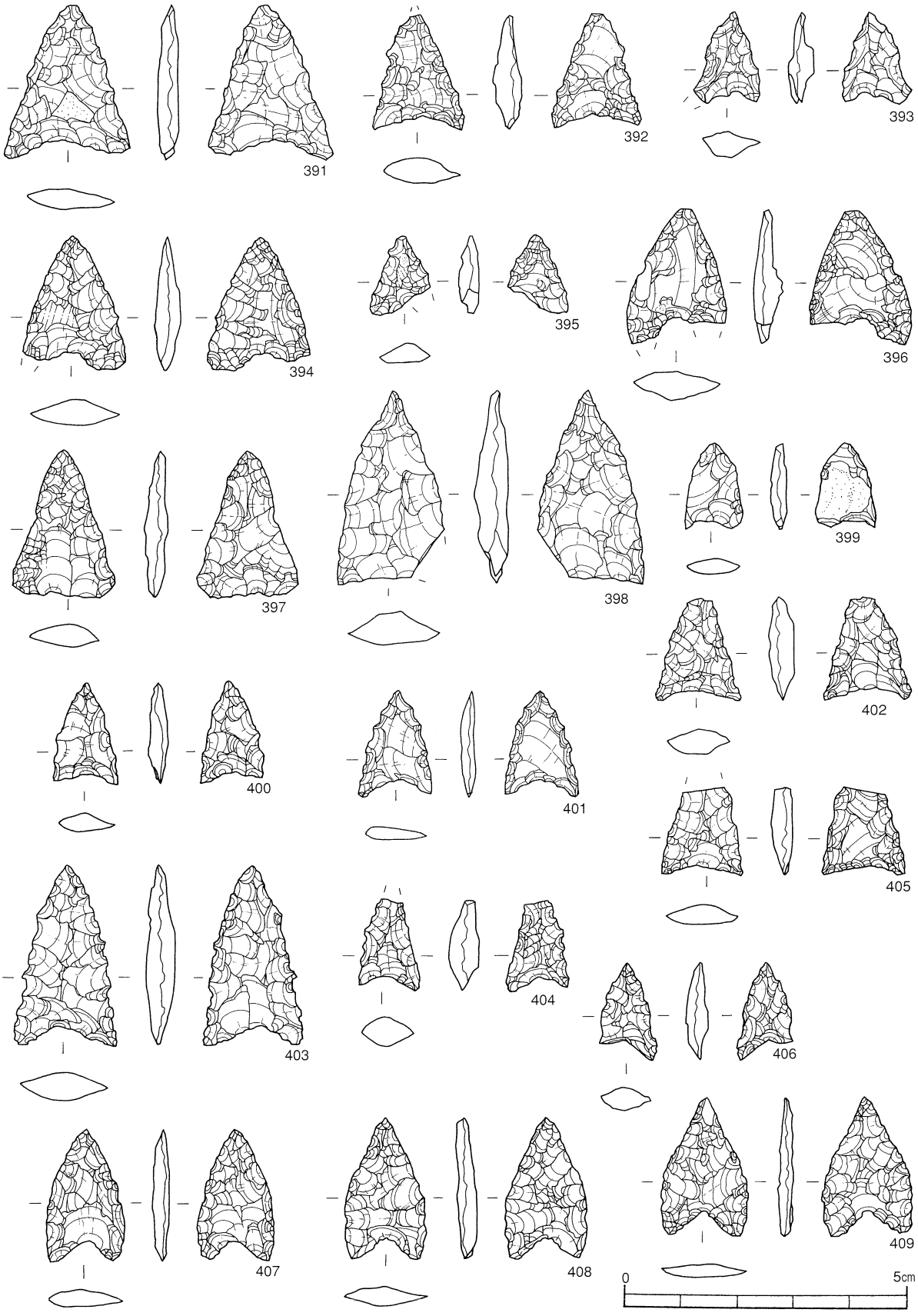


石鏃分布図

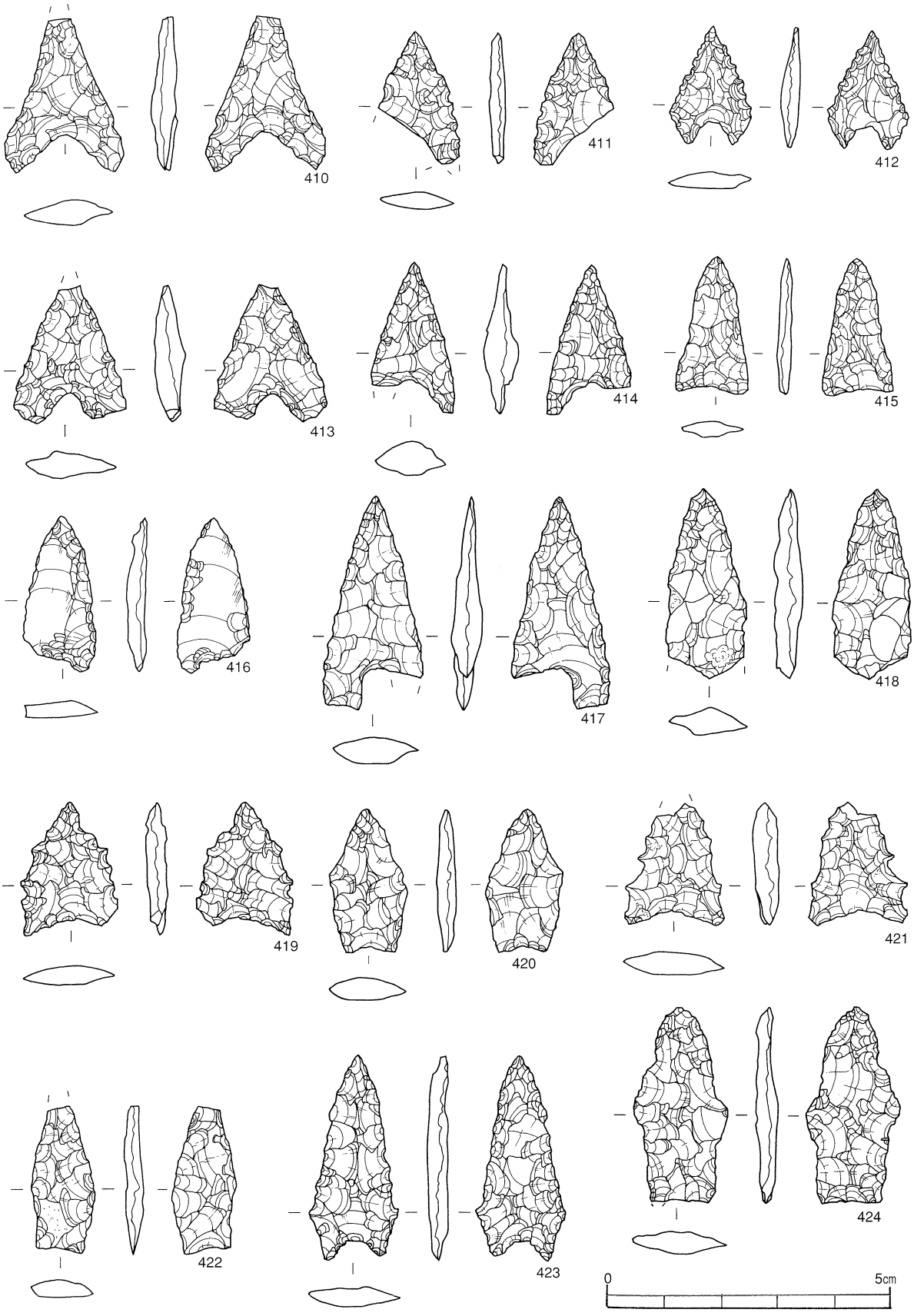
第58図　石鏃分析・分布図



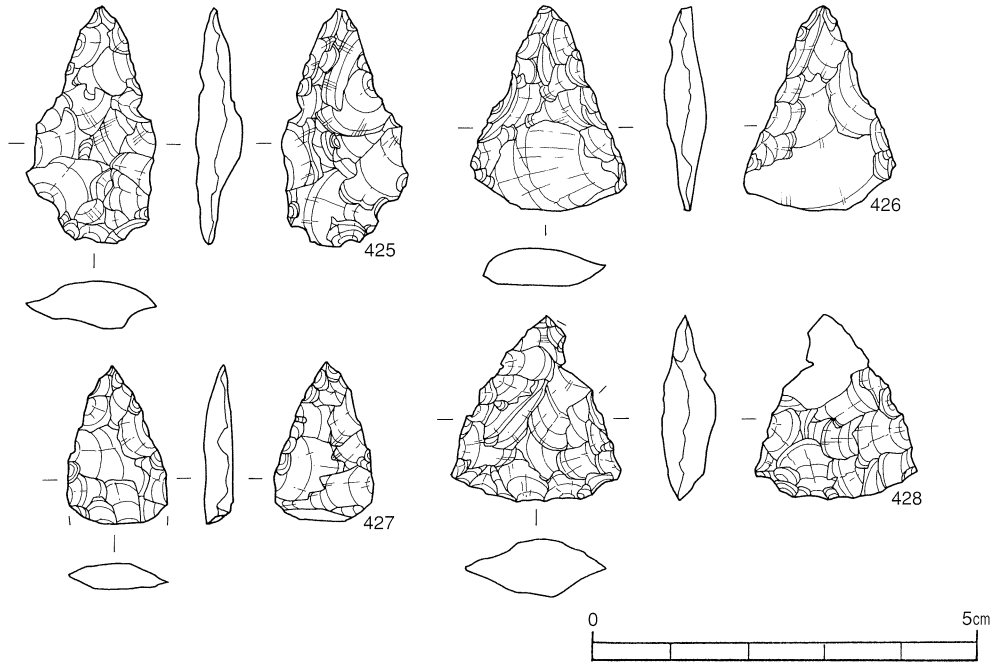
第59図　縄文時代早期出土石器4（石鏃）



第60図　縄文時代早期出土石器5（石鏃）



第61図　縄文時代早期出土石器6（石鏃）



第62図　縄文時代早期出土石器７（石鏃）

第19表　石鏃観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第59図	369	3T	Ⅲ	頁　岩	1.98	1.66	0.22	0.90	
	370	C-1	Ⅴ	チャート	0.98	0.65	0.22	0.13	
	371	C-1	Ⅴ	チャート	1.37	1.18	0.38	0.52	
	372	K-4	Ⅴ	頁　岩	1.26	1.20	0.32	0.42	
	373	J-4	Ⅴ	黒曜石	1.23	1.16	0.32	0.42	
	374	K-4	Ⅴ	チャート	1.27	1.06	0.21	0.29	
	375	C-1	Ⅴ	頁　岩	1.72	1.20	0.32	0.67	
	376	J-5	Ⅴ	頁　岩	1.64	1.29	0.23	0.47	
	377	B-5	Ⅴ	黒曜石	1.92	1.36	0.24	0.53	
	378	C-1	Ⅴ	頁　岩	1.54	1.64	0.43	1.01	
	379	J-4	Ⅴ	蛋白石	1.92	1.42	0.34	0.88	
	380	B-1	Ⅳ	瑪　瑙	2.00	1.48	0.33	0.90	
	381	J-4	Ⅴ	蛋白石	2.33	1.83	0.56	2.56	
	382	J-3	Ⅴ	チャート	1.45	0.88	0.39	0.50	
	383	K-3	Ⅳ	黒曜石	1.38	1.04	0.33	0.41	
	384	K-4	Ⅴ	黒曜石	1.50	1.23	0.27	0.43	
	385	B-2	Ⅳ	頁　岩	1.51	1.25	0.36	0.44	
	386	K-4	Ⅴ	頁　岩	1.77	1.27	0.33	0.64	
	387	C-1	Ⅴ	黒曜石	1.65	1.45	0.43	0.75	
	388	C-2	Ⅳ	頁　岩	1.83	1.64	0.48	0.82	
	389	B-5	Ⅳ	安山岩	2.06	1.54	0.44	1.01	
	390	C-1	Ⅳ	頁　岩	2.32	2.12	0.55	2.42	
第60図	391	K-4	Ⅴ	安山岩	2.70	2.06	0.34	1.65	
	392	L-3	Ⅳ	安山岩	2.01	1.55	0.48	1.13	
	393	C-1	Ⅴ	安山岩	1.62	1.15	0.44	0.50	
	394	B-2	Ⅴ	黒曜石	2.40	1.72	0.38	1.25	
	395	J-4	Ⅴ	黒曜石	1.42	0.94	0.33	0.33	
	396	J-4	Ⅳ	黒曜石	2.40	1.70	0.54	1.50	
	397		カクラン	チャート	2.59	1.74	0.33	1.24	
	398	C-2	Ⅳ	頁　岩	3.47	1.80	0.60	3.24	
	399	B-1	Ⅳ	頁　岩	1.50	1.00	0.27	0.39	

石匙・石槍（第63図）

ほとんどが頁岩で，一部硅質頁岩やチャートが含まれる。431のみ横型剥片の利用であり，それ以外は縦型剥片を利用し，上下両面からの大小の剥離加工により側縁部や先端部を整えている。

429は石匙で，側縁部に明瞭な抉りが施されつまみ部が形成されている。先端部は鋭利で，両側縁に細かな調整剥離が見られる。430～438は石槍。432は長軸長3.5㎝，短軸長2.6㎝と長短軸比の小さな小資料である。着柄痕が確認できない点や小資料による着柄の困難さからスクレイパーの可能性も考えられるが，全面的に微細な押圧剥離が施されることから石槍とした。433は基部寄りの両側縁が若干の抉りを呈し，着柄によると思われる磨りが確認される。434は長軸長17.1㎝，最大短軸長4.9㎝，器厚3.3㎝程度と本器種中最大で器厚も大きい。436は両面側からの丁寧で微細な剥離調整が両側縁部に確認できる。両端部が大きく欠損した石槍の残存資料と考えられる。438は，長軸長10.8㎝に対し短軸長は2.4㎝程度と細長い器形である。細かい両面側からの剥離により整形した後，磨りにより加工を施したと思われる。上下両面と左側縁部には平坦面が形成され，擦痕が認められる。

石斧整形剥片（第64～67図）

頁岩がほとんどであり，硅質頁岩や黒曜石，蛋白石が含まれる。石器の形状と主要な敲打の方向の関係，刃部等の調整の有無から，以下の３種類に分類して特徴をとらえた。

Ⅰ類（第65・66図）

459・461・466～468・475～477・484・487・488は主要剥離面のリングの方向性が横長の剥片である。

器厚は扁平である。

Ⅱ類（第64～66図）

440・445・460・480・481・489は主要剥離面のリングの方向性が縦長の剥片である。

469は若干厚みを呈するが，その他は扁平な器厚をもつ。

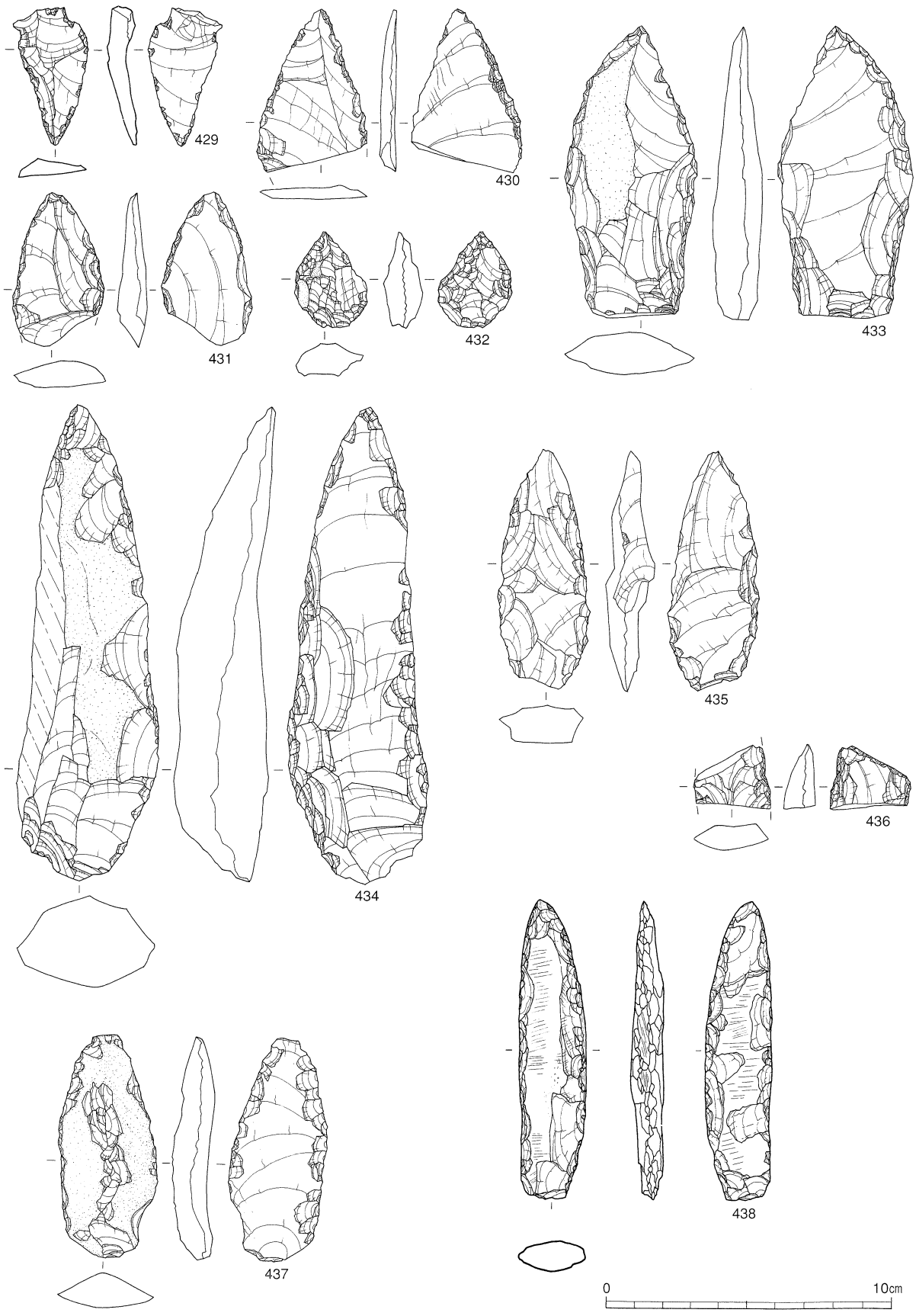
Ⅲ類（第64～67図）

剥片の二次加工により刃部が形成される一群である。

439は上下両面に丁寧に研磨された面を残すところ

第20表　石鏃観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第60図	400	B-1	Ⅳ	頁　岩	1.75	1.07	0.34	0.57	
	401	C-1	Ⅳ	安山岩	1.92	1.27	0.27	0.56	
	402	K-4	Ⅴ	頁　岩	1.83	1.50	0.44	1.04	
	403	B-2	Ⅳ	安山岩	3.20	1.76	0.52	2.34	
	404	J-4	Ⅳ	安山岩	1.64	1.07	0.51	0.75	
	405	C-1	Ⅳ	チャート	1.57	1.42	0.34	0.81	
	406	B-1	Ⅳ	頁　岩	1.75	0.83	0.47	0.49	
	407	J-4	Ⅴ	瑪　瑙	2.33	1.36	0.24	0.81	
	408	C-2	Ⅳ	蛋白石	2.47	1.43	0.33	0.98	
	409	C-2	Ⅳ	チャート	2.44	1.48	0.24	0.81	
第61図	410	C-7	Ⅳ	安山岩	2.77	2.03	0.36	1.46	
	411	B-1	Ⅳ	頁　岩	2.33	1.22	0.33	0.72	
	412	C-7	Ⅴ	頁　岩	2.13	1.42	0.29	0.64	
	413	C-5	Ⅳ	頁　岩	2.39	1.93	0.56	1.92	
	414	B-2	Ⅳ	黒曜石	2.64	1.43	0.61	1.35	
	415	B-1	Ⅷ	頁　岩	2.40	1.20	0.35	0.64	
	416	J-3	Ⅴ	頁　岩	2.75	1.20	0.27	1.11	
	417	C-5	Ⅳ	安山岩	3.83	1.77	0.44	2.25	
	418	J-4	Ⅴ	瑪　瑙	3.27	1.35	0.44	1.93	
	419	B-2	Ⅳ	黒曜石	2.24	1.66	0.36	1.27	
	420	J-4	Ⅴ	頁　岩	2.53	1.25	0.32	0.98	
	421	J-4	Ⅳ	安山岩	2.12	1.73	0.43	1.48	
	422	J-4	Ⅴ	頁　岩	2.58	1.05	0.34	0.97	
	423	B-1	Ⅳ	安山岩	3.60	1.48	0.35	1.71	
	424	J-4	Ⅴ	頁　岩	3.48	1.62	0.39	1.70	
第62図	425	J-4	Ⅴ	頁　岩	3.17	1.63	0.58	2.24	
	426	J-5	Ⅴ	頁　岩	2.80	1.94	0.52	2.16	
	427	J-4	Ⅴ	瑪　瑙	2.09	1.24	0.34	0.97	
	428	K-4	Ⅴ	安山岩	2.44	2.05	0.66	2.65	

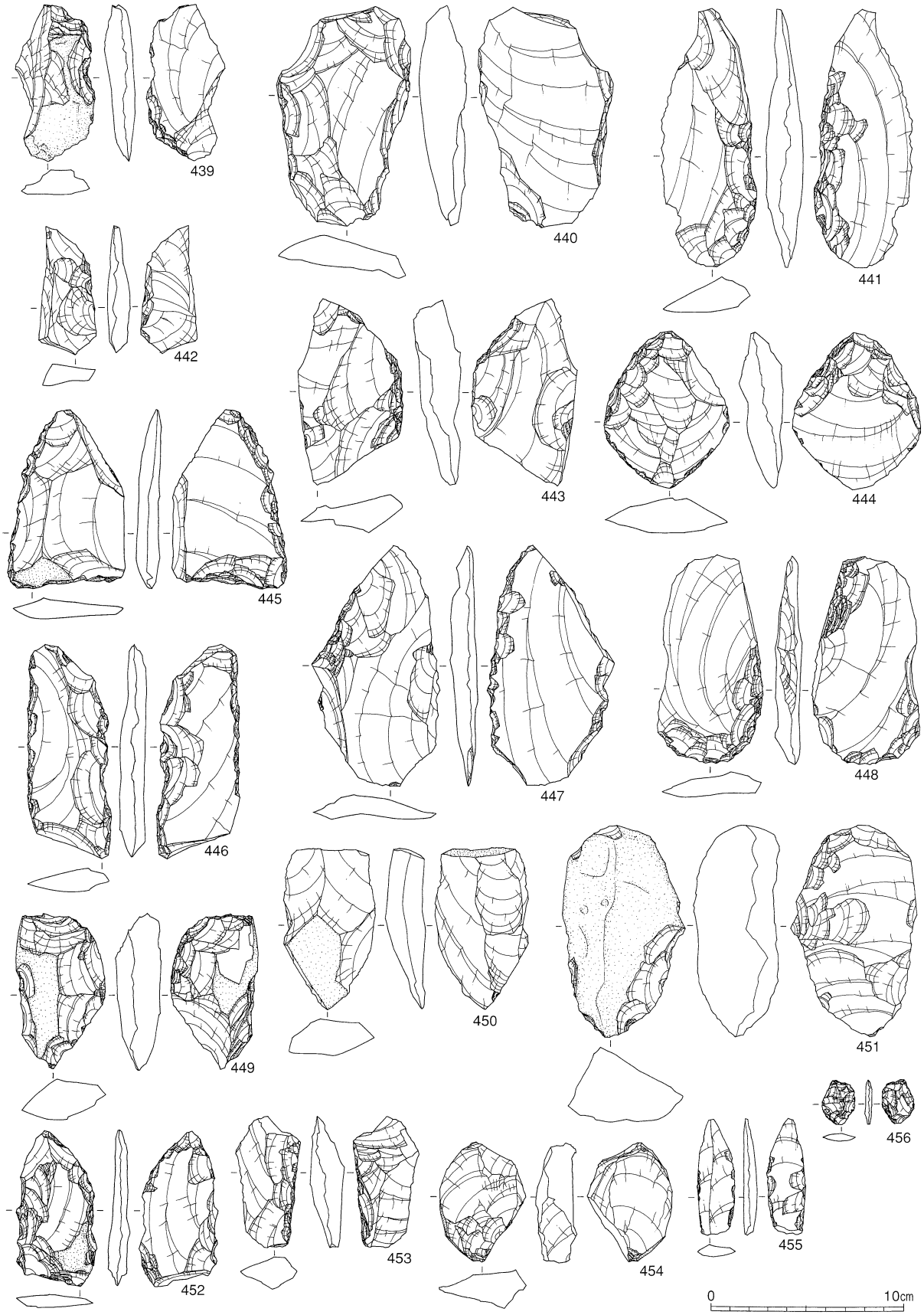


第63図　縄文時代早期出土石器 8 （石匙・石槍）

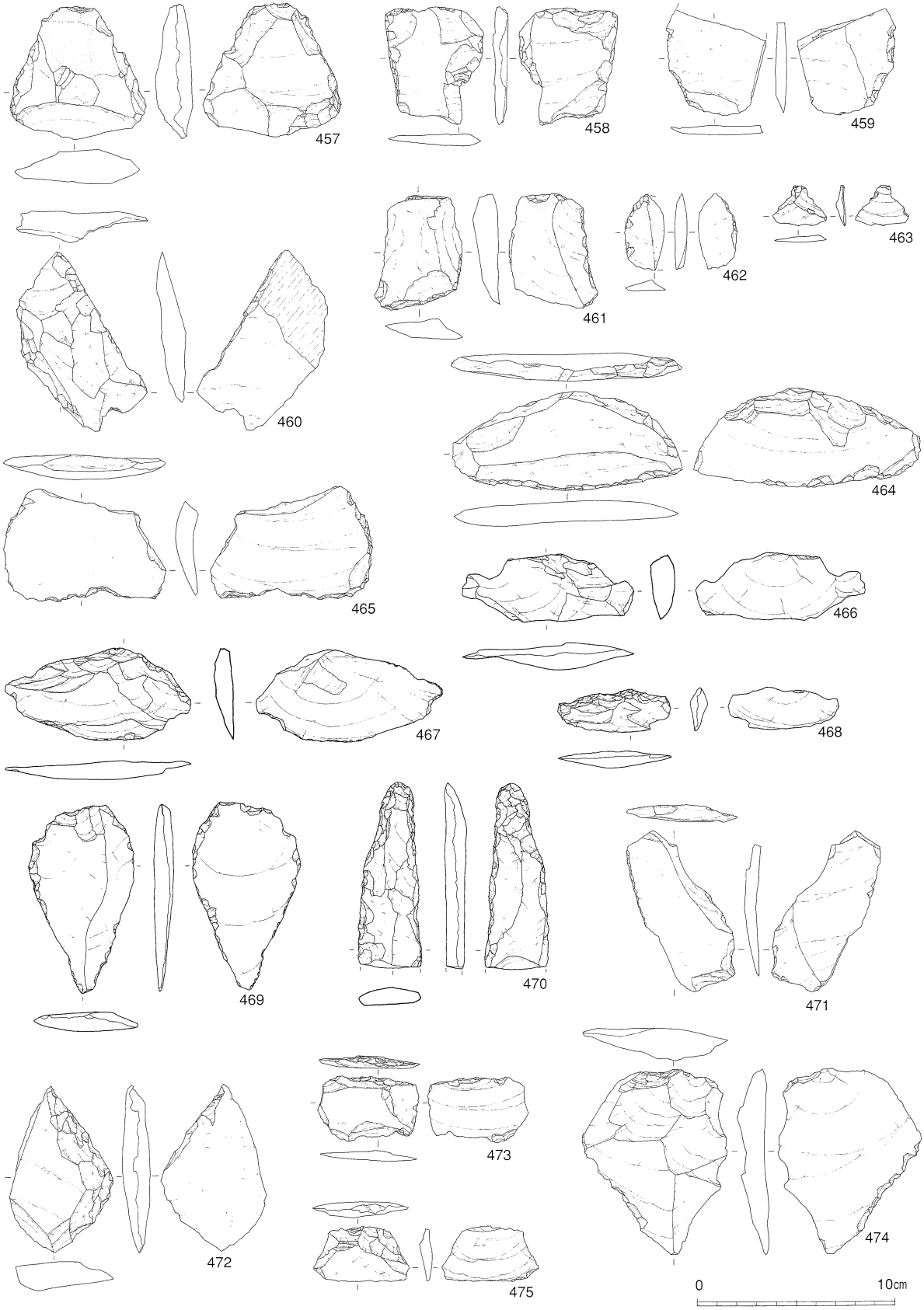
から，磨製石斧の使用後または破損後に，側縁部を片側面からの剥離により刃部及び基部形成を行なった可能性が考えられる。441は上下両面側からの大小の剥離により基部形成を丁寧に行っている。刃部調整痕は確認できず，使用痕剥片に類すると思われる。443は刃部整形加工が部分的に伺えるが，刃部先端部が潰れており使用痕と思われる。444は菱形状を呈する器形である。上部頂点部周辺を丁寧に基部整形し，下部頂点部を上面側からの微細な剥離により刃部形成を施してある。446はナイフ状の器形を呈する。上面左側縁部を両面側からの微細な剥離により基部を仕上げ，上面右側縁部を大小の剥離により刃部を作出している。448は上面下端部を細かな剥離により刃部に仕上げ，下面左側縁部を下面側からの剥離により基部として作出している。449は，研磨された面が上下両面に残される。破損等により使用できなくなった磨製石斧を，再度剥離整形した二次加工品と思われる。450は細かな剥離面が見られないことから，石器製作途中の資料の可能性がある。451は短軸断面観が三角形状である。下面を中心的に加工してある。上端部の鋭利な頂部を敲打により潰し，下面左側縁上部を下面側からの細かな剥離により基部として仕上げている。下端部は，下面側からの大きな剥離により刃部として作出している。452はナイフ状の器形である。刃部形成は明瞭でなく，基部・刃部の部位特定は困難である。453は上面左側縁部を両面側からの剥離により細かく基部形成を施しているが，刃部調整痕は認められない。大きな剥離により作出された鋭利な縁辺部を，刃部として利用した使用痕剥片と思われる。454には鋭利な刃部形成部位が認められず，大き目の剥離面が複数残される。石核の可能性が高い。456は，掲載遺物中最小の資料である。周縁部を丁寧な押圧剥離により加工し，縁辺全体を刃部とする。457は上面観が三角形状を呈する。上面右側縁部を両面側からの大小の剥離整形により刃部を作出している。部分的に側縁部の鋭利な箇所を潰し，基部として利用したと考えられる。458・459・467は部分的な調整剥離により刃部を形成している。458は周縁部両面側から整形を施し，微細な剥離により刃部を作り出している。459は，上面左側縁部を両面側からの部分的な細かな剥離により刃部形成を施している。基部に細かな調整痕は確認できない。462は長軸でも4㎝に満たない小さな器形である。上面左側縁部を両面側から微細な剥離を施して刃部とし，右側縁部には細かな調整を施さず基部としている。467は，主要敲打点周辺を細かな剥離により基部形成している。下端部においては主要剥離面により作出された鋭利な部位を生かし，極部分的な押圧剥離により刃部を作り出している。465・469・471～473・499は自然面や主要剥離面を大きく残し側縁部を細かく整形加工し，465・471～473は刃部のみを，469・499は刃部・基部ともに両面側から丁寧に剥離整形してある。

464・474は主要な敲打点側の器厚を生かし，大小の剥離により基部形成を施し，刃部を微細な剥離により丁寧に整形している。479・482は主要敲打点周辺を上面側からの剥離を中心として加工して基部を作出，刃部には細かな調整痕は確認できない。483は器厚が3.4㎝，長軸12.5㎝と大きめの資料である。両面側から加工が施され，刃部形成が見られる。使用痕も確認できる。485は上面左側縁部の自然面を生かして基部とし，上面右側縁部に部分的な微細な剥離により刃部を作出している。486は敲打点周辺部を大小の剥離により基部整形し，刃部側にはわずかな調整剥離が確認できる。490は扁平な素材を生かして周縁部を剥離加工し，上端上面側を基部整形し，上面右側縁部を微細な剥離により刃部としている。491は，大きく3面の剥離面により整形がなされている。上面観は基部が半円状を呈し，尖頭部が頂点を成す石錐と考えられる。493は下面には礫皮面が多く残される。上面右側縁部から下端部にかけて細かな剥離により刃部形成を意識したと思われる加工がなされている。直線的な鋭利な縁辺形成に至らず刃部としては不適当であり，製作途中の可能性も考えられる。494は三角形状の器形を呈している。底辺部の平坦な自然面を基部として生かし，斜辺2辺を上面側からの大小の剥離により刃部を形成している。495は，両側縁下半部から下端部にかけて円弧状に細かく剥離を施し，刃部形成している。礫表皮に擦痕が認められることから，磨斧等の二次加工品の可能性も考えられる。496は側縁部がきれいに切断され，上面観が正三角形状を呈している。底辺部には，大小の押圧剥離による直線的な刃部が形成されている。

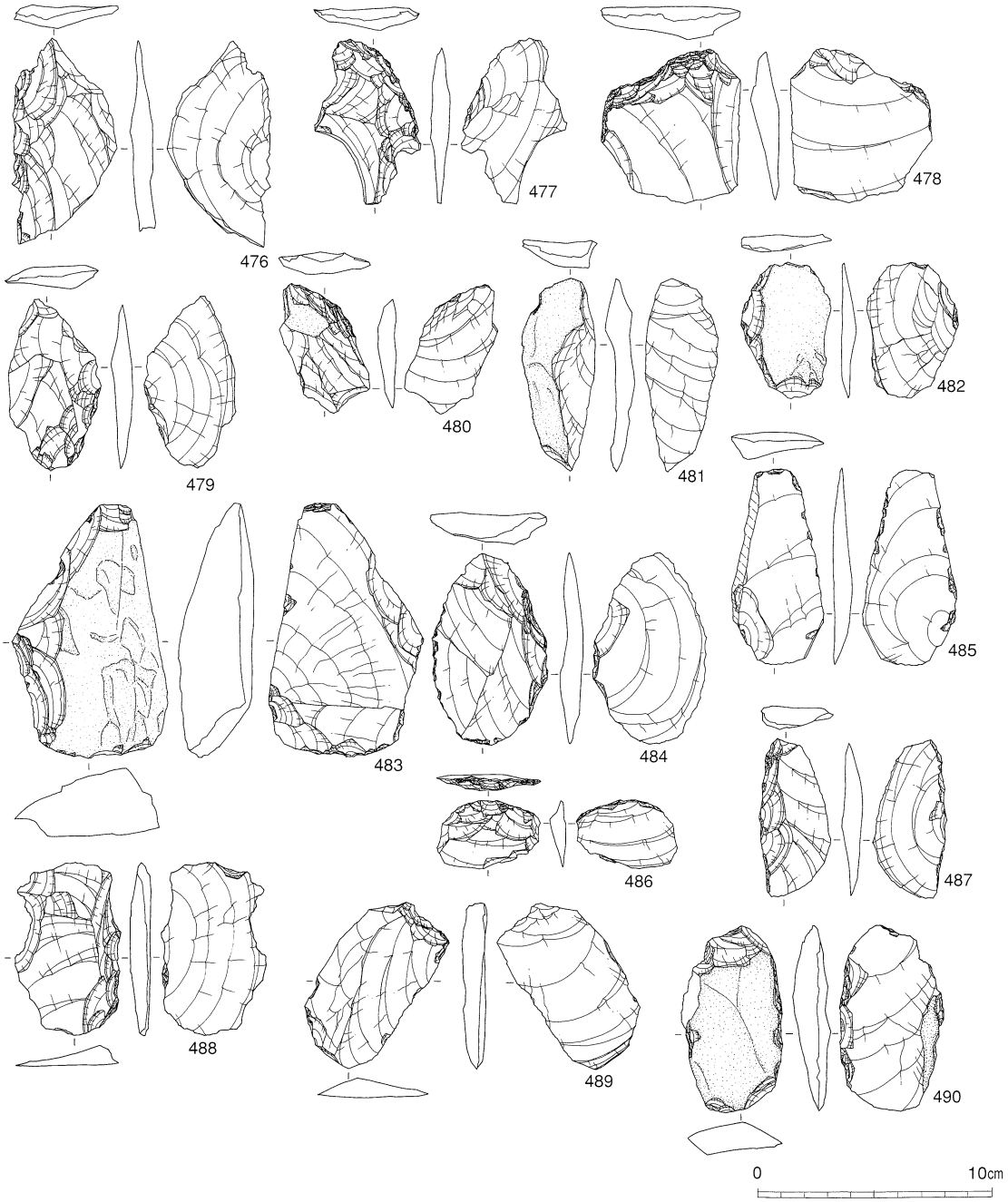
498は器厚4㎜と極薄で，五角形状の特徴的な器形を呈している。底辺部を両面側から押圧剥離し刃部を形成し，他の側縁部には剥離等の加工の痕跡は見受けられない。上下両面には擦痕が残される。499は厚みを有する主要敲打点周辺を大小の剥離により基部整形し，上面下端部の鋭利な縁辺を生かし，極微細な押圧剥離により刃部を作出している。



第64図　縄文時代早期出土石器 9 （石斧整形剥片）



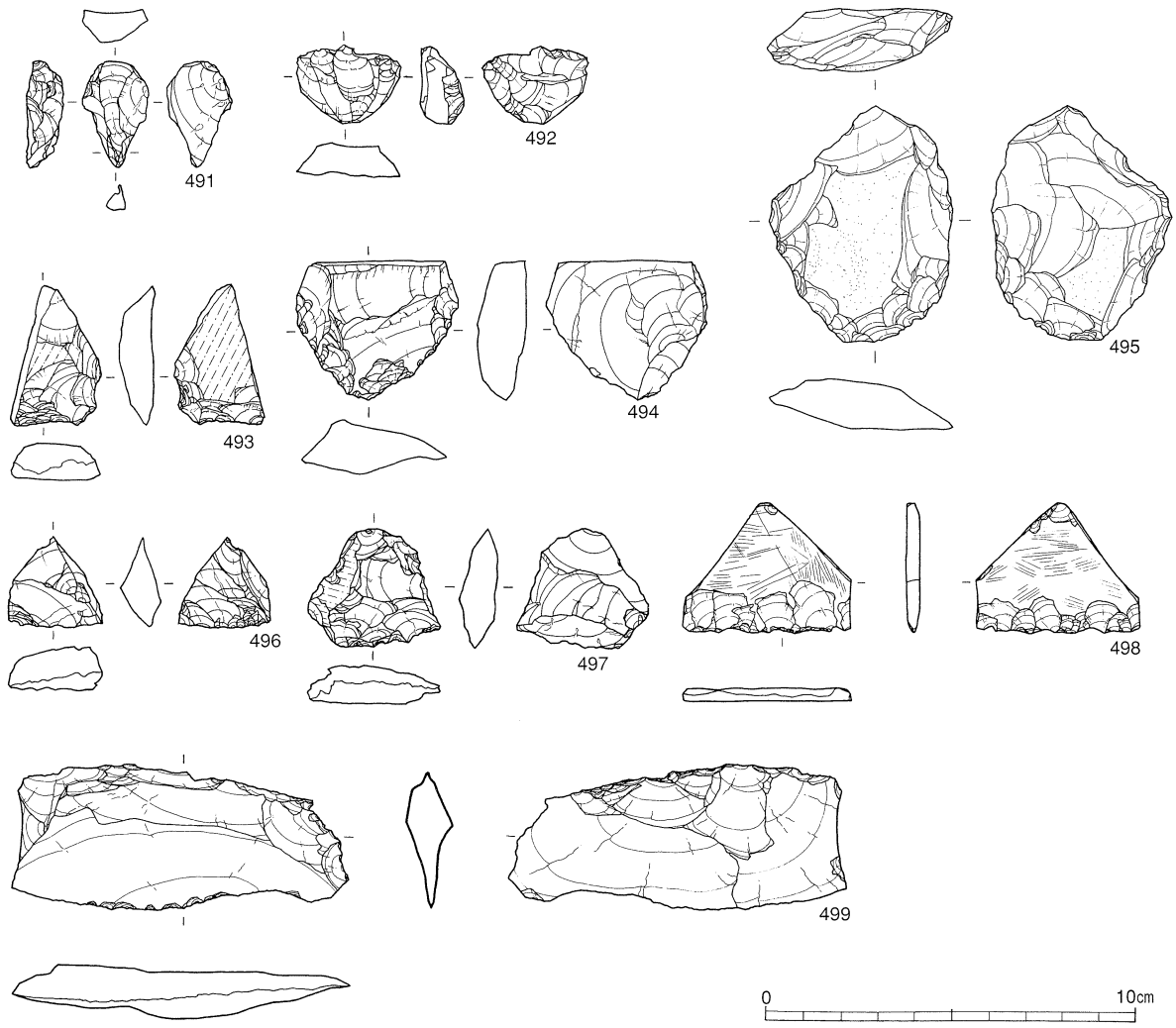
第65図　縄文時代早期出土石器10（石斧整形剥片）



第66図　縄文時代早期出土石器11（石斧整形剥片）

第21表　石匙・石槍観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第63図	429	J-5	Ⅴ	頁　岩	4.9	2.4	0.9	6.6	石匙
	430	J-4	Ⅴ	頁　岩	5.4	3.9	0.5	10.8	石槍
	431	K-4	Ⅴ	頁　岩	5.5	3.2	0.9	15.9	石槍
	432	K-3	Ⅴ	瑪　瑙	3.5	2.6	1.1	10.1	石槍
	433	K-4	Ⅴ	頁　岩	10.6	4.7	1.7	86.1	石槍
	434	K-4	Ⅴ	頁　岩	17.1	4.9	3.3	265.3	石槍
	435	K-4	Ⅴ	頁　岩	8.4	3.2	1.4	38.4	石槍
	436	C-1	Ⅳ	頁　岩	2.2	2.7	0.9	6.5	石槍
	437		Ⅰ	頁　岩	8.1	3.3	1.3	35.9	石槍
	438		Ⅰ	頁　岩	10.8	2.4	1.2	36.4	石槍



第67図　縄文時代早期出土石器12（石錐・石核・スクレイパー）

第22表　石斧整形剥片観察表

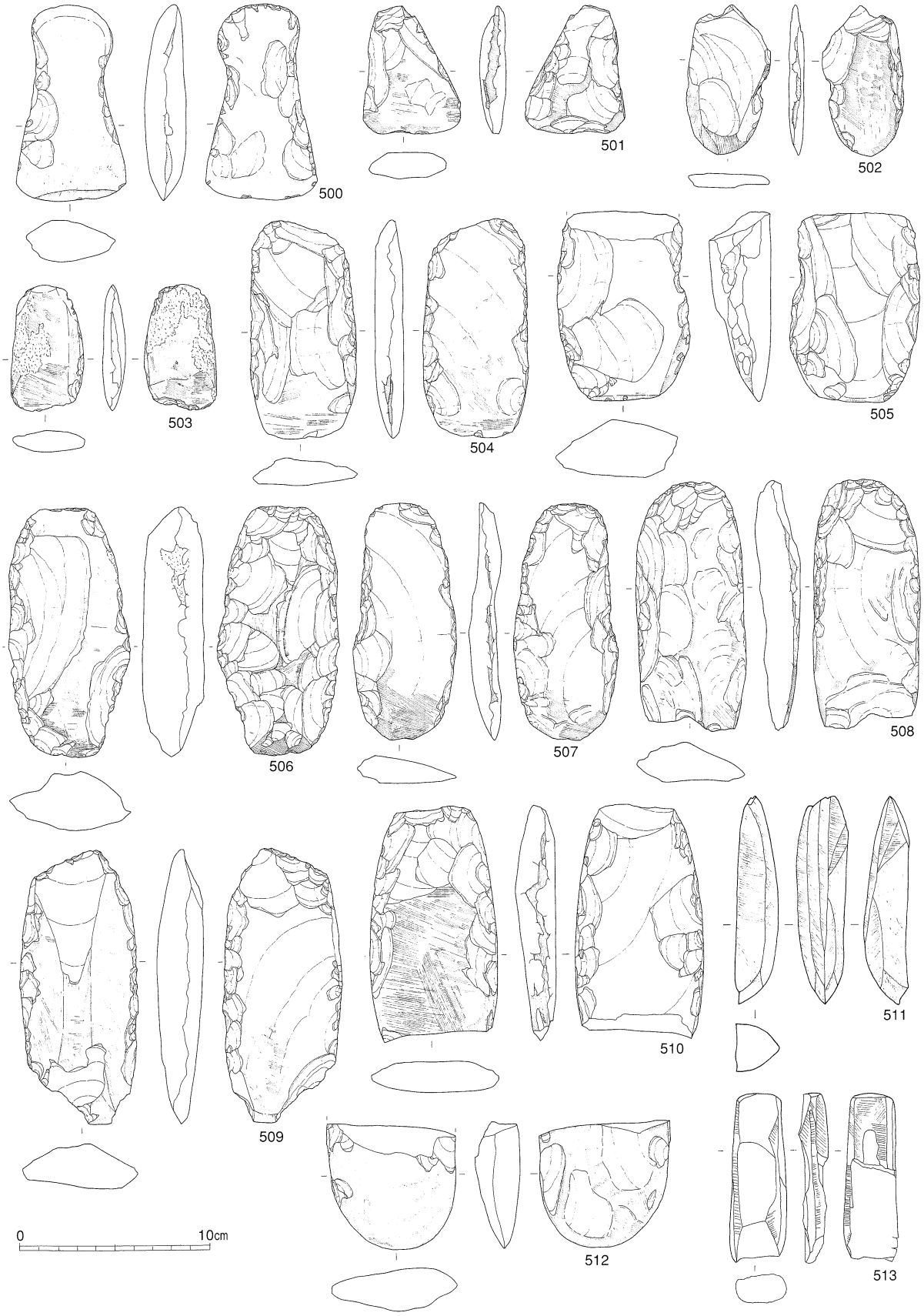
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第64図	439	C-2	Ⅴ	頁　岩	8.5	3.8	1.5	46.9	
	440	L-5	Ⅴ	頁　岩	11.6	7.1	2.4	175.0	
	441	K-4	Ⅴ	頁　岩	14.1	5.0	2.0	116.1	
	442	J-4	Ⅴ	硅質頁岩	6.4	3.0	1.2	2.7	
	443	K-5	Ⅴ	頁　岩	10.1	5.5	2.2	99.2	
	444	J-4	Ⅴ	頁　岩	8.7	6.8	2.4	111.4	
	445	K-4	Ⅴ	頁　岩	9.4	6.1	1.8	74.2	
	446	K-4	Ⅳ	頁　岩	10.6	4.2	1.4	74.0	
	447	K-5	Ⅴ	頁　岩	13.1	6.6	1.4	104.2	
	448	K-4	Ⅳ	頁　岩	11.1	5.5	1.3	103.3	
	449	L-5	Ⅴ	頁　岩	8.2	4.5	2.2	85.1	
	450	C-6	Ⅳ	頁　岩	8.2	4.9	2.0	76.1	
	451	K-3	Ⅴ	頁　岩	11.5	6.4	4.3	36.6	
	452	K-4	Ⅴ	頁　岩	7.9	4.1	0.7	32.6	
	453	K-5	Ⅴ	頁　岩	7.1	3.3	1.7	32.5	
	454	K-3	Ⅴ	硅質頁岩	6.5	4.5	2.0	58.9	
	455	J-4	Ⅴ	頁　岩	6.2	2.0	0.7	8.9	
	456	J-4	Ⅴ	頁　岩	2.3	1.6	1.5	1.6	

磨製石斧（第68図）

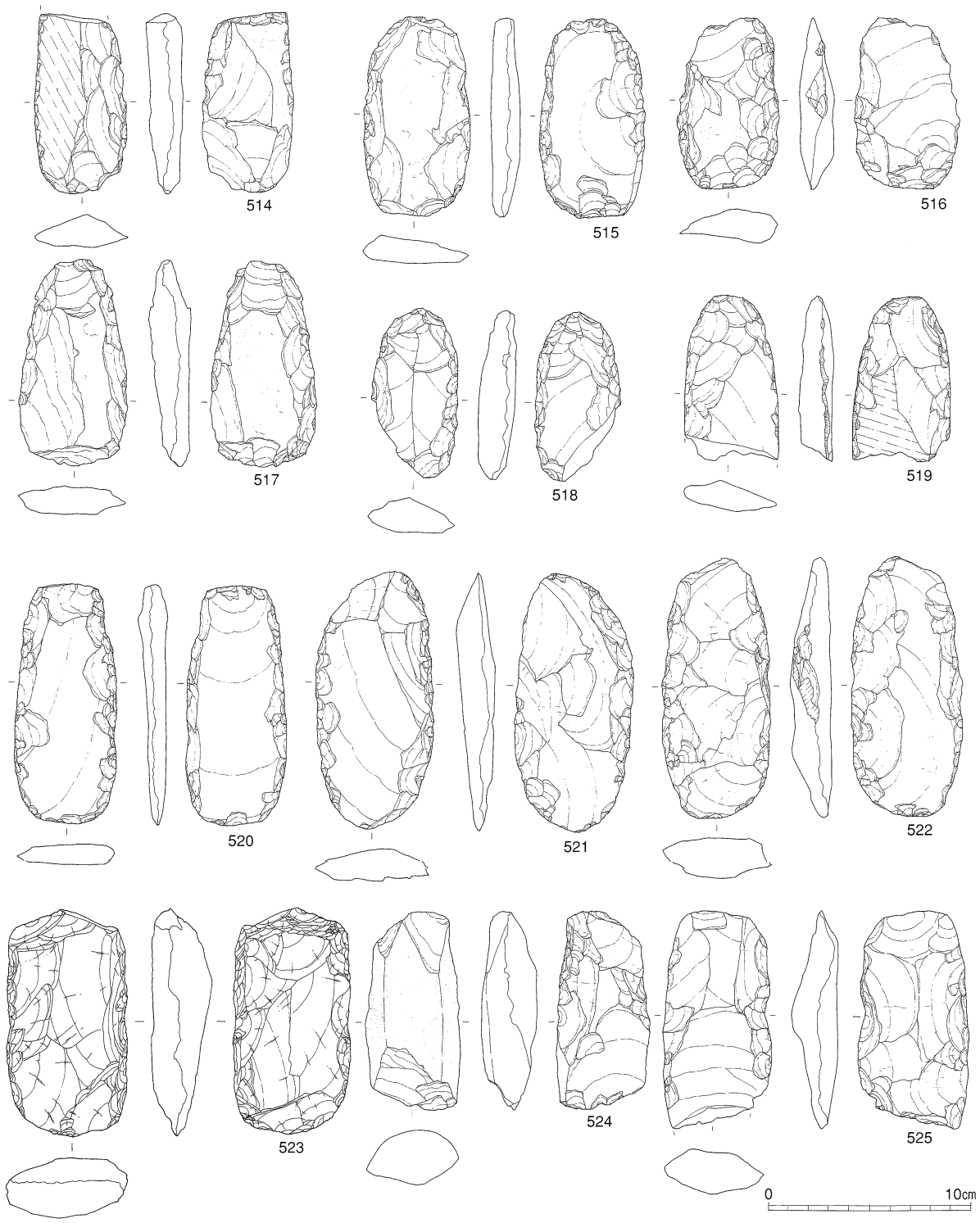
頁岩製が多く，一部は蛇紋岩製である。503は定角式石斧と思われ，両側縁及び頭部が丹念に研磨され，断面が隅丸方形を呈している。刃部形成箇所が欠損している。器面全体に擦痕が確認される。511は長軸方向に欠損し，512は短軸方向で大きく欠損し，損失部位は確認されていない。ともに胴部上半部の側縁の丸みを帯びた断面が，刃縁部にかけて鋭く尖ってくる蛤刃の刃縁であり，全体的に擦痕を有する。511が丁寧に研磨され，きれいな平坦面を有するのに対し，512は素材の凹凸面が大きく残される。513は平面観が丸ノミ状を呈し，基部側縁の断面は隅丸方形である。刃縁部の形状等は欠損のため定かでない。全体的に磨りが確認でき，特に胴部側縁部に他の擦痕とは深さや太さが異なり明瞭である。

打製石斧（第68～72図）

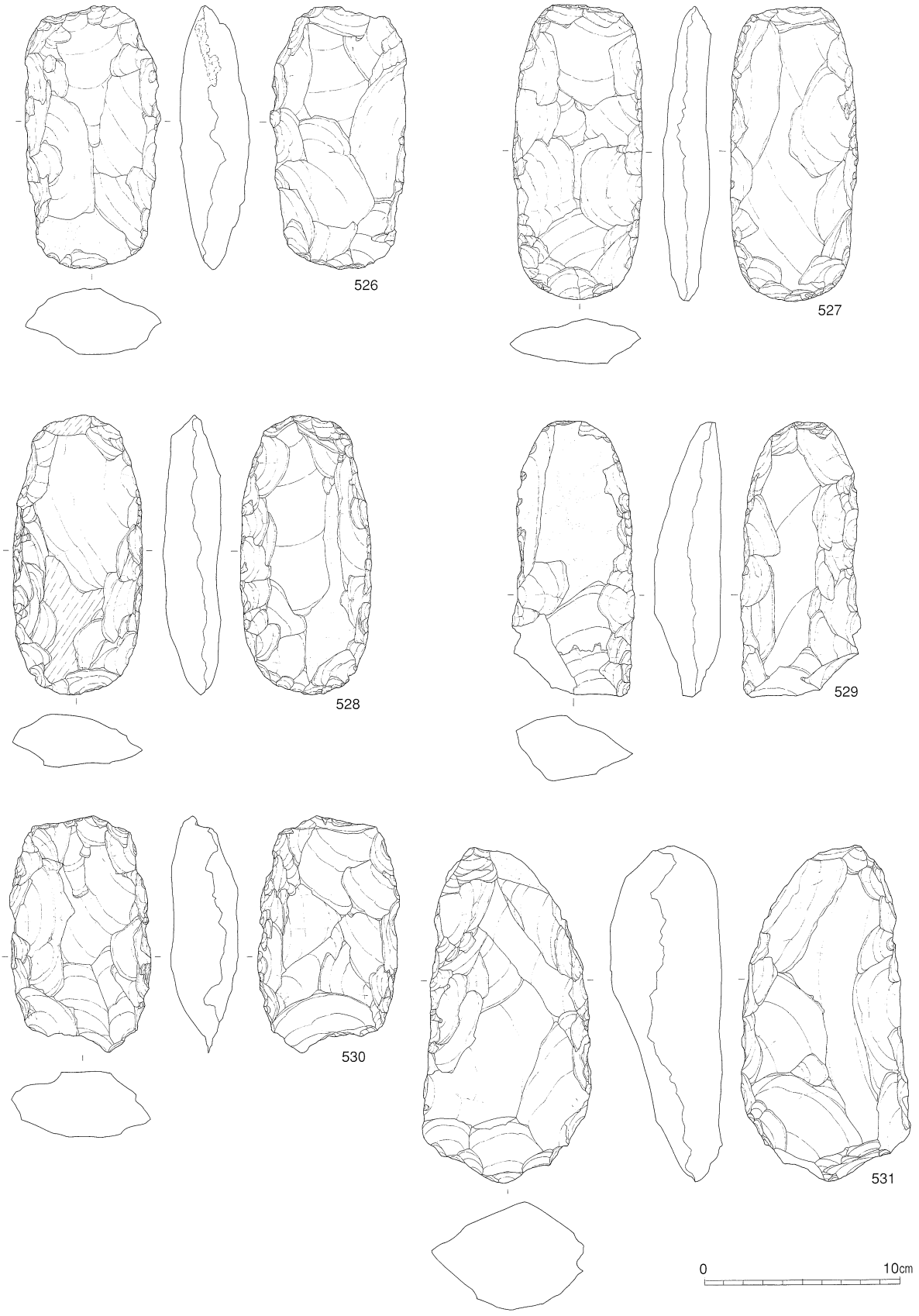
ほとんど頁岩製である。短冊形に類する資料がほとんどであり，500は分銅形，501は撥形に比定される資料と思われる。多くが長径10㎝～15㎝，短径が６㎝～７㎝，器厚５㎝程度の範疇に収まる。531・547は他より大きくかつ分厚いが，それらを除く資料は，分割あるいは粗割した薄手の剥片を素材にする打製石斧である。500は，下面の整形が粗いのに対して上面の整形が丁寧であり，刃縁部は研磨により鋭い刃が形成されている。胴部側縁の抉りには敲打による剥離面が明瞭に残され，２つの抉りを結ぶ上面中央部には磨りが確認できることから着柄痕の可能性が高い。全体的に，擦痕が確認できる。501は刃縁部が丁寧に研磨されるのに対して，胴部側縁部には大小の粗い剥離面が残されている。剥離面により整形した後，刃縁部に磨きを施したものと考えられる。上下両面上の稜線には擦痕が確認できる。502は器厚８㎜程度と極薄であり，特に刃縁部が鋭利に整形されている。下面の刃縁部周辺は，磨きにより丁寧に仕上げられている。504～510・514～523・526～532については，主要剥離面や自然面を大きく残しつつ部分的には磨きも見られる。いずれも側縁部を上・下両面側もしくは一部片面側からの剥離整形により刃部形成を施してある。524は片刃もしくは両刃の磨製石斧の欠損品を素材とし，上面の大部分や下面の一部に磨面が残存している。明瞭な刃部形成部位は確認できず，二次加工中途品の可能性も考えられる。525は側縁部の中央部付近において剥離による抉りが作出され着柄目的が想定されるが，自然風化による磨耗が激しく擦痕等は確認できない。530は刃縁部が丁寧に研磨されるのに対して，胴部側縁部には大小の粗い剥離面が残されている。剥離により整形した後，刃縁部に磨りを施したものと考えられ，上下両面上の稜線には擦痕が確認できる。533は側縁部に大小の剥離面が確認できることから，打製石斧が欠損した資料と考えられる。534は上端部に切断面を有する。側縁部を微細な剥離により丁寧に仕上げ，下端部は粗めの剥離で整形してある。側縁部や下面の一部には丁寧に研磨された部分が認められる。535は左側縁部の平坦面に敲打痕が確認できる。右側縁部には剥離調整が施されており，刃部としての使用も想定できる。536は上面に擦痕が残されることから，破損した磨製石斧の刃縁部の剥離部位を刃部として二次利用した可能性が考えられる。上面左側縁部には，擦痕を有する抉りと右側縁部には平坦面が作出されている。自然によるものか着柄を目的としたものかは定かでない。537～545は，刃縁部に使用によると思われる刃の潰れが確認できる。538は，長軸長が６㎝程度と本類資料としては極めて小さい資料である。546は下半部が欠損しているが，長軸方向に細長い器形である。残存する上端部の器厚が薄く刃部形成が確認できないことから，上端部は頭部と考えられ，下端部の刃縁部は欠損しているものと推定される。547は，長軸20㎝・短軸９㎝・器厚５㎝程度の大型の石斧である。548は上面左側縁部に剥離による擦痕を有する明瞭な抉りが作出されているが，右側縁部には抉りが確認できず，上下両面には明瞭な着柄の痕跡は伺えない。550は，横長剥片の上端部にわずかな剥離と磨りを施して頭部とし，下端部を大まかな剥離により刃部として仕上げたものである。551は，擦痕の認められる自然面を残すもので打製石斧の破損品と思われる。両側縁部に抉りの形成が確認できる。



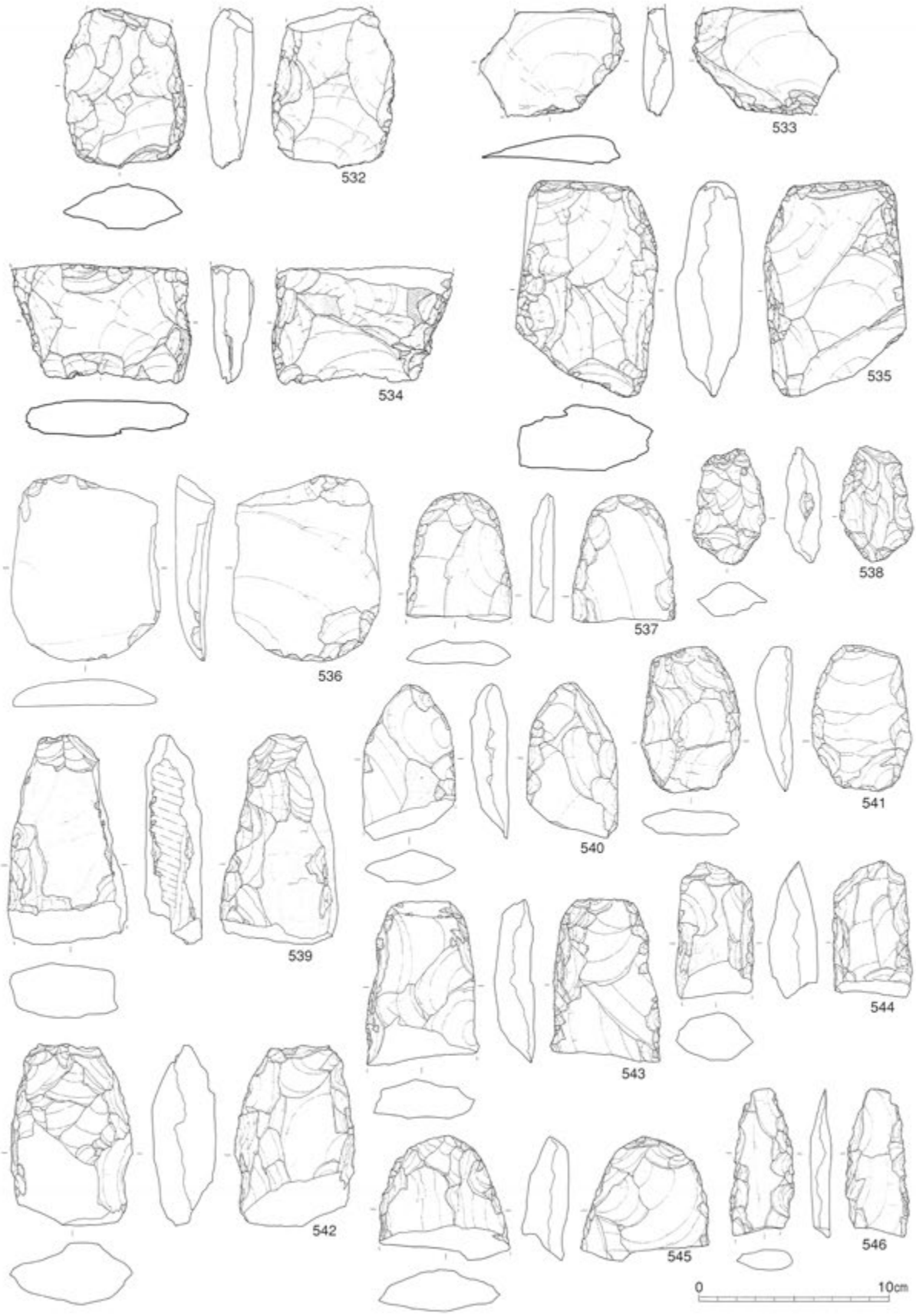
第68図　縄文時代早期出土石器13（石斧）



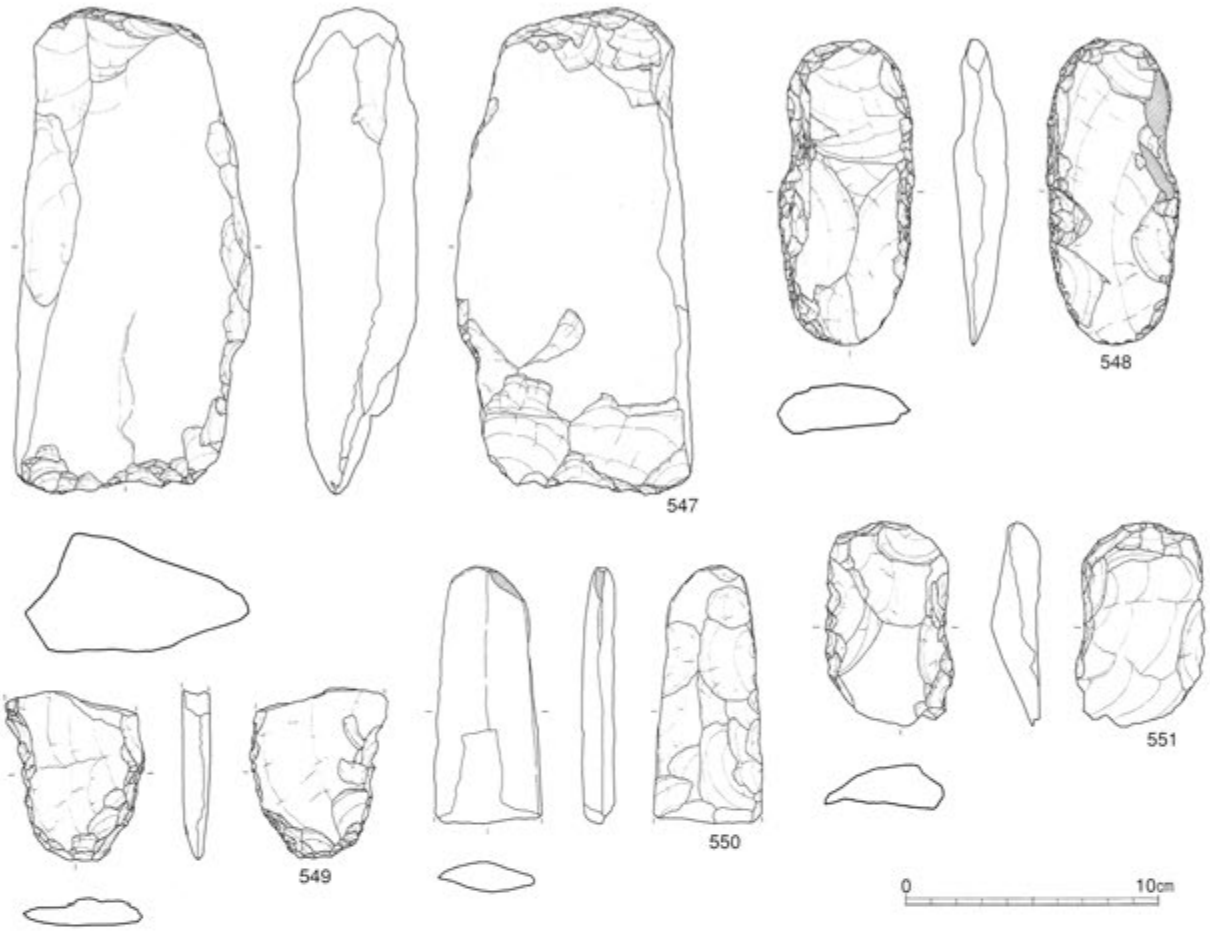
第69図　縄文時代早期出土石器14（石斧）



第70図　縄文時代早期出土石器15（石斧）



第71図　縄文時代早期出土石器16（石斧）



第72図　縄文時代早期出土石器17（石斧）

磨石・敲石・凹石(第73～81図)

磨石や敲石・凹石については，使用痕の形態により次のように分けた。

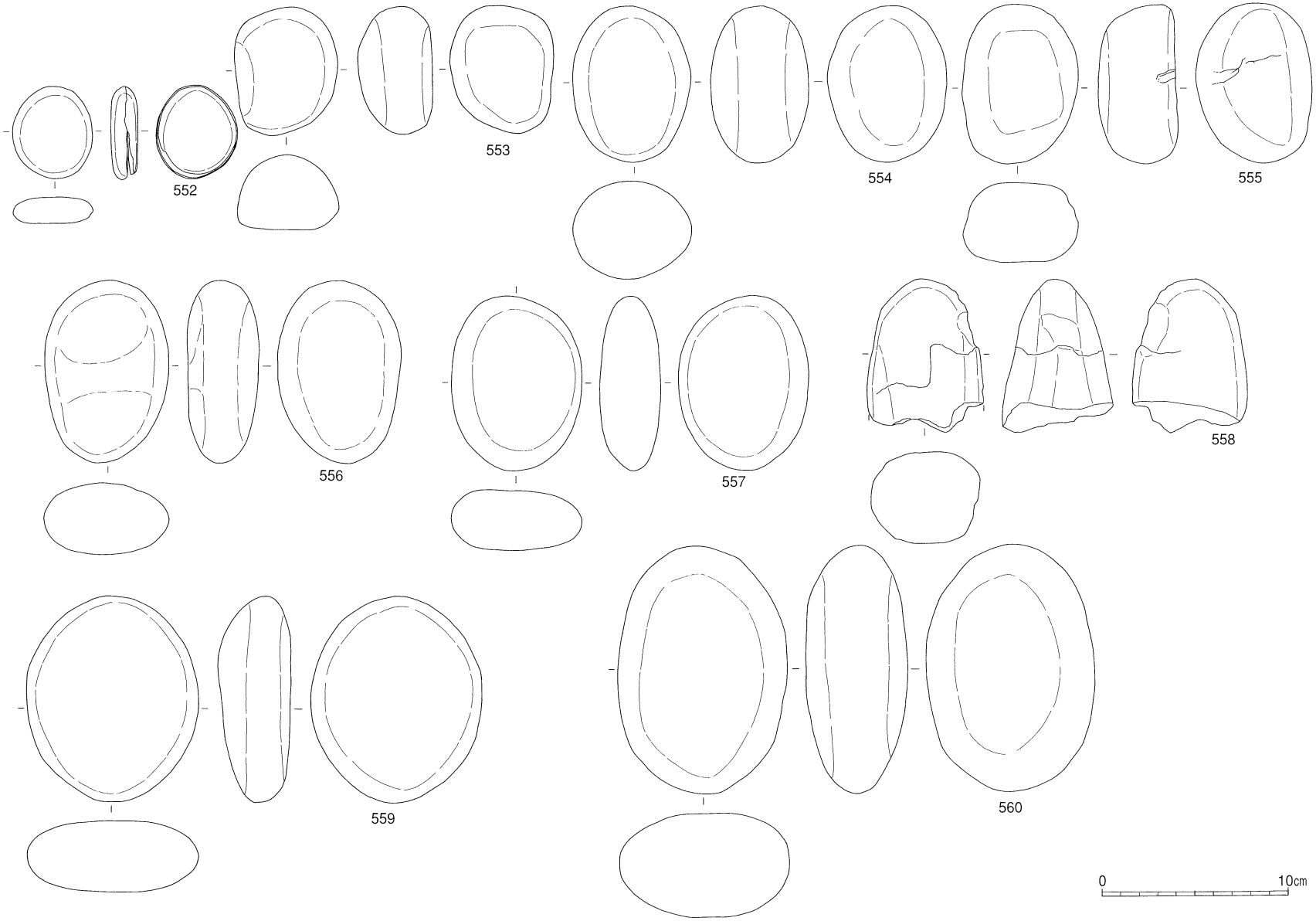
Ⅰ類（第73～81図）

552～563・565・570～573は，全面的もしくは部分的に磨面のみを有する。砂岩製がほとんどであり，頁岩製や安山岩製，花崗岩製が少数見られる。ほとんどの資料の上面観は円形や楕円形及びその類似形を呈しているが，568は長軸側面観が三角形状で，570は上面観が台形状である。553は，側縁部一か所に磨りによる凹みがあり，使用頻度の高さが伺える。570は自然の直線的な側縁部に明瞭な磨面を有し，平坦面より側縁部の磨耗度が高い。

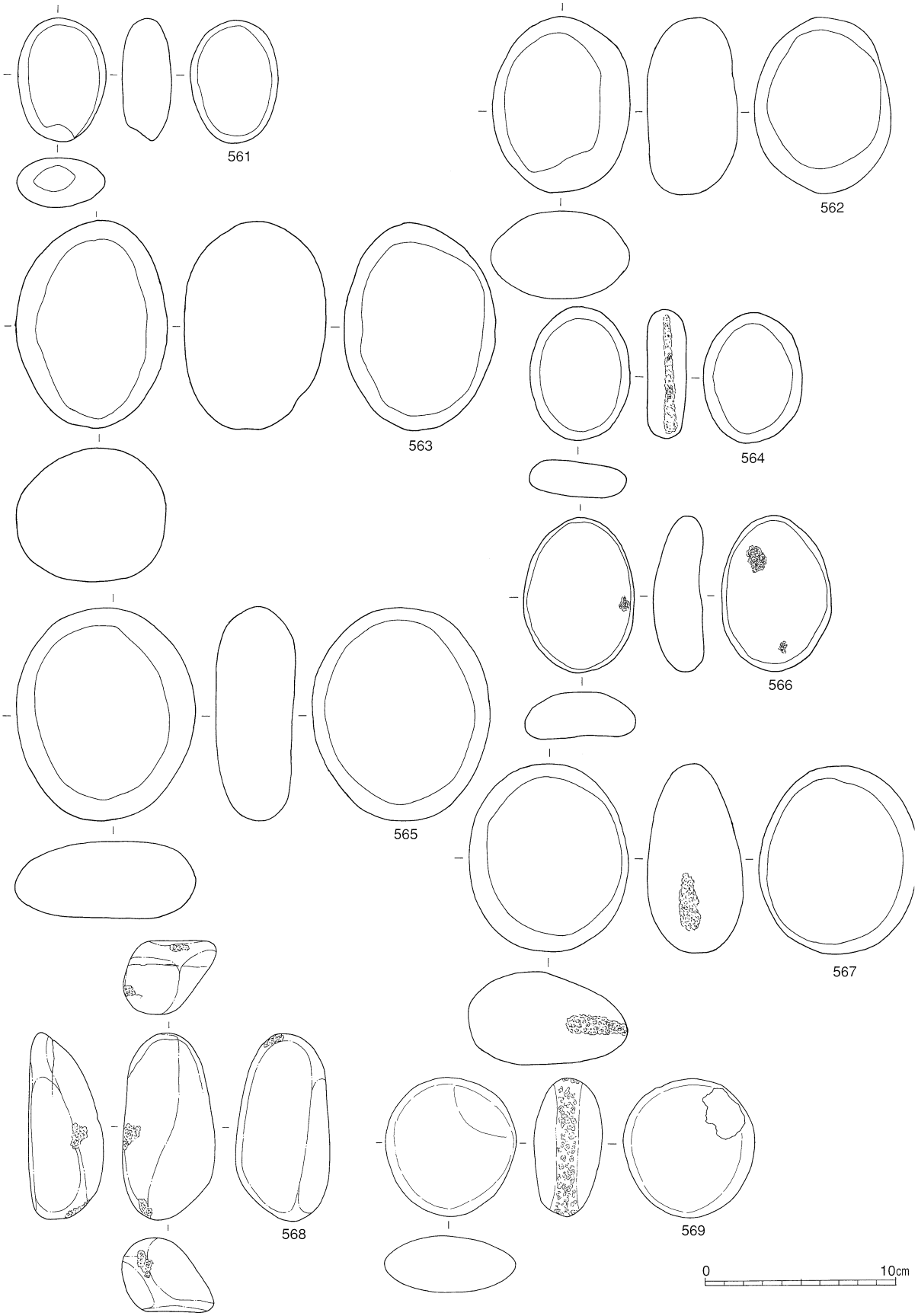
Ⅱ類（第74～81図）

564・566～614は，全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦面や側縁部に敲打痕が見られる。砂岩製が多く，ついで安山岩製や花崗岩製がある。ほとんどの資料の上面観は円形や楕円形，もしくはそれらに類する器形であるが，607が長方形状，609は三角形状，613～615は棒状を呈した上面観である。いずれの資料も，上下両面や側縁部に磨面があり，側縁部や一部平坦面に敲打痕が見られる。平坦面の中央付近に集中的な敲打による凹みを有するのが597・599・602・603・605～611・614である。特に605は幅５㎝程度，深さ５㎜程の顕著な凹みが見られる。

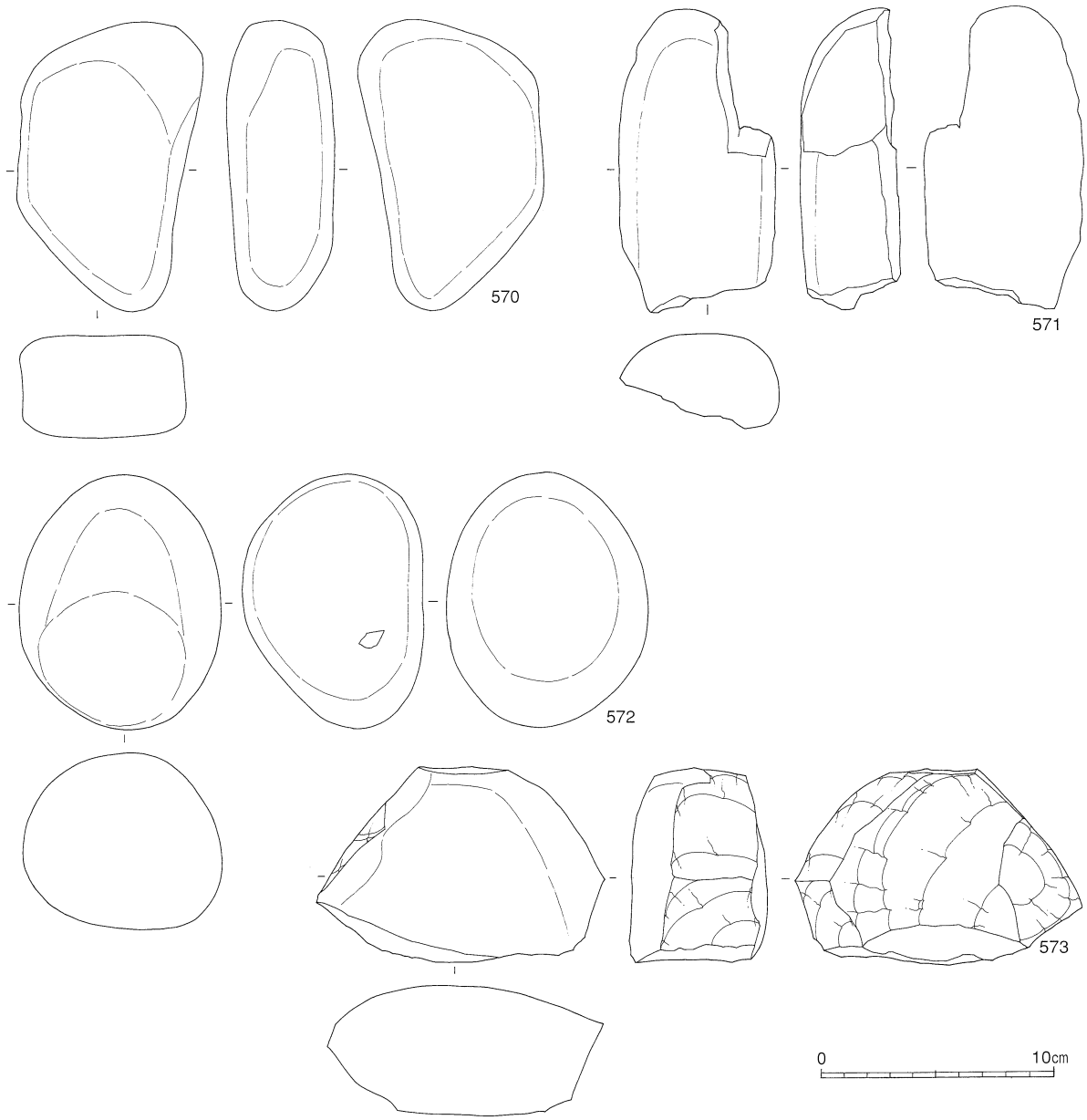
561～564・567・594・595・598～601は，撹乱で出土されたが，縄文時代早期相当として捉えた。



第73図　縄文時代早期出土石器18（磨石）



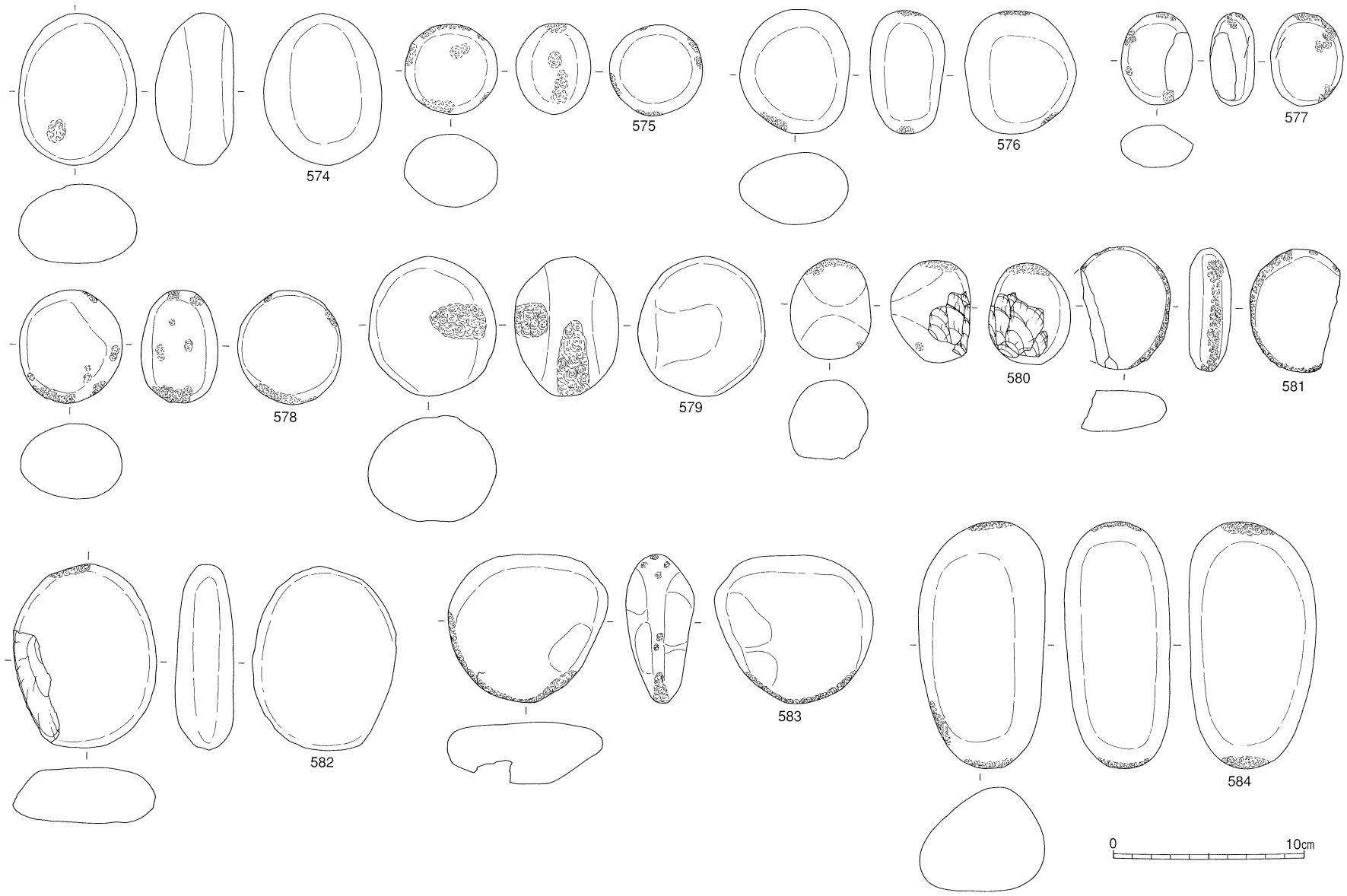
第74図　縄文時代早期出土石器19（磨石・敲石）



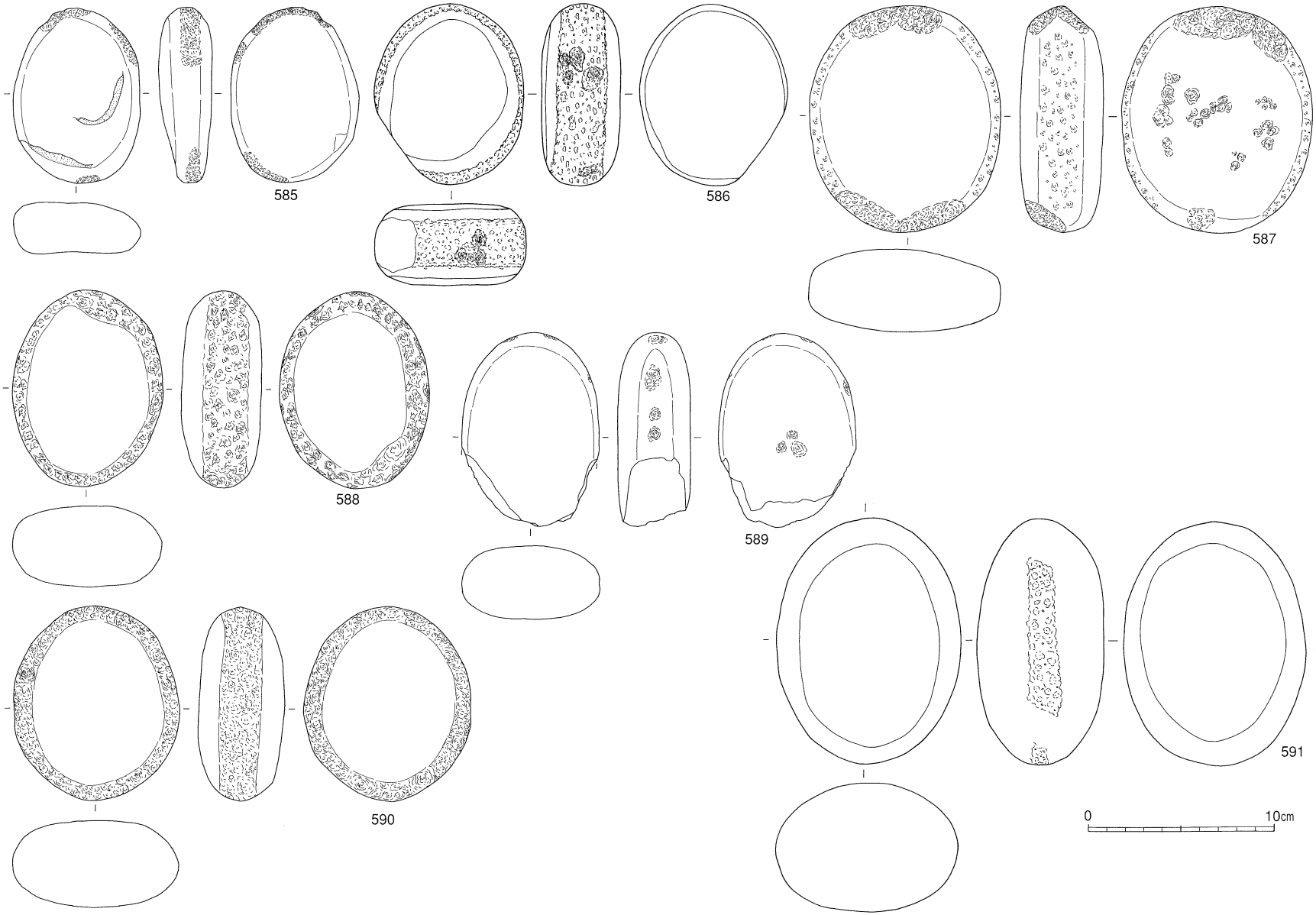
第75図　縄文時代早期出土石器20（磨石）

第23表　石斧整形剥片観察表

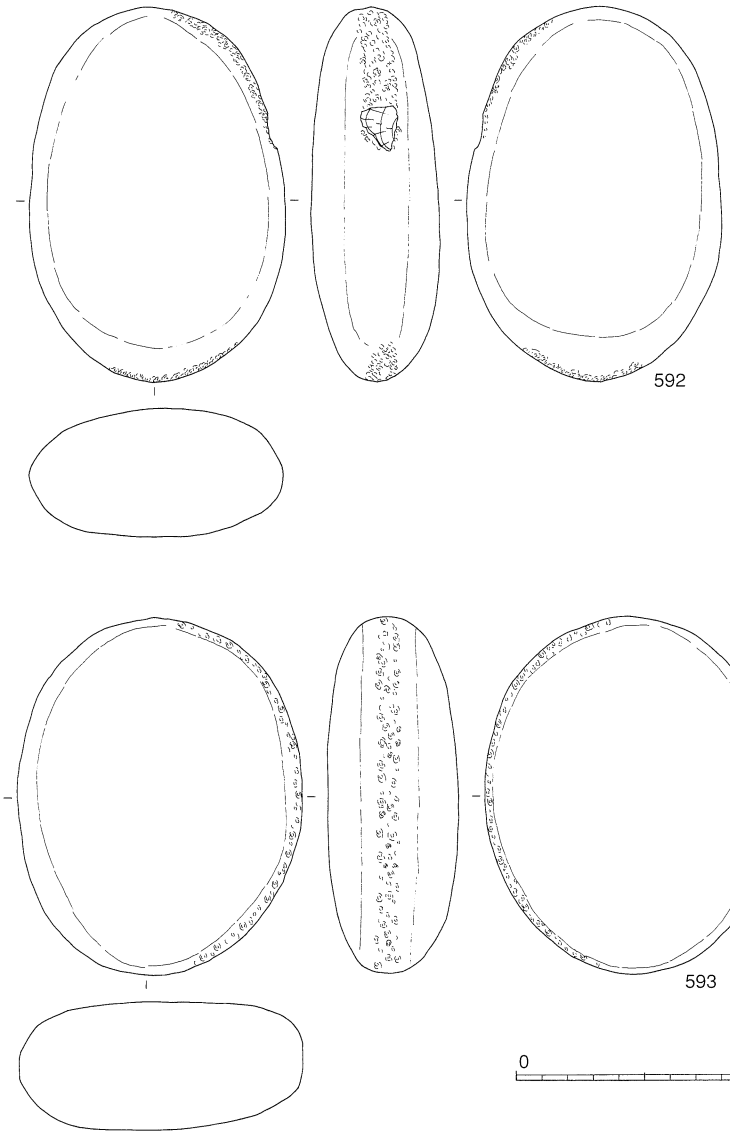
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第65図	457	D-6	Ⅳ	頁　岩	7.1	7.1	1.9	83.3	
	458	B-1	Ⅴ	頁　岩	6.1	4.9	0.6	24.8	TR
	459	K-5	Ⅴ	頁　岩	4.9	5.2	5.0	22.2	
	460	J-4	Ⅴ	頁　岩	8.2	5.2	1.3	49.9	
	461	B-1	Ⅴ	頁　岩	5.9	4.0	1.1	40.1	TR
	462	J-4	Ⅳ	頁　岩	4.0	2.0	0.6	4.6	
	463		Ⅲ	頁　岩	2.1	2.8	0.3	1.1	
	464	L-5	Ⅴ	頁　岩	5.3	11.8	1.1	101.8	
	465	C-1	Ⅴ	頁　岩	6.0	8.2	0.9	57.9	
	466		Ⅰ	頁　岩	3.6	8.9	1.5	37.4	
	467		Ⅰ	頁　岩	5.0	9.7	1.1	43.0	
	468		Ⅰ	頁　岩	2.3	5.8	0.9	9.0	
	469		Ⅰ	頁　岩	11.0	5.5	1.1	46.6	



第76図　縄文時代早期出土石器21（磨石・敲石）



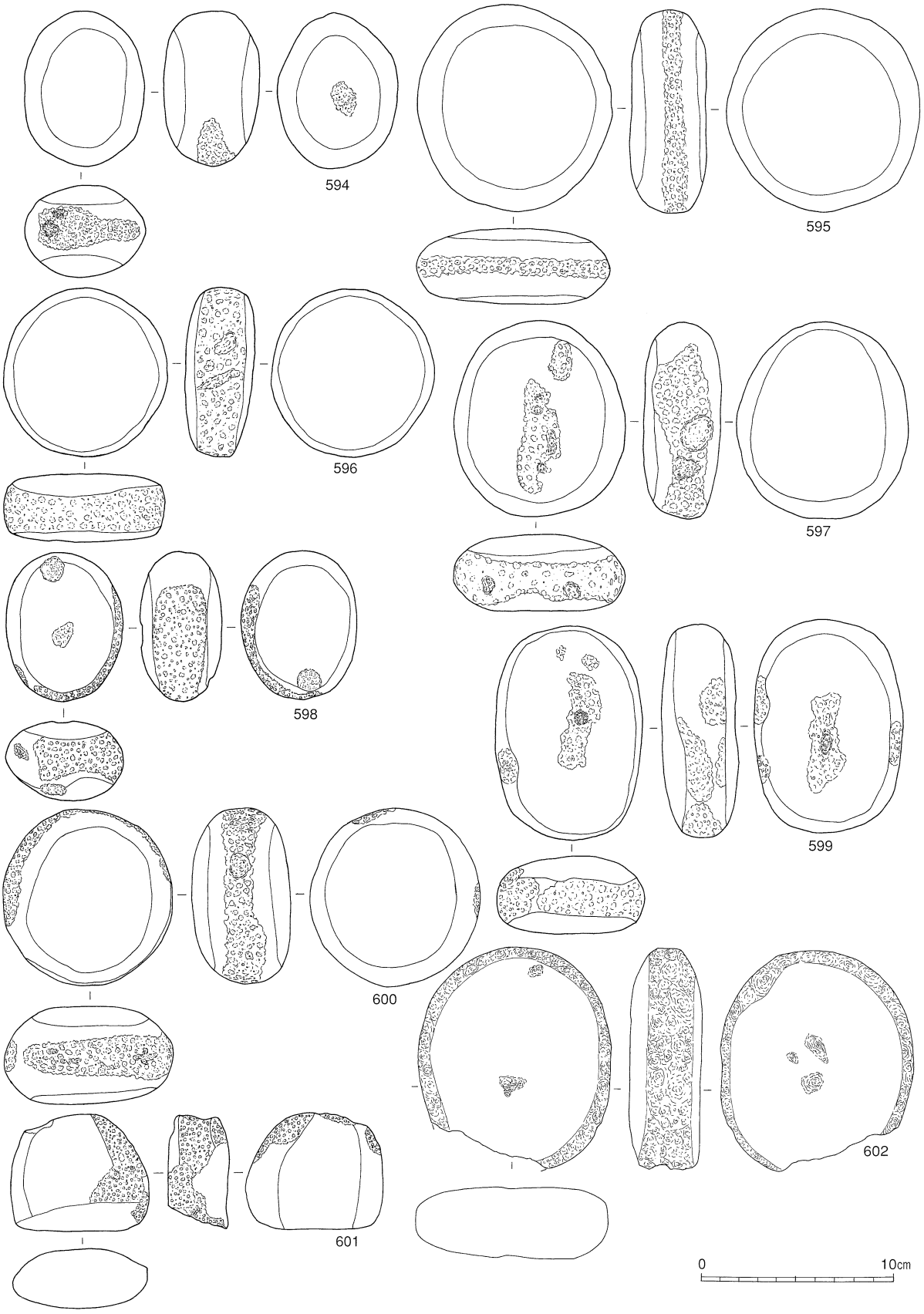
第77図　縄文時代早期出土石器22（磨石・敲石）



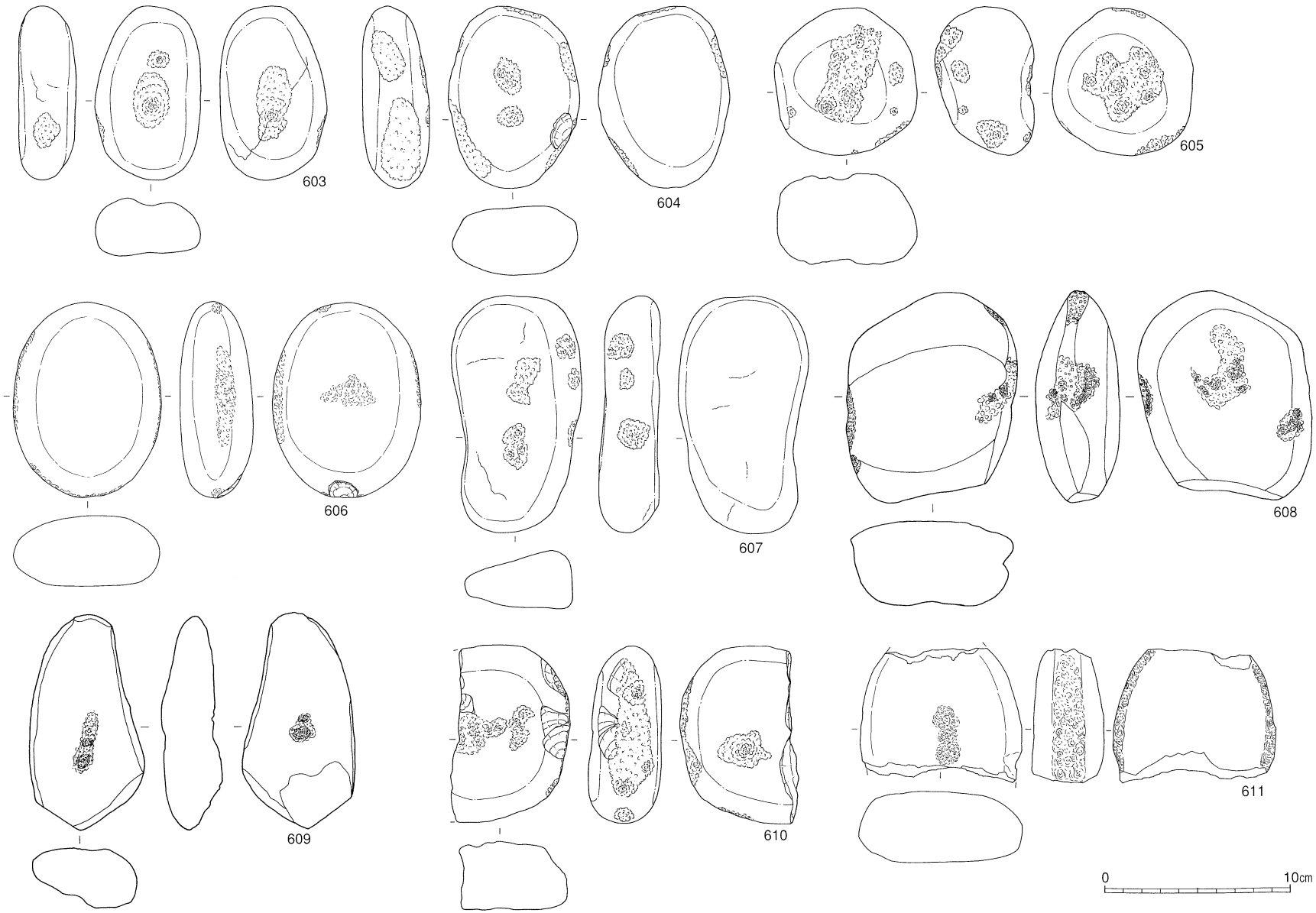
第78図　縄文時代早期出土石器23（磨石）

第24表　石斧整形剥片観察表

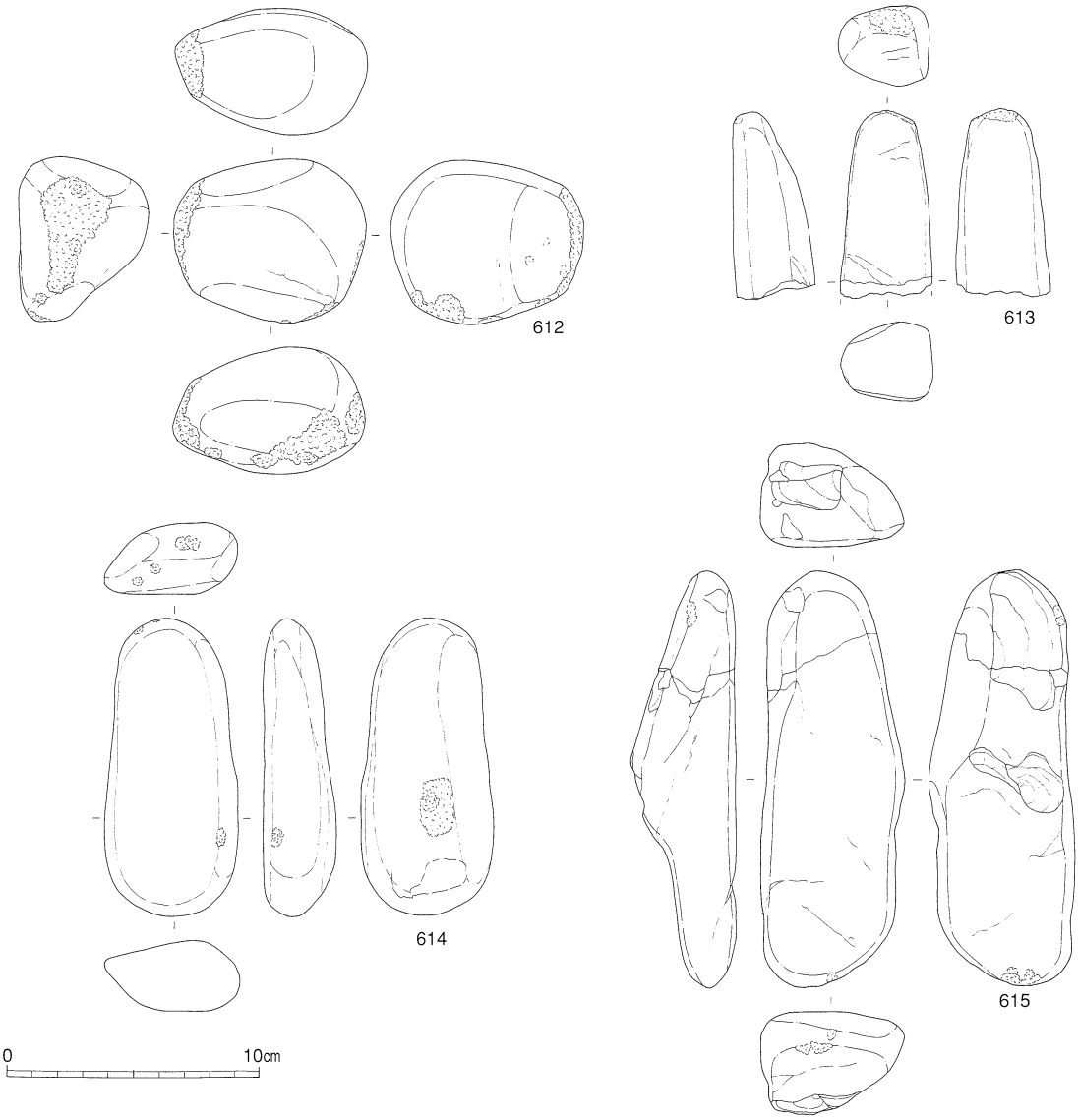
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第65図	470		Ⅰ	頁　岩	8.9	3.3	1.2	37.6	
	471	J-4	Ⅴ	頁　岩	6.8	4.4	0.9	29.5	
	472	K-4	Ⅴ	頁　岩	8.9	5.2	1.4	67.3	
	473	K-5	Ⅴ	頁　岩	3.4	5.3	0.6	11.4	
	474	K-4	Ⅴ	頁　岩	9.9	7.5	1.7	101.2	
	475	K-3	Ⅴ	頁　岩	2.9	5.0	0.8	11.1	
第66図	476	J-4	Ⅴ	頁　岩	9.9	5.2	1.1	50.0	
	477	J-4	Ⅴ	頁　岩	8.2	5.2	1.2	33.7	
	478	J-4	Ⅴ	頁　岩	7.6	7.0	1.7	69.5	
	479	J-4	Ⅴ	頁　岩	8.5	4.6	1.2	41.0	
	480	C-1	Ⅴ	頁　岩	5.6	3.7	1.1	27.1	
	481	K-4	Ⅴ	頁　岩	10.0	3.7	1.3	38.9	
	482	K-3	Ⅴ	頁　岩	7.0	4.4	8.5	23.6	
	483	C-5	Ⅳ	頁　岩	12.9	7.3	3.4	382.0	
	484		Ⅰ	頁　岩	9.8	5.7	1.0	60.0	
	485	K-3	Ⅴ	頁　岩	10.1	4.6	1.3	51.9	
	486	L-4	Ⅳ	頁　岩	3.5	4.9	0.8	12.64	
	487	K-3	Ⅳ	頁　岩	8.2	3.5	1.0	31.8	
	488	L-4	Ⅳ	頁　岩	8.9	5.1	1.0	45.4	
	489	K-3	Ⅳ	頁　岩	7.8	5.7	1.0	55.9	
	490	K-4	Ⅳ	頁　岩	9.4	5.1	1.4	73.7	



第79図　縄文時代早期出土石器24（磨石・敲石・凹石）



第80図　縄文時代早期出土石器25（磨石・敲石・凹石）



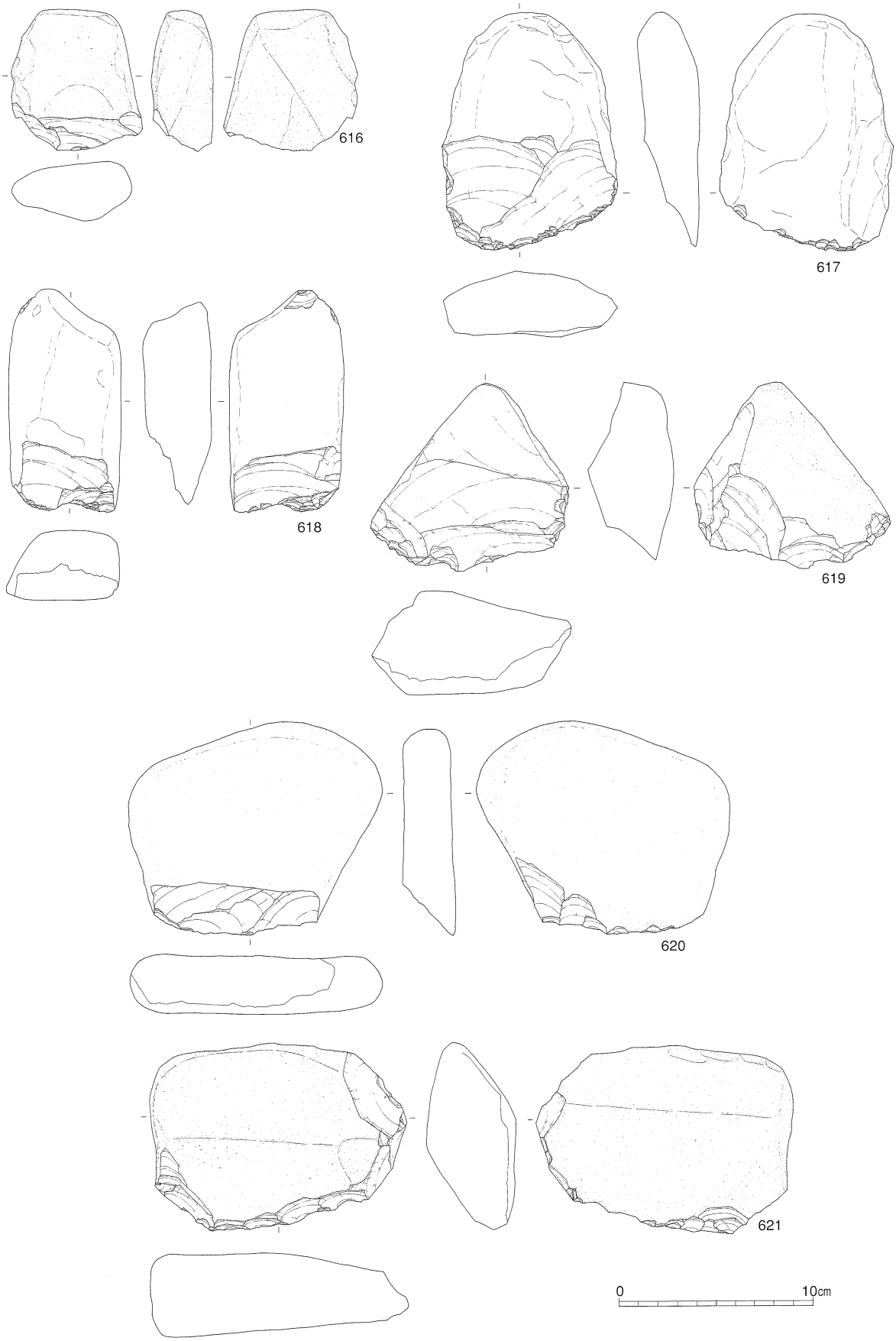
第81図　縄文時代早期出土石器26（磨石・敲石・凹石）

礫器（第82・83図）

いずれも自然面を多く残す礫を素材とするもので，616～618は，縦長で下面に粗い剥離が認められる。619は片面のみ自然面を残す三角形状である。620・621は横長である。620は下面に，621は下面及び側縁部に剥離が認められる。622～625は不正形な自然礫に大きな剥離を施し刃部とするものである。626は下面に剥離が認められる。

石皿（第84図・85図）

砂岩製が多く，ついで安山岩が多い。平坦面が使用のため磨滅し凹んだものが627・629・632であり，磨面はあるがほとんど凹みが見られないのが628・630・631・633～638である。欠損していない面に関しては，いずれの石皿にも磨面が見られる。628については，平坦面に敲打された痕跡が多数残されている。631と634，633と635は石材の種類や素材石の器厚，使用痕の状態からそれぞれ同一個体だと考えられる。また，631・634は被熱により赤く変色し，631は煤も付着している。

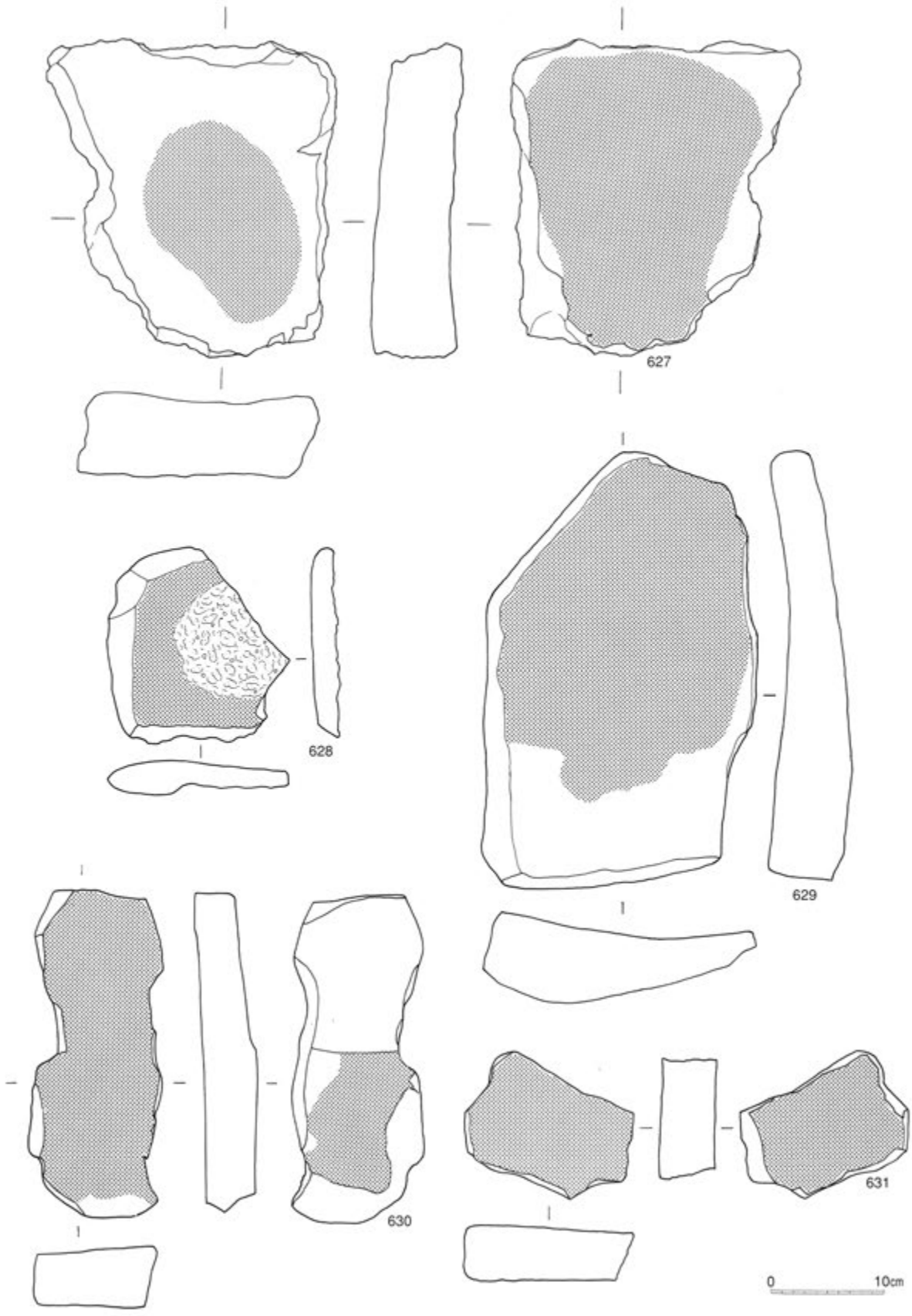


第82図　縄文時代早期出土石器27（礫器）

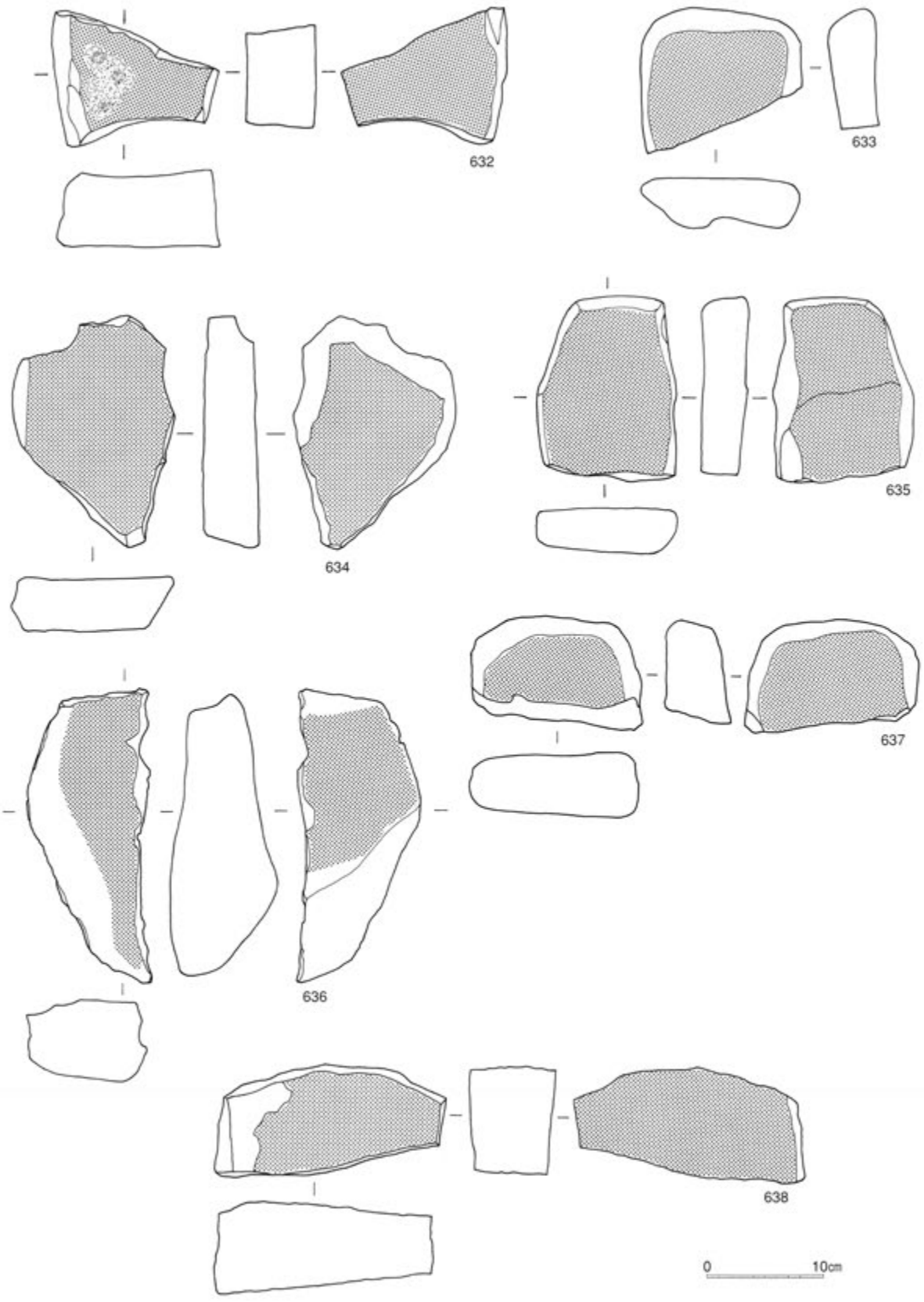
第83図　縄文時代早期出土石器28（礫器）

第25表　石錐・石核・スクレイパー観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第67図	491	B-6	Ⅳ	黒曜石	2.9	1.8	0.8	4.5	石錐
	492	C-1	Ⅳ	頁　岩	2.2	2.8	7.5	6.7	石核
	493	J-4	Ⅴ	頁　岩	3.7	2.1	0.9	9.6	スクレイパー
	494	C-1	Ⅳ	頁　岩	3.8	4.3	1.4	23.4	スクレイパー
	495	J-4	Ⅴ	ホルンフェルス	6.5	4.9	1.3	56.4	石核
	496	C-1	Ⅳ	チャート	1.5	2.5	1.0	6.0	スクレイパー
	497		カクラン	蛋白石	3.2	3.3	1.0	11.0	スクレイパー
	498		カクラン	硅質頁岩	3.6	4.5	0.4	6.8	スクレイパー
	499		カクラン	ホルンフェルス	4.0	9.2	1.3	47.2	スクレイパー



第84図　縄文時代早期出土石器29（石皿）



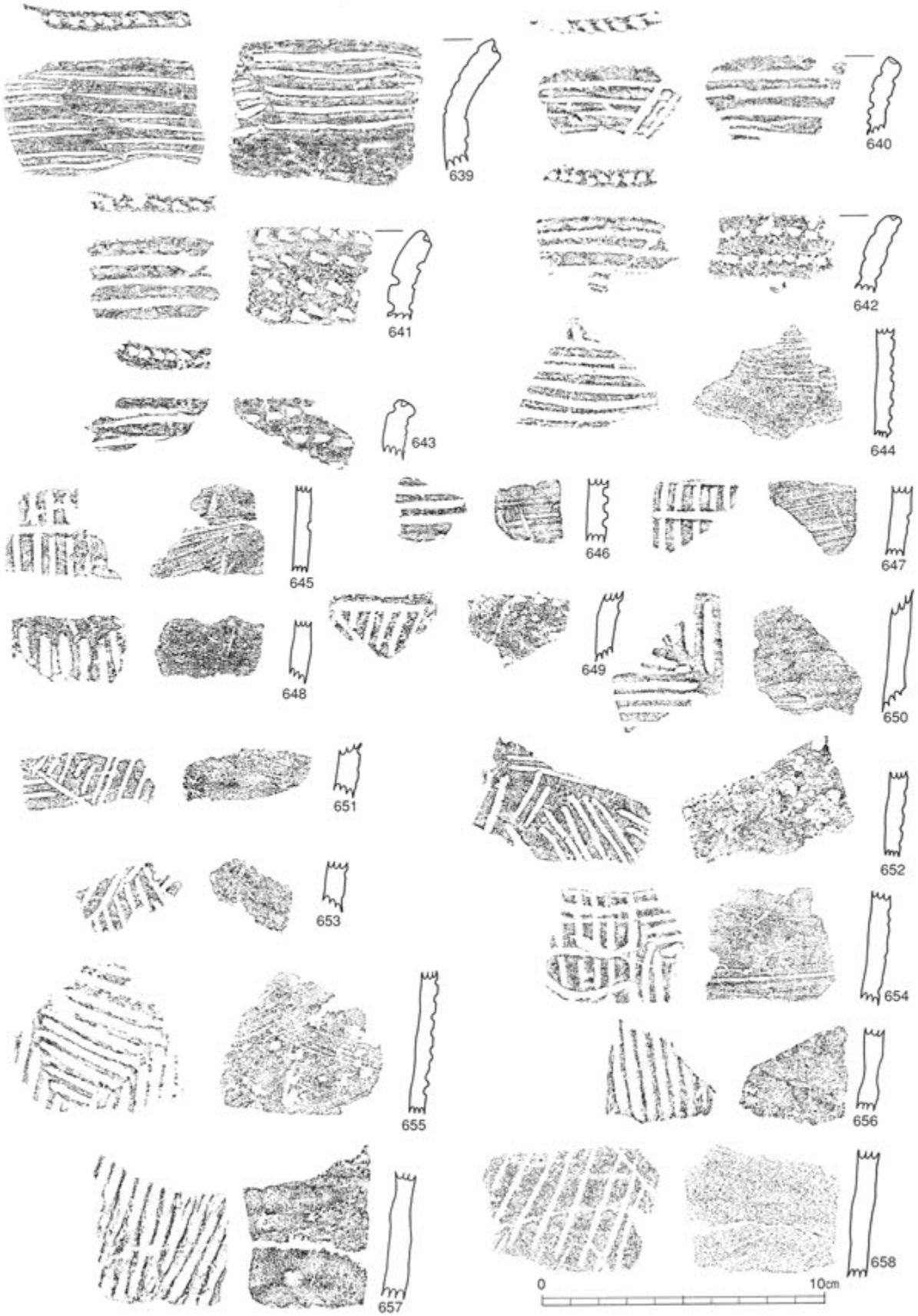
第85図　縄文時代早期出土石器30（石皿）

第27表　石斧観察表

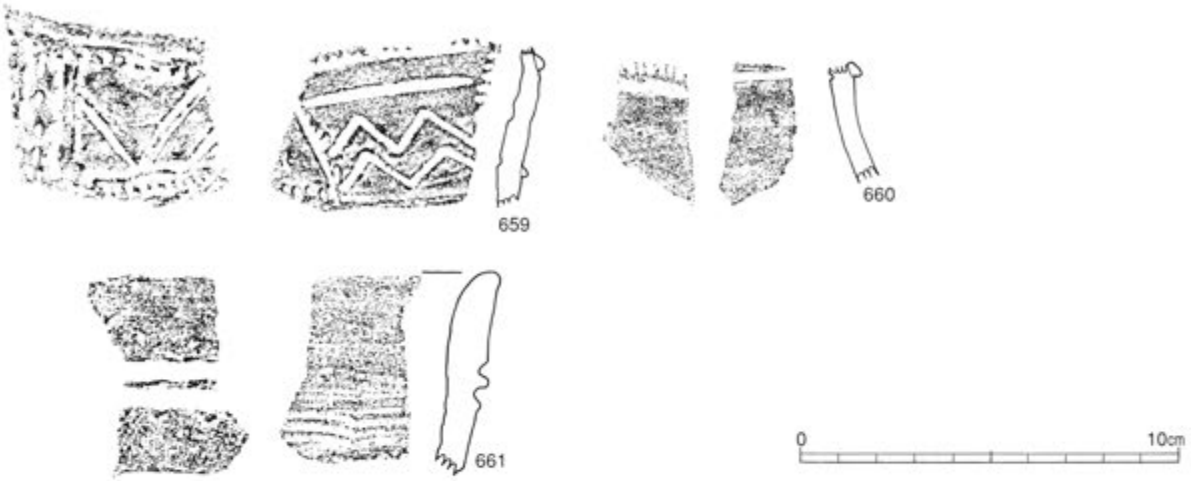
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第68図	500	K-4	Ⅳ	頁　岩	10.7	5.7	2.3	156.3	
	501	C-3	Ⅴ	頁　岩	6.8	5.1	1.4	51.2	
	502	J-4	Ⅴ	頁　岩	8.0	4.3	0.8	35.8	
	503	D-8	Ⅳ	蛇紋岩	6.8	3.8	1.7	44.5	
	504	J-4	Ⅴ	頁　岩	11.9	5.6	1.5	147.5	
	505	J-4	Ⅴ	頁　岩	10.3	6.8	3.1	281.3	
	506	C-6	Ⅳ	頁　岩	13.5	6.4	3.2	355.2	
	507	J-4	Ⅳ	頁　岩	12.8	5.5	1.5	123.4	
	508	K-3	Ⅳ	頁　岩	13.5	5.8	2.2	214.5	
	509	J-4	Ⅴ	頁　岩	14.8	6.3	2.4	262.2	
	510	K-5	Ⅴ	頁　岩	12.3	6.8	1.7	252.6	
	511		Ⅰ	頁　岩	11.1	2.3	2.5	83.7	磨製
	512	K-4	Ⅳ	頁　岩	6.8	6.9	2.2	130.9	
	513		Ⅰ	頁　岩	9.9	3.0	1.5	60.4	磨製
第69図	514	K-3	Ⅳ	頁　岩	9.2	4.6	1.8	85.7	
	515	K-3	Ⅳ	頁　岩	10.2	5.3	1.3	104.4	
	516	K-4	Ⅴ	頁　岩	8.7	5.1	1.6	88.9	
	517	K-4	Ⅴ	頁　岩	10.5	5.3	1.5	122.1	
	518	K-4	Ⅳ	頁　岩	8.7	4.4	1.9	73.1	
	519	J-4	Ⅴ	頁　岩	8.6	4.8	1.7	75.5	
	520	J-4	Ⅴ	頁　岩	12.3	5.1	1.5	102.3	
	521	K-3	Ⅳ	頁　岩	13.1	5.9	1.9	145.8	
	522	K-4	Ⅴ	頁　岩	13.2	5.6	2.1	185.4	
	523	3T	Ⅴ	頁　岩	11.6	6.0	3.1	252.0	
	524	K-3	Ⅴ	頁　岩	10.2	4.7	2.7	162.5	
	525	K-5	Ⅴ	頁　岩	11.0	5.5	2.3	139.4	
第70図	526	J-4	Ⅴ	頁　岩	13.8	6.9	3.6	378.0	
	527	K-4	Ⅴ	頁　岩	15.4	5.6	2.3	295.8	
	528	K-5	Ⅴ	頁　岩	14.5	6.6	2.8	342.0	
	529	K-4	Ⅴ	頁　岩	14.2	6.3	3.5	330.6	
	530	K-4	Ⅳ	頁　岩	12.2	7.3	3.4	345.0	
	531	K-3	Ⅴ	頁　岩	17.3	8.6	5.5	900.0	
第71図	532	K-5	Ⅳ	頁　岩	8.7	6.5	2.6	164.0	
	533	3T	Ⅳ	頁　岩	5.8	7.7	1.7	69.1	
	534	K-4	Ⅴ	頁　岩	6.5	9.5	2.2	168.0	
	535	B-5	Ⅳ	頁　岩	11.7	7.6	3.6	400.0	
	536	K-3	Ⅴ	砂　岩	10.2	7.8	1.4	219.4	
	537	K-3	Ⅳ	頁　岩	6.7	5.5	1.3	63.3	
	538	K-3	Ⅴ	頁　岩	6.2	3.7	1.3	48.2	
	539	K-5	Ⅴ	頁　岩	11.4	6.2	3.0	289.3	
	540	J-5	Ⅴ	頁　岩	8.0	4.8	1.7	82.8	
	541	K-4	Ⅳ	頁　岩	7.8	5.2	1.3	89.2	
	542	K-3	Ⅳ	頁　岩	9.9	6.4	3.4	245.0	
	543	K-4	Ⅴ	頁　岩	8.6	5.6	2.1	134.0	
	544	C-1	Ⅴ	頁　岩	7.3	4.1	2.6	92.8	
	545	3T	Ⅴ	頁　岩	6.2	6.8	2.2	107.7	100（3T）
	546	J-3	Ⅳ	頁　岩	7.5	3.3	1.1	34.2	
第72図	547		カクラン	頁　岩	19.6	9.4	4.9	1045.0	
	548		カクラン	頁　岩	12.4	5.4	2.2	141.2	
	549		カクラン	頁　岩	6.8	5.4	1.1	49.2	
	550		カクラン	頁　岩	10.3	4.3	1.4	75.4	
	551		カクラン	頁　岩	8.2	5.2	1.8	86.8	

第28表　磨石観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
第73図	552	J-4	Ⅴ	砂　岩	4.9	4.4	1.5	40.0	
	553	K-4	Ⅴ	砂　岩	6.7	5.6	4.0	225.0	
	554	K-4	Ⅴ	砂　岩	8.3	6.4	5.3	400.0	
	555	K-4	Ⅴ	砂　岩	8.4	6.2	4.3	310.0	
	556	K-4	Ⅴ	砂　岩	9.7	6.7	3.8	382.0	
	557	B-2	Ⅴ	頁　岩	9.3	7.0	3.2	315.0	
	558	K-4	Ⅴ	安山岩	7.9	6.3	4.8	355.0	
	559	K-4	Ⅴ	砂　岩	11.1	9.2	3.7	670.0	
	560	C-1		安山岩	13.3	9.1	5.9	1040.0	


639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
0
10cm

第86図　Ⅸ類土器



第87図　X類・XI類土器

3　縄文時代前・中・後期の調査

（1）遺構

遺構は，検出されなかった。

（2）遺物（第86～89図）

遺物は，土器，石鏃の石器が出土している。

土器（第86・87図）

Ⅸ類土器（第86図）

639～643は，口縁部資料である。639は口縁部が大きく外反し，640～643は外反が小さい。639～643には，口唇部に棒状工具による1条の刺突列点文が施文されている。639～643は口縁部に棒状または篦状工具による横位の沈線を4条から5条施している。639及び640は口縁部内面において，外面と同様に4条から5条ほどの横位の沈線を施し，641～643については口縁部内面に篦状工具による列点状の刺突を横方向に施文してある。

内面調整は，いずれもケズリ後ナデである。644～658は胴部の破片資料であるが，篦状工具による横位や縦位，斜位の直線的な沈線を中心に一部曲線を組み合わせて羽状文や縦列横線文，複合文などを構成している。器壁は薄く，ケズリ後丁寧にナデ消しが施されている。胎土の状態は，礫が殆ど含まれず，滑石が混入している。

X類土器（第87図）

659・660は口唇部を欠損しているが，残存する文様形態から口縁部から頸部に至る資料と推定される。

659は，粘土紐を貼付することによって矩形の文様帯の枠組みを構成し，棒状（篦状）工具による連点や沈線で幾何学的な文様を形成している。内面も外面と同様な施文法により，連点文や鋸歯文等を施してある。660には，連点による刻み状の跡を残す粘土紐が貼付してある。ともに，内面をケズリ後ナデ調整し，仕上がりが丁寧で器壁は大変薄い。胎土は，砂粒や礫が殆ど含まれず緻密である。

XⅠ類土器（第87図）

661が本類に該当する。直行ないし緩やかに外反する口縁部の資料と思われる。

口唇部の断面観は，外面側は直行し内面側は弧を描きながら口唇部外端部にいたる半月円弧状である。篦状工具による太目の横位の沈線が2条平行に施されている。

内外面ともに丁寧にケズリ後ナデ調整を施しているが，口縁部内面下部には貝殻条痕が確認できる。

石器（第88・89図）

石器は，Ⅱ・Ⅲ層内において，石鏃4点，石槍3点が出土している。

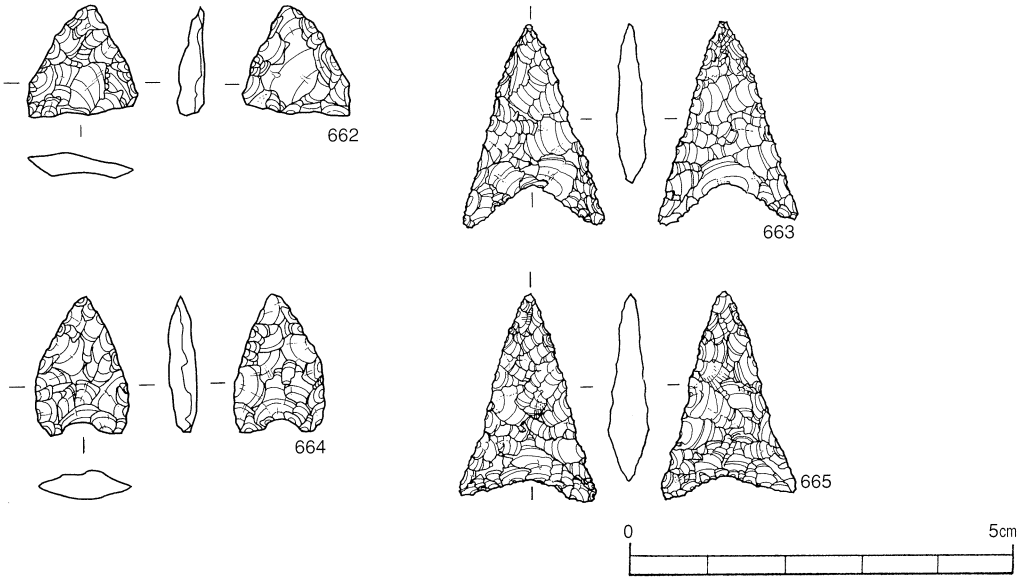
石鏃（第88図）

662は，形状がほぼ正三角形状を呈し，基部は平坦でありⅠ類に属する。663・665は縦長の三角形状で，浅い抉りが施され，Ⅴ類に属する。664はほぼ5角形状を呈し，浅い抉りが施され，Ⅸ類に属する。

石槍（第89図）

666は頁岩製で縦長剥片を使用し，両側縁部を両面側から細かく剥離調整し形を整えてある。また，使用痕を有している。

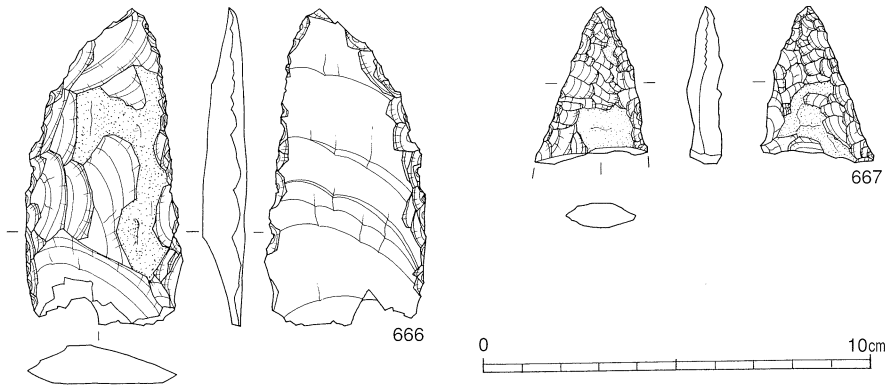
667は頁岩製であり，両側縁を両面側からの細かな剥離により丁寧に調整加工してある。上面観がきれいな三角形状を呈し，基部が欠損している。



第88図　Ⅱ層・Ⅲ層出土石鏃

第29表　磨石・敲石観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第74図	561		カクラン	砂岩	6.5	4.5	2.5	100.0	
	562		カクラン	砂岩	9.3	11.2	4.7	480.0	
	563		カクラン	砂岩	11.1	7.9	7.1	842.0	
	564		カクラン	砂岩	7.1	5.1	1.9	106.0	
	565		カクラン	花崗岩	11.4	9.9	4.1	635.0	
	566			安山岩	8.2	5.8	2.4	165.0	
	567		カクラン	砂岩	10.0	8.3	5.0	528.0	
	568	C-7	Ⅳ	砂岩	10.0	4.8	4.0	220.0	敲石
	569	K-4	Ⅴ	砂岩	7.5	6.9	3.1	260.0	
第75図	570	C-6	Ⅳ	砂岩	12.8	7.6	4.6	730.0	
	571	K-4	Ⅴ	安山岩	13.1	6.7	4.1	500.0	
	572		Ⅰ	砂岩	11.3	8.6	8.0	995.0	表採
	573	J-4	Ⅴ	砂岩	8.6	12.0	5.7	850.0	
第76図	574	K-4	Ⅴ	砂岩	7.9	6.2	4.1	335.0	
	575	J-3	Ⅳ	花崗岩	4.7	4.9	3.9	120.0	
	576	K-3	Ⅳ	砂岩	6.4	5.7	3.8	200.0	
	577	J-5	Ⅴ	砂岩	4.8	3.8	2.2	50.0	
	578	J-4	Ⅴ	安山岩	5.9	5.4	3.9	175.0	
	579	K-4	Ⅳ	安山岩	7.2	6.7	5.5	340.0	
	580	J-4	Ⅴ	安山岩	5.2	4.2	4.2	125.0	
	581	K-4	Ⅴ	砂岩	6.3	4.6	2.1	83.0	
	582	3T	Ⅳ	安山岩	9.6	7.5	2.9	320.0	
	583	J-5	Ⅴ	砂岩	7.7	8.3	3.2	240.0	
	584	L-4	Ⅳ	砂岩	12.8	6.6	5.4	675.0	
第77図	585	K-4	Ⅴ	砂岩	9.3	6.8	2.8	250.0	
	586	B-5	Ⅳ	砂岩	9.4	8.1	4.2	485.0	
	587	B-6	Ⅴ	砂岩	11.9	10.3	4.4	862.0	
	588	3T	Ⅳ	安山岩	10.5	8.1	4.3	548.0	
	589	K-3	Ⅳ	安山岩	10.3	7.4	3.9	460.0	
	590	J-4	Ⅳ	花崗岩	10.5	8.9	4.5	605.0	
	591			砂岩	12.8	9.8	6.7	1155.0	
第78図	592	K-3	Ⅴ	花崗岩	15.1	10.0	5.2	1090.0	
	593	J-4	Ⅴ	安山岩	14.4	11.2	5.2	1330.0	



第89図　Ⅲ層出土石器

第30表　磨石・敲石・凹石観察表

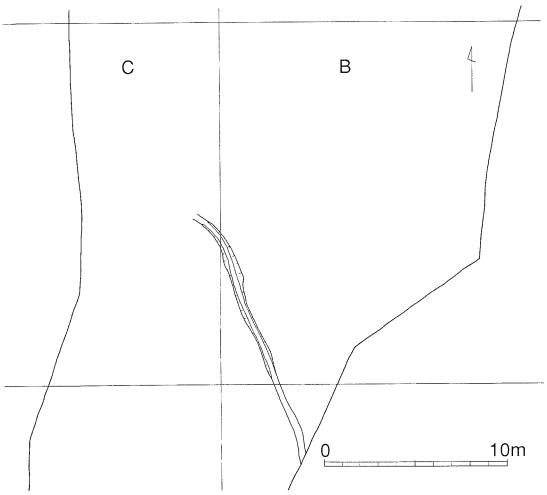
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第79図	594		カクラン	安山岩	8.3	6.2	5.1	365.0	
	595		カクラン	安山岩	11.0	10.1	4.0	690.0	
	596		Ⅰ	安山岩	9.1	8.5	3.1	425.0	
	597		Ⅳ	花崗岩	10.5	8.9	4.2	575.0	
	598		カクラン	砂岩	7.9	6.1	4.3	280.0	
	599		カクラン	砂岩	11.4	7.7	4.1	560.0	
	600		カクラン	安山岩	9.5	8.8	5.3	670.0	
	601		カクラン	安山岩	6.3	7.1	3.2	225.0	凹石
	602		Ⅴ	安山岩	11.7	10.0	3.9	825.0	
第80図	603	3T	Ⅴ	砂岩	9.3	5.7	3.1	240.0	凹石
	604	J-4	Ⅴ	安山岩	9.8	7.1	3.6	365.0	
	605	C-6	Ⅳ	安山岩	7.8	7.5	4.9	430.0	凹石
	606	C-6	Ⅳ	安山岩	10.4	8.0	3.9	475.0	
	607	K-5	Ⅴ	砂岩	12.7	6.9	3.1	362.0	凹石
	608		Ⅰ	砂岩	10.4	9.0	4.4	595.0	凹石
	609		Ⅰ	砂岩	11.3	6.1	3.1	315.0	凹石
	610	L-3	Ⅳ	安山岩	9.4	6.0	3.6	340.0	凹石
	611	J-3	Ⅳ	安山岩	6.8	8.7	3.8	350.0	
第81図	612	J-4	Ⅴ	砂岩	6.7	7.8	5.2	325.0	
	613	L-4	Ⅴ	砂岩	7.6	3.7	3.2	120.0	凹石
	614	J-4	Ⅴ	砂岩	12.2	5.4	3.0	250.0	
	615	D-2	Ⅴ	砂岩	17.0	5.7	4.3	465.0	

第31表　礫器観察表

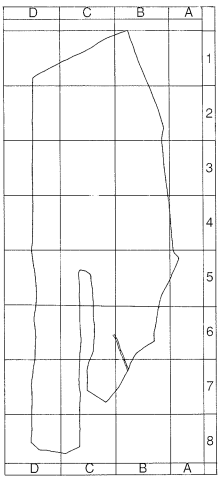
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第82図	616	K-3	Ⅴ	頁岩	7.5	6.4	3.1	200.0	
	617	K-4	Ⅴ	頁岩	12.6	8.9	2.9	420.0	
	618	K-5	Ⅴ	頁岩	11.8	5.8	3.5	340.0	
	619	J-4	Ⅴ	頁岩	9.5	10.0	4.4	460.0	
	620	J-4	Ⅴ	砂岩	10.8	13.0	2.7	714.0	
	621	B-6	Ⅴ	砂岩	9.7	13.3	4.4	760.0	
第83図	622	C-1	Ⅳ	頁岩	9.4	9.1	4.1	427.0	
	623	C-1	Ⅴ	頁岩	10.6	6.8	3.5	350.0	
	624	C-7	Ⅳ	砂岩	12.8	8.3	2.0	260.0	
	625	C-1	Ⅳ	頁岩	11.3	8.8	2.6	395.0	
	626	B-2	Ⅳ	頁岩	11.4	13.0	2.7	445.0	

第32表　石皿観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第84図	627	B-2	Ⅳ	安山岩	27.0	25.5	7.3	6700.0	
	628	C-1	Ⅴ	安山岩	16.7	20.0	3.0	650.0	
	629	J-4	Ⅴ	砂岩	38.2	24.7	8.0	8900.0	
	630	J-3	Ⅴ	砂岩	28.5	11.5	0.6	2750.0	
	631	J-4	Ⅴ	砂岩	11.0	17.5	4.8	1354.0	
第85図	632	K-4	Ⅳ	砂岩	11.7	14.2	6.6	1410.0	
	633	C-5	Ⅳ	砂岩	11.6	13.7	4.4	1016.0	
	634	J-5	Ⅴ	砂岩	20.0	13.8	4.9	1662.0	
	635	C-5	Ⅳ	砂岩	16.0	12.1	3.1	1440.0	
	636		横転内出土	安山岩	25.4	10.2	6.7	1765.0	
	637	K-5	Ⅳ	安山岩	9.0	14.5	5.5	1232.0	
	638	K-4	Ⅴ	砂岩	9.4	19.2	7.3	2400.0	



第90図　古道遺構



第91図　中世・近世遺構配置図

4　中・近世の調査

（1）遺構（第90図）

遺構では，古道と思われる溝が検出された。

古道遺構（第90図）

中・近世の時期と考えられる古道がⅢ層上面に検出された。B－7区から古道が北北西方向に1.5mほどのびた地点で暗黒褐色土の埋土がみられ，幅約0.5～0.8m，厚さ3cm程度の細長い硬化面が検出された。山の斜面に位置し，山の麓と頂上をつなぐ古道と推定される。

（2）遺物

掘り込み内には，土師器の破片が数点出土したが，小破片のため図化できない。また，時期確定も難しい。

第33表　Ⅸ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第86図	639			黄褐色	黄褐色		○	○		良	横位沈線文	ケズリ後ナデ	
	640			灰オリーブ色	灰オリーブ色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	641			黄褐色	黄灰色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	642		カクラン	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	643			明赤褐色	明赤褐色		○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	644			黄褐色	黄褐色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	645			黄褐色	黄灰色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	646			黄橙色	浅黄色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	647			黄褐色	黄灰色	○				良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	648		カクラン	オリーブ黒色	オリーブ黒色			○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	649			明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	650			灰オリーブ色	灰オリーブ色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	651			明赤褐色	明赤褐色	○		○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	652	C-1		明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	653			褐色	褐色		○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	654			黄橙色	黄褐色					良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	655			灰オリーブ色	灰オリーブ色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	656	2T	Ⅲ	灰オリーブ色	黄橙色		◎	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	657	2T	Ⅲ	褐色	褐色	○	◎	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	
	658		カクラン	赤褐色	灰オリーブ色	○	○	○		良	沈線文	ケズリ後ナデ	

第34表　Ⅹ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第87図	659	2T	ⅡC	黄橙色	黄橙色		○	○		良	短沈線文	ケズリ後ナデ	
	660	2T	Ⅲ	黄橙色	黄橙色		○	○		良	短沈線文	ケズリ後ナデ	

第35表　ＸＩ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	角閃石	その他				
第87図	659	2 T	ⅡC	黄橙色	黄橙色		○	○		良	短沈線文	ケズリ後ナデ	

第36表　Ⅱ・Ⅲ層出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第88・89図	662	B-2	Ⅲ	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.5	石鏃
	663	2T	Ⅱ	頁岩	2.7	1.7	0.3	1.0	石鏃
	664	B-2	Ⅲ	蛋白石	1.8	1.5	0.3	0.7	石鏃
	665	2T	Ⅲ	黒曜石	2.7	1.8	0.5	1.2	石鏃
	666	3T	Ⅲ	頁岩	8.4	4.1	1.0	35.5	石槍
	667	B-2	Ⅲ	頁岩	3.8	3.0	0.7	7.5	石鏃

第３節　小　結

窪見ノ上遺跡では，１地点・２地点に分けて調査をしたが，出土した土器は縄文時代が主体である。縄文時代の土器は11類に分類され，表にまとめた。

２地点においては縄文時代早期の最古段階と思われる土器（Ⅰ類土器）が多く出土したため，Ⅰ類土器について若干の考察を試みた。

縄文時代土器分類表

分類	項目	概要
Ⅰ類 13～186	器形	口縁部が，ほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。底部は平底である。
	文様	口唇部及び口縁部下に貝殻腹縁による連続刺突文をめぐらす。 円筒土器の一部には，口縁部下文様の下に貝殻腹縁による刺突文を鋸歯状に施すものもある。胴部はほぼ全面に斜位（一部横位）の貝殻条痕を施し，底端部には縦位の連続刺突文をめぐらす。 角筒土器は口唇部および口縁部下に貝殻腹縁による刺突文を施すものと，胴部文様で浅い横位の条痕地に流水文や連続刺突文を縦位に施すものがある。
	口唇部形態	外面が高く内面が低い形態のものが多いが，平坦なものもみられる。
	土器型式名	岩本式土器
Ⅱ類 187～202	器形	器形は，円筒形と角筒形が存在する。円筒形は，口縁部から底部に至るまで直線的な胴部を有し，口縁部が直立あるいは緩やかに外傾もしくは内弯している。 底部は平底である。
	文様	口唇部には連続した浅い刻みを施す。口縁部下に貝殻腹縁部による横位の刺突文を１～２段めぐらす。その下位にクサビ形の貼付文を施すものもある。 胴部を貝殻腹縁による縦位および横位の刺突文を施している。貝殻腹縁部による刺突文や貝殻背面による押圧文を組み合わせて施すものもある。 口縁部下にクサビ形の貼付文を施すものもある。 底端部には縦位の連続刺突文をめぐらす。
	備考	胴部文様の貝殻刺突文に縦位と横位がある。これらを同一型式土器で扱うについてはまだ不確定要素が多い。
	土器型式名	前平式土器～加栗山式土器
Ⅲ類 203～259	器形	口縁部が緩やかに外傾あるいは直行するもので，口縁部が山形になり２か所（推定）の瘤状突起をもつものもある。 底部は平底である。
	文様	口縁端部に連続した浅い刻みを施すものもあるが無文のものも多い。口縁部に貝殻腹縁部による刺突文を横位・縦位・斜位に施すものでそれらを組み合わせたものもある。 胴部全体に綾杉状の貝殻条痕を施すものであるが，底部付近では横位の貝殻条痕となる。同様に胴部文様帯のないものもある。
	土器型式名	石坂式土器

分　類	項　目	概　　要
Ⅳ類 260～265	器　形	口縁部がゆるやかに外傾あるいは直行するもので，口縁部が山形になり２か所（推定）の瘤状突起をもつものもある。 底部は平底である。
	文　様	口唇部は無文である。胴部全体に貝殻腹縁による刺突文や先端の鋭利な工具による細沈線を施すものである。多くは綾杉状に施文されている。底部付近は横位の貝殻条痕を施すものもある。
	土器型式名	下剥峯式土器
Ⅴ類 266～295	器　形	口縁部が緩やかに外傾しバケツ状を呈するものである。器壁では，口縁部が最も薄い。口唇部がやや内弯気味の部分もある。 底部は平底である。
	文　様	口縁部下にクシ状工具による横位の条痕を１ないし２段施し，胴部には同一施文具による鋸歯状の条痕文を施すものである。 底面には広葉樹の木葉圧痕がみられるものもある。
	土器型式名	桑ノ丸式土器
Ⅵ類 296～298	器　形	円筒形深鉢の平底の器形である。底部から口縁部まで，やや外反もしくは直行する。
	文　様	単一の文様帯で，口縁部から胴部上面に至るまで貝殻腹縁による条痕文で施文され，胴部から底部に至るまでは無文である。器面全体的に，ケズリ調整を施している。
	調　整	口縁部内面はケズリ後ナデ整形を施し，胴部以下はケズリもしくはケズリ後ナデの調整である。
	土器型式名	中原式土器
Ⅶ類 299～336	器　形	底部からの立ち上がりが大きく開き口縁部に至るまで直行する器形や底部から胴部まで膨らみ一旦頸部でしぼみ，口縁部にかけて強く外反する器形が見られる。 底部は，平底である。
	文　様	施文原体を回転させて，山形押型文もしくは楕円押型文が施文される。口唇部や口縁部内面に押型文が施文されるのも見られる。
	土器型式名	押型文土器
Ⅷ類 337～339	器　形	口縁部が緩やかに外傾あるいは直行するもので，口縁部が山形になり２か所（推定）の瘤状突起をもつものもある。 底部は平底である。
	文　様	浅い貝殻条痕を施すことにより文様効果を意識している可能性もあるが，多くは明瞭な文様をもたないものである。
	備　考	無文や底部のため，型式等は不明である。
	土器型式名	
Ⅸ類 629～658	器　形	器形は円筒状で深鉢丸底が基本である。口縁部は直行あるいは外傾する。
	文　様	外面のほぼ全面と，内面の一部に細い篦状，棒状施文具，あるいは植物の茎を横断した篦状の施文具を用いて，刺突文・鋸歯文・平行線文・綾杉文などを連続的に組み合わせて幾何学的文様を施している。
	土器型式名	曽畑式土器
Ⅹ類 659～660	器　形	胴部から頸部へ内傾し口縁部は内弯したキャリパー状を呈する。底部は上げ底をなす。
	文　様	粘土紐をはりつけ渦文・曲線文などを形成し口縁部に刻みを施してある。はりつけた隆起部上に連点を施し，この粘土紐と共に沈線文を施し美麗な文様を構成している。貝殻によって調整した条痕を有している。
	型　式	春日式土器
XI類 661	器　形	口縁部が直行するものや胴部がわずかにはって頸部が弱くしまり口縁部で外反するものがある。口縁は波状をなす。
	文　様	口唇部は波状口縁の頂部にキザミ目を施し，裏面に渦巻き文のものもある。口縁部は２本の平行線により長靴形・山形・三角形・曲線的な構図など多彩な文様を形成する。沈線間に貝殻刺突によって擬似縄文とするものもある。文様が胴部にいたるものもある。
	型　式	指宿式土器

本遺跡では，Ⅰ類土器が多数出土した。その出土状況から伺える傾向について考えてみたい。ただし，耕作による撹乱や地層の横転域が多く存在したことから，撹乱層出土遺物の割合も多いことを記しておきたい。Ⅰ類土器は，ほとんどが２地点よりの出土で，分布的偏在が明白である。

グラフ１で見られるように，Ⅰ類土器はⅤ層を中心として，Ⅷ層（チョコ層）にいたるまで出土しているが，２地点においては傾斜の強い地形と地層が整然としていないことに由来するものと思われる。

グラフ２によって，口唇部及び口縁部の文様を分類してみると，口縁部を横位の貝殻刺突で施文したものが全体の35％を占めもっとも多いが，その他は15％から10％弱程度の範囲におさまる。口縁部を横位の貝殻刺突で施文した資料が量的に突出しており，他の資料には大きな量的な偏りは見られないと言えよう。

口唇部に貝殻腹面部による押圧を施し，その直下に貝殻刺突文を施した資料は，Ⅰ類土器の前段階の資料として捉えられている水迫式土器[1)]の特徴を残すものと考えられているものである。また，隆帯文土器からの系譜をうたわれる岩本式土器古段階[2)]の一部と考えられてきた横位の施文刺突の出土層を見ると，Ⅷ層出土文様形態の半分を占め，本類土器の成立期の文様形態であるとの説を補強するものと考える。ただし，施文形態は横位から縦位への変化の方向性を指摘する考えもある[3)]が，横位刺突文の文様形態資料中に占めるⅣ層出土資料が20％程度であることを考えると，本遺跡の資料では横位から縦位への文様形態の変容を捉えることはできない。本遺跡では，成立期に発生した横位の貝殻刺突文は縦位や斜位，その複合文様体を生み出しつつ，並存した可能性が高いと考える。

本遺跡におけるⅠ類土器の口唇部内面の段の有無等について考察してみたい。ただし，口唇部内面の段の有無や傾斜の緩急の分類については，各人の見方により分類の曖昧さを内包していることを記しておきたい。

Ⅷ層では段なしが最も多く，Ⅴ層段階では段が明瞭につく資料の割合が激増し，Ⅳ層段階では段ありと段なしが同程度になる。

Ⅰ類土器の古段階から新段階への形態変容のひとつとして，口唇内面の明瞭な段が次第になくなっていく方向性が述べられている[4)]が，本遺跡において，図３に見られるように時代ごとの段の有無や緩急に変容の方向性や規則性を捉えることはできなかった。

石器では，磨面や敲打痕を有する磨石・敲石・凹石の大部分が２地点に集中して出土している。後述するように，同地点において３基の集石遺構が検出されていることとあわせて，調理場の可能性が高いと考えられる。

２地点では，早期相当層のⅤ層から石斧整形剥片も多量に出土している。石斧の完形品も数多く見られ，完形品と剥片の石材や石質等が類似していることから，本地点は石器製作場であった可能性が高いと考えられる。また，石斧整形剥片の中には，縁辺部に調整痕をもつ資料も見受けられ，スクレイパーとしての用途を有していた可能性を指摘しておきたい。

本遺跡全体では集石遺構が６基検出されているが，いずれの集石遺構の礫にも赤化が見られ，調理施設としての機能を有していたと考えられる。集石の礫数は多いところで122点であり，規模的には特に大きくはなく，礫層も厚くはない。遺構としては集石遺構以外に丸みを帯びた礫（磨石）で構成される集積遺構が１基検出された。

遺物の出土範囲を見てみると，Ⅷ層からⅤ層にかけての遺物は２地点に多く見られ，Ⅴ層上面から上位層については１地点に遺物出土が多く見られ，生活領域の変遷が伺える。

窪見ノ上遺跡における縄文時代の遺構としては，集石・集積遺構以外に目立った遺構等は確認されていないが，今後，農業開発総合センター遺跡群内の他の遺跡の報告書刊行等により窪見ノ上遺跡の性格がより詳細に明らかになることを期待する。

註

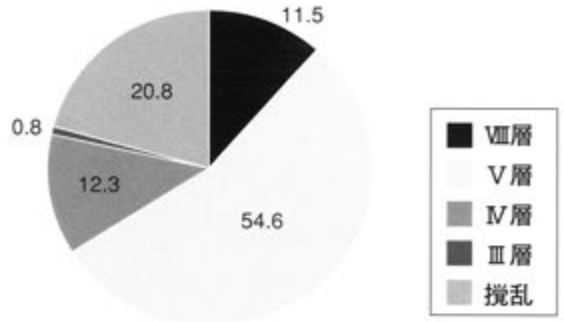
１）指宿市教育委員会　2001　「水迫遺跡Ⅰ」
　『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)

２）鹿屋市教育委員会「上祓川遺跡群」
　『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』（１）

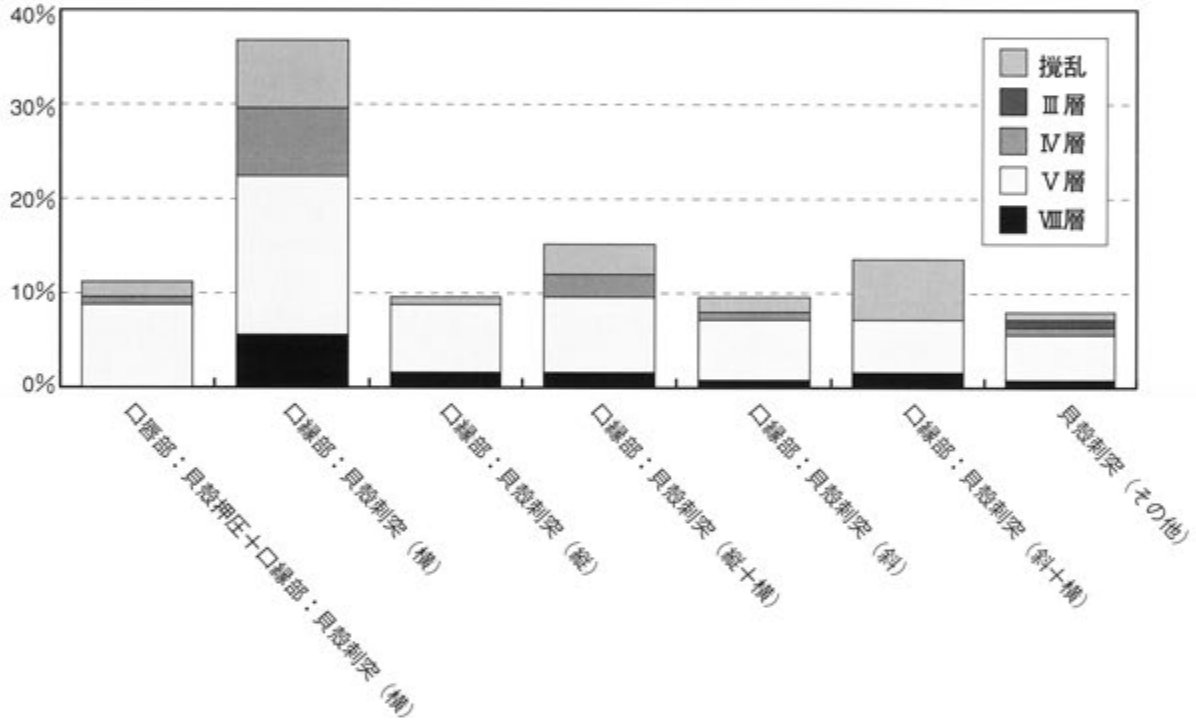
３）田代町教育委員会　2001　「ホケノ頭遺跡」
　『田代町埋蔵文化財調査報告書』

４）分類表等の作成にあたり，南九州縄文研究会
　2003「南九州縄文集成２　南九州貝殻文系土器Ⅱ」
　も参考にした。

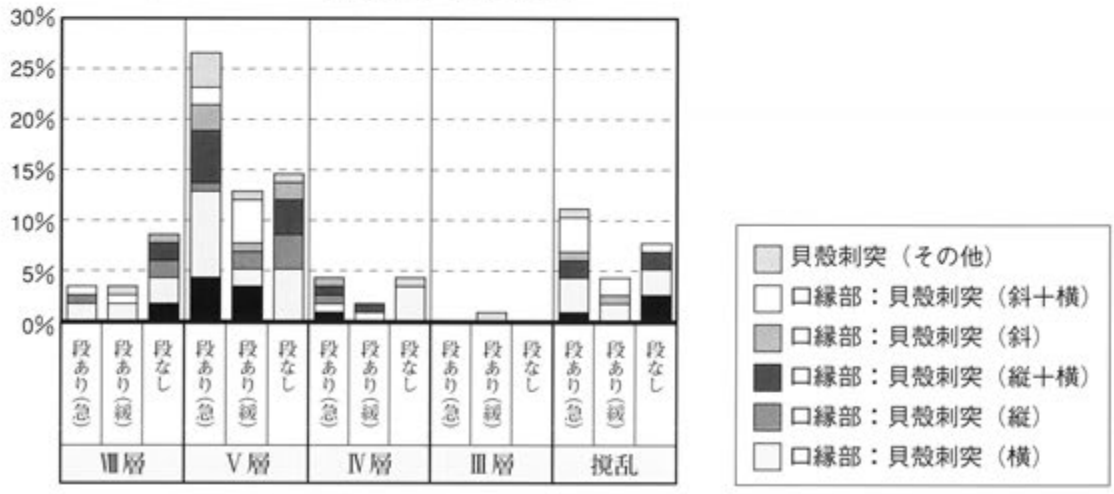
グラフ１　出土層別Ⅰ類土器出土数



グラフ２　出土層別Ⅰ類土器文様形態



グラフ３　口唇部内面の段差状況



第Ⅴ章　建石ヶ原遺跡

第１節　調査の概要

１　遺跡の立地及び調査概要

（１）遺跡の立地

吹上町大字和田字建石ヶ原に所在し，農業大学校学生寮の建設地で，農業開発総合センター内の幹線道路が国道と交差する国道取付部である。標高55mの台地にあり，南側は大野原台地へ続き，西側は古里遺跡と隣接し，北側は標高差23mをもって谷水田となっている。東側は，国道270号線が南北に走り，東側の台地と分断されているが，以前は一部がつながっていたと考えられる。東側の台地も広大で，その東側を堀川が流れ，現在は堀川の河岸段丘に集落が発達している。

（２）調査の概要

Ⅰ層（表土）は重機で掘削し，Ⅱ層（黒色土），Ⅲ層（黄褐色土）を人力で掘り下げた。Ⅱ層には古墳時代以降の遺物は全くなく，主となる生活面は確認できなかった。しかし，古代～中世にかけての方形周溝（墓）が検出され，当時の集落などの生活空間から離れた場所であったことが明らかとなった。

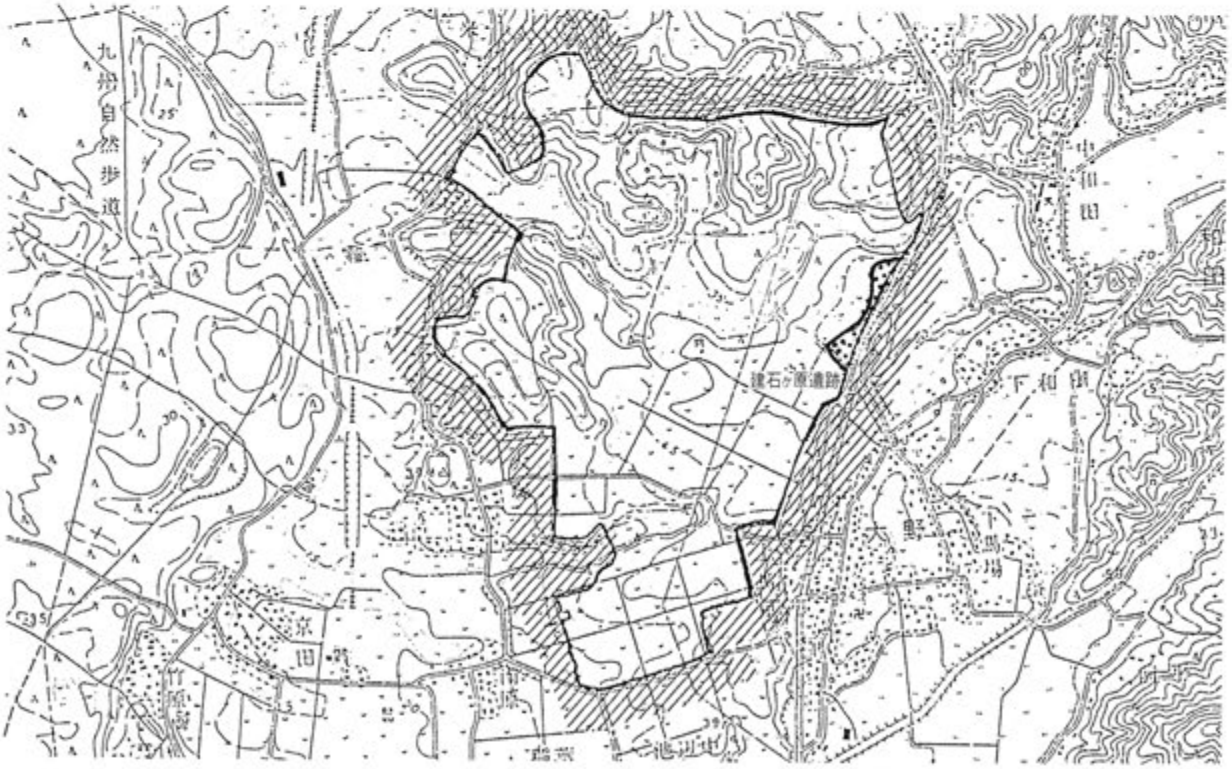
Ⅱ層の下部からは，弥生時代中期の土器片が少量出土し，当時の土坑や弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴住居跡１基を検出している。Ⅲ層上面では，中世のものと思われる溝跡が検出された。また，同じくⅢ層上面で南側から続く縄文時代晩期のものと見られる道跡が検出され，晩期の入佐式土器が出土した。アカホヤ下層のⅣ層では，縄文時代早期の遺物（桑ノ丸式，石器等）が出土した。更に幹線道路建設による削平が予定されている部分なので，重機でⅥ層（黄褐色火山灰：薩摩火山灰）まで掘削し，Ⅶ層（茶褐色粘質土）から縄文時代草創期の土器，石器，フレイク，チップ等が出土し，更に下層では旧石器時代の土坑が検出され，マイクロブレードや三稜尖頭器，チップ，フレイク等が出土した。

２　遺跡の層序

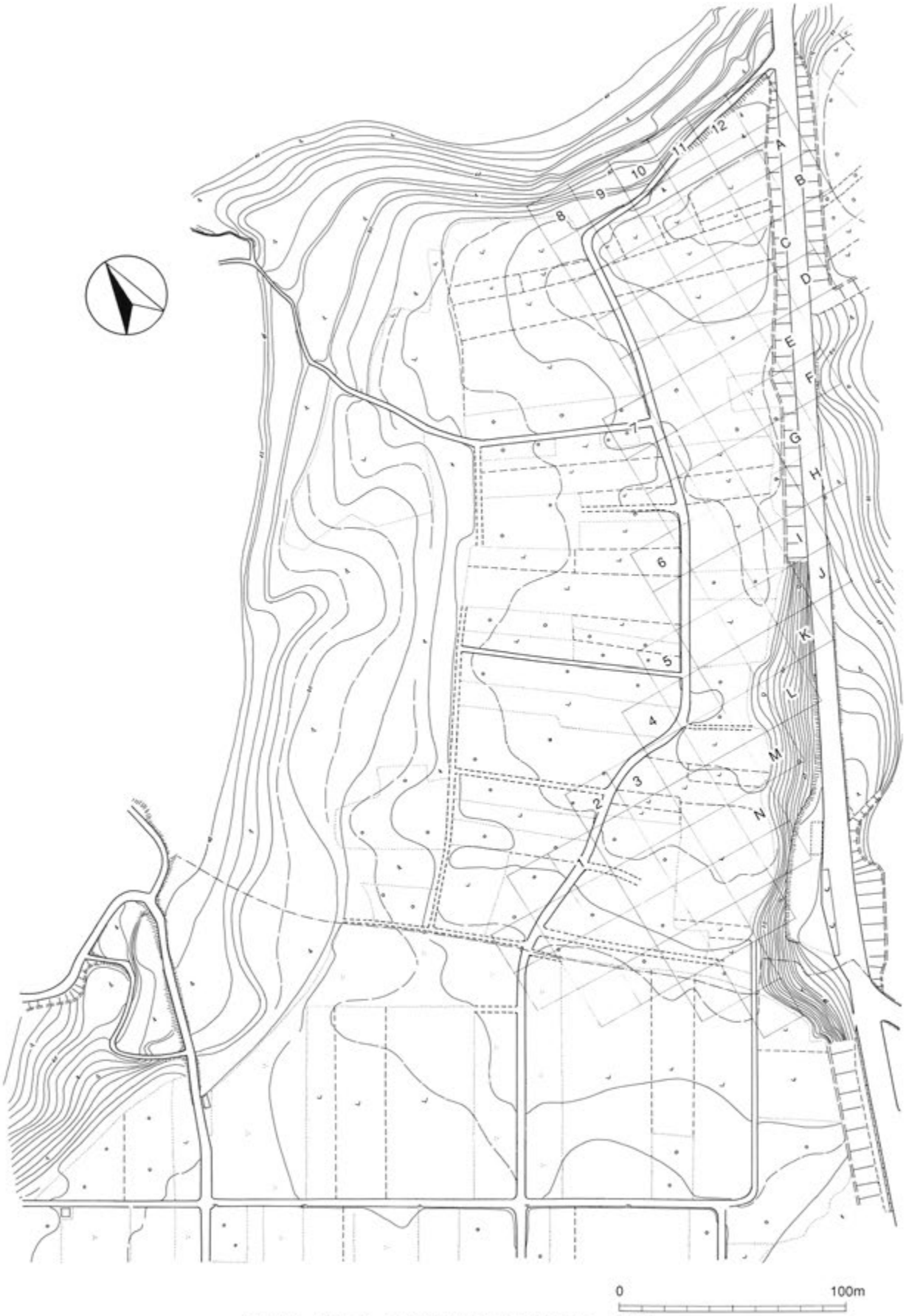
本遺跡の層位は，農業センター遺跡群全体の基準となっている台地部分の層位と基本的には変わらない。第３図はＣ－８～12区北側，Ｃ～Ｆ－10区西側，Ｈ～Ｉ－８区の西側土層断面図である。

表土は，かなり撹乱されている。

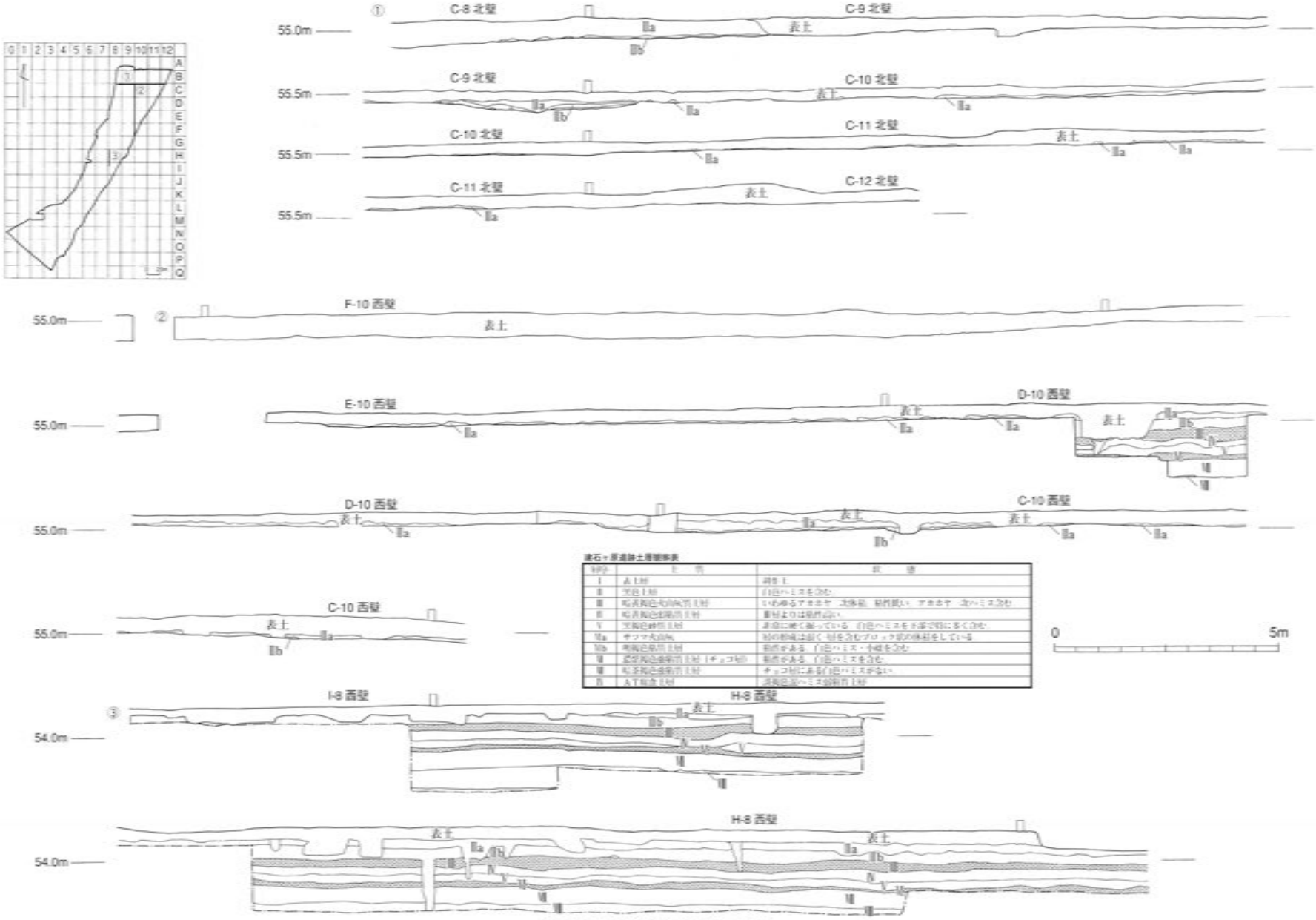
遺物包含層はⅡ～Ⅴ・Ⅶ～Ⅷ層で，全面調査はⅤ層まで行い，部分的にⅦ～Ⅷ層の調査を行った。下層確認はⅩ層まで行った。



第１図　建石ヶ原遺跡位置図（１／25,000）



第２図　建石ヶ原遺跡地形図及びグリッド図



C-8 北壁
C-9 北壁
C-10 北壁
C-11 北壁
C-12 北壁
F-10 西壁
E-10 西壁
D-10 西壁
C-10 西壁
I-8 西壁
H-8 西壁
55.0m
55.5m
54.0m
表土
0
5m

第３図　遺跡土層断面図

第２節　発掘調査の成果

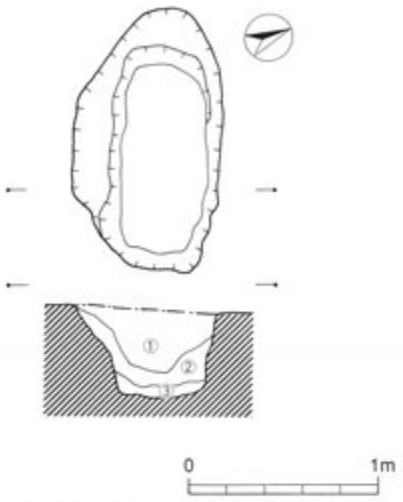
１　旧石器時代（Ⅷ～Ⅶ層）の調査

旧石器時代の遺構・遺物はⅦ層・Ⅷ層より出土・検出するもので，Ｂ－10～12において黒曜石・頁岩のフレイク・チップを含む石器製作址と思われるブロックが１基検出された。ブロック内には第７～８図の遺物番号１～19の石器が検出された。

（１）遺構（第４図）

①　土坑

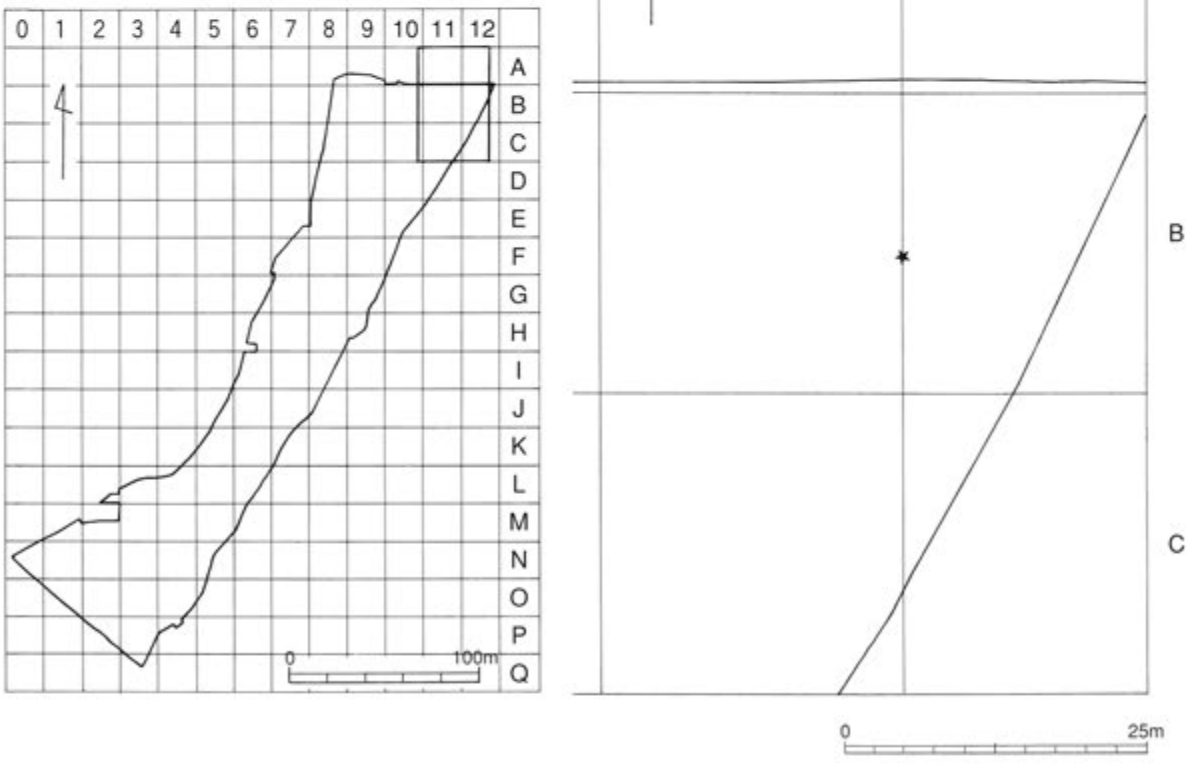
平面プランは長径138㎝，短径75㎝の楕円形である。深さは検出面から48㎝である。各層とも遺物・炭化物は見られず壁面はしっかりしている。壁面，底面ともにピットは確認できなかったため用途は判然としない。本来の立ち上がりはⅦ層中位と考えられる。



第４図　Ⅶ層検出土坑

1号土坑層序観察表

①	Ⅶ層と同じ粘性強
②	①に若干シラス（Ⅸ層）が混じる。粘性弱。
③	わずかに砂も混じる。①にかなりシラスが混じる。粘性ほとんどなし。



第５図　Ⅶ層遺構配置図

（2）遺物（第7～8図　遺物番号1～19）

Ⅶ層出土の遺物総数は820点であった。出土遺物中，黒曜石製と頁岩製のチップが大半を占めた。

① 三稜尖頭器（1～5）

1～5は上牛鼻産黒曜石製の三稜尖頭器である。いずれも厚手の剥片を素材とし，剥片を縦位に利用している。一面加工，二面加工，三面加工が存在する。1は大型の有茎三稜尖頭器で最大長5.4㎝，最大幅2.35㎝，厚さ1.5㎝，重さ13ｇである。両側縁に鋸歯状の二次加工が施され，基部においては腹面への加工が認められる。

2は最大長2.7㎝，最大幅1.6㎝，厚さ1.2㎝，重さ4ｇで，不純物のため欠損しており，製作途中での基部の欠損と考えられる。右側縁のみに加工が施され，顕著な稜上加工も確認される。

3は最大長3.5㎝，最大幅1.3㎝，厚さ1.0㎝，重さ3.2ｇである。断面が菱形を呈する一面加工の三稜尖頭器である。右側面の一部にも簡易な剥離が施される。

4は最大長3.1㎝，最大幅1.7㎝と小型で甲高の三稜尖頭器である。厚さ1.35㎝，重さ6.2㎝である。基部が欠損している。

5は最大長3.5㎝，最大幅1.4㎝，厚さ1.35㎝，重さ4.6ｇの三面加工の三稜尖頭器である。腹面への加工が認められる。

② 尖頭器（6）

6は上牛鼻産の黒曜石製尖頭器である。薄手の剥片の周辺に急角度の調整を施し，先端部を作り出している。

③ 細石刃（マイクロブレード）（7～13）

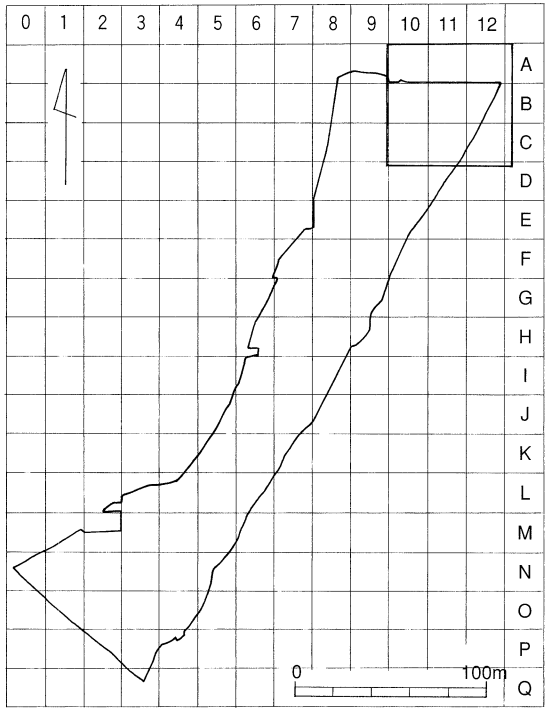
7～13は頁岩製もしくは硬質頁岩製の細石刃（マイクロブレード）である。

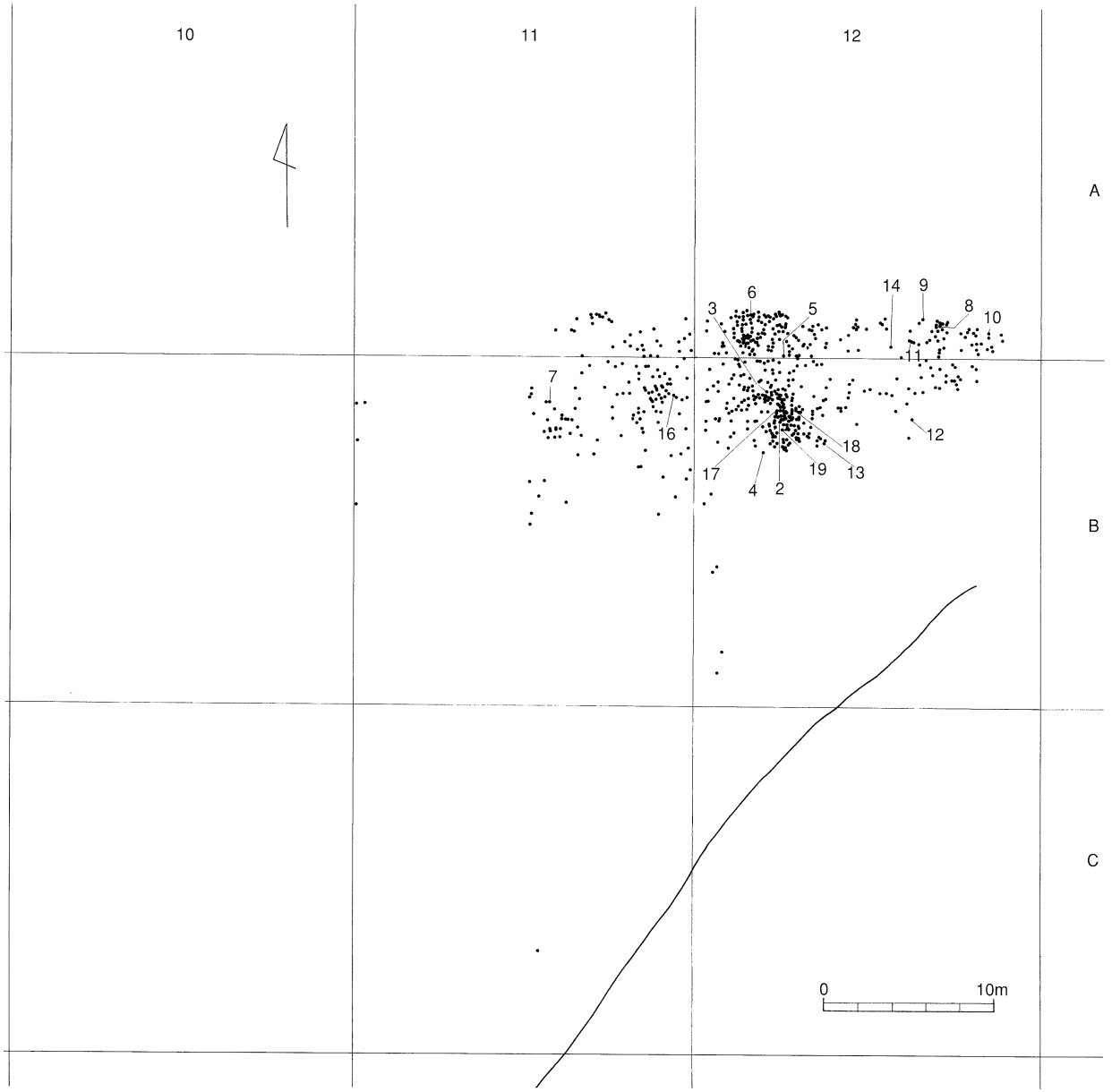
7は裏面右側面の中間部に，12は表左側辺部の頭部から尾部にかけて極浅形細部調整が見られる。また，7・9は打面を上下に転移し剥離されている。

7～13は全て切断が観察できる。7・8は尾部末端部，9～12は尾部が切断されている。また，13は頭部・尾部とも切断されている。

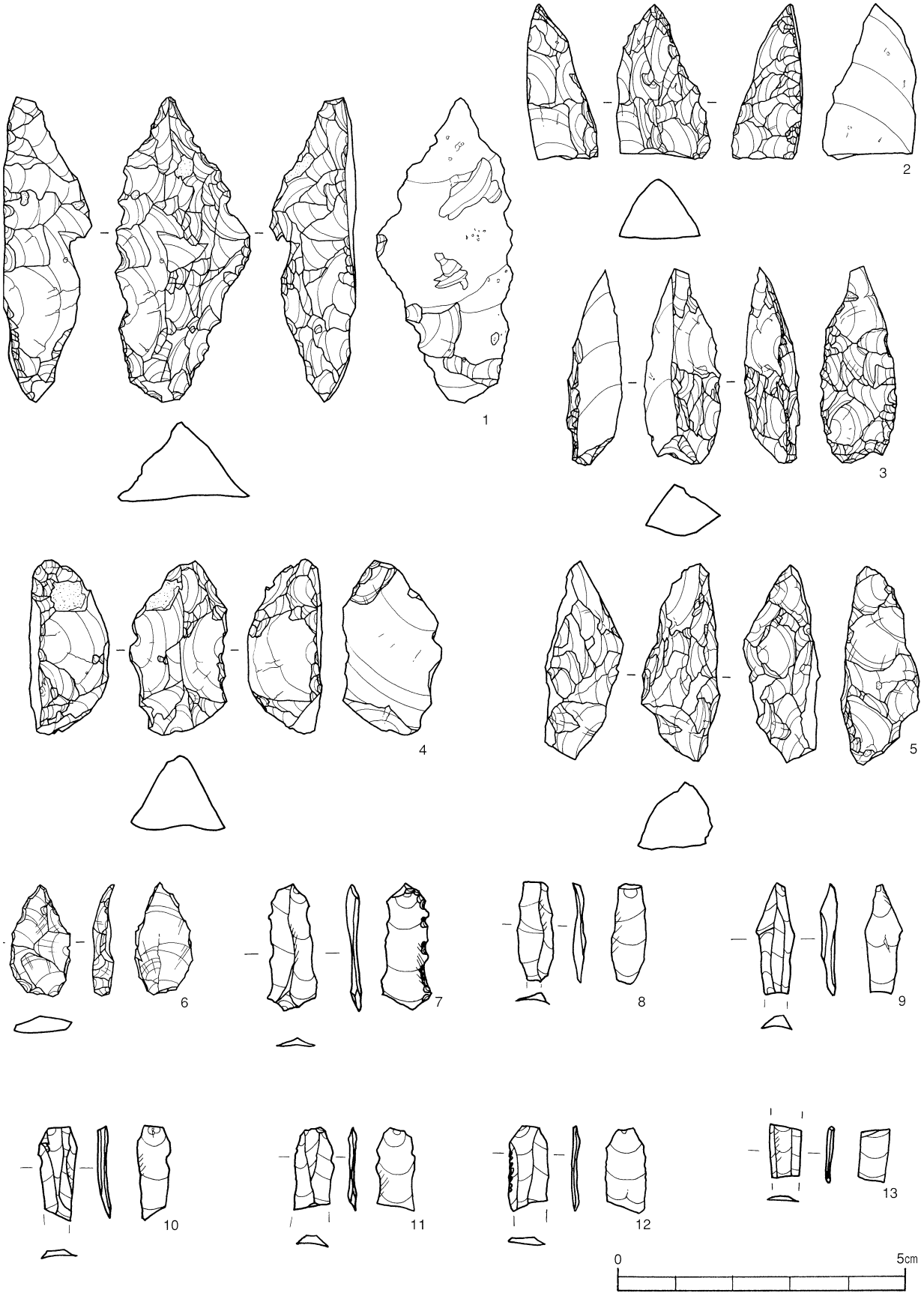
建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器　種	出土区	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考
第7図	1		三稜尖頭器	H－8	黒曜石	5.4	2.4	1.5	13	上牛鼻産
	2	Ⅶ	三稜尖頭器	B－12	黒曜石	2.7	1.6	1.2	4	上牛鼻産
	3	Ⅶ	三稜尖頭器	B－12	黒曜石	3.5	1.3	1	3.2	上牛鼻産
	4	Ⅶ	三稜尖頭器	B－12	黒曜石	3.1	1.7	1.35	6.2	上牛鼻産
	5	Ⅶ	三稜尖頭器	A－12	黒曜石	3.5	1.4	1.35	4.6	上牛鼻産
	6	Ⅶ	尖頭器	B－11	黒曜石	2	1	0.4	0.6	上牛鼻産
	7	Ⅶ	細石刃	B－11	頁岩	2.3	0.9	0.15	0.4	
	8	Ⅶ	細石刃	A－12	硬質頁岩	1.8	0.7	0.2	0.17	
	9	Ⅶ	細石刃	A－12	硬質頁岩	2	0.7	0.25	0.32	
	10	Ⅶ	細石刃	A－12	硬質頁岩	1.7	0.7	0.15	0.21	
	11	Ⅶ	細石刃	A－12	硬質頁岩	1.5	0.7	0.2	0.16	
	12	Ⅶ	細石刃	B－12	硬質頁岩	1.5	0.8	0.15	0.21	
	13	Ⅶ	細石刃	B－12	硬質頁岩	1	0.6	0.1	0.06	
第8図	14	Ⅶ	石鏃	A－12	瑪瑙	3.7	1.8	0.4	2	
	15	Ⅷ	石鏃	F－8	頁岩	2.4	1.7	0.5	1.46	
	16	Ⅶ	スクレイパー	B－11	黒曜石	2.1	1	0.55	0.8	上牛鼻産
	17	Ⅶ	打面再生剥片	B－12	黒曜石	1.6	2.9	0.4	1	上牛鼻産
	18	Ⅶ	石核	B－12	黒曜石	1.6	1.8	2.1	4.4	上牛鼻産
	19	Ⅶ	叩石	B－12	砂岩	7	7.8	3	236	

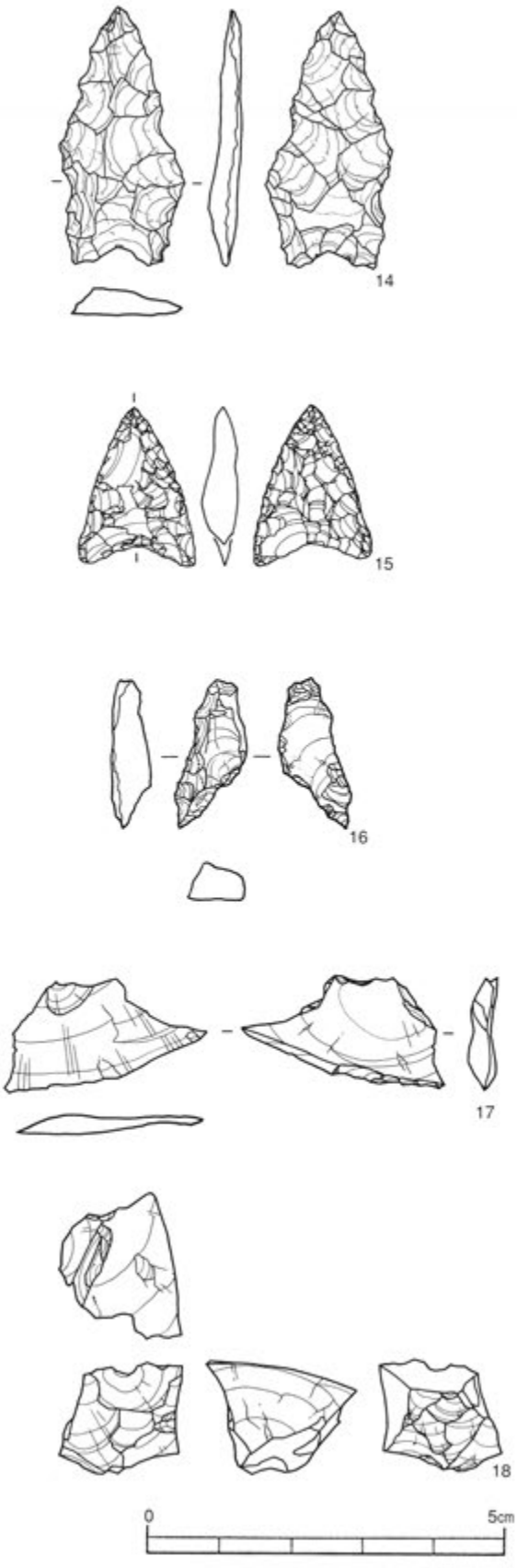


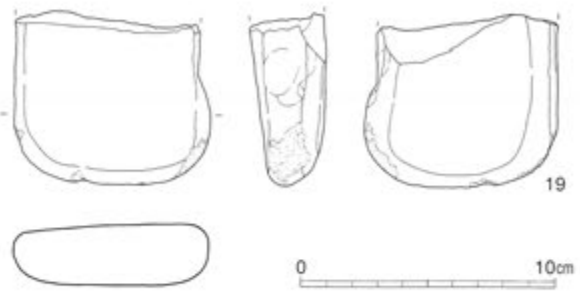


第6図　Ⅷ層遺物出土状況



第 7 図　旧石器実測図 1





④ **石鏃　（14・15）**

14は瑪瑙製，15は頁岩製の石鏃である。

14は最大長4.2㎝，最大幅2.6㎝で長幅比1.61のほぼ五角形鏃である。両側面ともに鋸歯状の仕上げが見られ，基部の抉りはやや浅い。

15は最大長2.4㎝，最大幅1.7㎝で長幅比は1.41でほぼ三角形を呈する。鋸歯状の仕上げは見られず，抉りも浅い。

⑤ **スクレイパー（16）**

16は上牛鼻産黒曜石製である。側縁部に二次加工が見られる為，スクレイパーに分類した。欠損面に不純物が観察されるため，製作途中で破棄したものと思われる。

⑥ **打面再生剥片（17）**

17は上牛鼻産黒曜石製石核の打面再生剥片である。剥離面から細石刃の製作の途中で，新たな打面作成を目的として生じた剥片と考えられる。

⑦ **石核（18）**

18は上牛鼻産黒曜石製の石核である。打面転移が繰り返されている。

⑧ **叩石（19）**

19は最大長７㎝，最大幅7.8㎝，厚さ３㎝，重さ236gで，砂岩製である。扁平な転石を利用し，一角に使用によるつぶれが確認される。欠損品である。

第８図　旧石器実測図２

2　縄文時代早期（Ⅴ～Ⅳ層）の調査

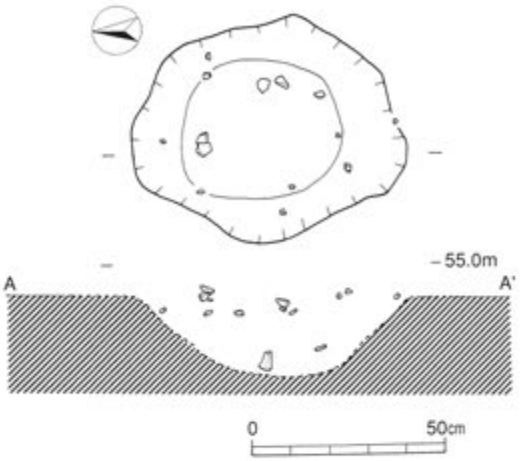
縄文時代早期は、Ⅳ層・Ⅴ層より土坑１基が検出され，土器111点，石器118点が出土した。

（１）遺構（第９図）

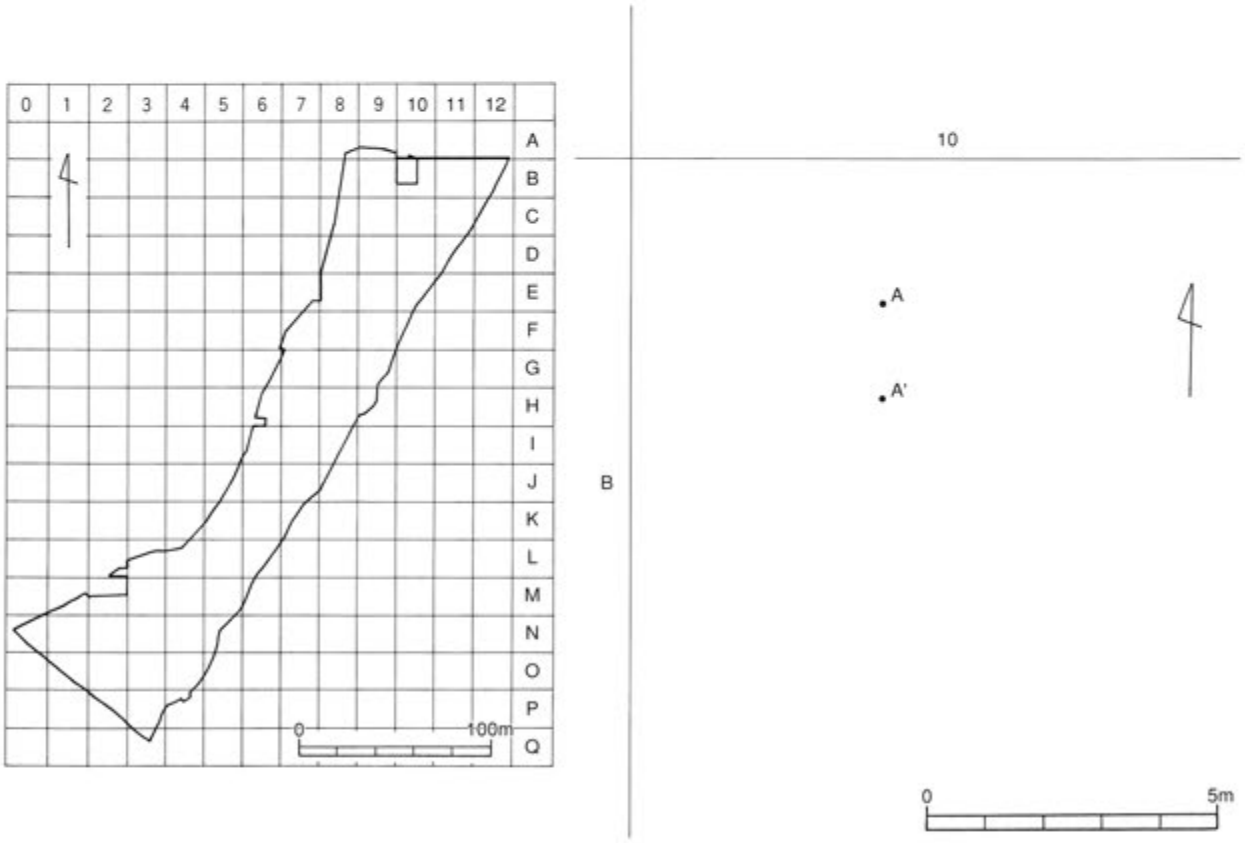
Ⅲ層上面で土坑１基を検出した。用途は判然としなかった。

①　土坑

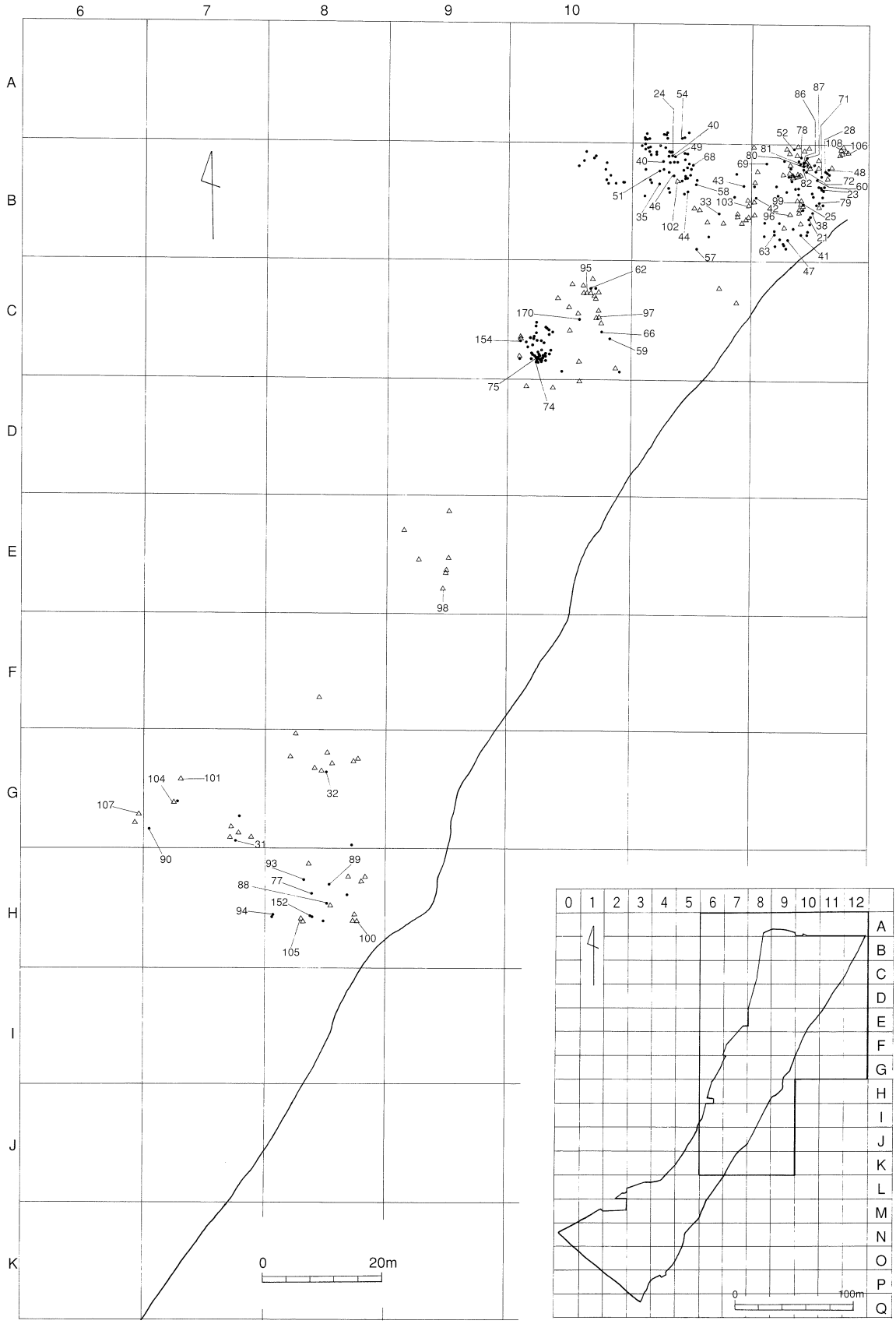
平面プランはほぼ円形で，長径71㎝，短径60㎝である。土器片数点と若干の炭化物が遺構内から出土し，掘り込みラインは土坑検出時には確認できなかったが，ここでは推定ラインを復元した。



第９図　縄文時代早期土坑



第10図　縄文時代早期遺構配置図



第11図　縄文時代早期遺物出土状況

建石ヶ原遺跡　Ⅴ～Ⅳ層土器分類表

分類	項　目	概　　要
Ⅰ類	器　形	口縁部・胴部ともにほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。
	文　様	口縁部は斜位の貝殻条痕上に横位の貝殻刺突文が施される。胴部は斜位の貝殻条痕上に縦位もしくは，斜位の貝殻刺突文が施されている。更に，施文パターンがやや粗雑・簡略化し，整然さに欠けるものがある。
	調　整	内面はナデおよびケズリ両方。外面はナデ。
	備　考	時間的には貝殻条痕文が密→粗の編年が可能である。
	土器形式	前平式土器
	図番号	20～32
Ⅱ類	器　形	円筒形・角筒形ともに底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。
	文　様	円筒形のものは胴部には横位の貝殻条痕文上に流水状・直線状に貝殻条痕文が施されている。底部にかけては縦位の貝殻条痕文が施され，更に底部裏面にも放射状の貝殻条痕文が施されている。角筒形のものは縦位の貝殻刺突文が口縁部を取り巻き，下位には横位の貝殻条痕文上に斜位もしくは，縦位の貝殻条痕文が施されている。
	調　整	円筒形は外面ケズリ・内面ナデ。角筒形は内面に丁寧なナデ調整が見られるものがある。
	備　考	底面が上げ底状のものと平坦なものがある。
	土器形式	志風頭タイプ
	図番号	33～44
Ⅲ類	器　形	胴部がほぼ直線的に立ち上がる円筒形である。
	文　様	斜位の貝殻条痕上に縦位２～３条もしくは斜位の２～３条の貝殻刺突文を施している。胴部貝殻刺突文は粗・密ともに観察でき，内外面の調整も文様の形状によって変化する。
	調　整	内面調整は貝殻刺突文の粗なものはケズリ，密はナデ。
	備　考	斜位の貝殻条痕上の貝殻刺突文の間隔が粗・密ともに観察できる。
	土器形式	加栗山式土器
	図番号	45～72
Ⅳ類	器　形	口縁部はほぼ直線的に立ち上がる円筒形である。
	文　様	口唇部にキザミ目が施され，口縁部上部に３条の横位貝殻刺突文が施されている。口縁下部には貝殻押引文が施されている。
	調　整	内・外面ともナデによる調整である。
	備　考	
	土器形式	吉田式土器
	図番号	73
Ⅴ類	器　形	胴部はほぼ直立するが口縁部にかけては緩やかに外傾し，口縁上部は外反する。
	文　様	口唇部に連続したキザミ目を施す。口縁部上に貝殻腹縁部による斜位の貝殻刺突文を施す。胴部全体に綾杉状の貝殻条痕文を施すものであるが，瘤状の突起をもつものもある。
	調　整	外面はナデによる丁寧な調整が観察できる。
	備　考	胴部に貝殻条痕文が一切観察できないものもある。
	土器形式	石坂式土器
	図番号	74
Ⅵ類	器　形	胴部は緩やかに外傾するが口縁部は内弯し，拳を内側に傾けた形に似ている。
	文　様	口縁部から胴部にかけて短い斜位の貝殻条痕が整然さに欠けるパターンで連続して施されている。施文は角度の増すものもある。
	調　整	内・外面ともナデ。丁寧な調整が観察できる。
	備　考	胎土はいずれも粗く，小礫を含むものが多いが内・外面とも丁寧な調整が施されている。
	土器形式	桑ノ丸式土器
	図番号	78～87
Ⅶ類	器　形	胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。
	文　様	縦位の貝殻条痕文が施されているものと，貝殻刺突文のみが施されているものとに分類できる。
	調　整	外面はナデによる丁寧な調整が観察できる。
	備　考	
	土器形式	分類不能
	図番号	88～94

（2）遺物

出土状況から，Ⅳ～Ⅴ層は早期の遺物が中心である。それぞれ土器は同器種ごとにⅠ～Ⅶ類まで分類を試みた。

Ⅰ類（第12図　20～32）

20は口縁部である。直行する形で立ち上がる。斜位の貝殻条痕上に横位の貝殻刺突文が施される円筒であるが，口唇部付近にキザミ目は施されていない。21～32は同じく円筒の胴部である。21～28は太目の斜位の貝殻条痕上に，縦位もしくは斜位の貝殻刺突文が連点状に施されている。29は横位の貝殻条痕上に縦位の沈線文が施されている。30～32は貝殻条痕がやや粗雑・簡略化している。

Ⅱ類（第13図　33～44）

33～37は円筒胴部，38～42は円筒底部，43は角筒口縁部，44は角筒胴部である。

33～37は横位の貝殻条痕文上に流水状，もしくは直線的な貝殻条痕文を重ねる。36・37は斜位の貝殻条痕文がやや粗に施され，その上に直線的な貝殻条痕文が重ねられている。38～42は底部にかけて，縦位の貝殻条痕文が施され，39は更に底面に放射状に貝殻条痕文が施されている。また，38・42は底面が平坦であるのに対し，39・40は底面側面付近が上げ底状になり，41は中央部に向かって上げ底状になっている。43は角筒口縁部だが，口縁部上部に横位の貝殻押引文が施され，その下に横位の貝殻刺突文が施される。更に胴部にかけて，縦位の貝殻条痕状に直線状の貝殻沈線文が施される。

Ⅲ類（第14・15図　45～72）

加栗山式土器の円筒が45～66，角筒が67～72である。内面の調整で顕著な特徴は貝殻刺突文の粗なものほどケズリが観察され，密なものほどナデが観察される。胴部文様は斜位の貝殻条痕上に縦位２～３条もしくは斜位２～３条の貝殻刺突文を重ねている。なお，編年の指標となる貝殻刺突文の間隔は疎・密ともに観察できる。

斜位の貝殻条痕状の貝殻刺突文の間隔は45～55が比較的粗であり，56～57が密，58～72は粗である。

Ⅳ類（第15図　73）

吉田式土器の口縁部である。口唇部にキザミ目が施され，口縁部には３条の横位の貝殻刺突文が施されている。口縁部から胴部にかけての部分には貝殻押引文が密に施されている。

Ⅴ類（第16図　74～77）

74～77は外反する口縁部である。74・75ともに，口唇部にキザミ目と口縁部上部は貝殻刺突文が施されている。胴部は綾杉条痕文が施されている。

76は口縁部付近の胴部であると考えられる。貝殻条痕は一切観察できなかった。78は斜位の貝殻条痕文がかなりはっきり施されている。

Ⅵ類（第18図　78～87）

底部から胴部にかけては外傾をなすが，口縁部にかけては内弯し，拳を内側に傾けた形に似ている。胴部文様は斜位の粗雑な貝殻条痕が施され，全体的にかなり厚みのある土器である。

78は口縁部で，直行し，口唇部はやや内傾する。口縁上部から下部にかけて短い斜位の貝殻条痕が整然さに欠けるパターンで施されている。同様の施文パターンは79～82にかけて見られ，85・87は施文の角度がやや鋭くなる。83・84・86は縦位の貝殻条痕文が施される。胎土はいずれも粗く，小礫を含むが，内面・外面ともミガキを入念に施しているが，83は胎土・調整とも粗で内面はケズリによる調整である。

Ⅶ類（第19図　88～94）

縄文時代早期の範疇にはいると思われるが，現段階では分類不可能な土器である。88・89・91には縦位の貝殻条痕が施されているが，90・92～94は刺突文のみが施されており，いずれも分類不能である。

縄文時代早期の石器（第20・21図　95～108）

①　石鏃（95～99）

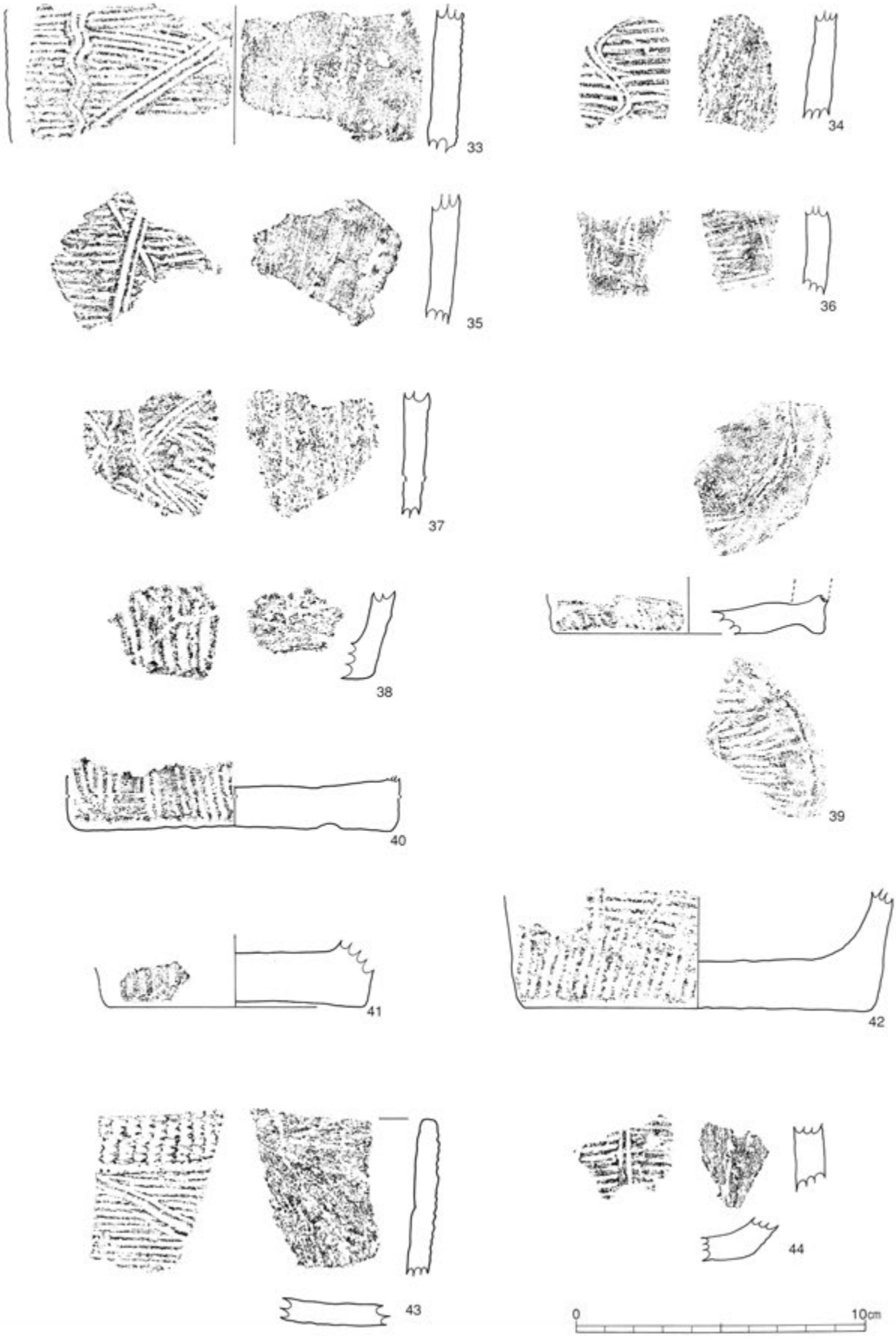
95は頁岩製の石鏃未製品である。形状は丸く最大長4.2㎝，最大幅2.6㎝，重さ11.1gで，厚さ1.0㎝とやや分厚い。長幅比1.61である。

96は安山岩製の石鏃未製品である。最大長2.9㎝，最大幅1.75㎝，長幅比1.65で二等辺三角形である。側縁部に鋸歯状の仕上げが見られる。先端部のみ細かい調整剥離が施されている。

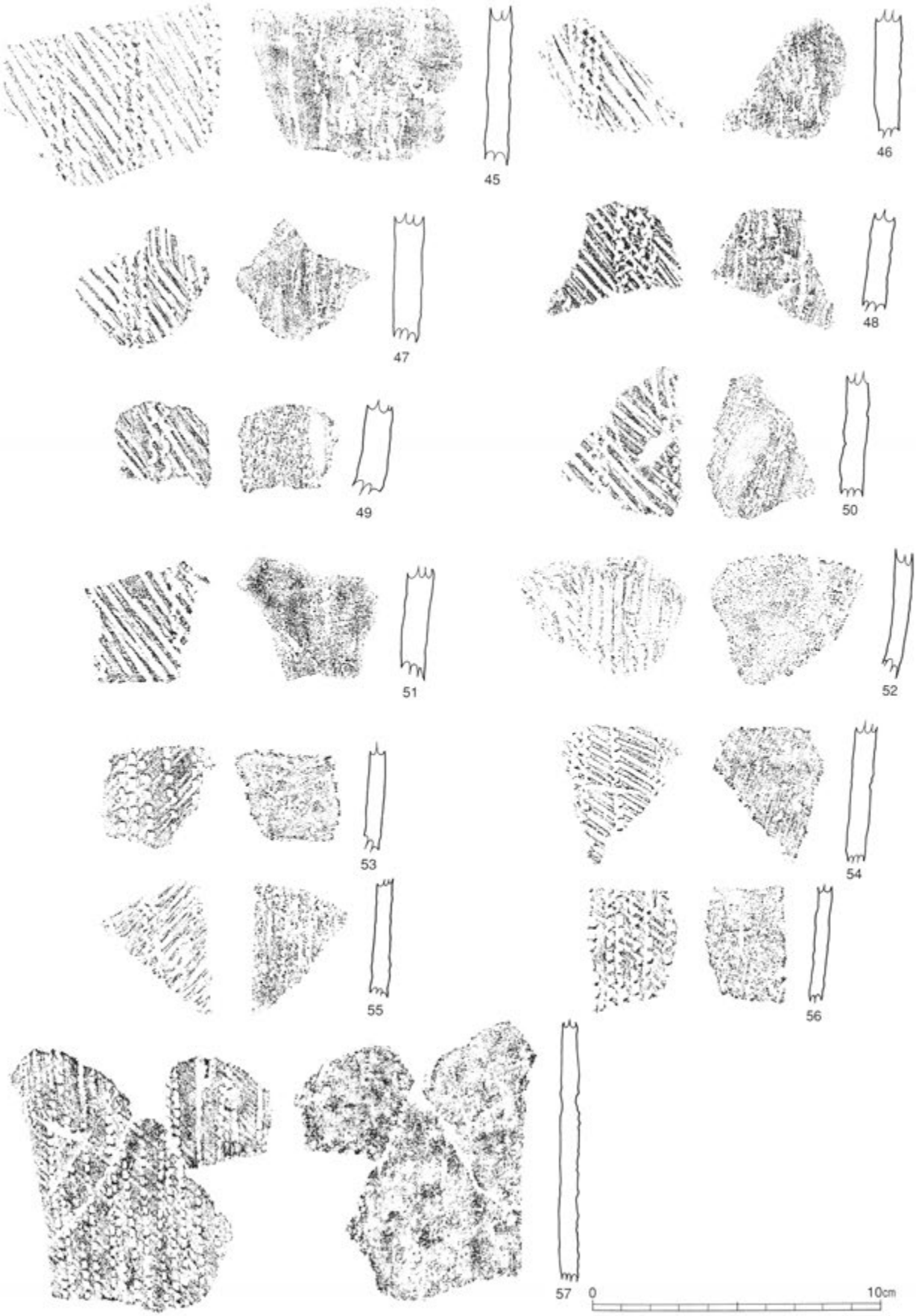
第12図　Ⅰ類土器

縄文土器Ⅰ類観察表

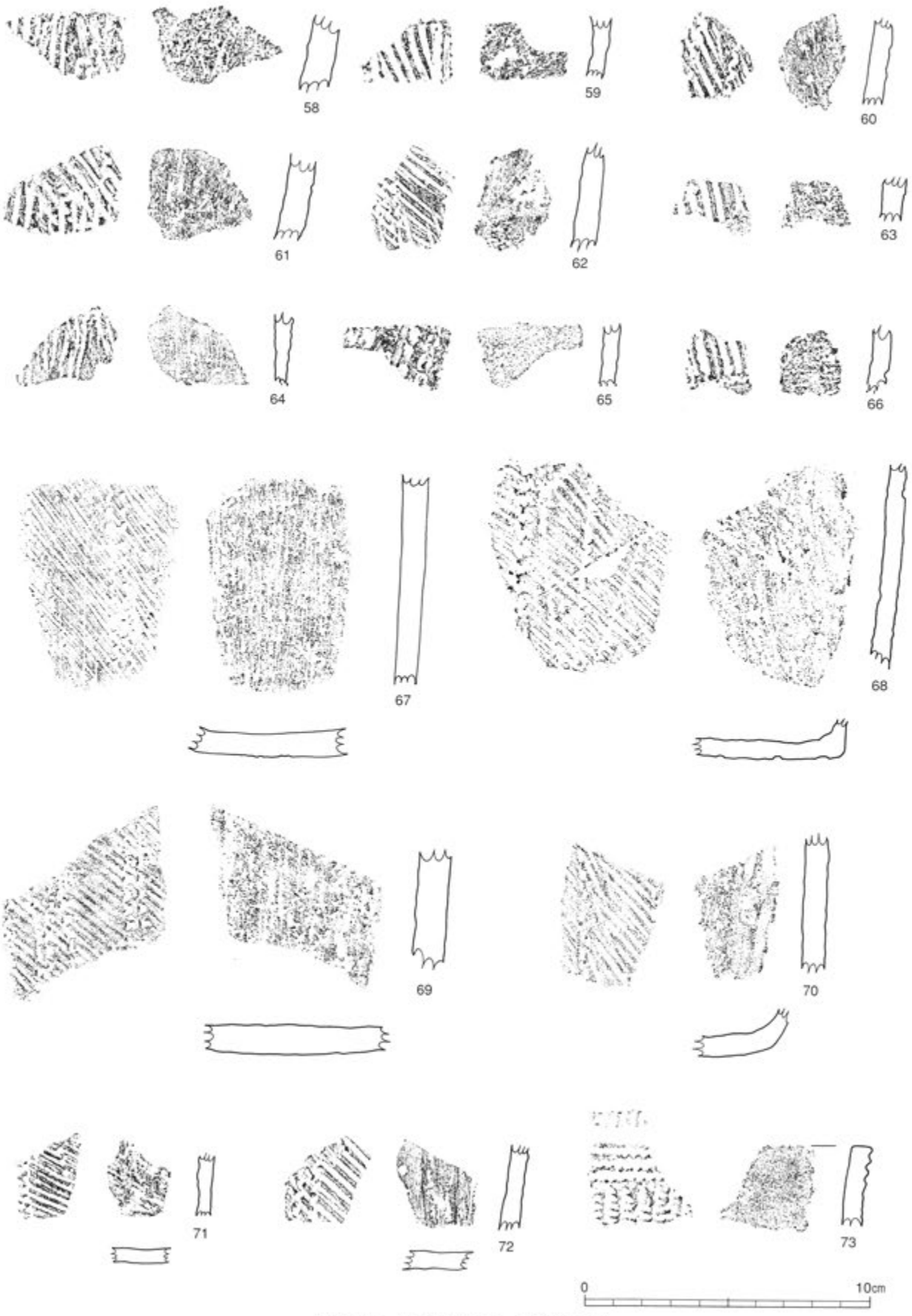
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第12図	20	B-12	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○		良	貝殻刺突・貝殻条痕	口唇部ナデ+他ケズリ	
	21	B-12	Ⅴ	淡茶褐色	暗茶褐色			◎		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	22	B-9	Ⅱ	淡茶褐色	淡黒褐色	◎	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	23	B-12	Ⅳ	暗茶褐色	茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	24	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	25	B-12	Ⅳ	茶褐色	淡茶褐色	○	○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	26	B-12	Ⅲ	茶褐色	淡黒褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	27	C-8	Ⅱ	淡茶褐色	黒褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	28	B-12	Ⅳ	黒褐色	黒褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	29	B-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ナデ	
	30	H-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡茶褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	31	G-7	Ⅳ	淡黒褐色	黒褐色		○			〃	貝殻条痕	ナデ	
	32	G-8	Ⅴ	白濁	淡黒褐色		○			〃	貝殻条痕	ナデ	



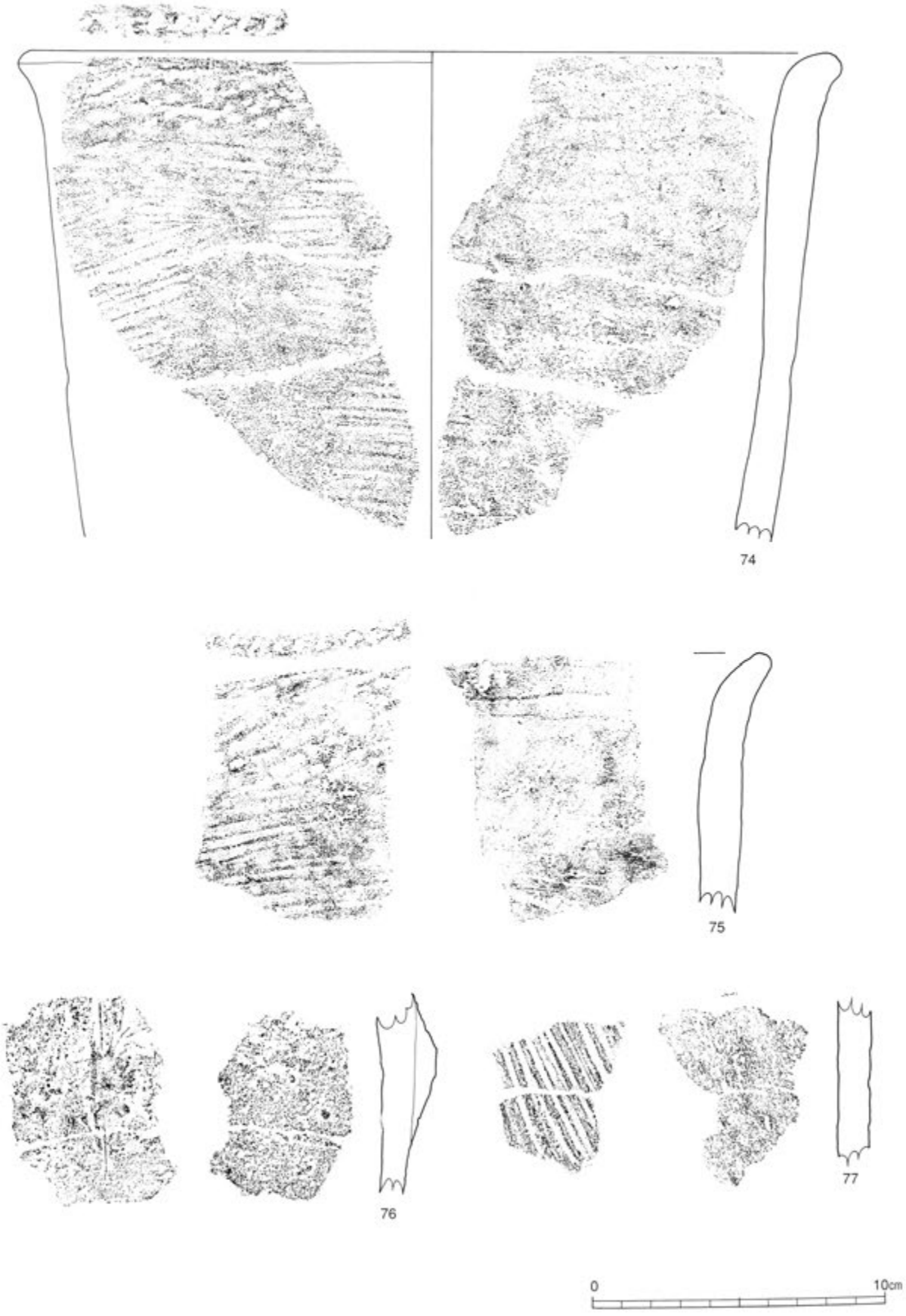
第13図　Ⅱ類土器



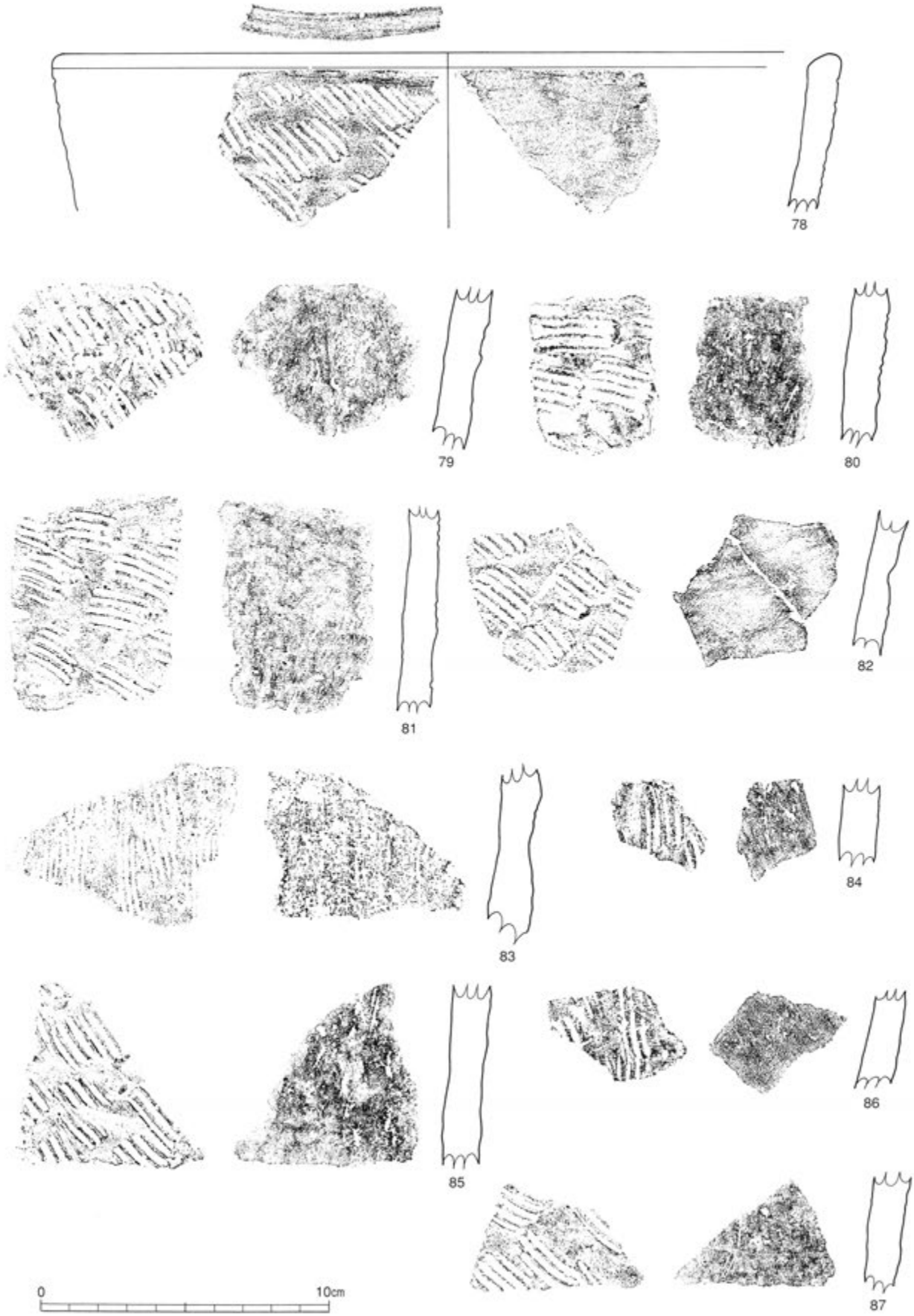
第14図　Ⅲ類土器１



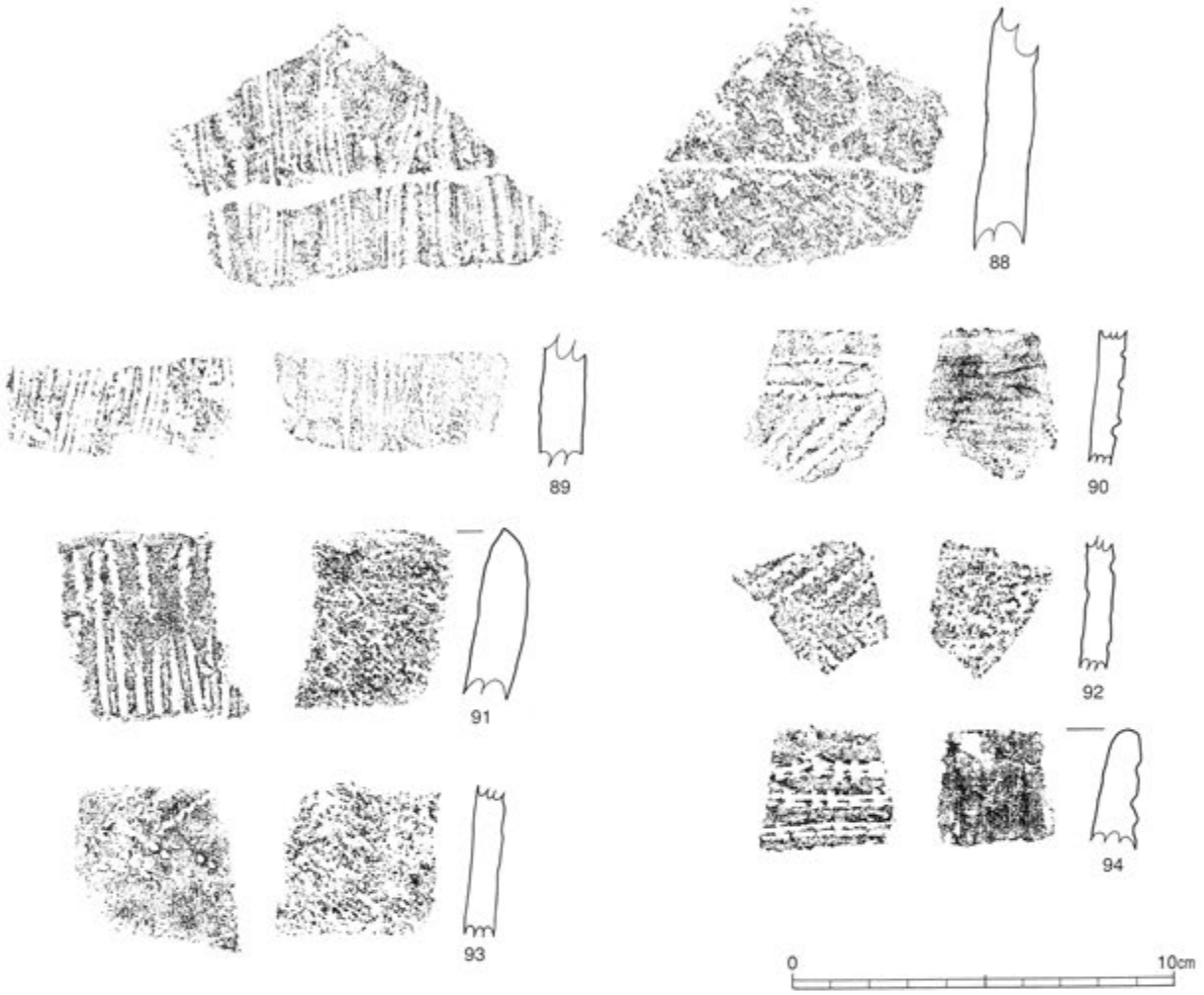
第15図　Ⅲ類土器２・Ⅳ類土器



第16図　Ｖ類土器



第17図　Ⅵ類土器



第18図　Ⅶ類土器

縄文土器Ⅱ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第13図	33	B-11	Ⅳ	茶褐色	茶褐色		○	○		良	貝殻条痕	ケズリ	
	34	B-10	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	35	A-9	Ⅱ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	36	B-11	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	37	B-11	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	38	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	39	B-10	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	40	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色		○		金雲母	〃	貝殻条痕	ケズリ	
	41	B-12	Ⅴ	淡茶褐色	白濁	○	○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	42	B-12	Ⅳ	茶褐色	淡茶褐色	○	○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	43	B-11	Ⅳ	茶褐色	明茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	角筒
	44	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	茶褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒

縄文土器Ⅲ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第14図	45	B-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色		○			良	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	46	B-11	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○				〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	47	B-12	Ⅳ	茶褐色	黒褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	48	B-12	Ⅳ	明茶褐色	明淡茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	49	B-11	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	◎	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	50	B-11	Ⅲ	茶褐色	淡茶褐色	○	◎	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	51	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	淡黒褐色	○	◎			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	52	B-12	Ⅳ	淡茶褐色	白濁	○	○			〃	貝殻条痕	ナデ	
	53	C-10	Ⅲ	淡茶褐色	濁茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突	ケズリ	
	54	A-11	Ⅳ	茶褐色	茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	55	B-12	Ⅲ	白濁	濁茶褐色	○			黒曜石	〃	貝殻条痕	ケズリ	
	56	B-11	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	57	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	淡茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
第15図	58	B-11	Ⅳ	暗茶褐色	濁茶褐色		◎			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	59	C-10	Ⅳ	淡茶褐色	白濁			◎		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	60	B-12	Ⅴ	明茶褐色	白濁		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	61	B-12	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	62	C-10	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	
	63	B-12	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ナデ	
	64	A-9	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻条痕	ケズリ	
	65	N-4	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	66	C-10	Ⅳ	明茶褐色	明茶褐色			◎		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	
	67	B-12	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒
	68	B-11	Ⅳ	淡茶褐色	淡茶褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒
	69	B-12	Ⅳ	茶褐色	茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒
	70	H-8	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	角筒
	71	B-12	Ⅳ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒
	72	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻刺突・貝殻条痕	ケズリ	角筒

縄文土器Ⅳ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第15図	73	B-9	Ⅲ	黒褐色	茶褐色	○	◎	○		良	貝殻条痕	ナデ	

縄文土器Ⅴ類観察表

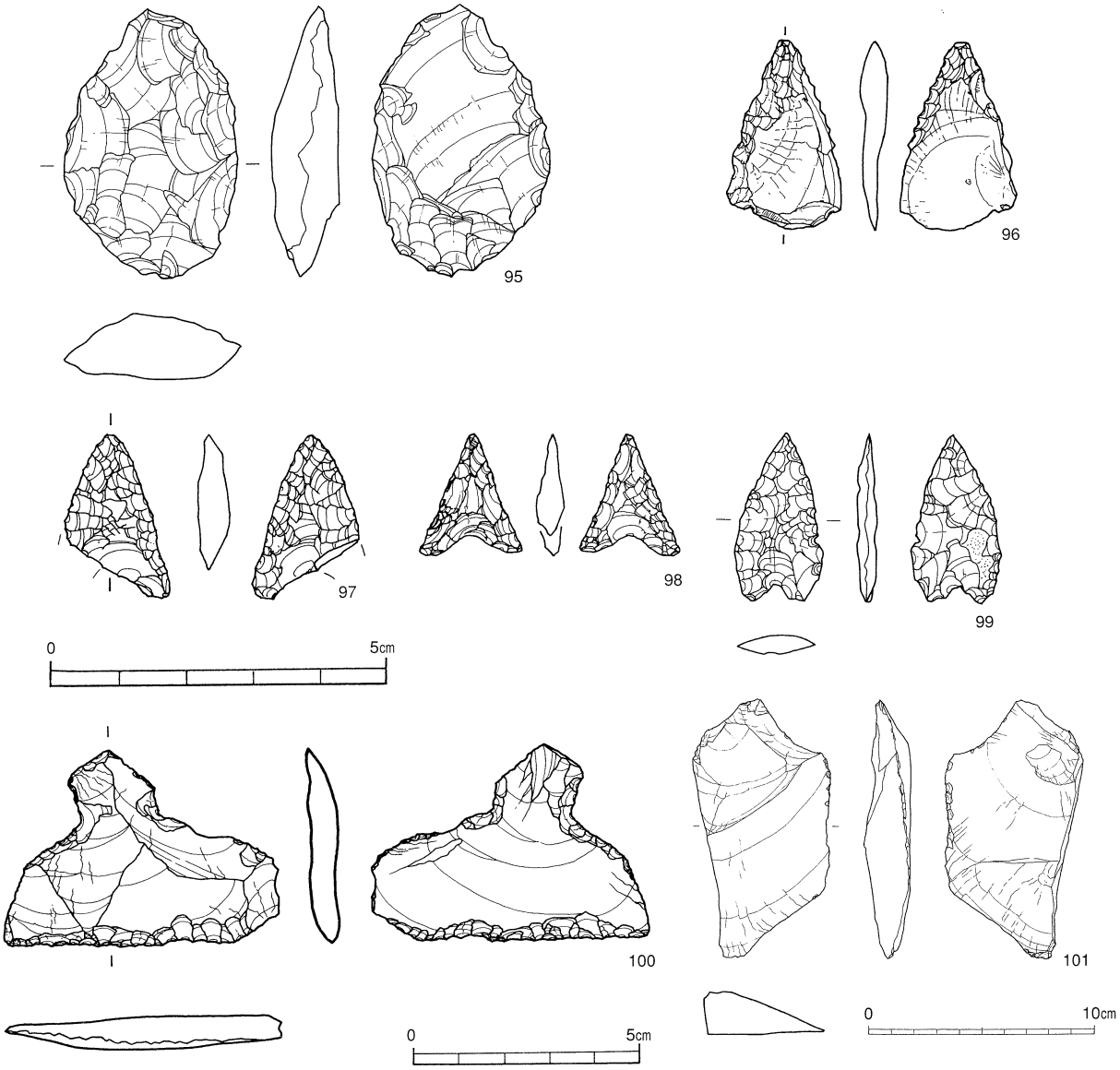
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第16図	74	C-10	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		良	貝殻刺突・綾杉状貝殻条痕	ナデ	
	75	C-10	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突・綾杉状貝殻条痕	ナデ	
	76	C-11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	◎				〃	無文	ケズリ	
	77	H-8	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色	◎				〃	綾杉状貝殻条痕	ケズリ	

縄文土器Ⅵ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第17図	78	B-12	Ⅳ	茶褐色	茶褐色		○	○		良	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	79	B-12	Ⅳ	茶褐色	白濁		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	80	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	81	B-12	Ⅳ	茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	82	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○			〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	83	A-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色		○	○	磁鉄鉱	〃	貝殻条痕による羽状文	ケズリ	
	84	G-8	Ⅲ	茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	85	C-9	SR1	茶褐色	白濁		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	86	B-12	Ⅳ	茶褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	
	87	B-12	Ⅳ	茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	貝殻条痕による羽状文	ナデ	

縄文土器Ⅶ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第18図	88	H-8	Ⅳ	白濁	白濁	○	○	○		良	貝殻条痕	ケズリ	
	89	H-8	Ⅳ	淡茶褐色	白濁		○	○		〃	貝殻条痕	ケズリ	
	90	G-7	Ⅳ	白濁	淡茶褐色	○	○	○		〃	貝殻刺突	ナデ	
	91	G-8	Ⅲ	濁茶褐色	茶褐色		◎			〃	口縁部貝殻刺突＋胴部貝殻条痕	ケズリ	
	92	H-8	Ⅲ	白濁	淡黒褐色		◎			〃	貝殻刺突	ケズリ	
	93	H-8	Ⅳ	淡茶褐色	淡茶褐色		◎	○		〃	貝殻刺突	ケズリ	
	94	H-8	Ⅳ	淡黒褐色	暗茶褐色		○	○		〃	貝殻押し引き	ナデ	



第19図　縄文時代早期出土石器１

97は上牛鼻産黒曜石製石鏃の基部欠損品である。最大長2.9㎝，最大幅は予測で1.75㎝である。長幅比1.65でほぼ二等辺三角形を呈する。

98は安山岩製の石鏃である。最大長1.8㎝，最大幅1.4㎝の長幅比は1.28で，器形はほぼ二等辺三角形を呈している。側縁部に鋸歯状の仕上げが施されており，基部の抉りがやや深い。

99は，瑪瑙製の石鏃である。最大長2.6㎝，最大幅1.35㎝，長幅比1.92で，ほぼ縦長の二等辺三角形を呈する。側縁部に鋸歯状の仕上げを施しており，基部はすぼまり抉りはやや浅いがＵ字状を呈する。

②　石匙（100）

100は硬質頁岩製の石匙である。横形で素材剥片の剥離面を大きく残すつまみ部付近の右側縁部に集中的な加工が施され，刃部にかけて大剥離が観察できる。刃部は周縁に形成される。

第20図　縄文時代早期出土石器 2

③　微細剥離痕のある剥片（101）

101は頁岩を用いた最大長12㎝，最大幅6.2㎝，厚さ2.1㎝，重さ124ｇで，大型剥片の右側縁部に削器様の刃部が形成されている。右側縁部には，中央部から上部にかけて微細な剥離痕が複数観察される。

④　打製石斧（102・103）

102・103は頁岩製の短冊形の打製石斧である。

102は最大長9.6㎝，最大幅6.6㎝で，両面に自然面を残しながら，側縁部を細かく調整し形状を整えている。103は最大長14㎝，最大幅９㎝で両面に自然面を多く残し，側縁部の抉りと刃部に若干の調整を入れている。使用痕が顕著であり，刃部及び側縁部の摩滅が激しい。しかし，全体的に作りが雑である。

⑤　磨石，叩石，凹石（104～107）

全て砂岩製である。重さは300～500ｇに集中している。104・106・107は側縁部に敲打痕が多数観察できる。104は叩石である。風化が激しいため観察が困難であるが，下端部に著しい打痕が観察される。106は石鹸状の磨石である。最大長10㎝，最大幅7.9㎝，厚さ4.3㎝で，敲打によりやや楕円に近い形状である。裏面に使用痕と，側面に敲打痕を観察できるため，磨石兼叩石の両使用目的を達成していたものと思われる。

107は叩石である。最大長7.7㎝，最大幅6.6㎝，厚さ5.3㎝と形状は球に近い。重さは300～500g後半に集中している。

108は短冊状を呈し上部・下部の先端部の敲打痕が集中している。

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器　種	出土区	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考
第19図	95	Ⅳ	石　鏃	G－10	頁　岩	4.2	2.6	1.0	11.15	
	96	Ⅳ	石　鏃	B－12	安山岩	2.9	1.8	0.45	1.3	
	97	Ⅳ	石鏃未製品	G－10	黒曜石	2.9	1.8	0.45	1.33	上牛鼻産
	98	Ⅳ	石　鏃	E－9	安山岩	1.8	1.4	0.5	0.62	
	99	Ⅳ	石　鏃	B－12	瑪　瑙	2.6	1.4	0.3	0.78	
	100	Ⅳ	石　匙	H－8	硬質頁岩	4.5	6.3	0.75	17.2	
	101	Ⅴ	礫　器	G－7	頁　岩	12.0	6.2	2.1	124.0	
第20図	102	Ⅳ	打　斧	B－11	頁　岩	9.6	6.0	2.4	179.0	
	103	Ⅳ	打　斧	B－11	頁　岩	11.0	5.9	2.2	190.6	
	104	Ⅳ	叩　石		砂　岩	10.2	8.2	5.7	565.0	
	105	Ⅳ	凹　石	H－8	砂　岩	9.8	6.7	4.7	370.0	
	106	Ⅳ	磨石・叩石	B－12	砂　岩	10.0	7.9	4.3	458.2	
	107	Ⅳ	磨　石	G－7	砂　岩	7.7	6.6	5.3	342.2	
	108	Ⅳ	叩　石	B－12	砂　岩	11.0	4.6	2.45	167.4	

3　縄文時代前期～晩期（Ⅲ～Ⅱ層）の調査

縄文時代前期～晩期の遺構・遺物はⅡ～Ⅲ層で発見された。

（1）　遺構

①　溝状遺構（SR－1）（第22図）

A～H－8～10区にかけてⅢa層で検出された。南北約70ｍに渡って中世溝跡に沿う様な形で見つかった。北側部分が，中世溝跡に切られている。幅は最大幅約3ｍ60㎝，最小幅2ｍ程度で，深さはⅢａ層上面から18㎝以上である。形状は西側にやや膨らみをもたせながらカーブしている。遺構の全体は地形の平坦な面に沿って検出された。E・F－8・9区では硬化面のみ確認できたが，本来は同様の深さがあったものと思われる。底面にテフラが固着していた。これは，後述するように，分析の結果「灰ゴラ」であることが判明した。また，埋土中から入佐式土器が出土していることからも縄文時代晩期と考えられる。

（2）　Ⅲ～Ⅱ層の遺物

Ⅲ～Ⅱ層の遺物総数は1,121点であった。特に縄文時代晩期の遺物が大半を占めた。

Ⅷ類（第23・24図　109～117）

109は口縁部である。外面は斜位の，内面は横位の貝殻条痕文がナデ・ケズリの調整後施されている。胎土は粗く，小礫を多数含む。比較的薄手で，口縁部形状は直口する。110も口縁部だが，外傾し，横位の貝殻条痕文はややはっきりしない。胎土は比較的密で小礫が少ない。内面はナデ・ケズリによる調整が丁寧に施されている。111・112は胴部である。111は斜位の，112ははっきりとした横位の貝殻条痕文が施されている。いずれも小礫を多く含み，胎土は粗い。113は下部に補修孔が施される口縁部である。114～117はミミズバレ状の隆帯文から口縁下部と思われる。114～117はナデ・ケズリの調整後，横位の貝殻条痕が施され，ミミズバレ状の隆帯文が施される。内面は横位のケズリによる調整が施され，胎土は小礫が少なく比較的密である。

Ⅸ類（第25図　118～122）

118～122・124は円筒土器の口縁部である。口唇部には指頭またはヘラ状工具による凸凹文様が施されている。口縁部から胴部にかけて118・119は同じく指頭による沈線が格子状の文様に施され，122はヘラ状工具による物と思われる横位の文様が断続的に施されている。118・120～122はいずれも土器の内外面ともナデによる調整が施され，特に内面には指の圧痕が顕著に観察される。胎土を実体顕微鏡で観察すると118～121には火山ガラスが多く含まれているのを観察できた。

Ⅹ類（第26図　123～133）

123～126の口唇部にはキザミ目が施され，口縁部は波状を呈する。口縁部形状は123・126が口唇部付近にかけてやや内弯するが，124・125・127～131は外反する。胴部文様は123～126はヘラ状工具で幾何学文様が曲線的に描かれているが，127～133は平行沈線が直線的に施されている。

Ⅺ類（第27図　134～141）

134・135・137・139は口縁部で外反もしくは外傾する。134はやや細いヘラ状工具で口唇部全体にキザミ目が施される。134～138は口縁部から胴部にかけて波状文が施され，内外面ともケズリによる調整が施されている。また，胎土に多量の金雲母を含む。

Ⅻ類（第28図　142～144）

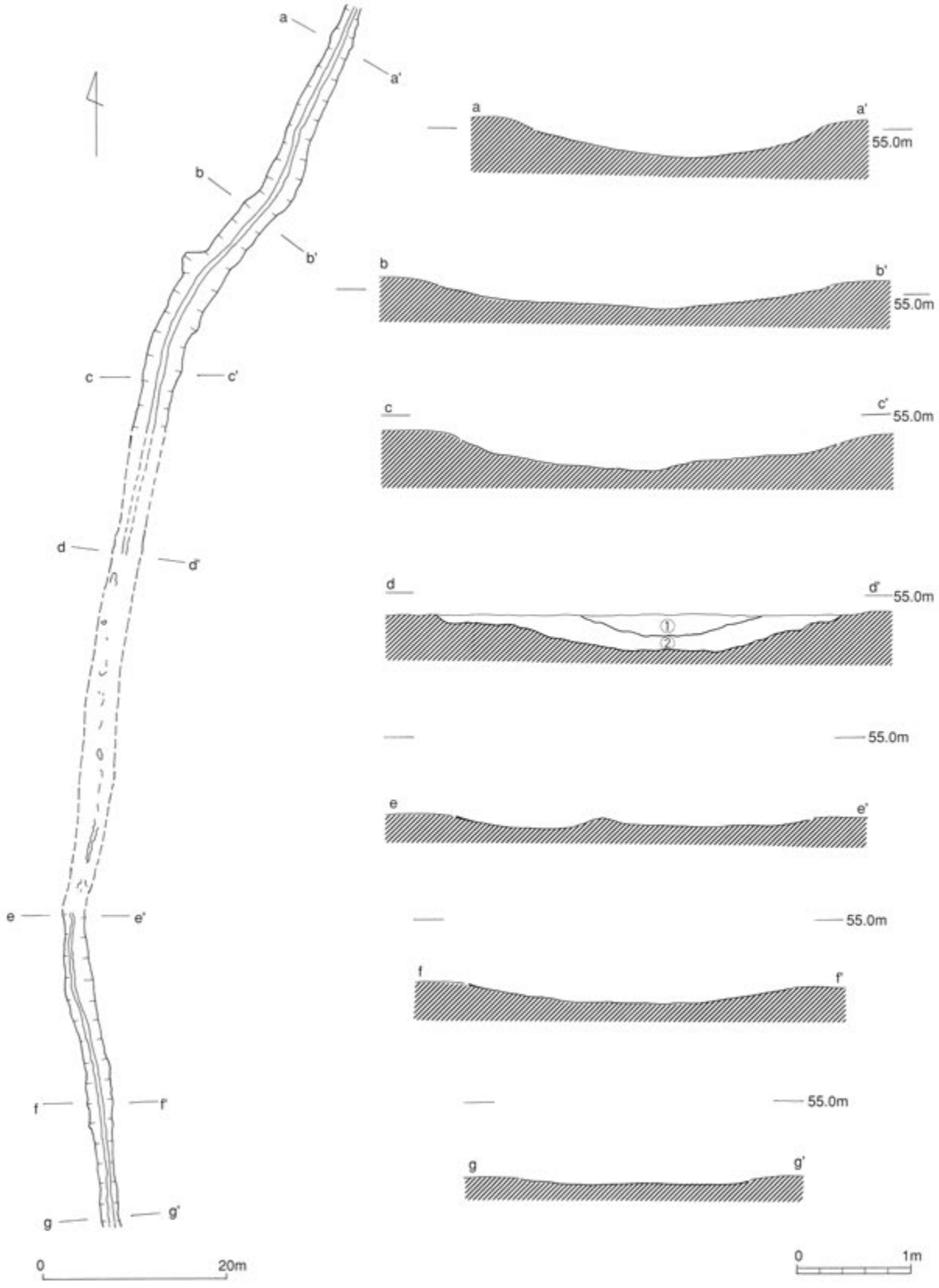
142～144は口唇部分にかけて2～3条の文様が施される。口縁部形状は大きく外反し，144は瘤状の突起がある。細粒が多く精製である。

ⅩⅢ類（第28図　145）

145は磨り消し縄文の技法を用い，内外面ともナデを施している。立ち上がりはやや外反し，3条の沈線が施されている。

ⅩⅣ類（第29図　146～172）

146～156は口縁部である。146～150は上部にかけて2～3条の横走沈線が施されている。151～154は沈線は施されていない。155～157ははっきりした横走沈線とは言い難いが，調整のナデ・ケズリの中で生じた文様を自然に生かしたと思われる。特に，156は横位のナデ上に斜位の比較的浅い横走沈線が施され，何らかの意図的な作業であったことを予想させるものとなっている。157～163は頸部である。157・159は上部に1～3条，164は比較的浅いが幅の広い横走沈線文が4条施されている。横走沈線文が施されているものに比



①	黒褐色	質的には層a層と同じであり，粒子が細かくそろっている．しまりがあって硬い．②が黒ずんだものである．
②	茶褐色	質的には層a層と同じである．層a層よりも黒ずんでいる．

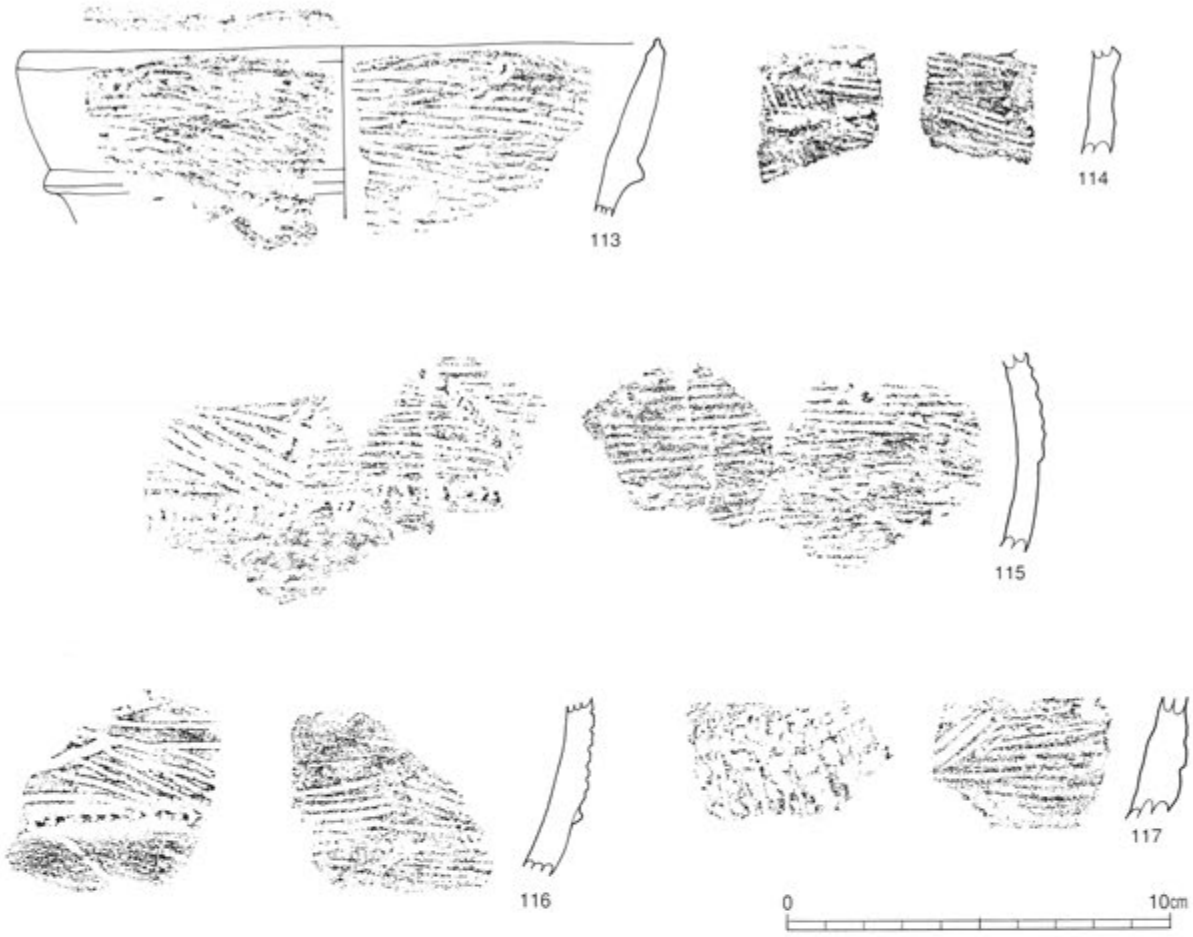
最底面よりも3cmくらい浮いた所に硬下面が見られる．3cm大のブロック状になった薄緑色で粗めの黒砂質状である．
細かな多孔質のものである．上のかたまりであるかどうか判然としない．

第21図　縄文晩期遺構（溝状遺構）

建石ヶ原遺跡　Ⅲ～Ⅱ層土器分類表

分類	項　目	概　　要
Ⅷ類	器　　形	口縁部はやや外傾する。比較的薄手で口縁部が直行する砲弾型を呈する。底部は尖底・丸底を呈する。
	文　　様	全体に斜位・横位の貝殻条痕文が施される。口縁下部にキザミ目の入ったミミズバレ状の隆帯文が施される。器面全体に大胆な貝殻条痕文が施されているものには胎土に多くの小礫を含むものがあるが，全体としては胎土は密である。
	調　　整	内外面ともナデ・ケズリによる調整が見られる。
	備　　考	
	土器形式	轟ａ式土器
	図 番 号	109～117
Ⅸ類	器　　形	口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形である。
	文　　様	口唇部には指頭またはヘラ状工具による凹凸文様が施されている。口縁部から胴部にかけて同じく指頭やヘラ状工具によって格子状沈線もしくは横位の文様がまんべんなく施されている。
	調　　整	ナデによる調整が施され，内面には指の圧痕が観察できる。
	備　　考	胎土を実体顕微鏡で観察したところ，火山ガラスを多く含むものもあることが確認できた。
	土器形式	阿高Ⅰ式土器
	図 番 号	118～122
Ⅹ類	器　　形	口縁部は波状を呈する。口縁部にかけてほぼ直行するものと，緩やかに外傾するもの，口唇部にかけて外反するものがある。口唇部が波状を呈するものの中にはやや内反するものがある。
	文　　様	口唇部にはキザミ目が施され，口縁部から胴部にかけてヘラ状工具による，幾何学的文様が曲線的に施されるものと，平行沈線が直線的に施されるものとがある。
	調　　整	ナデによる調整が施される。
	備　　考	
	土器形式	指宿式土器
	図 番 号	123～133
XI類	器　　形	口縁部にかけてほぼ直行するもの，外反するもの，内弯するものがある。無文もしくは突帯のあるものは外反する。
	文　　様	やや細いヘラ状工具で，口唇部全体にキザミ目が施される。口縁部から胴部にかけては縄文が施される。
	調　　整	内外面ともナデ・ケズリによる調整が見られる。
	備　　考	
	土器形式	曽畑式土器に該当すると思われるが判然としない。
	図 番 号	134～141
XII類	器　　形	口縁部が外反する。
	文　　様	口縁部に２～３条の文様が施される。瘤状の突帯も形成される。
	調　　整	ナデ・ケズリによる調整が見られる。
	備　　考	細粒が多く，精製である。
	土器形式	市来式土器
	図 番 号	142～144
XIII類	器　　形	直立する。
	文　　様	磨り消し縄文と３条の沈線文を施す。
	調　　整	内外面ともナデによる調整が見られる。
	備　　考	
	土器形式	西平式土器
	図 番 号	145
XIV類	器　　形	深鉢に伴う形状を呈する。底部の立ち上がりから内傾し，胴部に向かって外反するものと立ち上がりから外傾するものとがある。更に頸部で内弯し，口縁部にかけて外反する。
	文　　様	口縁上部に２～３条の横走沈線が施されているものと，文様が判然としないものがある。また，横位のナデ上に斜位の比較的浅い横走沈線文が施される。
	調　　整	横走沈線が施されていないものが精製である。
	備　　考	実体顕微鏡で全体的に比較的多量の火山ガラスが含有されていることが確認できた。
	土器形式	上加世田式土器
	図 番 号	146～172
XV類	器　　形	浅鉢・マリ型を呈する。胴部・頸部に明瞭な稜をもち，口縁部にかけて外反もしくは，内弯するもの。また，緩やかな曲線を描きながら口縁部で内弯し，口縁上部で屈曲外反するものがある。
	文　　様	口縁部に２条のヘラ沈線文が施されている。
	調　　整	緻密なヘラナデによる調整が綿密に施されている。ほとんどが精製であり，黒色磨研のものもある。胎土の状態も密である。
	備　　考	浅鉢は胴径と口径がほぼ一致するものと，口径が胴径に対し，大幅に広がっているものがある。
	土器形式	入佐式土器・黒川式土器
	図 番 号	173～186

第22図　Ⅷ類土器 1



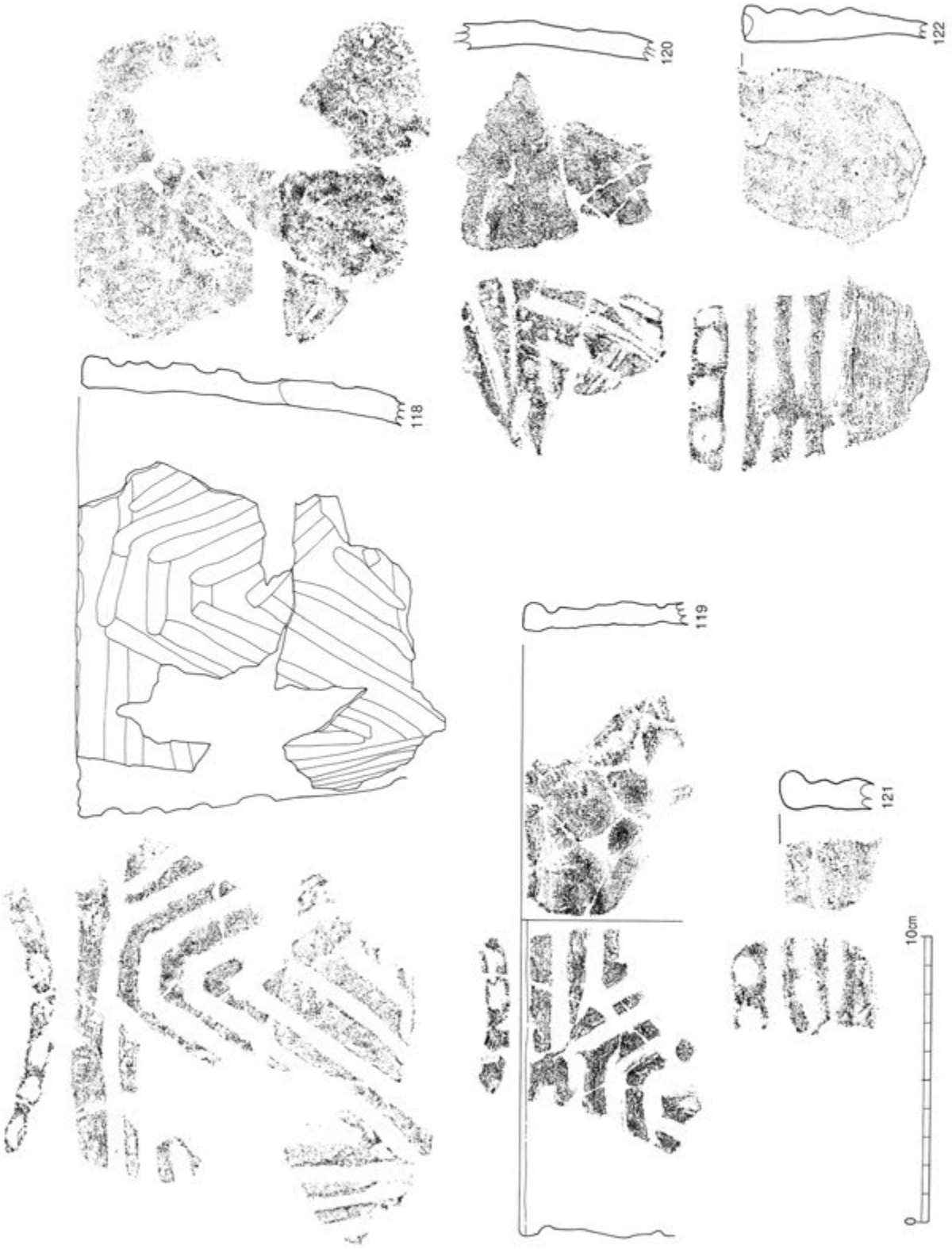
第23図　Ⅷ類土器 2

縄文土器Ⅷ類観察表

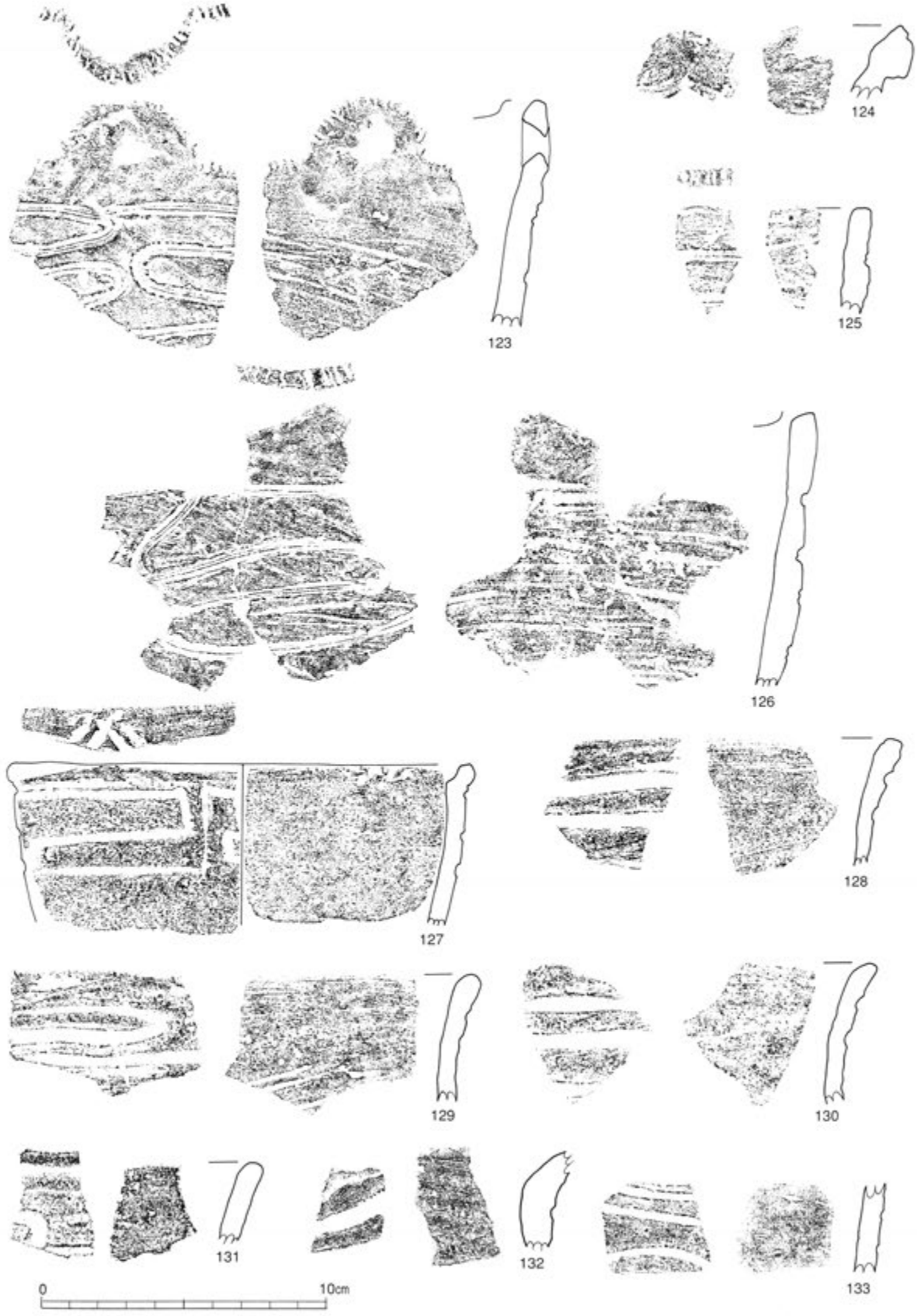
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第22図	109	B-9	Ⅲ	黒褐色	淡黒褐色	○	◎	○		良	貝殻条痕	ケズリ	
	110	G-8	Ⅲ	黒褐色	淡黒褐色		○	○		〃	貝殻条痕	ナデ	
	111	F-9	Ⅲ	黒褐色	淡茶褐色	○	◎	○		〃	貝殻条痕	ナデ	
	112	B-9	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色		○		火山ガラス	〃	貝殻条痕	ナデ	
第23図	113	H-7	Ⅲ	暗茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	口縁部ミミズバレ状突帯+貝殻条痕	ケズリ	
	114	F-10	Ⅲ	茶褐色	茶褐色		○	○		〃	口縁部ミミズバレ状突帯+貝殻条痕	ナデ	
	115	B-12	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色		○			〃	口縁部ミミズバレ状突帯+貝殻条痕	ナデ	
	116	B-12	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色		○		火山ガラス	〃	口縁部ミミズバレ状突帯+貝殻条痕	ナデ	
	117	O-3	Ⅱ	茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	貝殻押し引き	ケズリ	

縄文土器Ⅸ類観察表

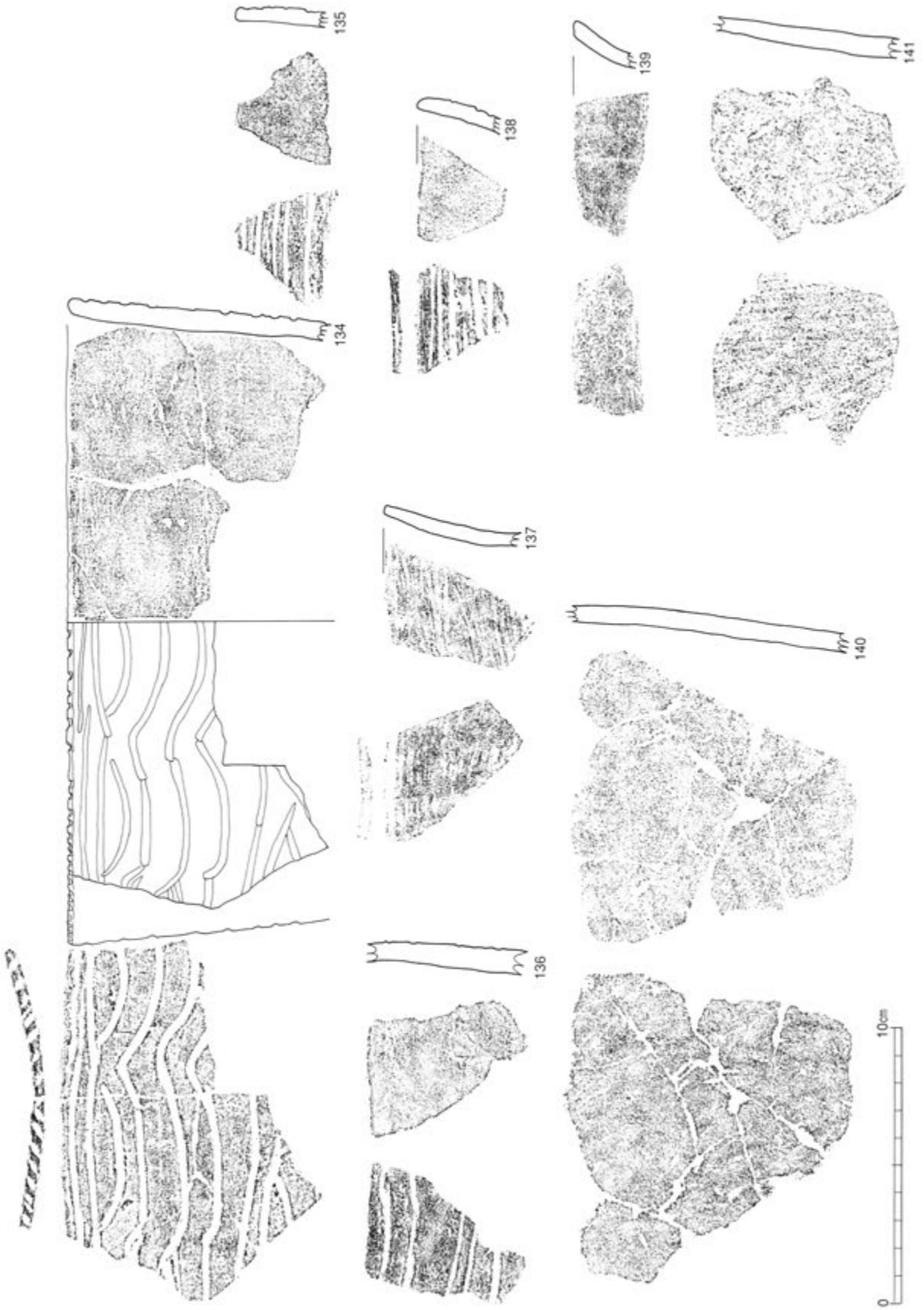
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第24図	118			暗茶褐色	淡茶褐色		○	○	火山ガラス	良	指	ナデ	
	119			茶褐色	茶褐色		○	○	火山ガラス	〃	指	ケズリ	
	120	G-6	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色		○	○	火山ガラス	〃	指	ナデ	
	121		Ⅲ	淡茶褐色	淡黒褐色		○	○	火山ガラス	〃	指	ナデ	
	122	G-7	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○			〃	指もしくはヘラ	ナデ	



第24図　Ⅸ類土器



第25図　X類土器



第26図　ＸＩ類土器

第27図　ＸⅡ・ＸⅢ類土器

べ，施されていないものの方が精製である。165～172は底部である。底部から屈曲外反し，側面に指圧痕が観察される。底面は，165・166・171・172が比較的精製であり，164・167～170は比較的粗製である。なお，172は浅鉢であるが，165～171は深鉢である。実体顕微鏡で胎土を観察したところ，160・161・167～169に多数の火山ガラスが含有していた。また，154・157・165・170・171は他の土器に比べ火山ガラスが比較的多く含まれていた。

XV類（第30図　173～185）

いずれも，173～182は晩期の浅鉢で，178が粗製である以外，全て精製である。180以外はすべて緻密なヘラナデ・ヘラミガキが施されており，174・177・179は黒色磨研である。いずれも精製である。173～180は口縁部で，167・168には口縁上部にかけて２条のヘラ沈線文が施されている。173・174・177・178・181・182は胴部もしくは口縁部に明瞭な稜をもつ。

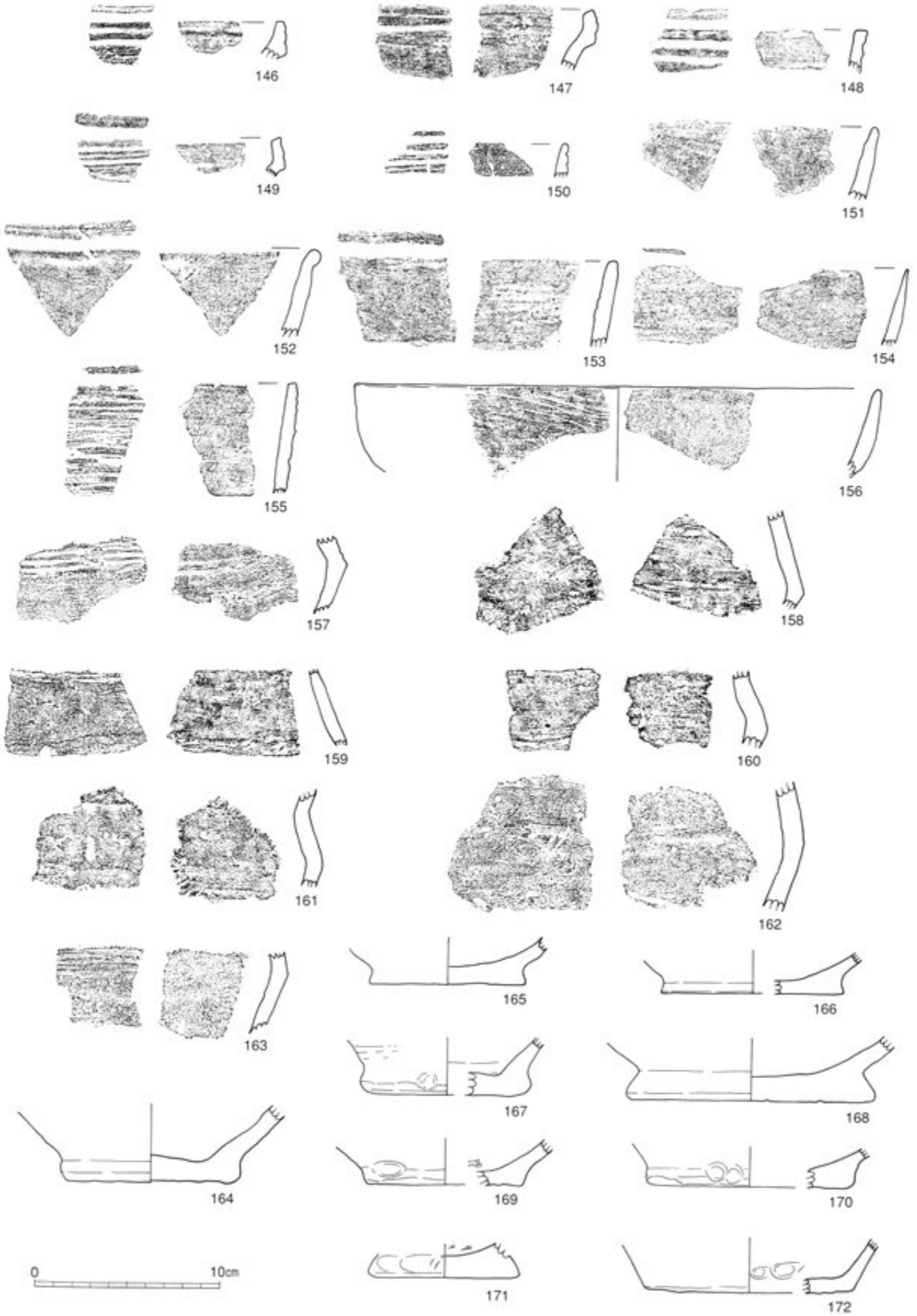
177は胴径と口径がほぼ一致するのに対し，178は口径が胴径に比較し，大幅に広がっている。186は口唇部付近の粗製の突帯である。

縄文土器Ｘ類観察表

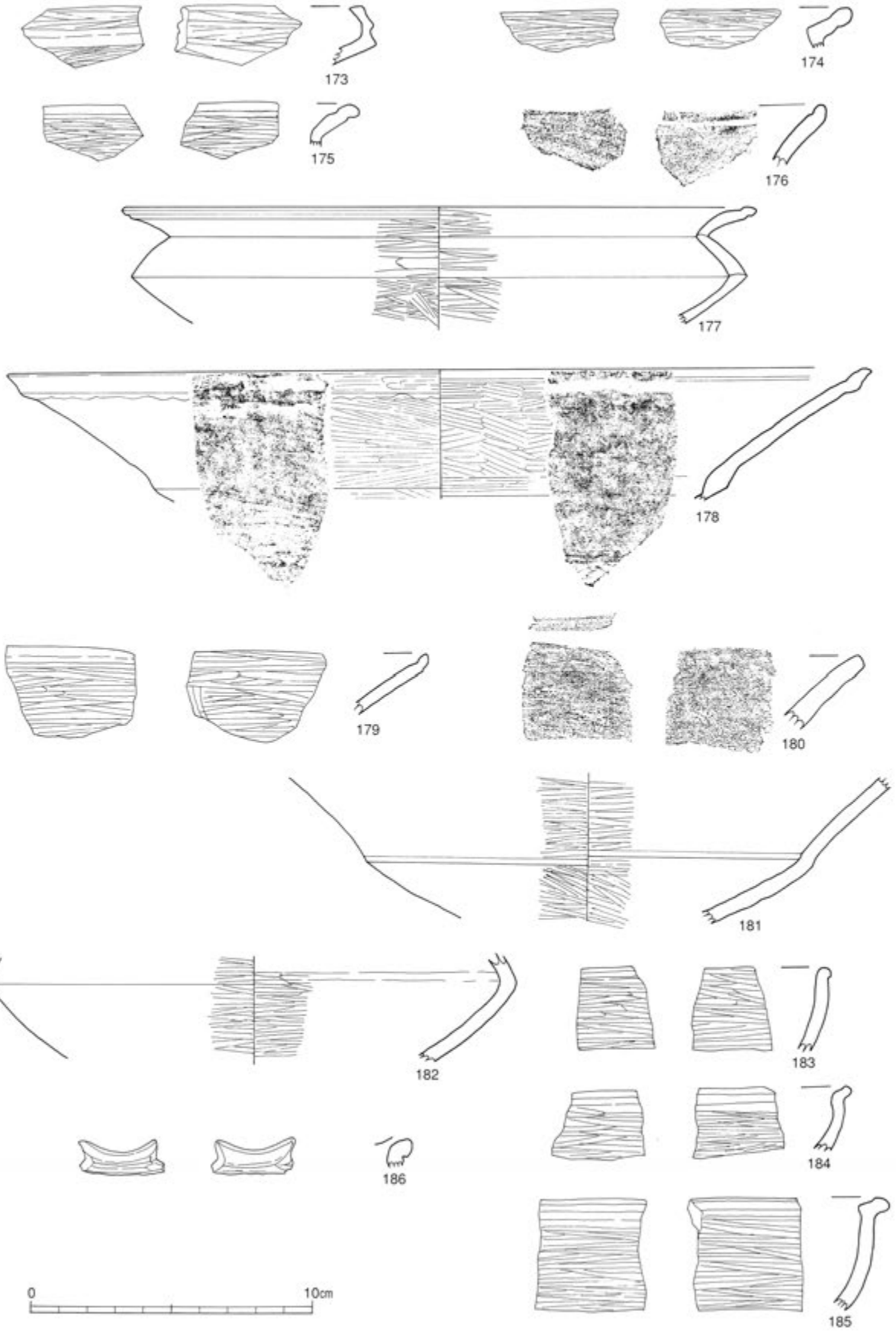
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第25図	123	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	黒褐色		○			良	指orヘラ沈線	ケズリ	
	124	F-8	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色		○	○		〃	指orヘラ沈線	ナデ	
	125	F-8	Ⅲ	黒褐色	淡茶褐色		○	○		〃	指orヘラ沈線	ケズリ	
	126	F-8	Ⅲ	淡茶褐色	淡黒褐色		○	○		〃	指orヘラ沈線	ケズリ	
	127	H-8	Ⅲ	明茶褐色	淡茶褐色		○	○		〃	指orヘラ沈線	ナデ	
	128	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色		○			〃	指orヘラ沈線	ナデ	
	129	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色		○			〃	指orヘラ沈線	ナデ	
	130	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色		○			〃	指orヘラ沈線	ケズリ	
	131	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色		○	○		〃	指orヘラ沈線	ナデ	
	132	B-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	◎		〃	指orヘラ沈線	ナデ	
	133	B-11	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	◎		〃	指orヘラ沈線	ナデ	

縄文土器ＸⅠ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第26図	134	B-11	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	◎		良	ヘラ沈線	ナデ	
	135	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	136	A-10	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○	◎		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	137	B-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○			〃	ヘラ沈線	ナデ	
	138	F-8	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○			〃	ヘラ沈線	ナデ	
	139	A-9	Ⅲ	暗茶褐色	淡茶褐色		○			〃	ヘラ沈線	ナデ	
	140	G-6	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色		○		火山ガラス	〃	ヘラ沈線	ナデ	
	141	H-8	Ⅲ	淡茶褐色	淡黒褐色	○	○			〃	ヘラ沈線	ナデ	


146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
165
166
167
168
164
169
170
171
172
0
10cm

第28図　ⅩⅣ類土器



第29図　ＸＶ類土器

縄文土器ＸⅡ・ⅩⅢ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第27図	142	E-9	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色				火山ガラス	良	指	ナデ	
	143		表採	明茶褐色	明茶褐色					〃	口縁部刺突	ナデ	
	144	E-9	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色					〃	口縁部刺突＋貝殻条痕	ナデ	
	145	C-8	Ⅱ	明茶褐色	黒褐色					〃	磨消縄文？	ナデ	

縄文土器ⅩⅣ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第28図	146	G-9	Ⅲ	暗茶褐色	淡黒褐色					良	ヘラ沈線	ナデ	
	147	C-12	Ⅲ	茶褐色	茶褐色		○			〃	ヘラ沈線	ナデ	
	148	A-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	149	A-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色		○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	150	K-4	Ⅲ	黒褐色	黒褐色					〃	ヘラ沈線	ナデ	
	151	B-9	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色					〃	無紋	ナデ	
	152	H-8	Ⅳ	茶褐色	濁茶褐色		○	○		〃	無紋	ナデ	
	153	B-9	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色		○			〃	無紋	ナデ	
	154	C-10	Ⅳ	白濁	白濁		○		火山ガラス	〃	無紋	ナデ	
	155	H-8	Ⅲ	濁茶褐色	茶褐色		○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ	
	156	C-10	Ⅲ	淡茶褐色	濁茶褐色	○	○	○		〃	ヘラ沈線	ナデ＋ケズリ	
	157	D-9	SR1	茶褐色	濁茶褐色		○		火山ガラス	〃	ヘラ沈線	ケズリ	
	158	B-11	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		〃	無紋	ケズリ	
	159	C-10	Ⅲ	白濁	白濁					〃	無紋	ナデ	
	160	B-9	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	火山ガラス多	〃	無紋	ナデ	
	161	B-9	Ⅲ	暗黄褐色	暗黄褐色		○	○	火山ガラス多	〃	無紋	ナデ	
	162	D-10	Ⅲ	淡黒褐色	暗茶褐色	○	○			〃	無紋	ナデ	
	163	L-4	Ⅲ	暗黄褐色	淡黒褐色		○			〃	ヘラ沈線	ナデ	
	164	B-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色		○	○		〃	無紋	ケズリ	底部圧痕
	165	K-7	Ⅲ	明茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	火山ガラス	〃	無紋	ナデ	
	166	J-6	Ⅲ	淡黄褐色	淡黒褐色	◎	○			〃	無紋	ナデ	
	167	B-9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色			○		〃	無紋	ナデ	
	168	G-8	SR1	茶褐色	白濁	◎	○	○	火山ガラス多	〃	無紋	ナデ	
	169	C-10	Ⅲ	茶褐色	淡黒褐色	○			火山ガラス多	〃	無紋	ナデ	
	170	C-10	Ⅳ	淡茶褐色	暗茶褐色	○	○		火山ガラス	〃	無紋	ナデ	
	171	G-8	Ⅲ	淡茶褐色	暗黒褐色	○	○		火山ガラス	〃	無紋	ナデ	
	172	H-8	Ⅲ	茶褐色	茶褐色		○	○		〃	無紋	ナデ	

縄文土器ⅩⅤ類観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第29図	173	B-9	Ⅱ	茶褐色	茶褐色		○	○		良	ヘラ沈線	ヘラナデ	
	174	G-9	Ⅲ	黒褐色	黒褐色					〃	ヘラ沈線	ヘラナデ	
	175	H-9	Ⅲ	黒褐色	黒褐色					〃	黒色磨研	ヘラナデ	
	176	H-7	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○		〃	無文	ヘラナデ	
	177	C-9	SR1	黒褐色	黒褐色	○	○			〃	無文	ヘラ磨き	
	178	F-9	Ⅱ	淡黒褐色	淡黒褐色		○			〃	無文	ヘラ磨き	
	179		表採	黒褐色	黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	180	E-9	Ⅲ	濁黒褐色	明茶褐色		○	○		〃			
	181	B-9	Ⅲ	茶褐色	明茶褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	182	G-7	Ⅱ	茶褐色	明茶褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	183		表採	黒褐色	淡黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	184	C-10	Ⅲ	黒褐色	淡黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	185	C-10	Ⅲ	淡茶褐色	黒褐色					〃	無文	ヘラ磨き	
	186	C-9	SR1	暗茶褐色	暗茶褐色				火山ガラス	〃		ヘラ磨き	

① 石鏃（第31図　187～208）

Ⅲ層出土の石鏃は22点である。

分類は窪見ノ上遺跡の第57図石鏃分類表に準じて，石鏃の形状，長幅比，基部をもとに下記の通り類別に分けた。

Ⅰ類：187（A－a－a）

187は安山岩製で裏面に主剥離面を残す。長幅比が1.05である。基部が平基となる正三角形鏃である。

Ⅱ類：188～193（A－a－b）

188はチャート製，189は黒色ガラス質で良質の黒曜石製，190・191・193は安山岩製，192は硬質頁岩製である。長幅比が1～1.5でほぼ正三角形を呈し，基部は浅い抉りが加工されている。

190・192・193は側縁部が鋸歯状に加工されている。

Ⅲ類：194～197・199（A－a－c）

194・196・199は黒色ガラス質で良質の黒曜石製，195は頁岩製，197は安山岩製である。長幅比が1～1.5でほぼ正三角形を呈し，基部の抉りがやや深く加工されている。

199は表面右側辺部付近に気泡による孔がある。

Ⅳ類：200（A－a－d）

200は黒色ガラス質の黒曜石製である。長幅比は1.25である。

Ⅴ類：201・202（A－b－b）

201～202は黒色ガラス質の黒曜石製である。

202は側縁部が鋸歯状に加工されている。207は瑪瑙製である。長幅比1.92である。

Ⅵ類：198・206（A－b－c）

198は安山岩製で，206は上牛鼻産の黒曜石製である。長幅比1.5～2でほぼ二等辺三角形を呈し，基部の抉りが比較的深い。

198は基部にかけて膨らむように整形されている。双方とも側辺部が鋸歯状に加工されている。

Ⅶ類：205（A－b－d）

205は頁岩製で基部に深い抉入部をもつ。長幅比1.11である。先端部にかけて加工が入念に施された鋸歯状の側縁部をもつ。

Ⅷ類：203（A－c－b）

203は瑪瑙製で薄手を呈する。長幅比は2.0である。

Ⅸ類：204（B－b－d）

204は三船産の黒曜石製である。長幅比は1.07である。先端部と基部の間に肩部をもつような形になっている。先端付近の側辺部には細かい調整が入る。

Ⅹ類：208（B－b－b）

208は安山岩製で204と同様の形状だが，先端部がやや長めで抉入部が浅い。長幅比1.11で五角形を呈し，基部の抉りはやや浅い。

② 石錐（ドリル）（第32図　209）

209はチャート製のドリルである。右上側縁部の大剥離面をつまみ部として意識している。先端部は欠損しているが，押圧剥離で細身に整形し，側縁部の加工も念入りに施されている。特に先端部が強調される形状である。

③ 作業面再生剥片（第32図　210）

210は上牛鼻産の黒曜石を素材とした石核の作業面再生剥片である。打面は単設で，自然面をそのまま利用している。

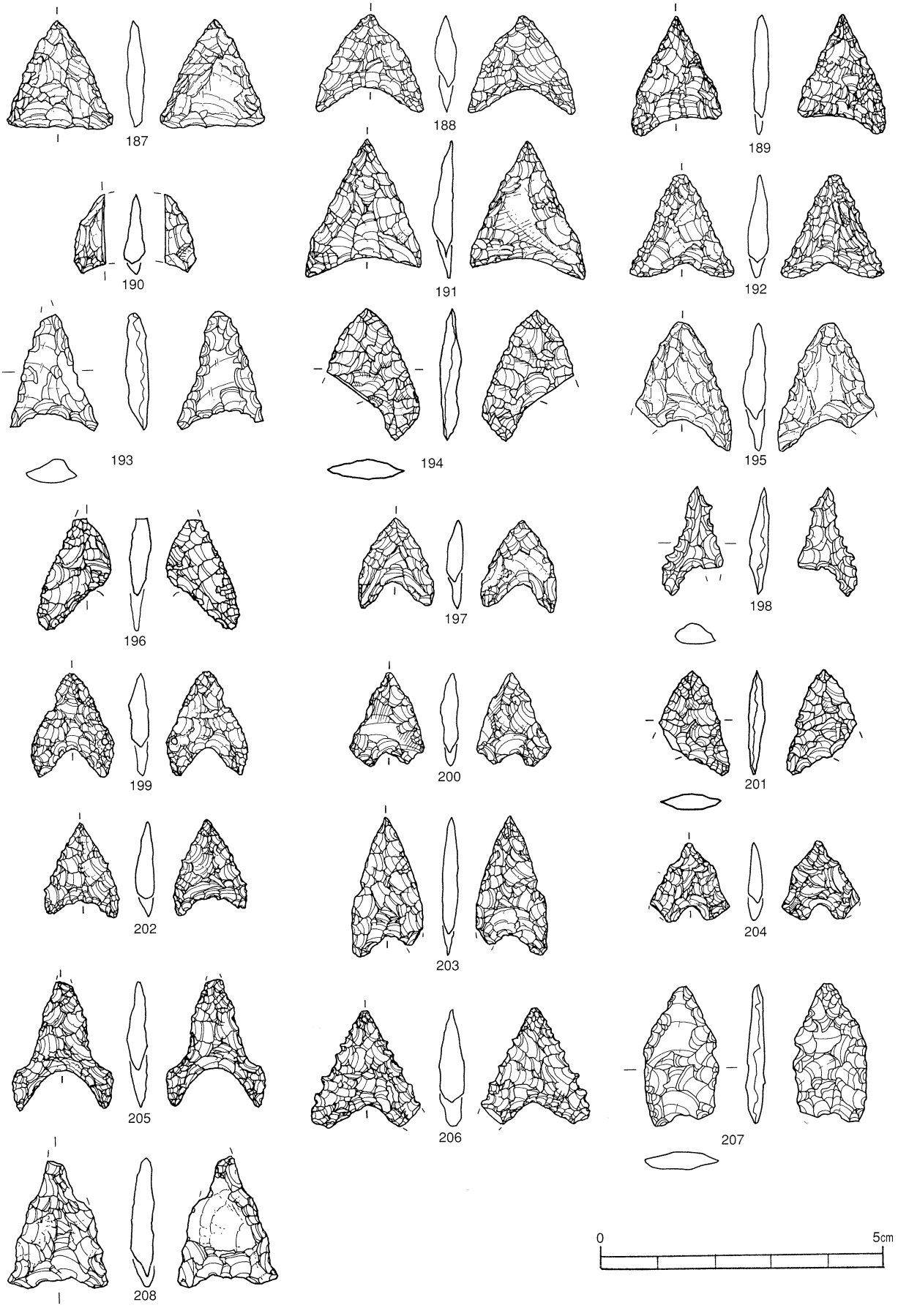
④ 礫器（第33図　211～215）

211～215は頁岩製の礫器である。211は表裏に節理面が観察できる。両面に剥離面を残すが細かい調整がなく，使用痕が観察できないため，製作途中で遺棄したものと思われる。

212は円礫の一端から両面に大剥離を施し，刃部を形成している。刃部には使用に伴うと考えられる細かい剥離が観察される。裏面の一部に摩滅痕が認められる。213は最大長21㎝，最大幅9.75㎝，重さ628ｇと大型の礫器である。片面に大剥離が数回にわたって繰り返され，反対の面は自然面である。側縁部に調整が見られるが，使用痕は確認できなかった。石斧の素材の可能性もある。214は円礫から得られた剥片を素材とし，背面の右側縁に数回の二次加工が施される。215は転石の一端から大きな剥離を一回加えたものである。

⑤ 磨石・敲石（第33～34図　216～219）

216は安山岩製の磨石・敲石である。用途の主な目的は敲石としてのものであるが，表面に磨石としての使用痕が観察できる。また，中央部から側縁部全体にわたって敲打痕が多数観察される。使用途中に欠損したものと思われる。



第30図　縄文時代前期～晩期（Ⅲ～表層）出土石器１

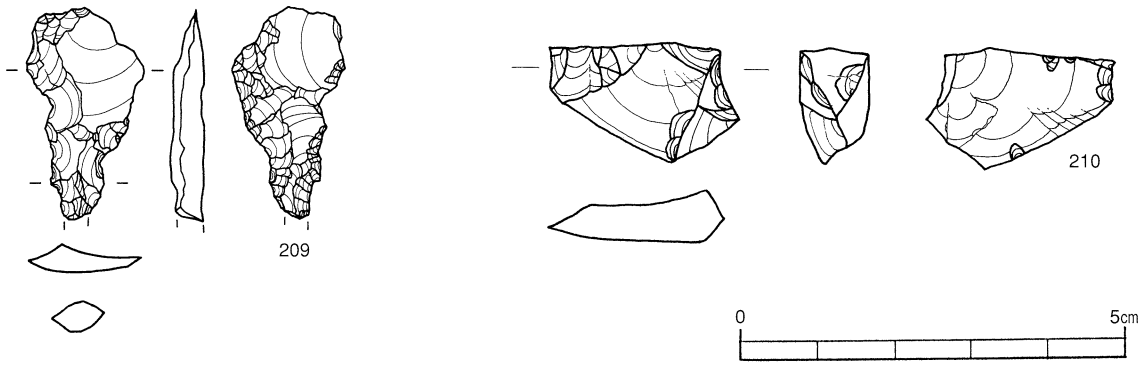
217・218は安山岩製の，219は砂岩製の磨石・敲石である。

217・218は欠損品で摩耗痕が全体的に観察され，頂点部と側縁部の一部に敲打痕がわずかに残る。

219は表面中央及び側縁部に敲打痕が集中する。

⑥　石皿・台石（第34図　220）

220は砂岩製の欠損品である。表面は平滑面をなし，裏面は敲打痕が残ることから，石皿と台石の両機能を兼ねたものである。6㎝前後のほぼ均一する辺をもつ立方体を呈し，重さが612gと同器種の中では比較的軽量であるため，携帯用に加工した可能性も考えられる。

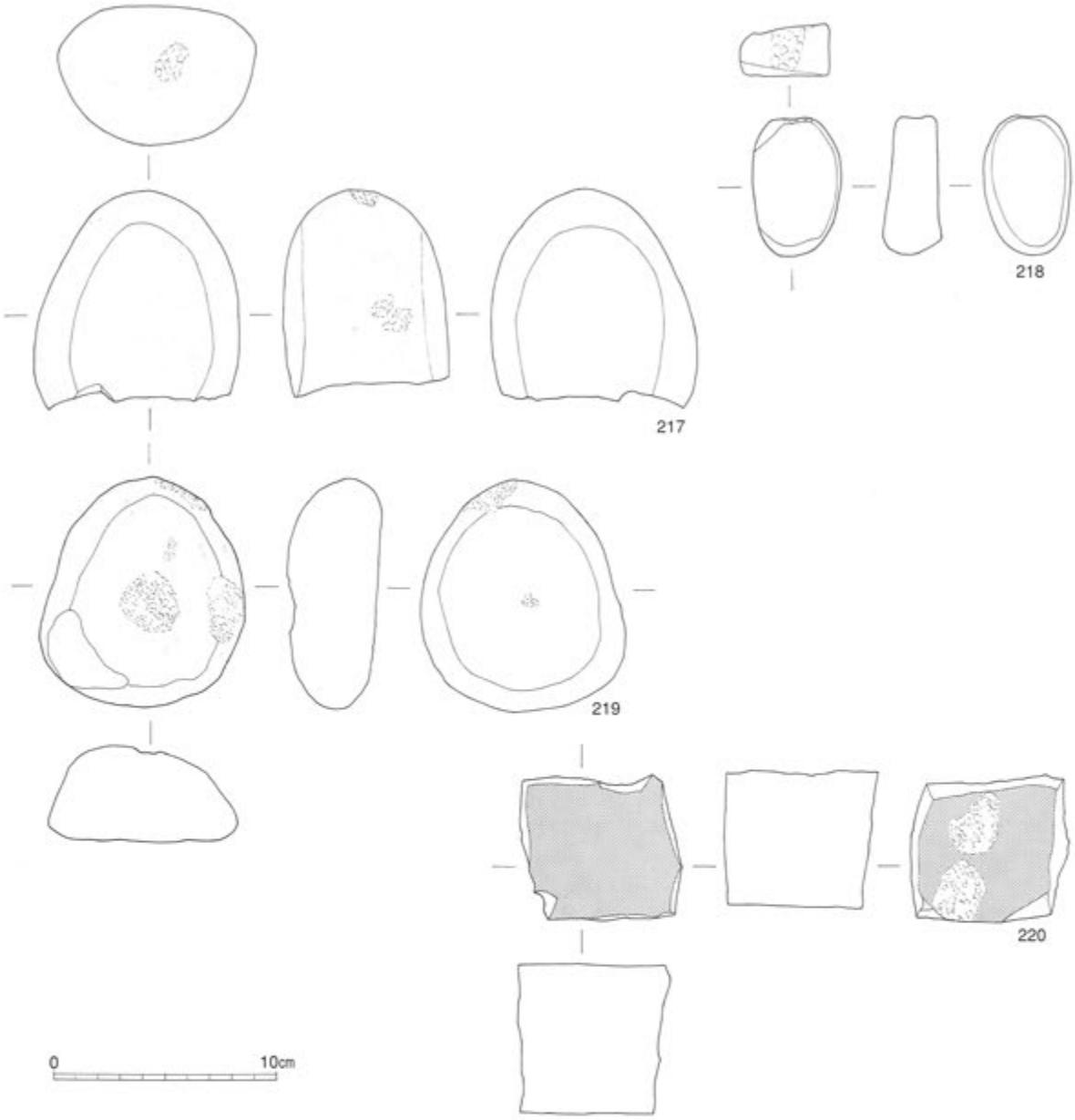


第31図　縄文時代前期～晩期（Ⅲ～表層）出土石器２

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器　種	出土区	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考
第30図	187	SR－2	石鏃	D－9	安山岩	2	1.9	0.35	0.19	
	188	撹乱	石鏃		チャート	1.8	1.95	0.4	0.75	
	189	撹乱	石鏃		黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.64	
	190	Ⅲ	石鏃	B－9	安山岩	1.5	0.6	0.4	0.23	
	191	Ⅲ	石鏃	C－10	安山岩	2.55	2.05	0.4	1.03	
	192	Ⅲ	石鏃	I－8	頁岩	1.9	1.85	0.4	0.83	
	193	Ⅲ	石鏃	H－8	安山岩	2.15	1.6	0.4	0.83	
	194	Ⅲ	石鏃	F－8	黒曜石	2.4	1.7	0.4	0.8	
	195	Ⅲ	石鏃	A－9	頁岩	2.4	2.1	0.45	1	
	196	Ⅲ	石鏃	B－12	黒曜石	2	1.3	0.4	0.73	
	197	Ⅲ	石鏃	B－9	安山岩	1.7	1.4	0.3	0.39	
	198	Ⅲ	石鏃	G－8	安山岩	2.05	1.1	0.35	0.34	
	199	Ⅲ	石鏃	B－12	黒曜石	1.9	1.5	0.35	0.56	
	200	Ⅲ	石鏃	H－8	黒曜石	1.7	1.35	0.35	0.47	
	201	Ⅰ	石鏃	C－9	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.6	
	202	Ⅱ	石鏃	B－9	黒曜石	1.8	1.35	0.35	0.41	
	203	Ⅲ	石鏃	C－11	瑪瑙	2.6	1.3	0.3	0.75	
	204	Ⅲ	石鏃	F－8	黒曜石	1.45	1.4	0.3	0.36	三船産
	205	Ⅲ	石鏃	G－8	安山岩	2	1.8	0.4	0.72	
	206	Ⅱ	石鏃	G－7	黒曜石	2.2	2	0.45	1.23	上牛鼻産
	207	Ⅲ	石鏃	B－11	瑪瑙	2.6	1.35	0.35	1.04	
	208	Ⅲ	石鏃	F－8	安山岩	2	1.8	0.45	1.42	
第31図	209	Ⅲ	ドリル	B－12	チャート	3	1.65	0.45	1.37	
	210	Ⅲ	作業面再生剥片	B－10	黒曜石	1.6	2.55	0.9	3.31	上牛鼻産

第32図　縄文時代前期～晩期（Ⅲ～表層）出土石器 3



第33図　縄文時代前期～晩期（Ⅲ～表層）出土石器 4

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器　種	出土区	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考
第32図	211	Ⅲ	礫器	B－10	頁岩	9.6	6.6	3.0	167.0	
	212	Ⅲ	礫器	B－11	頁岩	14.0	9.0	6.15	787.0	
	213	Ⅲ	礫器	A－12	頁岩	13.0	8.4	2.35	245.4	
	214	Ⅲ	礫器	B－11	頁岩	21.0	9.8	3.25	628.0	
	215	Ⅲ	礫器	B－11	頁岩	14.0	8.4	3.75	597.0	
	216	Ⅲ	磨石	G－7	安山岩	7.2	7.5	4.8	355.6	
第33図	217		磨石	表採	安山岩	10.2	9.5	7.3	999.0	
	218	Ⅲ	磨石	C－10	安山岩	6.4	4.0	2.8	95.0	
	219		磨石	表採	砂岩	10.5	9.3	5.0	559.0	
	220	表採	石皿（未製品）	B－11	砂岩	6.7	7.2	7.2	612.0	

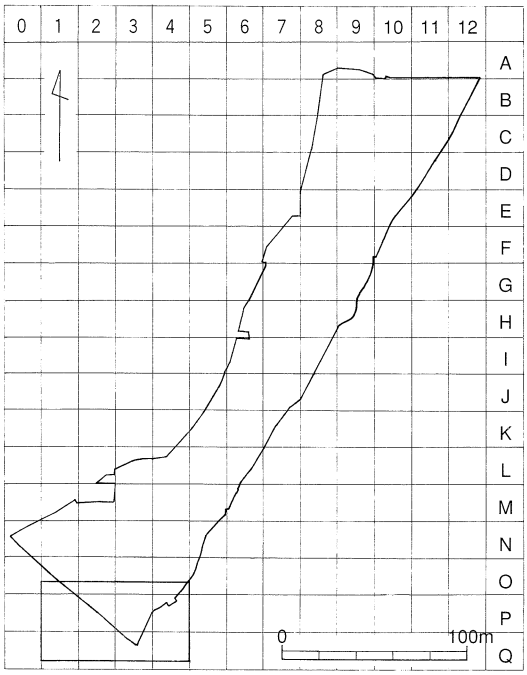
4　弥生時代～古代（Ⅲ～表層）の調査

弥生時代～古代はⅢ～表層にかけて出土するもので，竪穴住居跡等が検出された。

（1）遺構

①　竪穴住居跡（第35図）

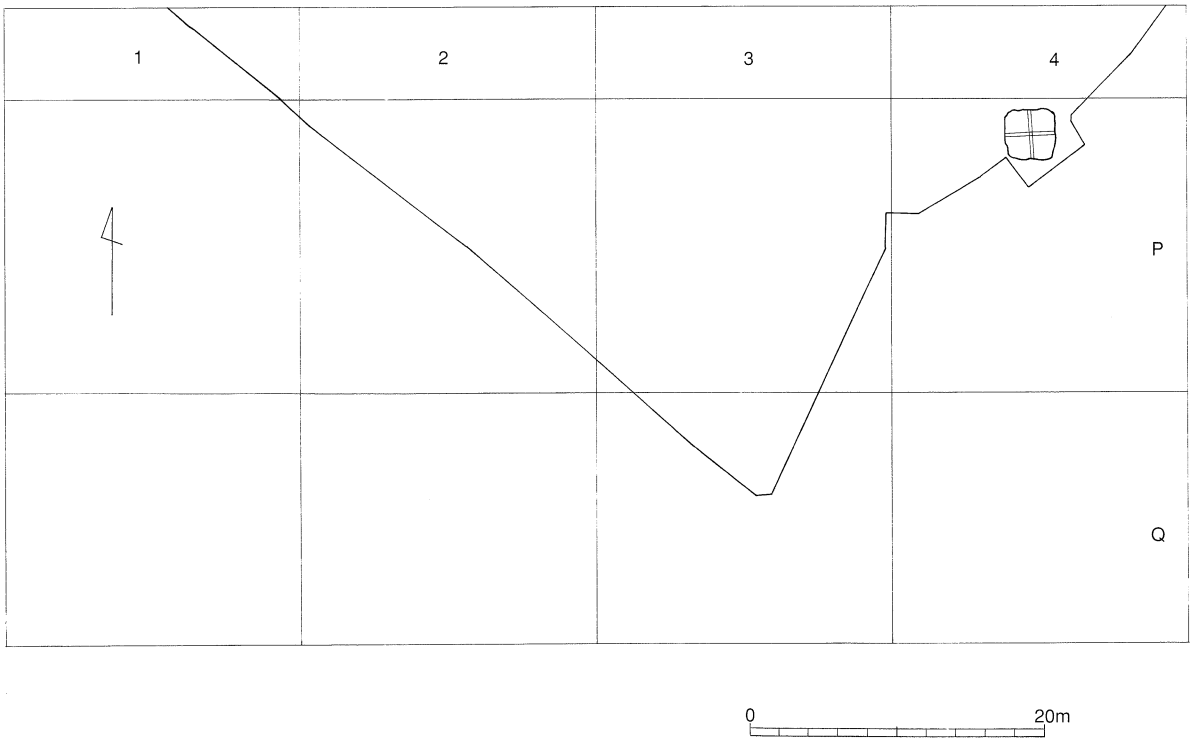
P－4区，Ⅲa層上面から竪穴住居跡と思われる遺構を1基検出した。平面プランはほぼ方形を呈しており，南北3.5m，東西3.4mである。後世の削平により大半を失ったと考えられ，確認された掘り込みの深さは2～4㎝で，深い場所でも7～8㎝と検出面はほぼフラットである。柱穴は特定できなかった。住居跡の時期は遺構内から成川式土器が2点出土したことから，古墳時代と考えられる。



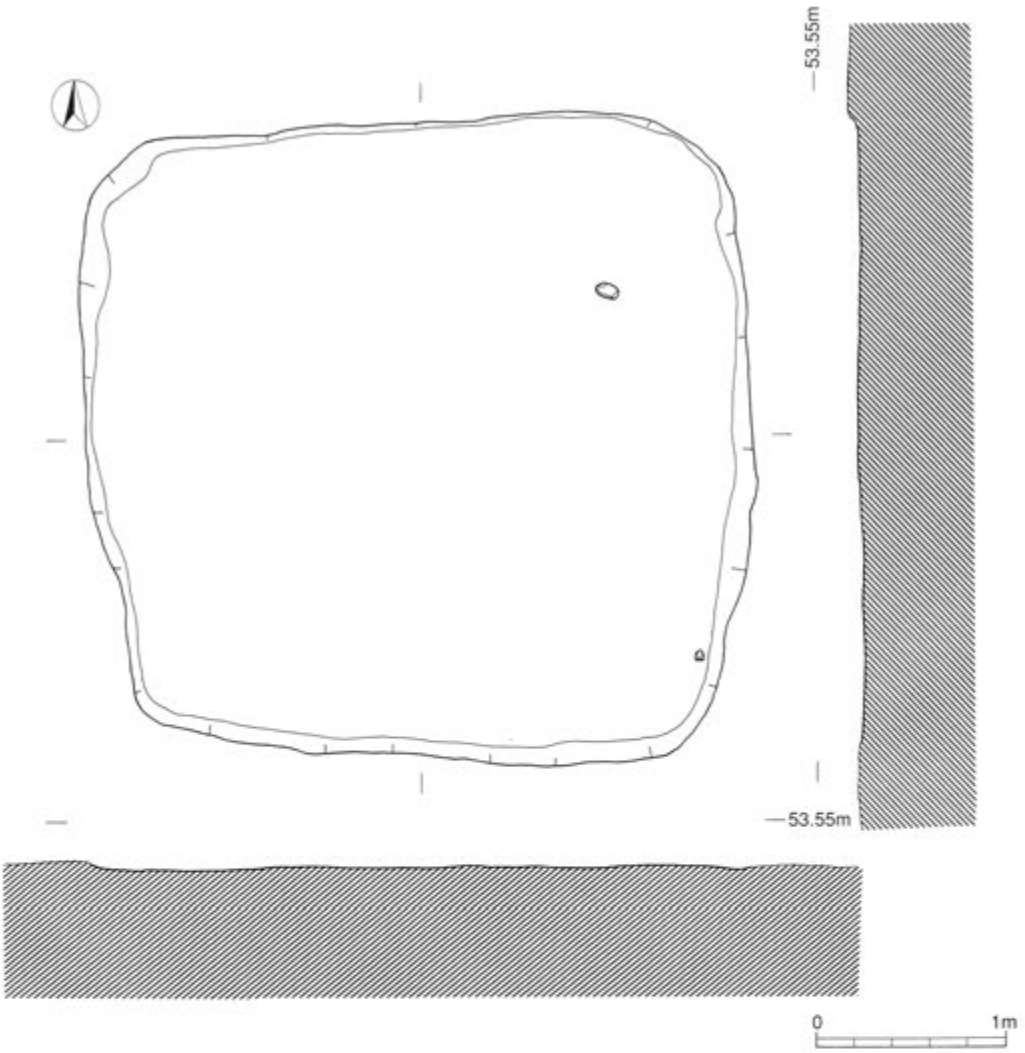
（2）弥生時代の遺物

①　土器（第36図　221・222）

221は壺形土器の口縁部である。口縁端部は浅く凹み，外面に暗文が見られる。222は甕の口縁部である。口縁部の上面が浅く凹んでいる。ともに弥生時代中期頃のものと思われる。



第34図　古墳時代遺構配置図



第35図　古墳時代住居

② 石器

磨製石鏃（第37図　227）

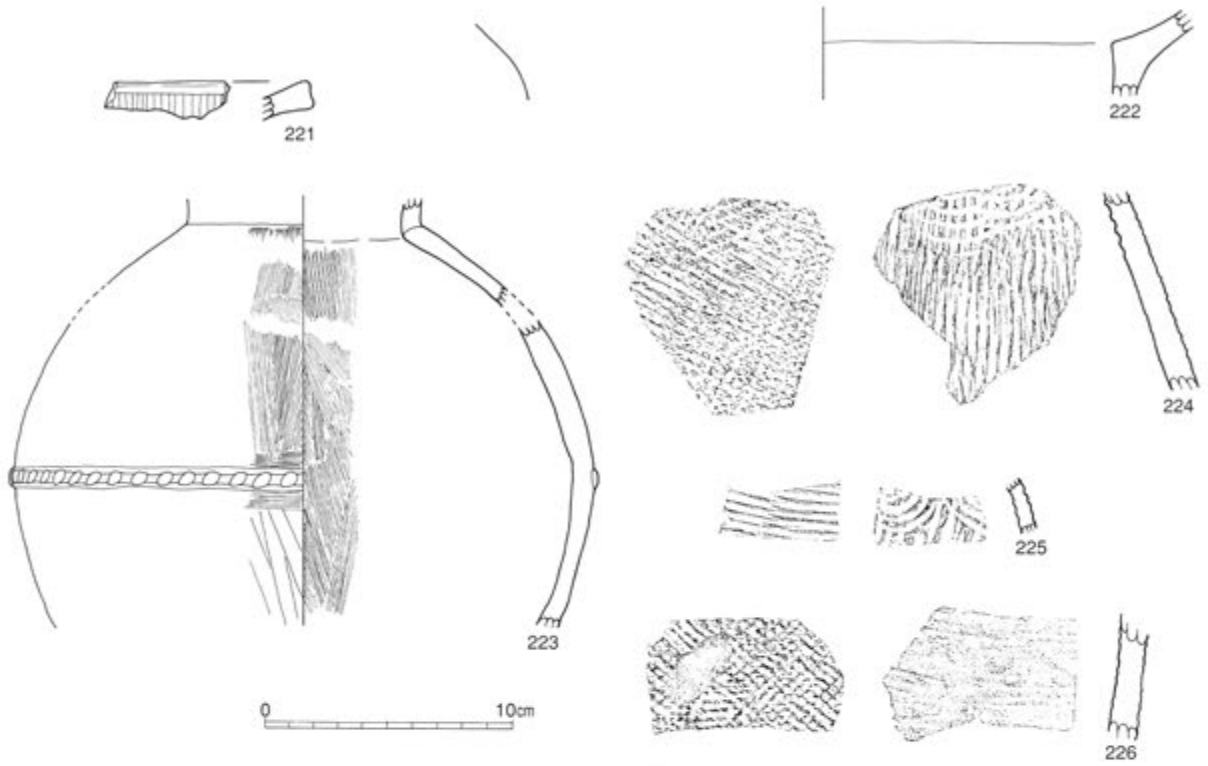
227は頁岩製の磨製石鏃である。最大長3.5㎝，最大幅2.25㎝，厚さ0.35㎝，重さ2.64ｇである。扁平無茎で，基部が凹む。左側縁部が欠損するが，ほぼ二等辺三角形を呈する。裏面は全体的に研磨され，側縁側に鎬が先端部から基部にまで続く。右側縁部は両面に研磨痕が観察できる。側縁部は若干丸味を帯びる。先端には使用時のものと思われる折れが観察でき，中央部にかけて右側縁部には微細剥離痕が観察できる。

（３）古墳時代の遺物（第36図　223）

223は壺の胴部である。胴部中央に棒状工具による刻目突帯文を施す。内外面ハケ目後，ナデ。

（４）古代の遺物（第37図　224～226）

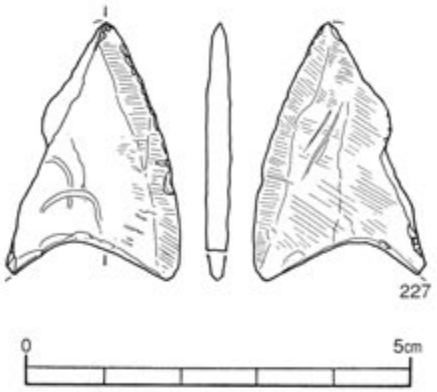
224～226は須恵器の瓶である。224は外面に格子目状のタタキを施し，内面には同心円状と平行線状の当て具痕が残る。226は外面に平行タタキ，内面に同心円状の当て具痕が残る。227は外面に格子目状のタタキ，内面は平行線状の当て具痕をナデ消している。



第36図　弥生～古墳時代土器及び古代の須恵器

弥生・古墳時代土器　須恵器

挿図番号	遺物番号	種別	器種	部位	出土	区	色調		調整		焼成	備考
							外面	内面	外面	内面		
第36図	221	弥生中期		口縁部	B－9	Ⅱ	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	良	
	222	弥生中期		胴　部	B－11	Ⅲ	茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ	〃	
	223	古墳成川	成川	胴　部	B－9	Ⅱ	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	〃	
	224	須恵器		胴　部	溝		茶褐色	灰褐色	格子目タタキ	同心円タタキ	〃	
	225	須恵器		胴　部	G－8	Ⅱ	灰褐色	灰褐色	格子目タタキ	同心円タタキ	〃	
	226	須恵器		胴　部		表採	灰褐色	灰褐色	格子目タタキ	ナデ	〃	



第37図　弥生時代石器

建石ヶ原遺跡石器実測観察表

図番号	遺物番号	層位	器　種	出土区	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考
						cm	cm	cm	g	
第37図	227	Ⅱ	磨製石鏃	K－6	頁岩	3.5	2.3	0.35	2.64	

3　中世（Ⅱ～表層）の調査

遺構は溝状遺構12条と方形周溝（墓）１基が検出され，遺物は青磁・白磁等が出土した。

（１）遺構

①　溝状遺構（ＳＤ－１～12）

本遺跡ではⅢａ層上面において溝状遺構が12条検出されている。溝状遺構の中には波板状凹凸面特有の浅い窪み，もしくは底面と思われる硬化面が連続して残っている部分がある。

溝状遺構１　第38図（ＳＤ－１）

Ａ～Ｐ－２～８区で検出された。溝状遺構の中で最も長く，全長約320ｍである。

Ｌ－４区で西側に延びる部分と北に延びる部分の二股に分かれる。西側に延びる部分は波板状凹凸面であるＳＤ－４に切られる形で検出され，古里遺跡の溝状遺構につながる。最大幅１ｍ70㎝程度で深さ約30㎝である。

①層に白色軽石を含み，埋土中にはわずかではあるが，中世の青磁・須恵器が出土した。

溝状遺構２　第39図（ＳＤ－２）

Ａ～Ｍ－６～９区にかけて検出された。南北約235ｍ程度で，検出された溝状遺構の中で２番目に長く，最南端でややカーブを描くが，全体的にほぼ南北に一直線である。最大幅60㎝程度で深さは約20㎝である。埋土は２層に分かれる。①層はしまりがあって硬く，ラミナが見られないことから，常時水が流れていた可能性は低いと考えられる。さらに，①層に白色軽石が含有されていないため，溝状遺構２は中世以前の可能性がある。

溝状遺構３　第40図（ＳＤ－３）

ほぼＳＤ－２に平行する形でＡ～Ｄ－６～９区において約10ｍ，最大幅１ｍ程度である。Ａ－９区では底面上に35㎝×40㎝の波板状凹凸面が芯々距離にして平均50～60㎝おきに連続して検出された。波板状凹凸面の底面は硬くしまっていた。

溝状遺構４　第41図（ＳＤ－４）

Ｌ－４区でＳＤ－１を切る形で検出された。最大幅50㎝程度で長さ約10ｍの波板状凹凸面であると思われる連続した硬化面が検出された。床面上に40㎝前後×35㎝前後の波板状凹凸面の底面と考えられる遺構が，芯々距離で平均50～65㎝おきに連続して検出された。

溝状遺構５　第42図（ＳＤ－５）

Ａ・Ｂ－10区においてＳＤ－６と二股に分かれる形で検出された。晩期の溝状遺構（ＳＲ－１）を切っている。最大幅50㎝程度，長さ約8.3ｍ，深さ約10㎝である。

溝状遺構６　第42図（ＳＤ－６）

Ａ・Ｂ－10区においてＳＤ－５から二股に分かれる形で最大幅70㎝程度，長さ約14.5ｍ，深さ約20㎝である。

溝状遺構７　第42図（ＳＤ－７）

Ａ・Ｂ－10区においてＳＤ－６に切られる形で検出された。最大幅50㎝程度，長さ約６ｍ，深さ約11㎝である。

溝状遺構８　第42図（ＳＤ－８）

Ａ・Ｂ－10区においてＳＤ－６を切る形で検出された。最大幅90㎝，長さ約10.62m，深さ約20㎝である。途中で途切れているが，本来は同一であると思われる。

溝状遺構９　第42図（ＳＤ－９）

Ａ・Ｂ－10区においてＳＲ－１を切る形で検出された。長さ2.56mにわたって，26～40㎝×22～24㎝の連続した硬化面が検出された。連続した硬化面の芯々距離平均約60㎝である。

溝状遺構10　第43図（ＳＤ－10）

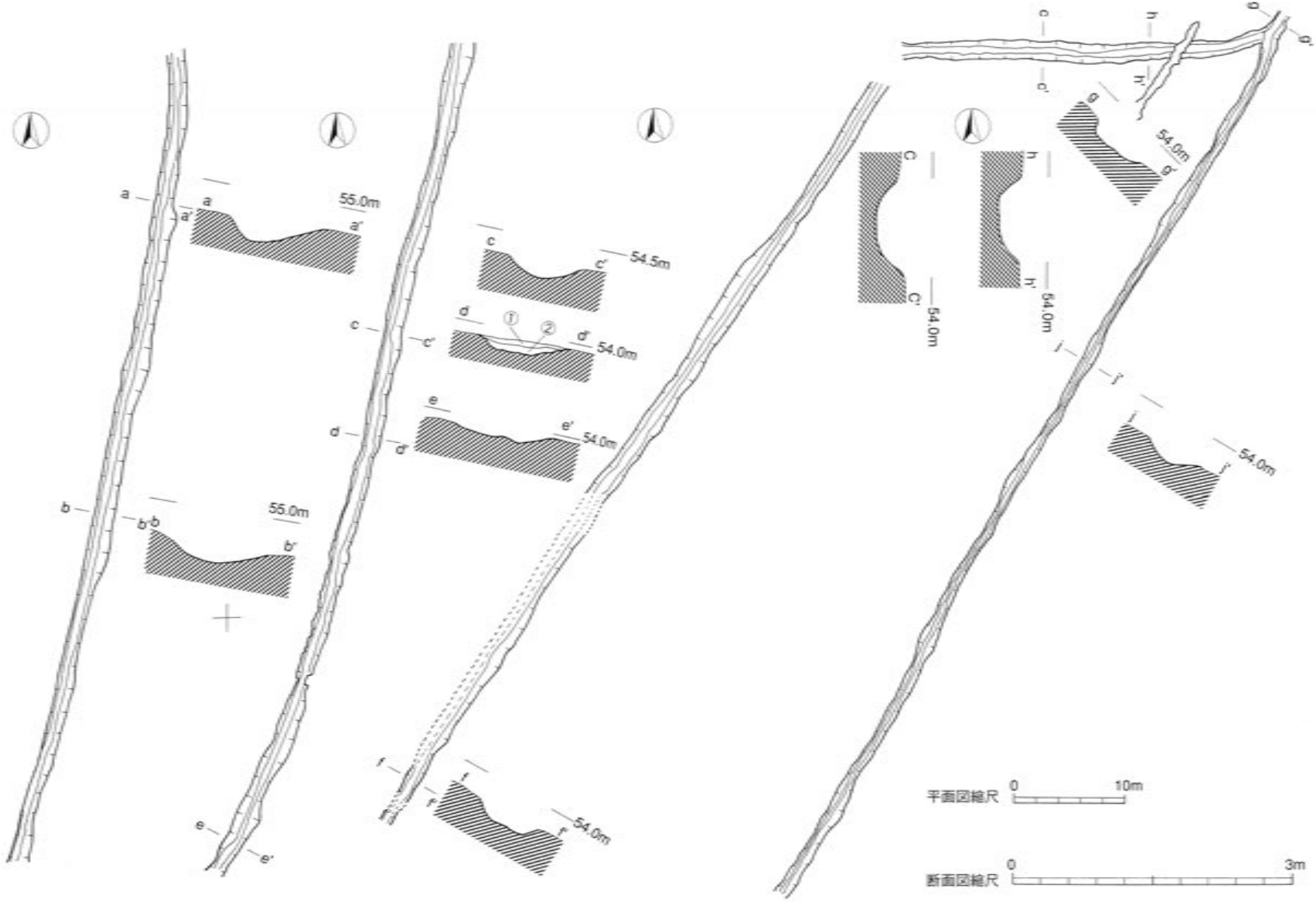
Ｌ・Ｍ－６区においてＳＤ－２に平行する形で検出された。最大幅30㎝，長さ約12ｍである。Ｌ－６区では底面上に40㎝×35㎝，深さ5.9㎝の波板状凹凸面が平均約60㎝おきに連続して検出された。

溝状遺構11　第44図（ＳＤ－11）

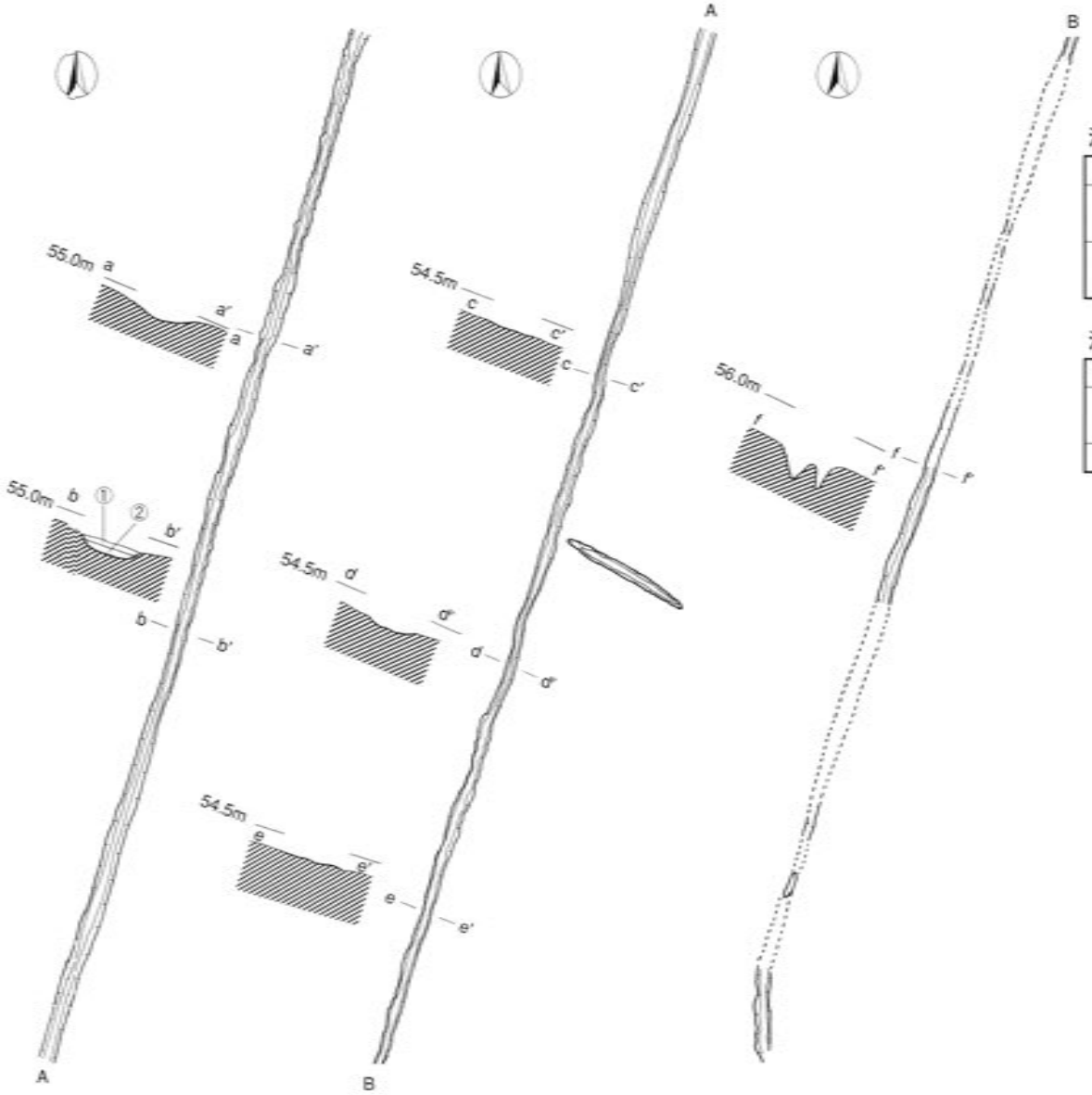
Ｐ－２区においてＳＤ－１の最南端に位置する形で検出された。南北７ｍ90㎝にわたって，35㎝×40㎝，深さ25～50㎝の波板状凹凸面が芯々距離90・50・90・100・80・350㎝とやや間隔をあけて連続しており，他と性格を異にする。

溝状遺構12　第45図（ＳＤ－12）

Ｇ・Ｈ－７区において波板状凹凸面および底面と思われる連続した硬化面が出土した。ＳＤ－１内でＧ－７区においてはやや不規則に並んでいるが，Ｈ－７区の南側では波板状凹凸面が規則的に出土した。芯々距離は50・75・65㎝である。



第38図　中世溝状遺構１（SD-１）



溝状遺構1（ＳＤ－1）

層序	状　態
①	黒褐色シルト質土で基本的にはⅠ層と同質の細かい白色軽石を含む。
②	黒茶褐色で基本的にはⅡ層と同じでⅢ層の細かい粒子が含まれ，しまりがなくやわらかい。

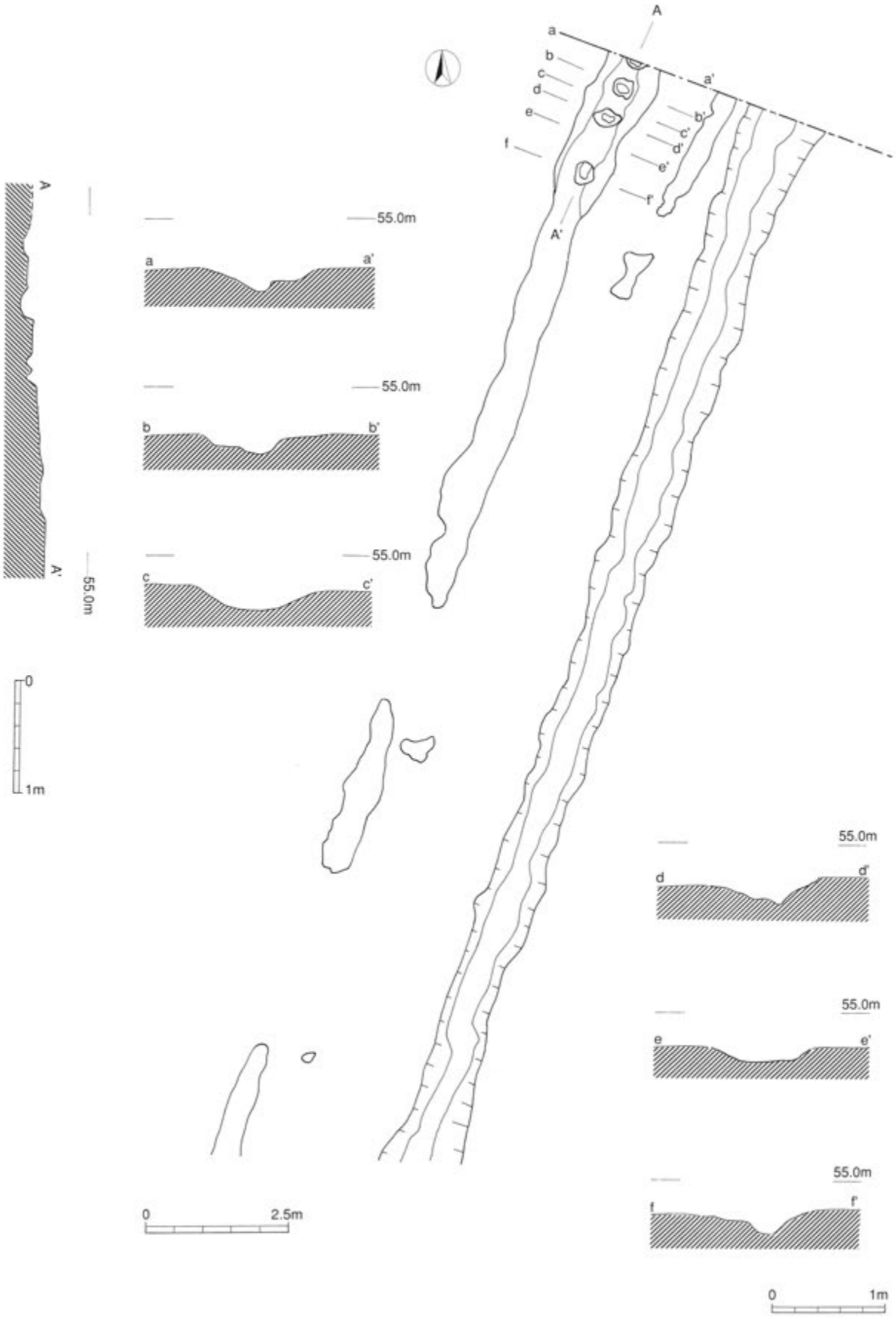
溝状遺構2（ＳＤ－2）

層序	状　態
①	黒色シルト質土中に1㎜以下の細かい黄褐色粒子を含む。しまりがあって硬い。白色軽石を含まない。
②	①と同様であるが，黄褐色粒子の割合が低い。

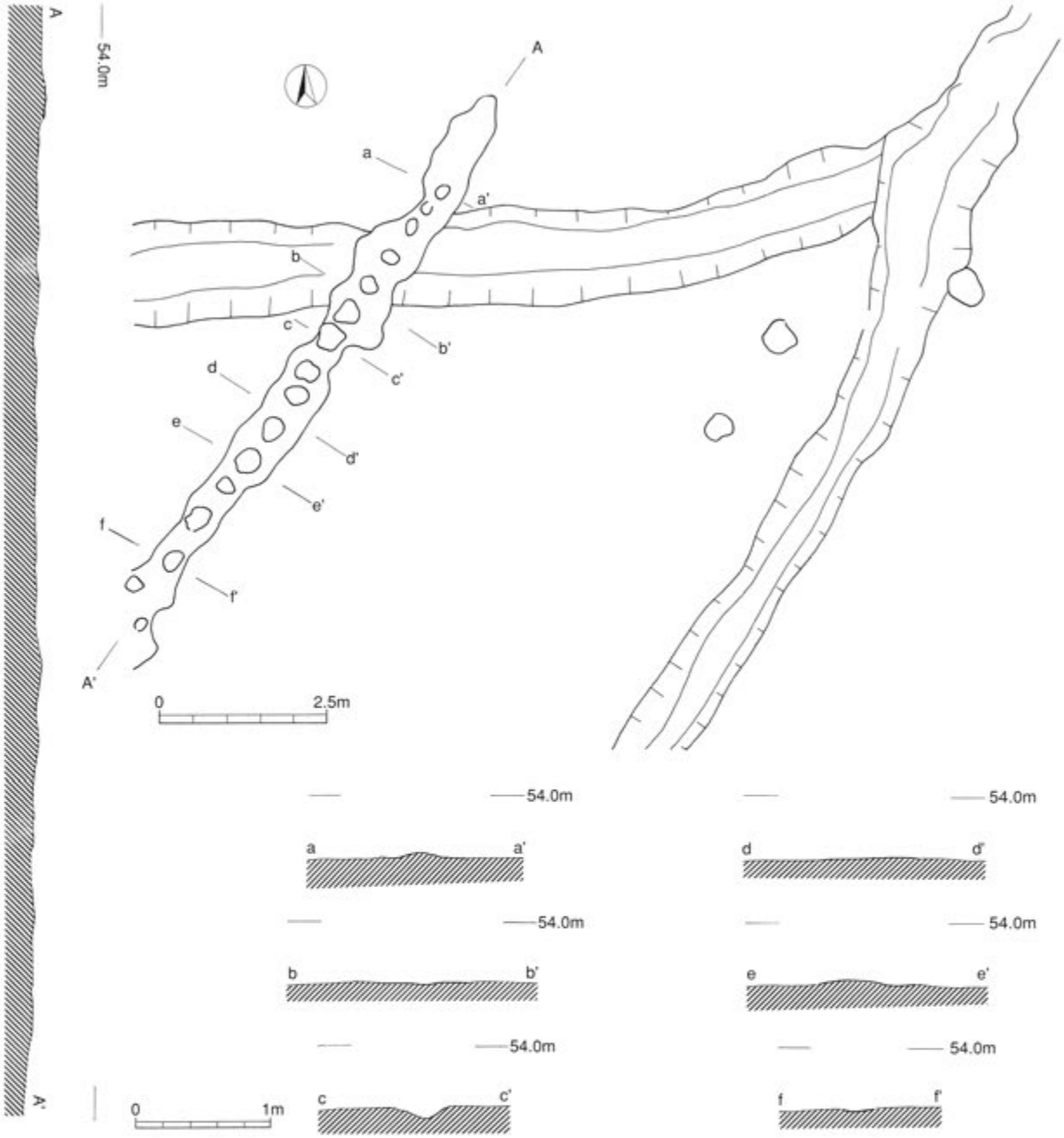
平面図縮尺　0　10m

断面図縮尺　0　5m

第39図　中世溝状遺構2（SD-2）



第40図　中世溝状遺構３（SD-３）

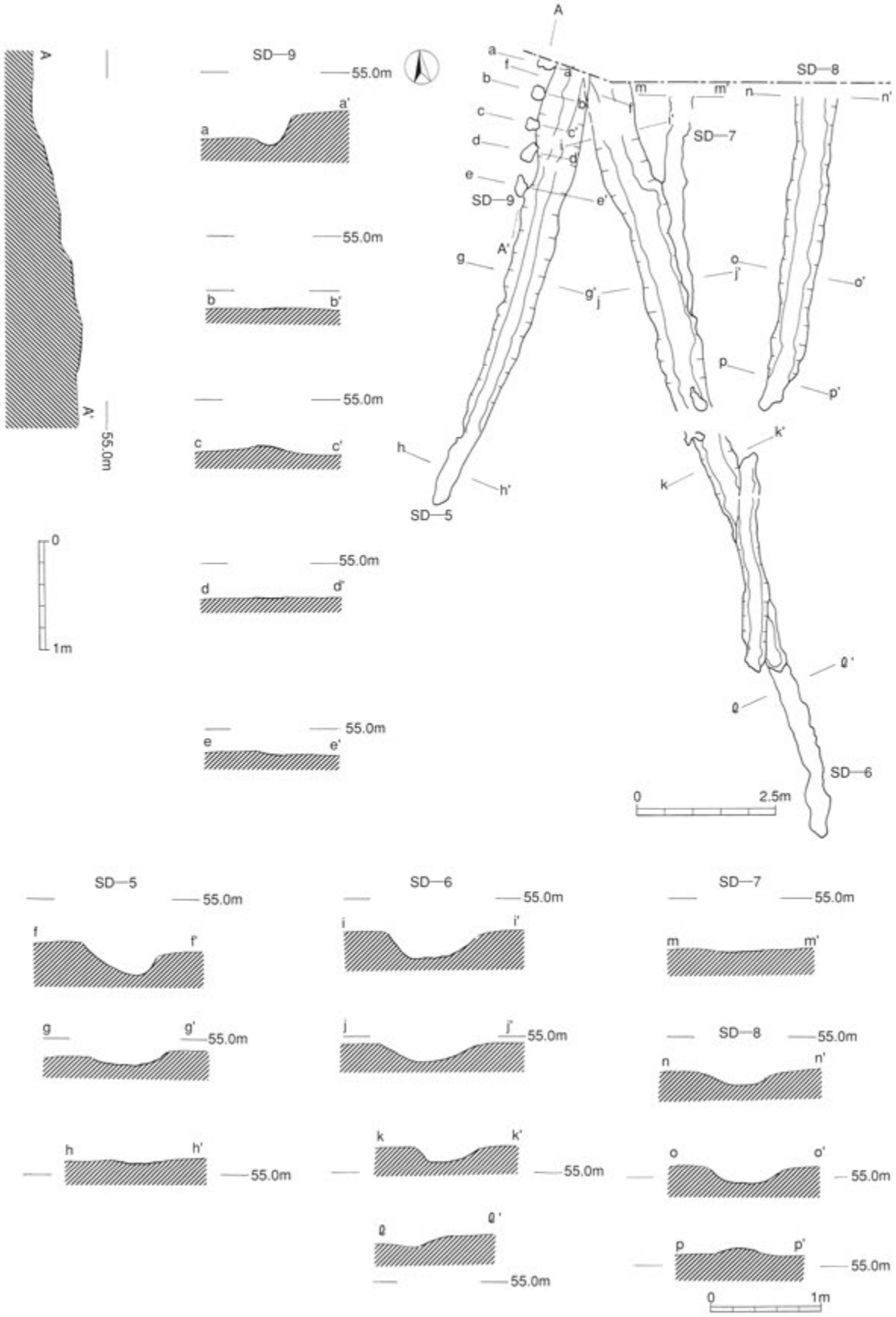


第41図　中世溝状遺構４（SD-４）

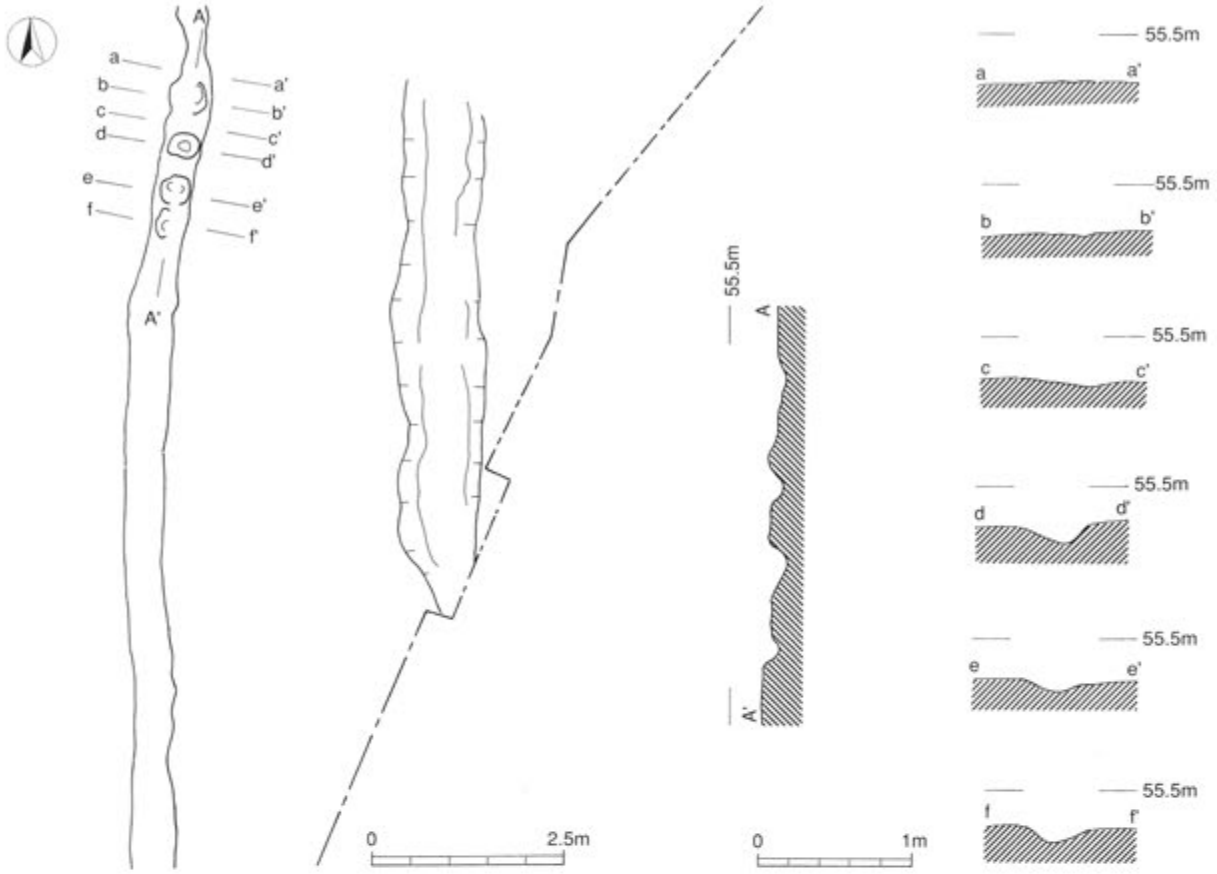
②　方形周溝（墓）第46図（ＳＴ－１）

Ｈ－９区Ⅲａ層上面において調査範囲東側の壁に切られる形で検出した。検出当初，調査範囲を広げ確認したが，崩落により全体を確認することはできなかった。東側を削平されているが，周溝は１条で１辺の長さが６ｍ20㎝，最大幅１ｍ26㎝，深さは浅い部分で約10㎝，深い部分で約40㎝程度である。周溝の断面はＶ字状を呈し，主体部を包囲していたと思われる。主体部は単体で長軸１ｍ40㎝，残存している短軸は50㎝である。深さは36㎝で平面形状は不定形の楕円を呈する。

主体部内は多数の小礫を含むが，礫以外の遺物は見られなかった。周辺に小礫の検出される層が無いことから，河原あるいは礫層のある場所から，ある程度意図的に持ち込まれたものだと考えられる。また，主体部の下面には，樹痕かと思われる深い穴の中にも小礫が落ち込んでいた。ＳＤ－１・２に比べ長軸が北東に向いているため関連は判然としない。



第42図　中世溝状遺構５～９（SD-５～９）



第43図　中世溝状遺構10（SD-10）

周溝内からは帯金具の一部と思われる青銅製品が出土した。青銅製品（第46図）は破損しており，風化が進んでいる。残存部分の長軸は2.1cm，重さ2.75ｇである。中央部の二つの孔の直径は２㎜で，並列して施されている。

集石　第47図

Ｇ－８区で検出した。拳大の安山岩の円礫を主体としている。長径30cm，短径20cmのやや楕円形を呈する。

礫上面から深さ11cmの掘り込みが確認できた。被熱の状況はほとんどうかがえなかった。礫は小さいもので３～５cm，大きいものでも７～10cmで比較的小型の礫で構成される。

（２）中世の遺物

①　白磁・青磁（第49図　229・230）

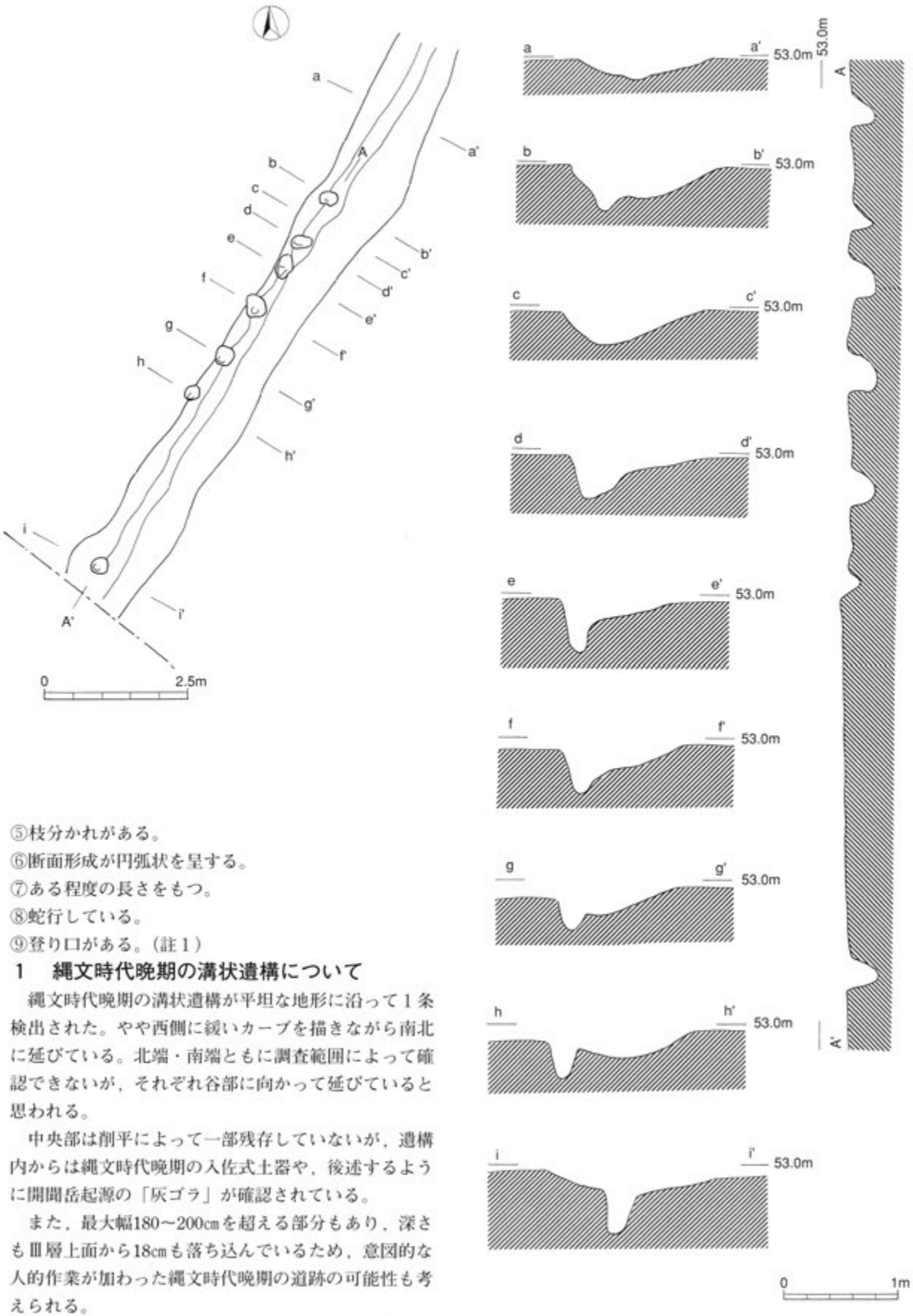
229は白磁の口禿皿である。復元口径12.4cmである。230は青磁で稜花皿である。復元口径13cmである。内面に文様が見られる。

第３節　小結

本遺跡は，出土遺物総数が約3,000点であったが，出土範囲が広く，溝跡などの遺構も検出された。

調査の結果，本遺跡は旧石器時代から中世までの複合遺跡であり，遺構・遺物の主体となるものは縄文時代早期・縄文時代晩期・中世であった。特に注目すべきは縄文時代晩期のものと思われる溝状遺構１条と，中世の溝12条（波板状凹凸面を含む），方形周溝（墓）１基である。これら縄文晩期の遺構と，中世の遺構を中心として調査の成果と今後の課題を述べ，まとめとする。また，中世溝状遺構を「道跡」と判断する基準を下記のように設定し，以下当てはまる項目については番号で記述する。

①硬化面を伴う。
②波板状凹凸面を伴う。
③直角に曲がる部分がカーブを切っている。
④バイパスを設けている。



⑤枝分かれがある。
⑥断面形成が円弧状を呈する。
⑦ある程度の長さをもつ。
⑧蛇行している。
⑨登り口がある。（註１）

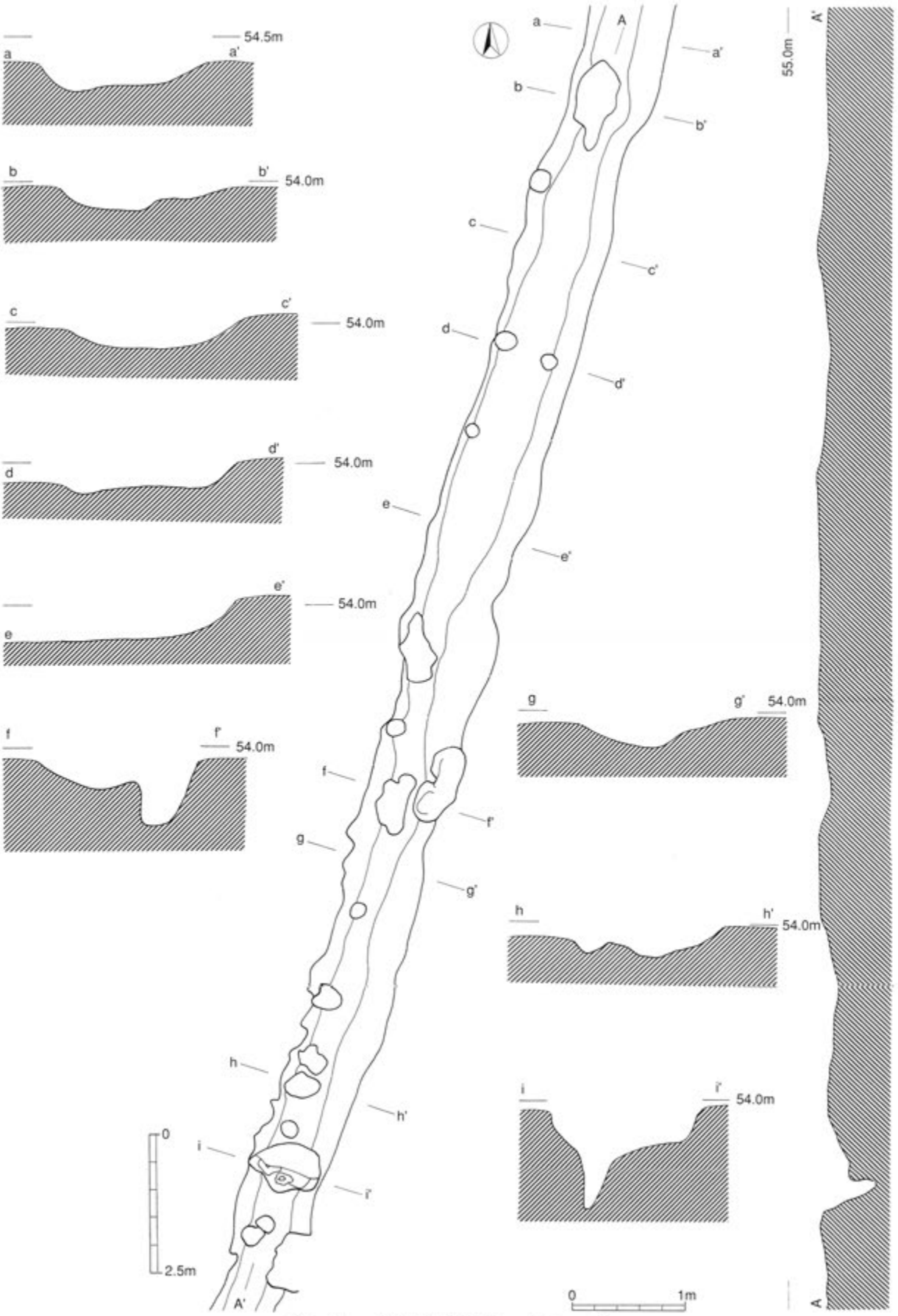
１　縄文時代晩期の溝状遺構について

縄文時代晩期の溝状遺構が平坦な地形に沿って１条検出された。やや西側に緩いカーブを描きながら南北に延びている。北端・南端ともに調査範囲によって確認できないが，それぞれ谷部に向かって延びていると思われる。

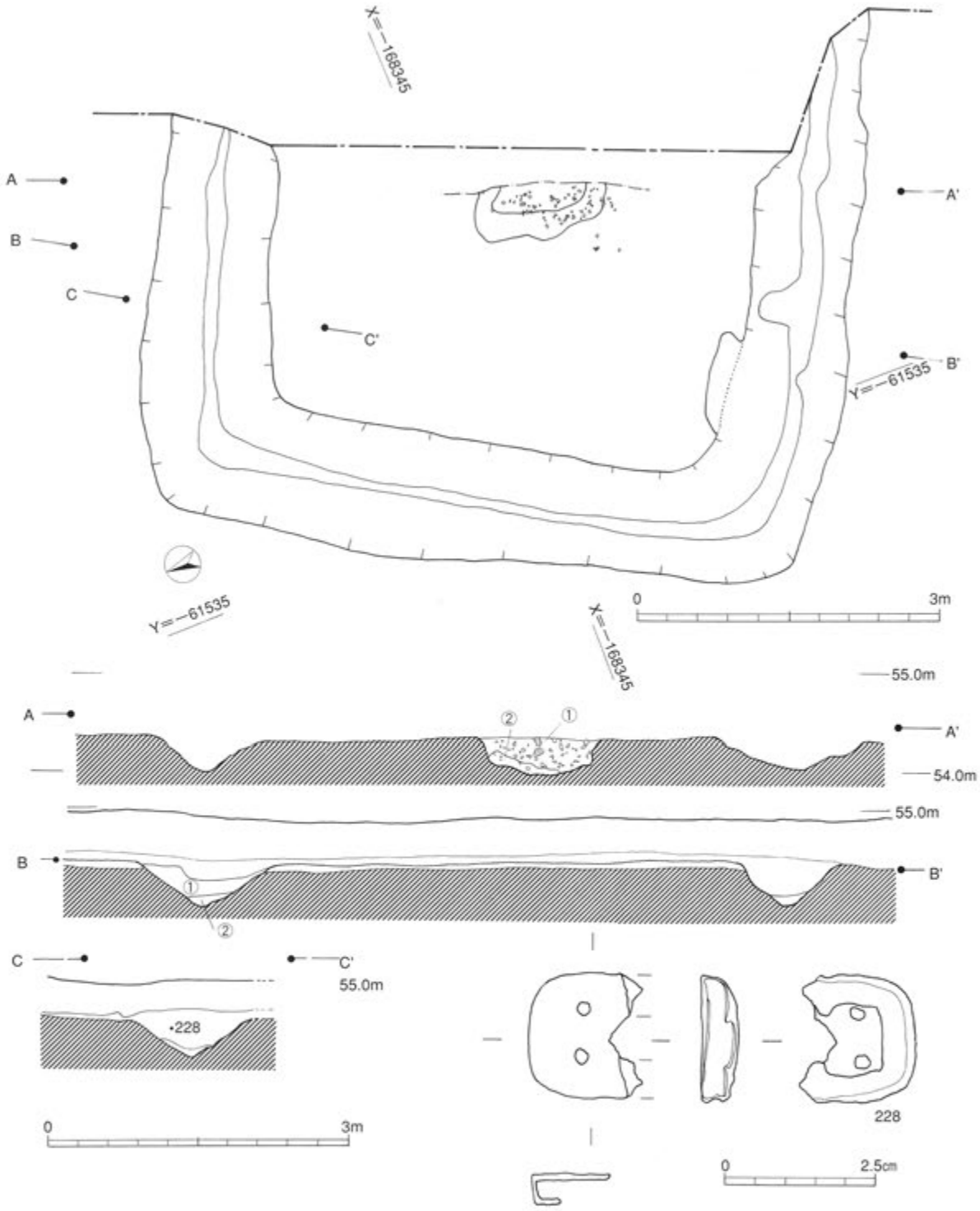
中央部は削平によって一部残存していないが，遺構内からは縄文時代晩期の入佐式土器や，後述するように開聞岳起源の「灰ゴラ」が確認されている。

また，最大幅180～200㎝を超える部分もあり，深さもⅢ層上面から18㎝も落ち込んでいるため，意図的な人的作業が加わった縄文時代晩期の道跡の可能性も考えられる。

第44図　中世溝状遺構11（SD-11）



第45図　中世溝状遺構12（SD-12）



方形周溝墓主体部内　小礫重量計測表

重さ(g)	0～10	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90
個数	261	241	80	20	7	4	1	0	4

方形周溝墓（主体部）土層観察表（A—A'）

層序	状　態
①	黒褐色土で黒色土をベースにし，Ⅲ層のブロックが入る。しまりがなく，やわらかい。
②	黄茶褐色土で①よりも黄色味が強い。

方形周溝墓（周溝部）土層観察表（B—B'）

層序	状　態
①	黒色土。しまりがありやや硬い。白色軽石は全く含まず，通常のⅡ層と全く同じである。
②	しまりがあり，かなり硬い。Ⅱ層の土にⅢ層の土や2㎝大のブロックが多く混じっている。

第46図　中世方形周溝（墓）及び遺構内出土遺物

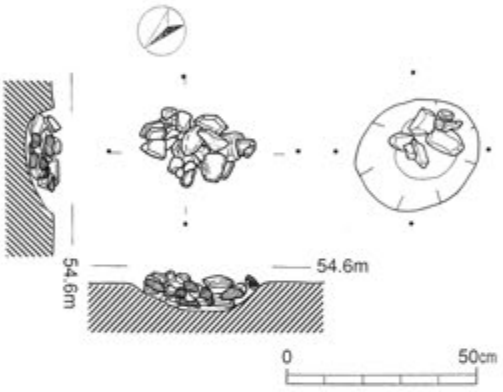
本遺跡においては晩期のものと考えられる遺構はその他に発見されておらず，比較・傍証する資料に乏しい。そのため，検出された溝状遺構が遺跡群全体の中で，どのような意味をもつのかは，現段階では不明である。今後，遺構の性格については，農業開発総合センター遺跡群の報告書刊行を経る中で明らかにされていくと思われる。

2　中世溝状遺構について

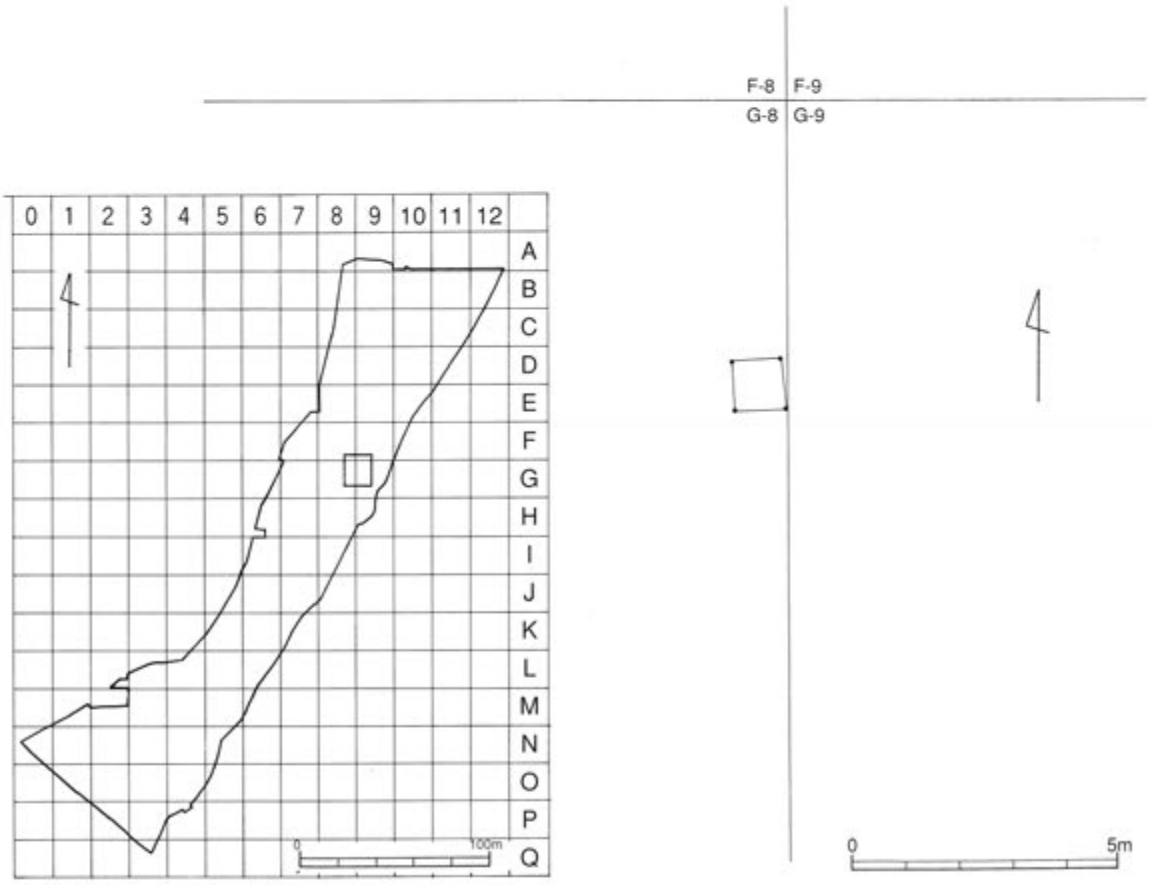
中世の溝状遺構が比較的フラットな地形の上で12条検出された。このうち６条が波板状凹凸面及び硬化面を伴う形で検出された。また，一部の溝状遺構は古里・西原遺跡とつながっている事も確認された。遺構内からは中世青磁・白磁の小破片が検出されており，Ⅲ層上面で検出されたことから中世のものとしてとらえた。また，それぞれが前述の①・②・③・⑤・⑥・⑦の条件を満たしており，道跡の可能性が高いと考えられる。

隣接する古里遺跡における掘立柱建物跡の中で，２号・９号・10号の主軸がＳＤ－１・２と平行を呈しており，何らかの関係が考えられる。特にＳＤ－１は古里遺跡における溝状遺構とつながっている。

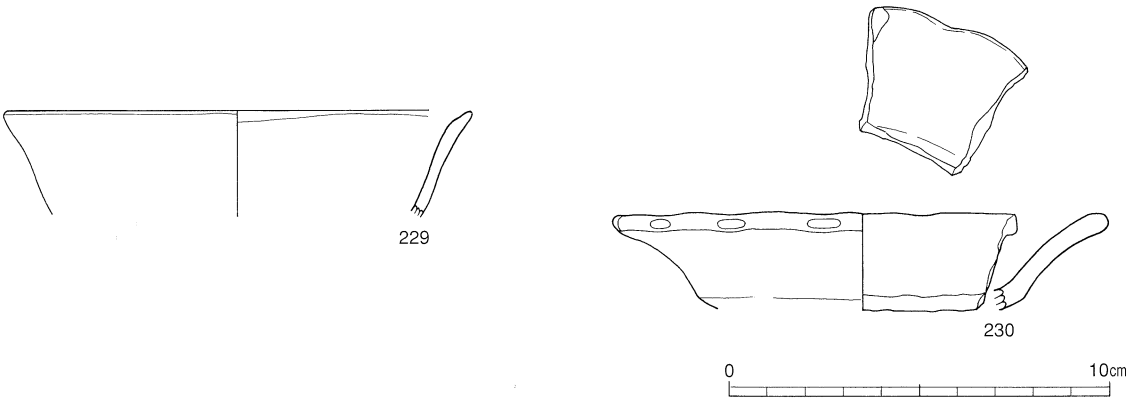
ＳＤ－１は南側において枝分かれをしているが，注目すべきは枝分かれ部分が北寄りに位置し，当時の人々の流れが北へ向かっていたことが予想できる点で



第47図　集石遺構



第48図　中世集石遺構配置図



第49図　中世白磁・青磁

白磁・青磁遺物観察表（中世）

挿図番号	遺物番号	種別	部位	出土区	層	法　量（cm）			胎土	備考
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第49図	229	白磁	口縁部		表採	12.4	—	—	灰褐色	口ハゲ
	230	青磁	口縁部	H—9	表採	13	—	—	灰褐色	稜花皿

ある。「吹上郷土史」によると本遺跡周辺は中世薩摩国伊作荘にあたる。平安末期から島津荘薩摩方伊作荘・日置南郷・日置荘などは平姓一族が支配しており，なかでも伊作平氏系一族は下司職という役職を保持し，南薩の各地域で土地や農民を治めていた。(註２)南薩における政治経済の中心が伊作荘であり，ＳＤ－１は物資や人の流れが周辺地域から集中する幹線道路であったと考えられる。

ＳＤ－２は硬化面と波板状の凹凸面を含むＳＤ－３と約50.5ｍにわたりほぼ並行して検出されており，これらは元来同一であったとすれば，芯々距離で平均約３ｍ幅の道であった可能性もある。また，埋土が黒色で白色軽石を含んでいないためＳＤ－１よりも時代はさかのぼると思われる。

ＳＤ－３・４・９・10・11・12において硬化面及び波板状凹凸面が検出された。特にＳＤ－３・４・12において硬化面及び波板状凹凸面は比較的規則的に連続して並んでいる。その芯々距離は50㎝～70㎝おきに集中して規則的に連続しており，牛馬歩行痕の可能性が考えられる。(註１)

３　方形周溝（墓）

中世の方形周溝（墓）が一基検出された。長軸がＳＤ－１・２に比べ，若干北東よりに開いている。しかし，ＳＤ－２のＧ－８区において検出されたやや短い溝状遺構との関連も考えられる。周溝の形態としては周溝数，葬法，主体部数により分類できる。(註３)本遺跡における方形周溝（墓）は周溝が１条である。主体部は単体で小礫が確認されるのみで，元来の形態，葬法などは確認できない。また，後述するように主体部内の埋土分析からも生物遺体の存在は確認できなかったため，本遺跡の方形周溝（墓）の用途は判然としないところがある。しかし，中世における溝状遺構，隣接する古里遺跡の中世掘立柱建物跡などの遺構から当時の人々の生活空間と何らかの関連があったと考えられる。(註４)

今後，農業開発総合センター遺跡群の報告書の刊行により本遺跡と本遺跡遺構の全貌が明らかになることを期待する。

(註１)

東　和幸　2003「波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」『縄文の森から』　創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004「溝状遺構の一性格」『縄文の森から』第２号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

(註２)

吹上郷土誌　2003「通史編一」

(註３)

太田三喜　1993「中世の周溝墓」『竪田先生古希記念論文集』竪田直先生古希記念論文集刊行会　真陽社　1992

(註４)

上床　真　2002「九州における古代・中世の周溝（墓）遺構の集成と若干の検討」
－鹿児島県の周溝墓を中心として－
『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文財センター報告書（34）

付　　編

Ⅰ．農業開発総合センター遺跡群における火山灰分析

注　今回は建石ヶ原遺跡における遺構内火山灰及びリン酸の分析にあたり，比較試料として同じ農業開発総合センター遺跡群の諏訪前遺跡の成分分析の結果を掲載した。

1．はじめに

鹿児島県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には，姶良カルデラや鬼界カルデラなど多くの火山から噴出したテフラが数多く認められる。テフラの中には，噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり，これらとの層位関係を遺跡で求めることで，遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

農業開発総合センター遺跡群の発掘調査では，「灰コラ（縄文時代晩期～弥生時代前期，開聞岳火山起源；成尾ほか，1997）」と呼ばれているテフラに同定される可能性の高いテフラが認められた。そこで重鉱物組成分析と屈折率測定を行って特徴の記載を行い，試料間の比較検討を行うことになった。分析の対象となった試料は，建石ケ原遺跡の縄文時代晩期溝状遺構（以下SR1）と諏訪前遺跡のSK28-6，および知覧町浮辺において採取された灰コラの標準試料（鹿児島県立博物館，成尾英仁学芸員による）の合計３点である。

2．重鉱物組成分析

（１）分析試料と分析方法

重鉱物組成分析の手順は次の通りである。

１）試料15gを秤量
２）超音波洗浄により泥分を除去
３）80°Cで恒温乾燥
４）分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別
５）偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し，重鉱物組成を求める。

（２）分析結果

重鉱物組成分析の結果をダイヤグラムにして図１に，その内訳を表１に示す。試料中に含まれる重鉱物の量は，いずれの試料においてもさほど多くはなかった。SR１に含まれる重鉱物は，量の多い順に単斜輝石（53.2%），磁鉄鉱（20%），斜方輝石（16.4%），カンラン石（６%），角閃石（3.6%）である。

SK28-6に含まれる重鉱物も，量の多い順に単斜輝石（43.6%），磁鉄鉱（23.2%），斜方輝石（23.2%），カンラン石（8.4%），角閃石（1.2%）である。

灰コラに含まれる重鉱物は，量の多い順に単斜輝石（55.2%），カンラン石（21.2%），磁鉄鉱（14%），斜方輝石（８%），角閃石（0.8%）である。いずれの試料も，単斜輝石やカンラン石が多く含まれていることや，角閃石が少量含まれている点で共通した特徴が認められる。

3．屈折率測定

（１）測定方法

温度一定型位相差法（新井，1972，1993）により，上述３試料に含まれる屈折率の測定を行った。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。SR１に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は，1.710-1.730である。またSK28-6に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は，1.706-1.711である。さらに灰コラに含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は1.702-1.710である。３試料に含まれる斜方輝石の屈折率には，さほど類似した値は得られなかった。ただし，SK28-6と灰コラの斜方輝石の屈折率には重複する部分が認められた。

なお，SR１に含まれる斜方輝石については，その値から約2.4～2.5万年前に姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito，荒牧，1969）や姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995）に由来するものと考えられる。以上のように，灰コラとそれに類似した特徴をもつ開聞岳火山起源のテフラについては，屈折率による同定はかなり難しい可能性があると思われる。

4．小結

重鉱物組成分析と屈折率測定により，鹿児島県農業開発総合センター遺跡群において採取されたテフラ試料と，開聞岳起源の灰コラの同定を試みた。その結果，重鉱物組成において共通した特徴が認められた。

文献
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法ー研究対象別分析法」，p.138-148
荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質雑，75，p.425-442.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p
町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰ー姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の14C年代．第四紀研究，26，p.79-83.
成尾英仁・永山修一．下山　覚（1997）開聞岳の古墳時代噴火と平安時代噴火による災害ー遺跡発掘と史料からの検討．月刊地球，no.214，p.215-222

表1　農業センター遺跡群における重鉱物組成分析結果

地点	試料	ｏｌ	ｏｐｘ	ｃｐｘ	ｈｏ	ｂｉ	ｍｔ	その他	合計
建石ヶ原	SR1	15	41	133	9	0	50	3	250
諏訪前	SK28-6	21	58	109	3	0	58	1	250
知覧町浮辺	灰コラ	53	20	138	2	0	35	0	250

※表中の数字は粒子数　　ｏｌ：カンラン石，ｏｐｘ：斜方輝石，ｃｐｘ：単斜輝石，ｈｏ：角閃石
ｂｉ：黒雲母，ｍｔ：磁鉄鉱

表2　農業センター遺跡群における屈折率測定結果

地　点	試　料	斜方輝石
建石ヶ原	SR1	1.710 - 1.730
諏 訪 前	SK28 - 6	1.706 - 1.711
知覧町浮辺	灰コラ	1.702 - 1.710

※屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1973）による

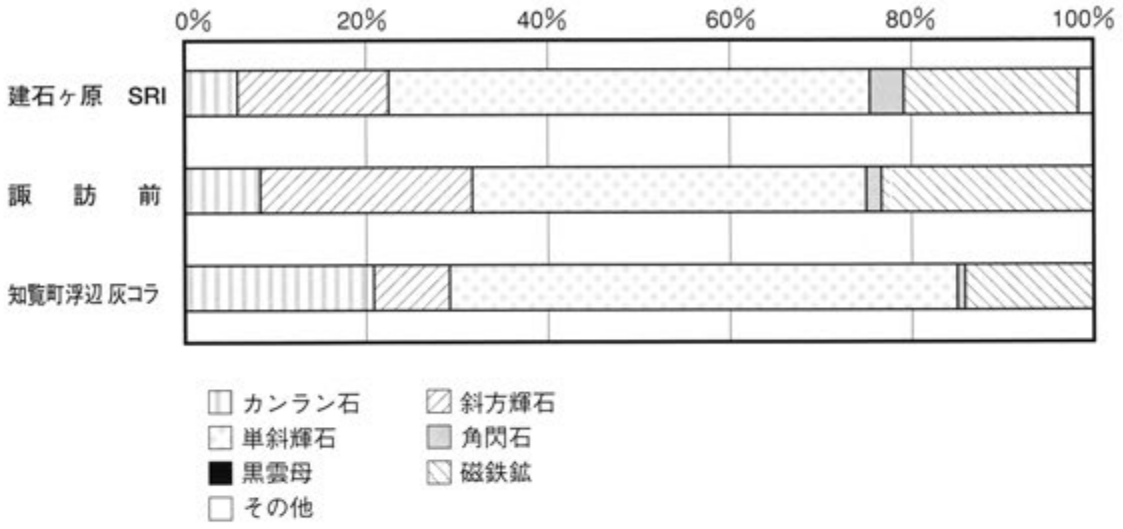


図1　農業センター遺跡群の重鉱物組成ダイヤグラム

Ⅱ．農業開発総合センター遺跡群（諏訪前遺跡）における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SK27内出土 入佐式土器（14435）	土器付着煤	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	$\delta^{13}C$[1] (‰)	補正^{14}C年代[2] (年BP)	暦年代（西暦）[3]	測定No.
No.1	−25.5	2970±85	1σ：BC1300～1280，BC1270～1040	NUTA-6419

※NUTAは，名古屋大学年代測定資料研究センターの測定番号

1）$\delta^{13}C$測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

2）補正^{14}C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。^{14}Cの半減期は，5,568年を用いた。

3）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。1σ（68%確率）は，補正^{14}C年代値の偏差の幅を暦年代補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の1σ値が表記される場合もある。

Ⅲ．農業開発総合センター遺跡群（諏訪前遺跡）における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

2．試料

分析試料は，諏訪前遺跡で検出された土坑（SK28，SK29）の埋土から採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約1gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加

（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数。

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚1㎝あたりの植物体生産量を算出した。ススキ属（ススキ）の換算係数は1.24，メダケ節は1.16，ネザサ節は0.48，クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75は0.30である。

4．分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表1および図1，図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ属A（チガヤ属など）

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク

節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など），未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，多角形板状（ブナ科コナラ属など），その他

（２）植物珪酸体の検出状況

１）SK28（図１）

上部を灰コラ層で覆われた土坑の埋土（試料１～３）について分析を行った。その結果，各試料からクスノキ科が多量に検出され，ウシクサ属Ａや棒状珪酸体も比較的多く検出された。また，ススキ属型，ネザサ節型，クマザサ属型，ブナ科（シイ属）なども少量検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（1999，杉山）。

なお，イネ，オオムギ属（ムギ類が含まれる），ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は，SK28およびSK29のいずれの試料からも検出されなかった。

２）SK29（図２）

上部を灰コラ層で覆われた土坑の埋土（試料１～４）について分析を行った。その結果，各試料からクスノキ科や棒状珪酸体が多量に検出され，ウシクサ属Ａも比較的多く検出された。また，ススキ属型，クマザサ属型，ブナ科（シイ属）なども少量検出された。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代晩期とされる土坑の埋没当時は，遺跡周辺にクスノキ科を主体としてブナ科（シイ属）なども生育する照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところも見られたものと推定される。

文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析　法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），p.109-123.

Ⅳ．農業開発総合センター遺跡群におけるリン・カルシウム分析

１．はじめに

土壌中のリン酸とカルシウムの起源としては，土壌の母材，動物遺体，植物遺体などがあり，農耕地では施肥による影響が大きい。したがって，目的とする試料の分析結果だけから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難であり，比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行うことが必要である。なお，未耕地の土壌中におけるリン酸含量は通常0.1～0.5％程度，耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0％程度である。

農業開発総合センター遺跡群の発掘調査では，方形周溝墓とされる遺構や幼児の墓とされる埋設土器が検出された。ここでは，これらの遺構や遺物の性格を把握する目的で分析を行った。

２．試料

試料は，建石ヶ原遺跡の方形周溝（墓）（ST１）および諏訪前遺跡の埋設土器（ＳＪ２）から採取された計19点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子

㈱製，JSX3201）を用いて，ファンダメンタルパラメータ法（PF法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

1）試料を絶乾（105℃・24時間）
2）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
3）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ，圧力15t/cm²プレスして錠剤試料を作成
4）測定時間300秒，照射径20㎜，電圧30keV，試料室内真空の条件で測定

X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット，ベリリウム（Be）窓，X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

4．分析結果

各元素の定量分析結果を表1，表2に示し，リン酸（P_2O_5）とカルシウム（CaO）の含量を図1に示す。

5．考察

（1）建石ヶ原遺跡の方形周溝（墓）（ST1）

主体部（土坑）の埋土におけるリン酸含量は，0.8～1.5%であり，下部（底部）に向かって減少傾向を示している。比較試料（表土層）では，リン酸含量が2.1%とかなり高い値であることから，表土層の耕作による施肥の影響が埋土に及んでいる可能性が考えられる。カルシウム含量については，比較試料よりも低い値である。

以上のことから，方形周溝（墓）（ST1）の主体部（土坑）にリン酸やカルシウムを多量に含む生物遺体が存在していたと判断することは困難である。

（2）諏訪前遺跡の埋設土器（SJ2）

土器内土壌（上部，中部，下部）におけるリン酸含量は，1.1～1.4%であり，下部（底部）に向かって増加している。これは，比較試料の0.9～1.1%よりもやや高い値である。なお，カルシウム含量については，比較試料よりも低い値である。

以上のことから，埋設土器（SJ2）の内部にはリン酸を多く含む生物遺体が存在していた可能性が考えられる。

6．まとめ

以上のように，諏訪前遺跡の埋設土器（SJ2）については，土器の内部にリン酸を多く含む生物遺体が存在していた可能性が認められた。建石ヶ原遺跡の方形周溝（墓）（ST1）の主体部（土坑）については，リン酸やカルシウムを多量に含む生物遺体の存在を確認するには至らなかった。

文献

竹追紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法．2，研究対象別分析法．東京大学出版会，p.38-45.

第Ⅵ章　古里遺跡・西原遺跡

第１節　古里遺跡

１　遺跡の立地及び調査概要

（１）遺跡の立地（第１図）

古里遺跡は吹上町大字和田字古里に所在するもので，農業大学校の教育管理棟・学生食堂・体育館・武道館等の建設地である。遺跡の東側は建石ヶ原遺跡，西側は西原遺跡に接し，南側は金峰町との町境にあたり大野原台地へと続いている。

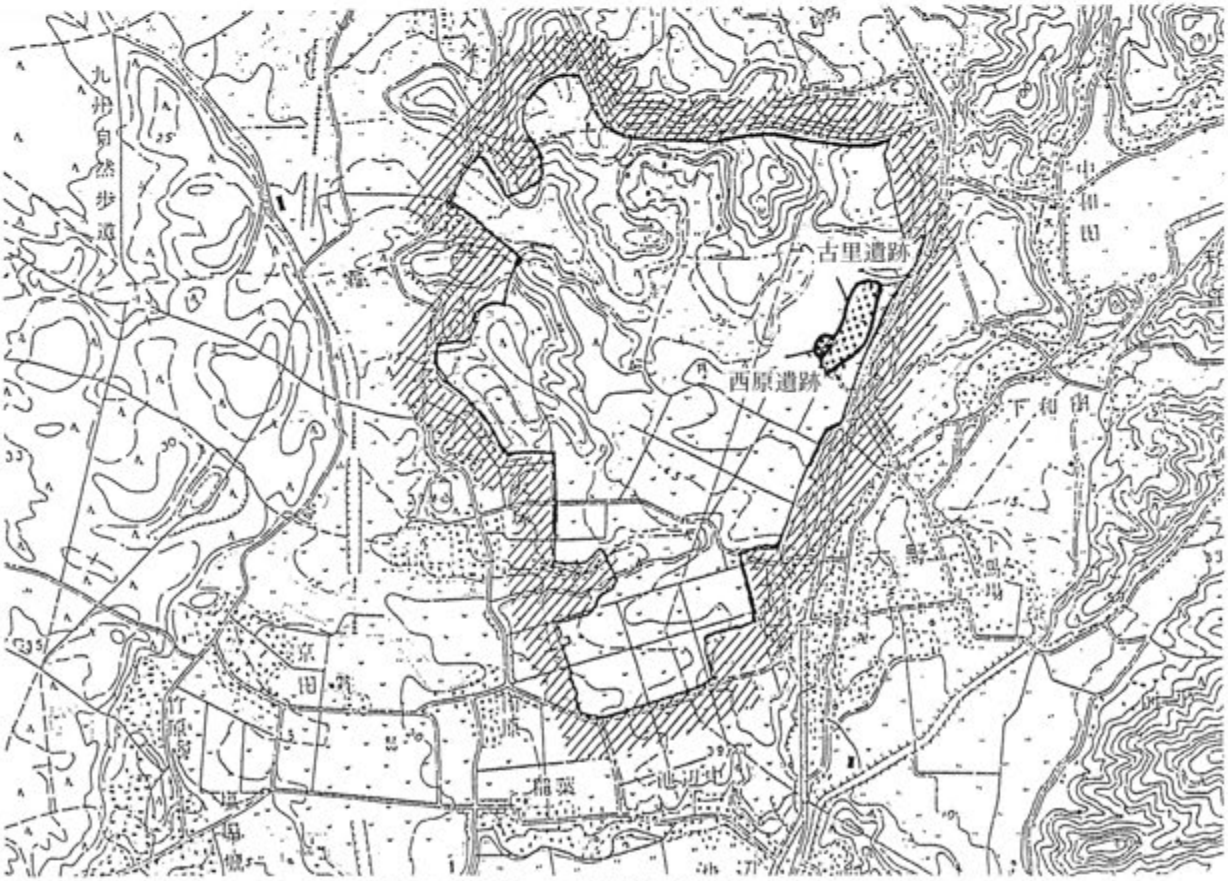
（２）調査概要

調査は，平成10年度にⅡ層及びⅢａ層の調査を実施した。その結果，中世以降のものと思われる11棟の掘立柱建物跡と４条の溝状遺構が検出されたほか，土師器・須恵器・滑石製石鍋の破片・中国製の青磁などが出土した。

平成11年度は，掘立柱建物跡の調査を実施するとともに，農業大学校建物予定地にトレンチを設定し下層の遺構及び遺物包含層の確認を行った。その結果，新たに掘立柱建物跡が１棟検出され，計12棟になった。また，Ⅳ層から縄文時代早期の土器や黒曜石製石鏃やチップ等が出土したので拡幅調査を行った。拡幅調査の結果，黒曜石チップ等の散布状況は確認できた。しかし，それ以上の包含層の広がりはなく，遺構の検出や遺物の出土がなかった。

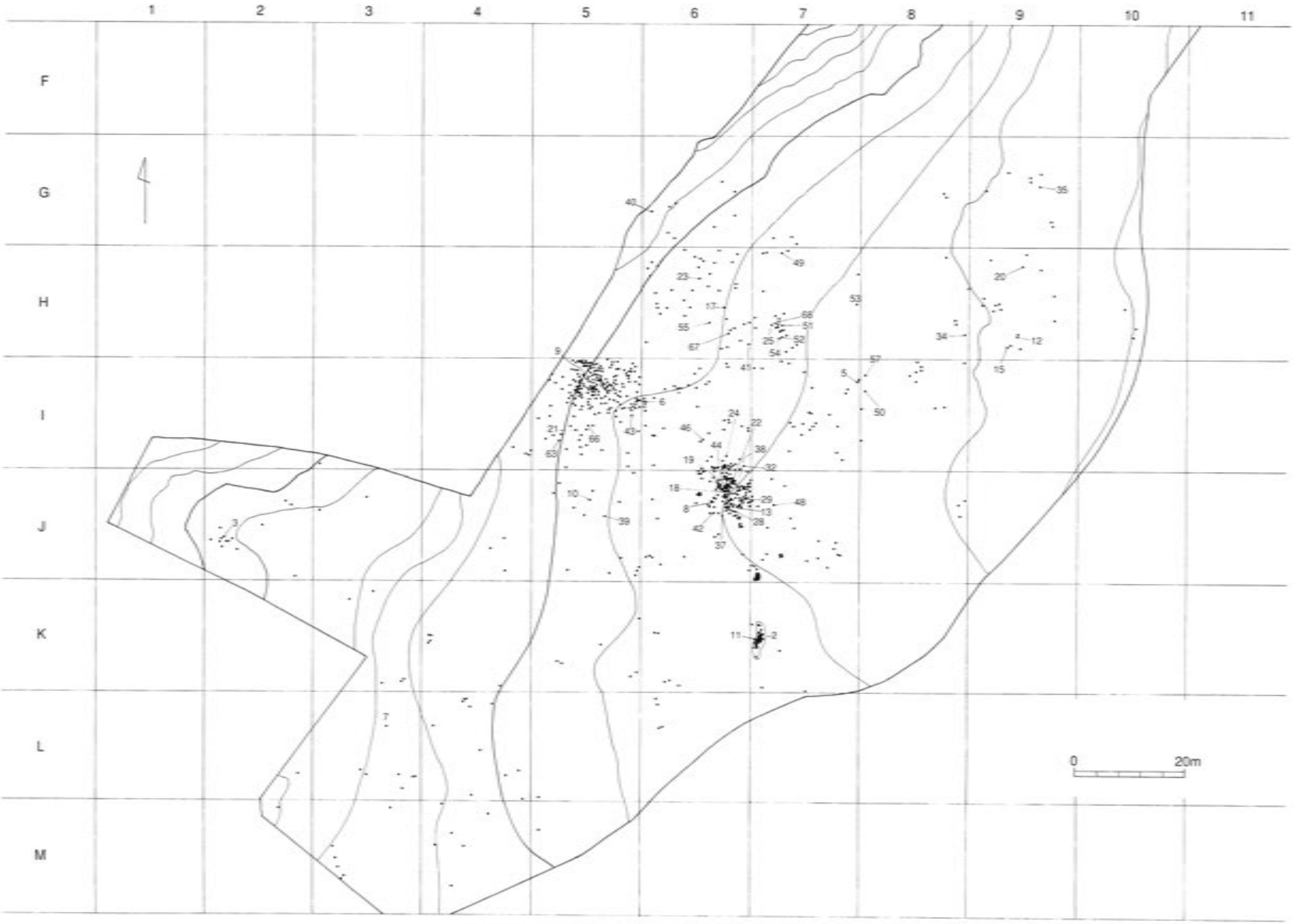
２　遺跡の層序

本遺跡の層位は，農業開発総合センター遺跡群全体の基準となっている台地部分の層位と基本的には変わらない。第３図はＧ－８区，Ｈ－６区，Ｉ－６区，Ｊ－６・７区の北側の土層断面図で，色の付いた部分はⅢ層・Ⅵ層・Ⅹ層である。表土は耕作または樹木の伐根の影響によりかなり撹乱されており，部分的にはⅤ層まで達している。Ⅱ層は削平のためほとんど残存しておらず，Ⅲａ・Ⅲｂ層は部分的に残存していた。本調査は，Ⅲａ層まで行い，下層確認調査をⅩ層まで行った。

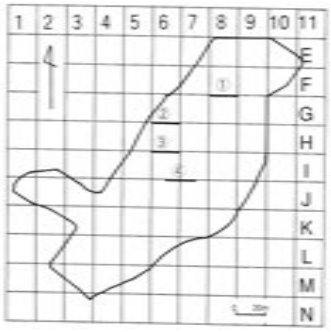


第１図　古里遺跡・西原遺跡位置図（１：25,000）

第２図　古里遺跡・西原遺跡周辺地形図及びグリッド図



第3図　古里遺跡全遺物出土状況図



Ⅰ層：耕作土（部分的にⅤ層まで達するものもある）

Ⅱ層：黒色土（ほとんど残存せず）

Ⅲ層：アカホヤ相当層だがはっきりしない。

a：こげ茶褐色。

b：茶褐色に橙色のパミスが点在。

Ⅳ層：アカホヤ下の茶褐色系の細粒土でⅢ層より目が細かい。

Ⅴ層：姶良火山灰層上部の黒色の細粒土でごま塩の斑点が見られる。

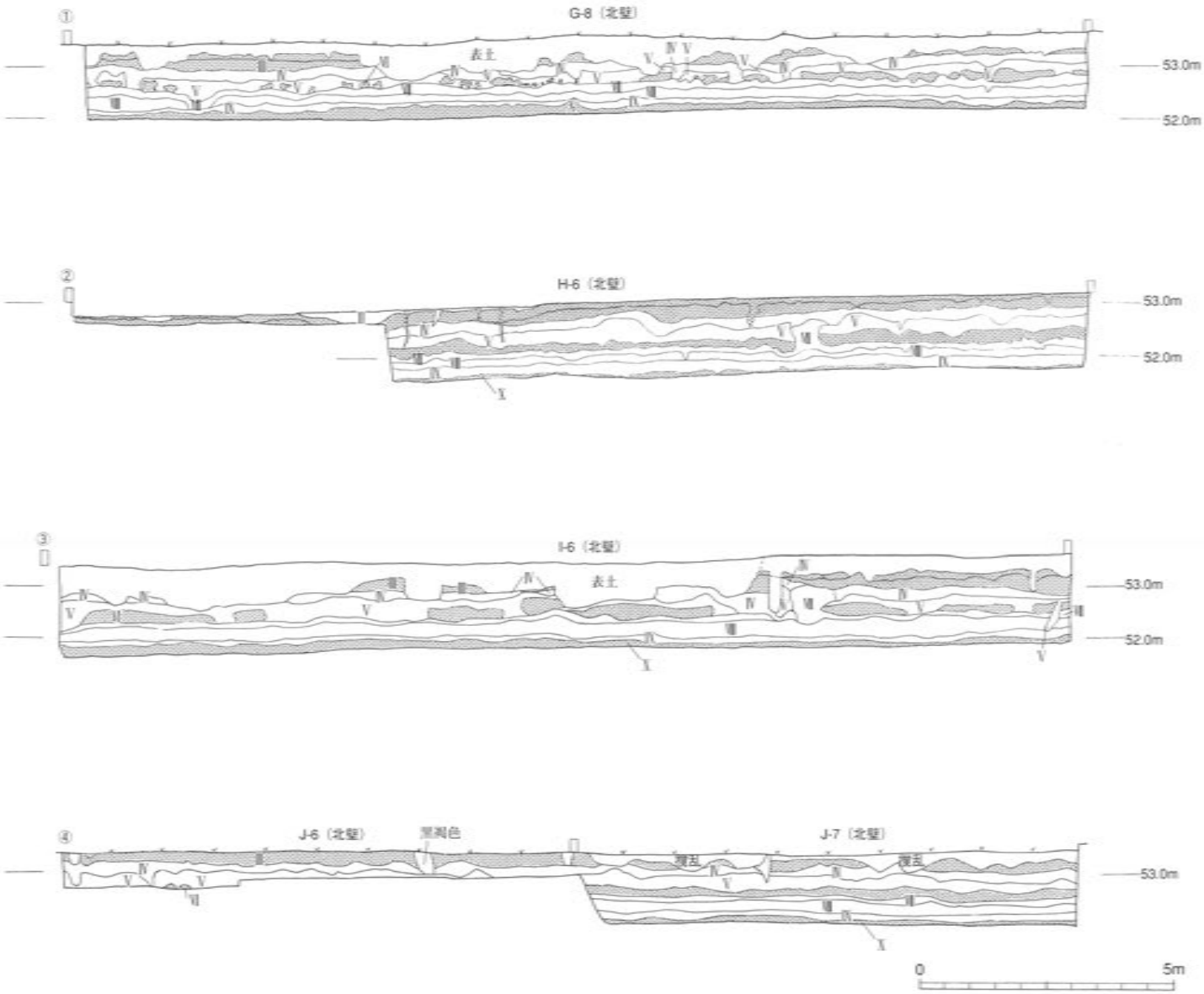
Ⅵ層：姶良火山灰層で黄橙色のパミスを多く含む。

Ⅶ層：チョコ層上部の弱粘性の土

Ⅷ層：チョコ層で非常に粘性が強い。

Ⅸ層：チョコ層よりやや色が黒い。粘性が強い。

Ⅹ層：黄色シラスで黄色軽石を含む。



第4図　古里遺跡土層断面図（抜粋）

3　発掘調査の成果

(1) 縄文時代の調査

①　調査の概要

6つのトレンチを設定し確認調査を行った結果，縄文時代早期～晩期の土器，黒曜石製石鏃やチップ等が出土した。その後，各トレンチ周辺を拡幅調査したが，遺構・遺物は発見されなかった。

②　遺物

縄文時代早期・前期の土器（第6図）

縄文時代早期・前期のものと思われる土器がⅢb層及びⅡ層から4点出土したが本来の層ではない。1は口縁部がやや外反している。口唇部にはキザミ目を有し，口縁部には斜位の貝殻刺突文が施される。石坂式土器に比定できるものと思われる。2は胴部から底部にかけての破片である。胴部には貝殻条痕が不規則に施される。右京西タイプの土器に比定できるものと思われる。3は地文の条痕が浅く，口縁部下位に2条のミミズバレ状突帯をめぐらす。口縁部は先細りである。轟B式1類に属する土器に比定できるものと思われる。4は底部である。側面には横位・斜位の貝殻条痕文がわずかに施され胴部に向け外傾している。土器の型式は不明だが，出土した層から前期の土器と考えられる。

縄文時代晩期の土器（第7図）

縄文時代晩期のものと思われる土器がⅢa層及びⅡ層から11点出土し，2点は表層で取り上げた。

5～11は粗製深鉢と思われる土器である。5は口縁部，6は頸部，7は胴部でいずれも小破片で，全体の器形等は明らかではない。調整はいずれもナデであるが，5は丁寧で器面の条痕がはっきりと残っている。実体顕微鏡で胎土を観察したところ，5と7は長石が多く含まれていた。

8～11は底部で，張り出しがわずかなものもあるが，底面が外側へ張り出している。8と11は平底で，9と10はやや上げ底ぎみである。調整は，8～10は外・内面ともナデ，11は外面はナデ，内面は磨きによって行われている。

12～17は精製深鉢と思われる土器の口縁部である。12は外反しており，外面に1条のヘラ沈線が施されている。13～16は明瞭な稜をもつが，13から16へ移るにつれて口縁帯の間隔が狭くなっている。13は外面に2条のヘラ沈線が施されている。

17は底部で，丁寧なナデによる調整が施されている。

縄文時代の石器（第8・9図　18～26）

H・I－5～9区のⅣ層～Ⅱ層で縄文時代のものと思われる石器が8点出土した。

ア　石鏃・石核（第8図）

18～23は石鏃である。18～19は上牛鼻産黒曜石製である。

18は最大長が約1.4㎝，最大幅が約1.5㎝の小型の石鏃である。両側面は鋸歯状に仕上げられている。形状はほぼ正三角形で，抉りの浅い基部である。基部の片側が一部欠損している。

19は側面の中央部が鋸歯状に仕上げられている。半分が欠損しているため，形状・基部とも断定できないが，ほぼ二等辺三角形の形状で抉りの深い基部と推定できる。

20は厚さ0.5㎝とやや厚手で，石材は頁岩である。鋸歯状の仕上げは見られない。形状はほぼ二等辺三角形で，抉りの深いU字形をした基部である。

21は灰色のチャート製である。鋸歯状の仕上げは見られない。基部は片側が欠損しているものの中央部付近から外側に開くような形状となっている。

22は良質の黒曜石製である。素材剥片の腹面を中央に残し，両側面とも鋸歯状に仕上げられている。形状はほぼ二等辺三角形で，抉りの深い基部である。基部の片側が一部欠損している。

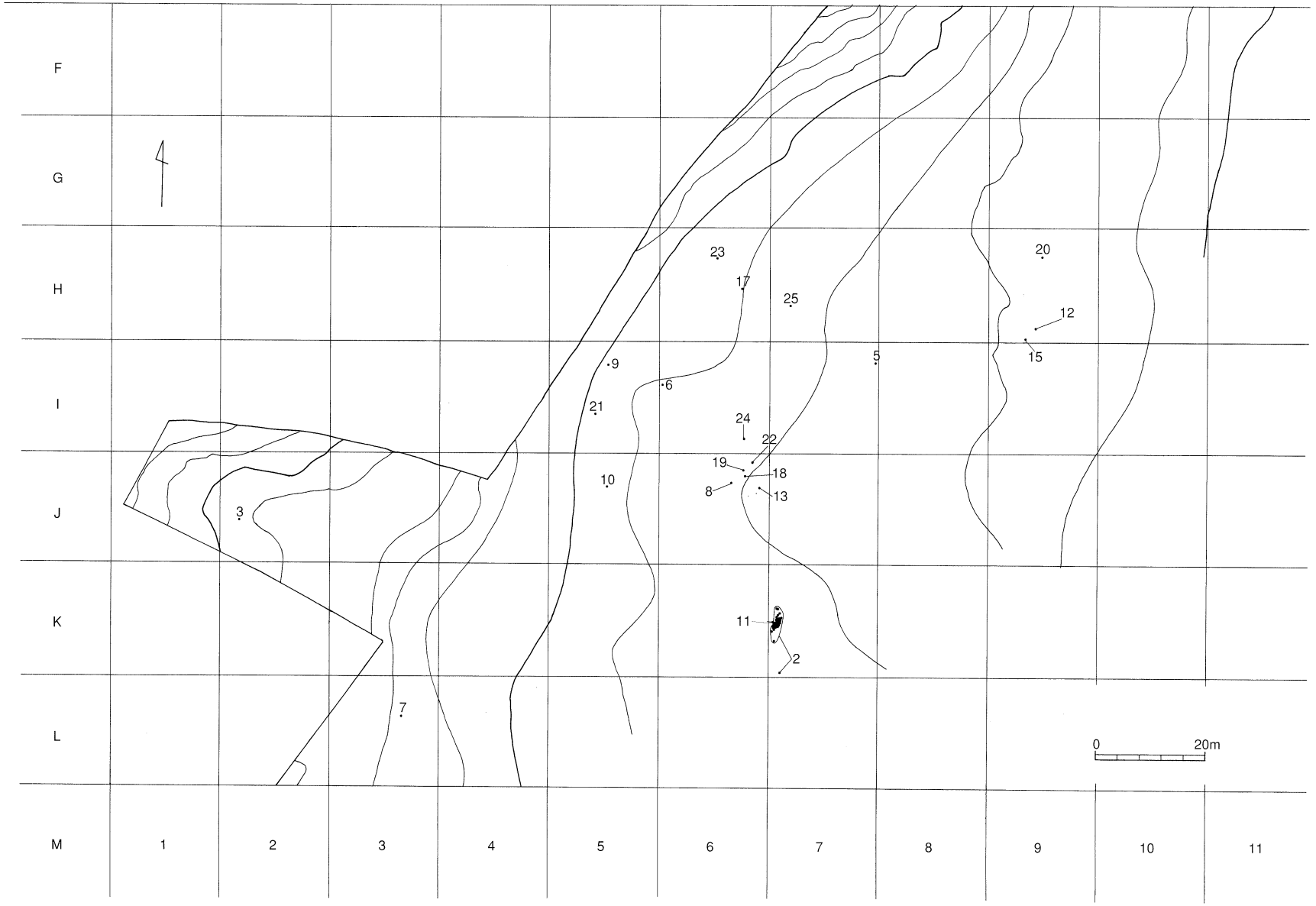
23は灰色がかった西北九州産の黒曜石を石材としたものである。鋸歯状の仕上げは見られない。形状はほぼ二等辺三角形で，抉りの深いU字形をした基部である。基部の片側が一部欠損している。

24は上牛鼻産黒曜石製の石核である。厚さ約0.95㎝とやや小さめだが石核とした。しかし，両面に加工の入った他の石器の可能性もある。作業面は単設の打面から連続で2枚の剥離痕が確認できる。背面は求心状の剥離により構成されている。

イ　砥石・打製石斧（第9図）

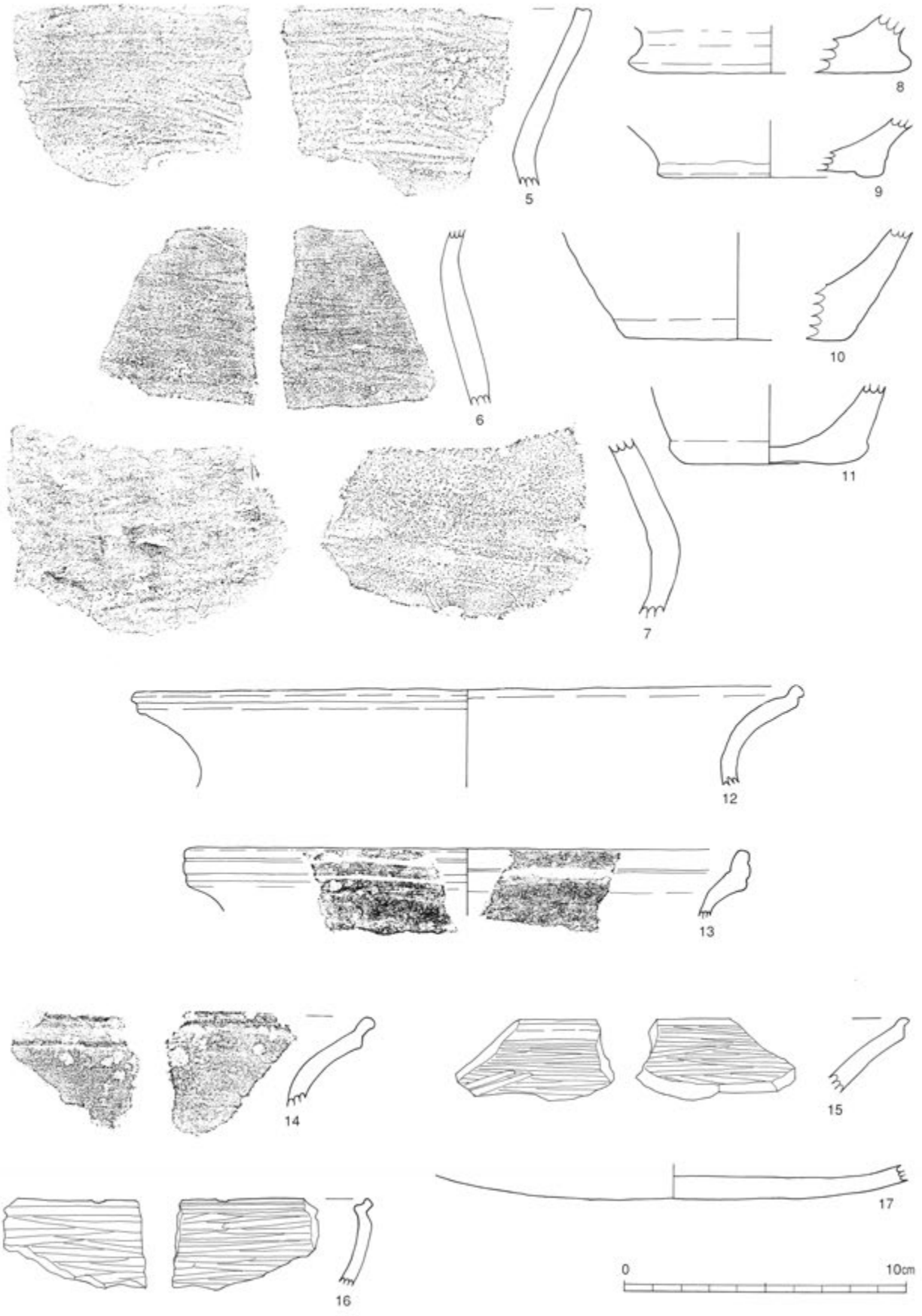
25は砂岩製の砥石である。磨面が4面確認され，いずれも使用による曲面を成している。一部欠損している。

26は表層で取り上げた粘板岩質製の扁平な打製石斧である。腹面はほぼ大剥離面で構成され，周縁にのみ面的な加工が施されている。

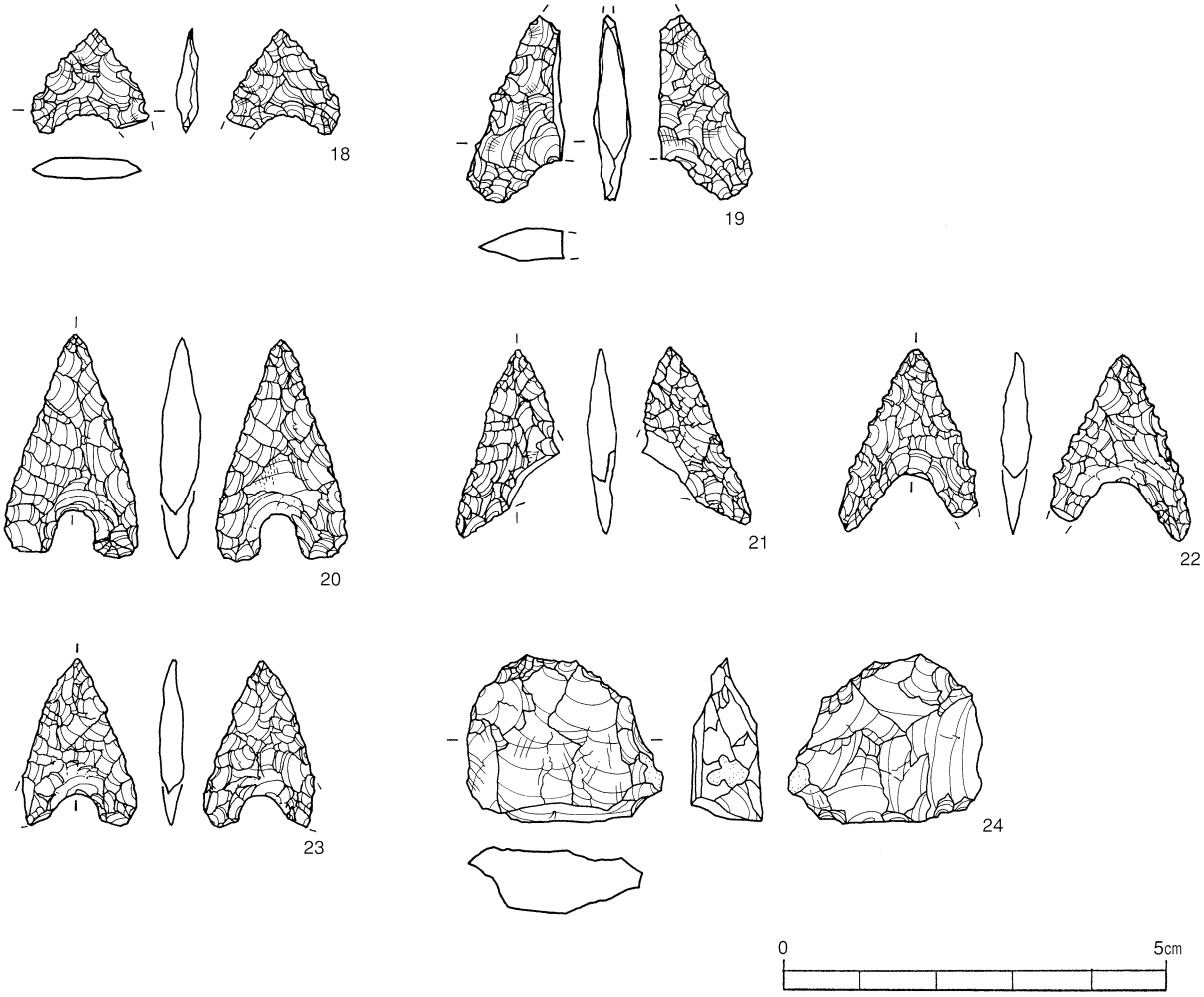


第5図　縄文時代遺物出土状況（掲載分）

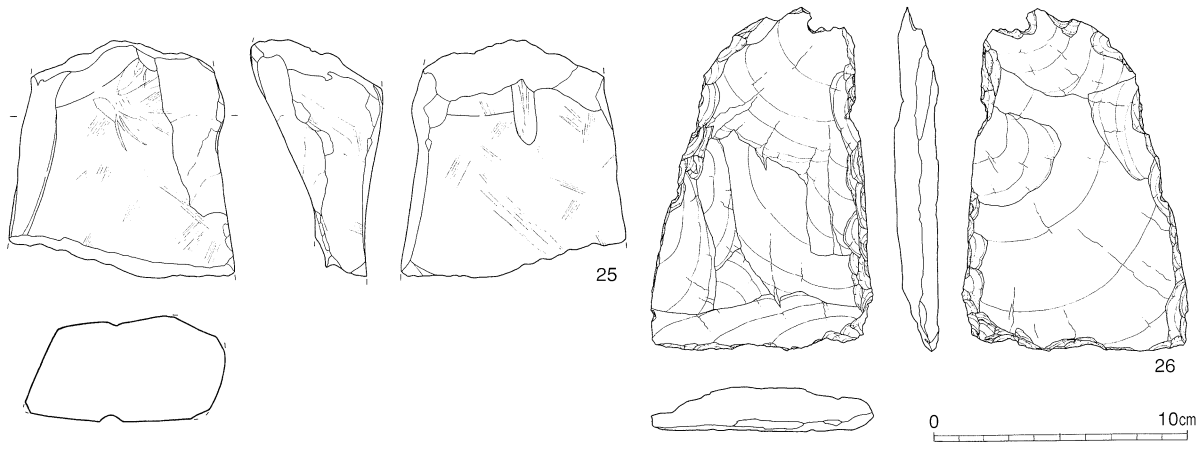
第6図　縄文時代早期・前期出土土器



第７図　縄文時代晩期出土土器



第 8 図　縄文時代出土石器 1 （石鏃・石核）



第 9 図　縄文時代出土石器 2 （砥石・打製品石斧）

縄文時代早期・前期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区 遺構	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第6図	1	SB09P11		明茶褐色	淡茶褐色	○	◎	◎	—	良	貝殻刺突	ナデ	
	2	K－7	Ⅲ	淡茶褐色	茶褐色	—	○	○	—	〃	貝殻条痕	ナデ	
	3	J－2	Ⅱ	淡黒褐色	淡黒褐色	—	○	—	—	〃	突帯	ナデ	突帯はミミズバレ状
	4	—	Ⅲ	淡黒褐色	淡茶褐色	—	○	—	—	〃	貝殻条痕	ナデ	

縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区 遺構	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第7図	5	I－7	Ⅱ	暗茶褐色	明茶褐色	○	◎	○	—	良	無文	ナデ	
	6	I－6	Ⅱ	淡茶褐色	白濁	○	○	○	—	〃	無文	ナデ	
	7	L－3	Ⅱ	淡茶褐色	白濁	○	◎	○	—	〃	無文	ナデ	
	8	J－6	Ⅱ	暗茶褐色	淡黄褐色	—	○	—	—	〃	ナデ	ナデ	
	9	I－5	Ⅲ	暗茶褐色	淡黒褐色	○	○	—	—	〃	ナデ	ナデ	
	10	J－5	Ⅱ	淡黒褐色	淡茶褐色	—	○	—	—	〃	ナデ	ナデ	
	11	K－7	Ⅲ	茶褐色	黒褐色	—	○	—	—	〃	ナデ	磨き	
	12	H－9	Ⅲ	黄褐色	黄褐色	○	◎	○	—	〃	ヘラ沈線	ナデ	
	13	J－6	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	—	◎	—	火山ガラス数片	〃	ヘラ沈線	ナデ	
	14	—	表採	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	—	—	〃	ナデ	ナデ	
	15	H－8	Ⅲ	淡茶褐色	淡茶褐色	—	○	—	—	〃	ナデ	ナデ	
	16	—	表採	淡黒褐色	淡黒褐色	—	○	○	—	〃	ナデ	ナデ	
	17	H－6	Ⅱ	白濁	淡黄褐色	—	○	○	—	〃	ナデ	ナデ	

縄文時代石器観察表

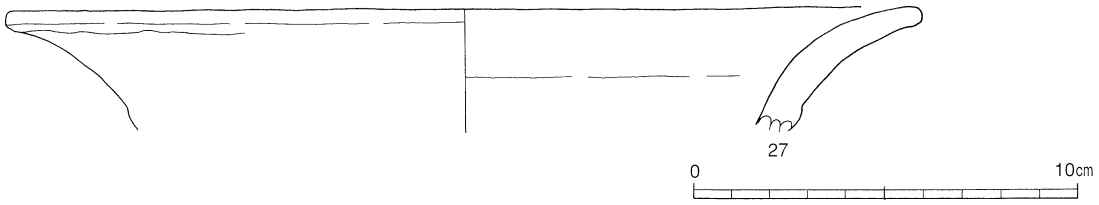
挿図番号	遺物番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第8図	18	Ⅳ	石鏃	J－6	黒曜石	1.4	1.5	0.3	0.4	上牛鼻産の黒曜石
	19	Ⅳ	石鏃	J－6	黒曜石	2.45	1.2	0.5	1	上牛鼻産の黒曜石
	20	Ⅱ	石鏃	H－9	頁岩	2.9	1.7	0.5	1.88	—
	21	Ⅲ	石鏃	I－5	チャート	2.45	1.2	0.3	0.73	灰色のチャート
	22	Ⅲ	石鏃	J－6	黒曜石	2.5	1.8	0.35	0.92	良質の黒曜石
	23	Ⅱ	石鏃	H－6	黒曜石	2.2	1.45	0.25	0.77	西北九州産の黒曜石
	24	Ⅲ	石核	I－6	黒曜石	2.2	2.5	0.95	5.2	上牛鼻産の黒曜石
第9図	25	Ⅱ	砥石	H－7	砂岩	9.6	8.9	5.3	375.4	一部欠損
	26	表採	打製石斧	—	粘板岩質	12.9	8.95	1.8	226	—

(2) 古墳時代の調査

古墳時代の土器がＪ－６区のⅡ層から１点出土した。

遺物（第10図）

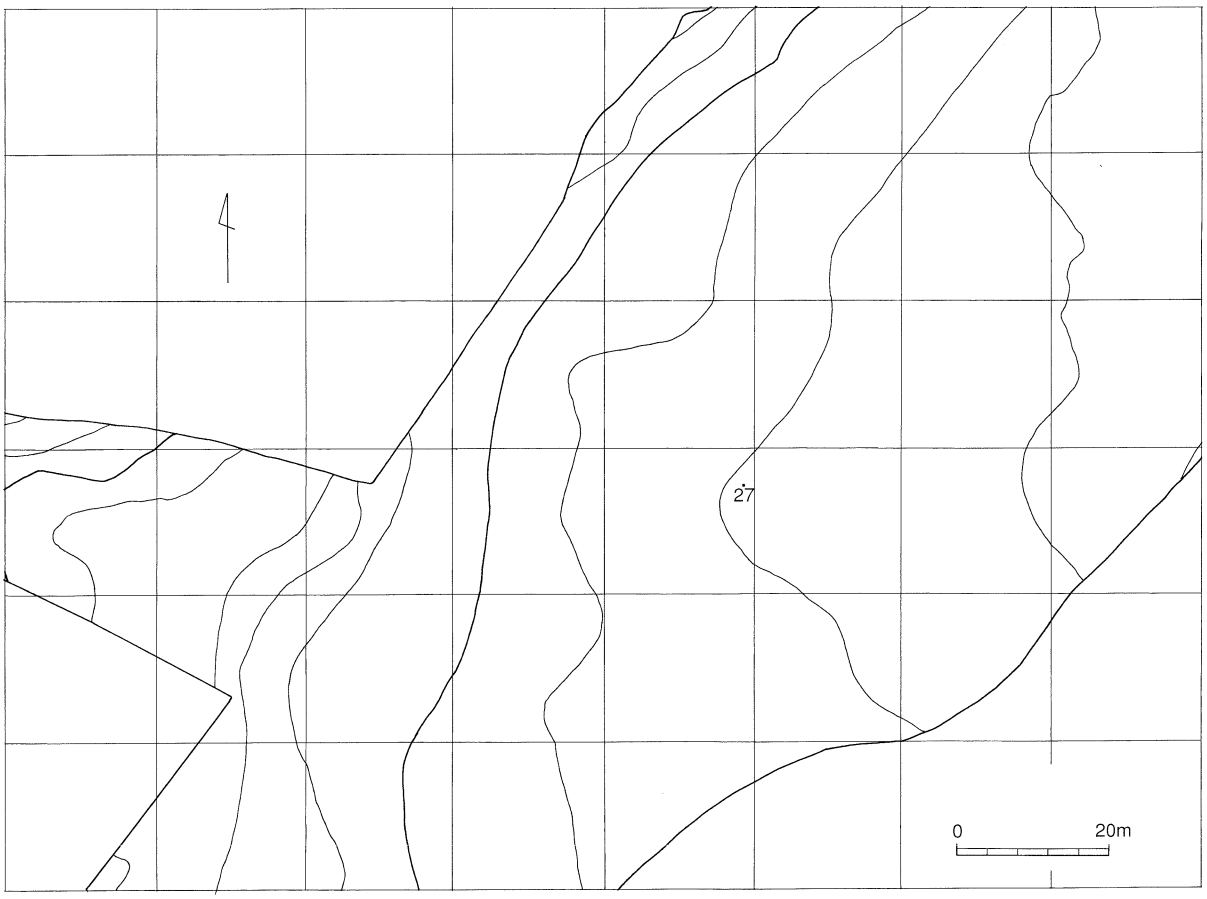
27は，外反する口縁部を有する壺形土器である。外面は横方向のハケナデ調整，内面はナデ調整である。胎土は，長石を多く含んでおり，角閃石，火山ガラスも数片見られた。成川式土器に比定できるものと思われる。



第10図　古墳時代出土土器

古墳時代土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区 遺構	層位	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第10図	27	Ｊ－６	Ⅱ	茶褐色	茶褐色	—	◎	○	火山ガラス数片	良	ハケナデ	ナデ	



第11図　古墳時代遺物出土状況（掲載分）

(3) 中世の調査

① 調査の概要

Ⅱ層及びⅢ層上面で，中世以降のものと思われる12棟の掘立柱建物跡と４条の溝状遺構が検出された。また，土師器・須恵器・滑石製石鍋の破片・中国製の青磁等が出土した。

② 遺構

ア 掘立柱建物跡（12棟）

12棟からなる建物群は，溝状遺構で囲まれており，１つの集落を形成していたものと思われる。建物跡は，建物の主軸方向や６～８号が重複した形で検出されたことから考えると３～５の時期にわたると思われる。３号は建物規模が１間×３間であるが，１間が２間分あるので２間×３間としてとらえることにした。２号・７号・８号・11号については，柱間芯芯間距離のみ観察表に掲載している。なお，数値は平均値で小数第１位を四捨五入して表してある。

１号掘立柱建物跡（第14図）

Ｊ－６・７区で検出された。２間×３間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。柱穴の長径は約40cm，短径は約31cm，深さは約56cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は，全柱穴とも非常にきめが細かく粘性が低い黒褐色砂質土とアカホヤで，中には粘性の低い暗灰褐色・暗茶褐色の砂質土を含むものもあった。柱穴８から東播磨系こね鉢が出土した。

２号掘立柱建物跡

Ｊ－８区で検出された。２間×３間の大きさで主軸はほぼ南北方向と思われる。

３号掘立柱建物跡（第15図）

Ｈ・Ｉ－９区の区境で検出された。２間×３間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。北側に庇をもつ。柱穴の長径は約30cm，短径は約27cm，深さは約32cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は粘り気が強い黒褐色のものが大部分で，下層部にアカホヤが混ざっているものが多かった。

４号掘立柱建物跡（第16図）

Ｈ・Ｉ－８・９区の境目付近で検出された。２間×３間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。柱穴の長径は約32cm，短径は約29cm，深さは約27cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は，黒褐色土が主体で，中にはアカホヤが粒状に入っているものもあった。

５号掘立柱建物跡（第17図）

Ｈ－８区で検出された。２間×３間の大きさで主軸はほぼ東西方向と思われる。柱穴の長径は約49cm，短径は約34cm，深さは約62cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は，粘土質の黒い土が主体で，アカホヤが混ざっているものもあった。

６号掘立柱建物跡（第18図）

Ｈ－７区で検出された。２間×３間の大きさである。柱穴の長径は約34cm，短径は約27cm，深さは約41cmを測るが一定ではない。柱穴の埋土は，黒褐色土とそれにアカホヤが混ざったものが多かった。また，西側では重複した形で大きさがいずれも２間×３間の７号，８号掘立柱建物跡も検出されたが，時期の新旧については判断できなかった。

９号掘立柱建物跡（第19図）

Ｈ－７区で検出された。２間×３間の大きさで主軸はほぼ南北方向である。南側に庇をもつ。柱穴の長径は約44cm，短径は約30cm，深さは約51cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は，黒土にアカホヤが点在したものが多かった。また，柱穴５から糸切底の坏が，柱穴６から白磁の碗が，柱穴７から青磁の碗と白磁の皿が，柱穴11から石坂式土器に比定できる縄文土器と土師器の坏が出土した。

10号掘立柱建物跡（第20図）

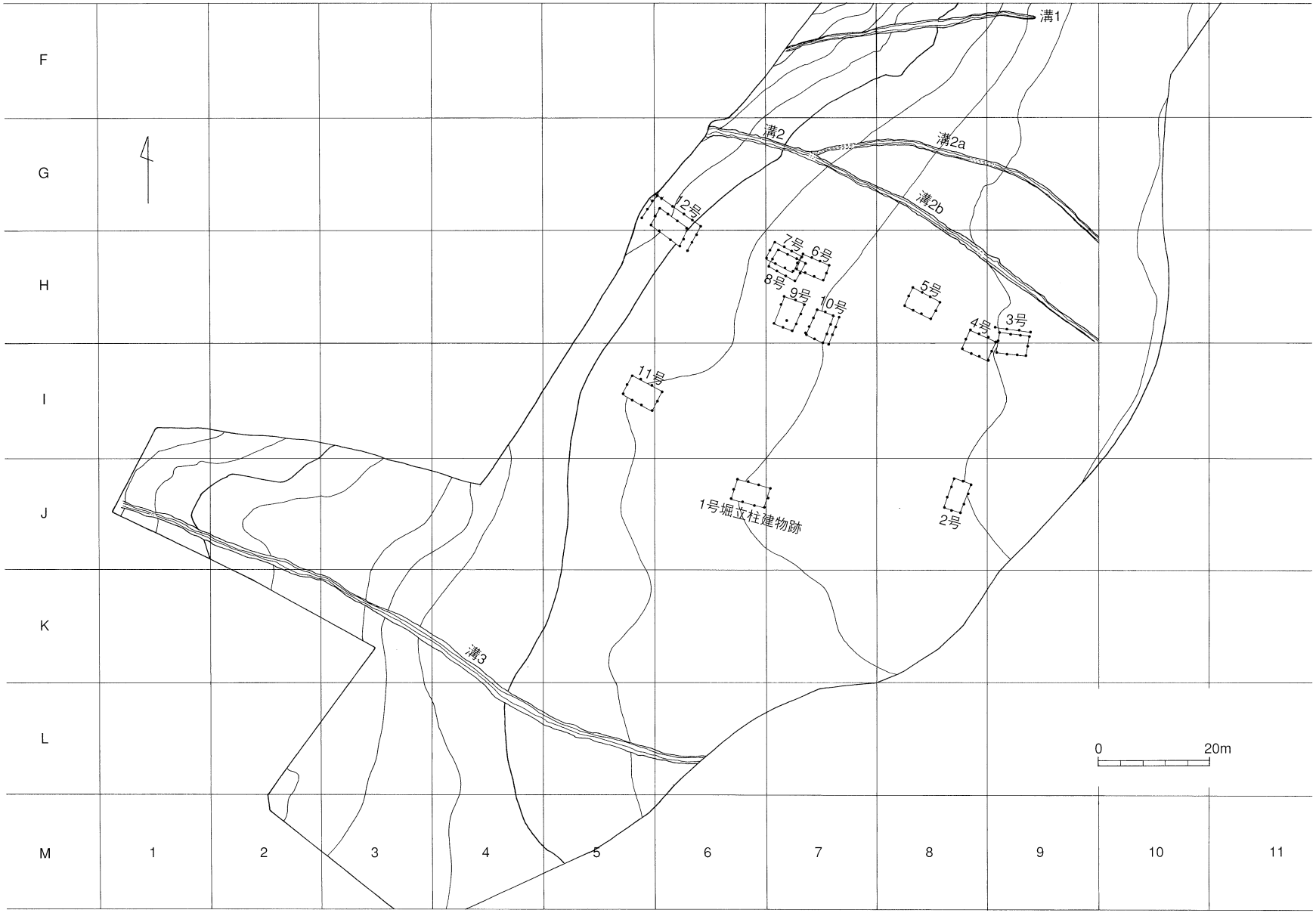
Ｈ－７区で検出された。２間×３間の大きさで主軸は南北方向である。東側に庇をもつ。柱穴の長径は約41cm，短径は約28cm，深さは約39cmであるが一定ではない。柱穴の埋土は，黒褐色と黒褐色にアカホヤが点在しているものが多かった。また，柱穴５から土師器の坏が１点出土した。

11号掘立柱建物跡

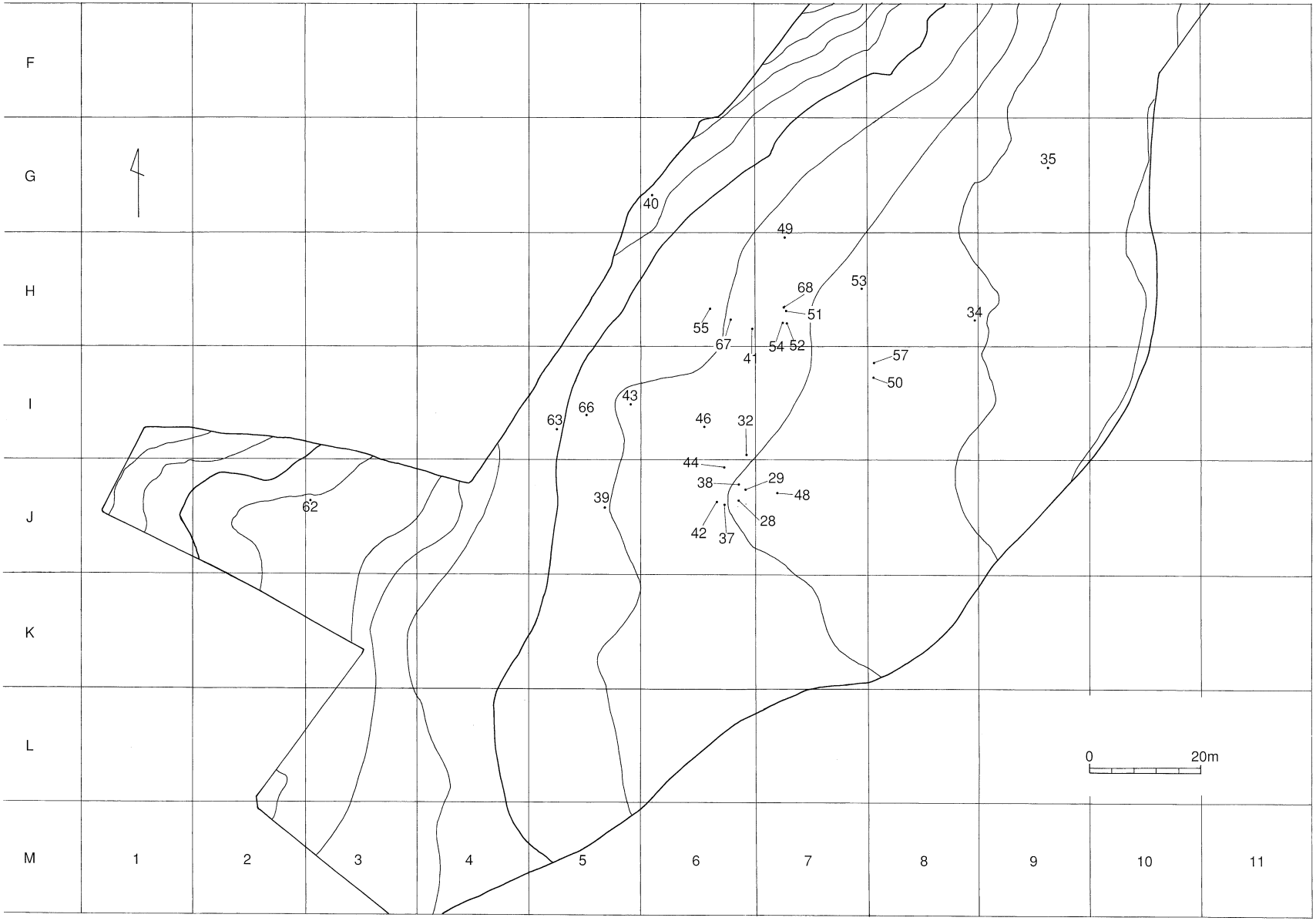
Ｉ－５区で検出された。２間×３間の大きさである。主軸はほぼ東西方向である。

12号掘立柱建物跡（第21図）

Ｈ－６区で検出された。２間×３間の大きさで，南側を除く三面庇をもつ構造となっていた。柱穴の長径は約33cm，短径は約28cm，深さは約44cmであるが一定ではない。



第12図　中世遺構配置図

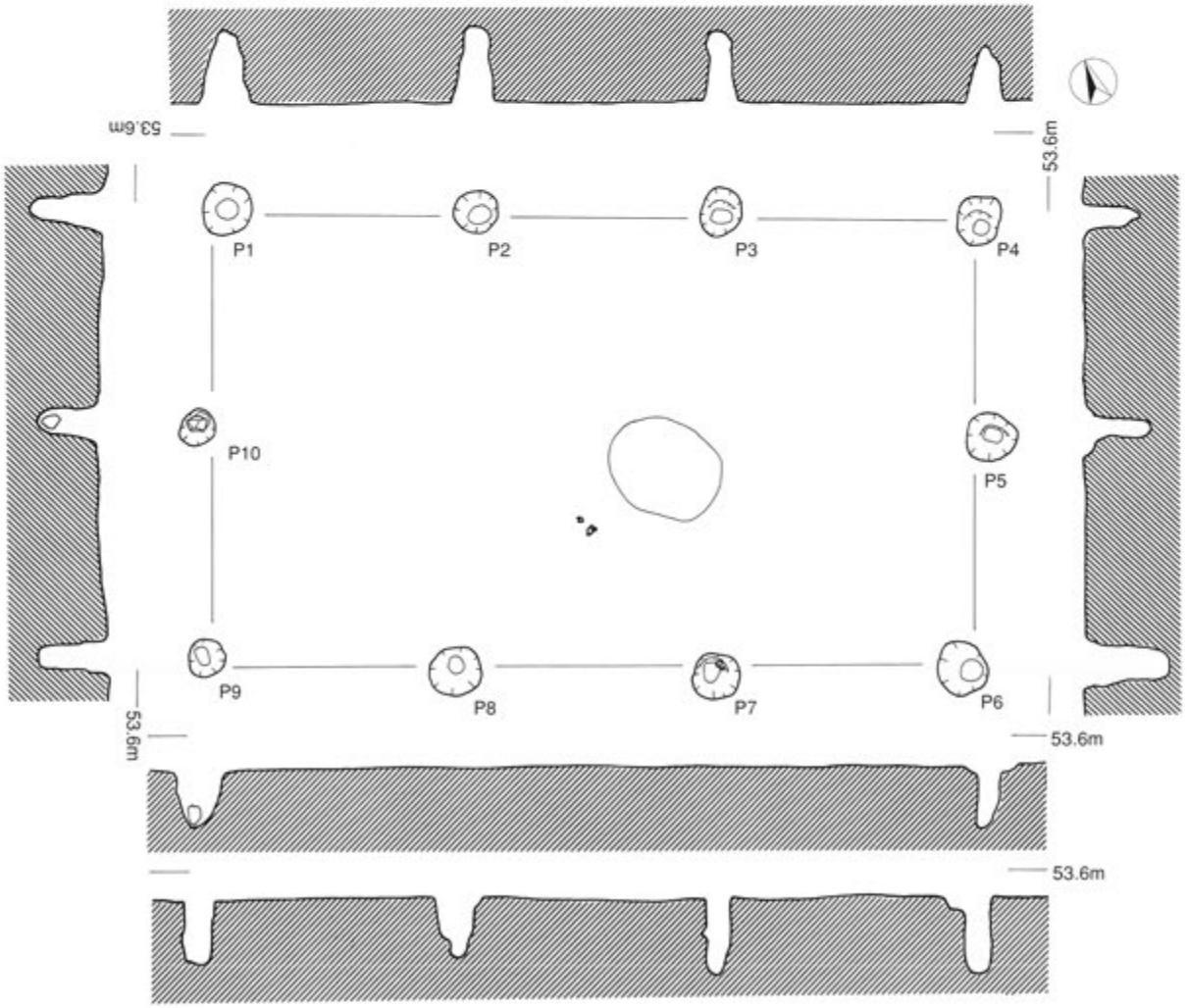


第13図　中世遺物出土状況（掲載分）

1号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
	長径	短径	深さ(最深)
1	45	39	60
2	36	33	63
3	42	33	57
4	45	33	45
5	42	39	54
6	45	39	69
7	42	36	63
8	45	39	51
9	33	30	51
10	30	27	48

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1～2	207
	2～3	198
	3～4	213
	1～4	621
	6～7	204
	7～8	213
	8～9	204
	6～9	621
梁間方向	1～10	186
	10～9	189
	1～9	375
	4～5	180
	5～6	192
	4～6	372

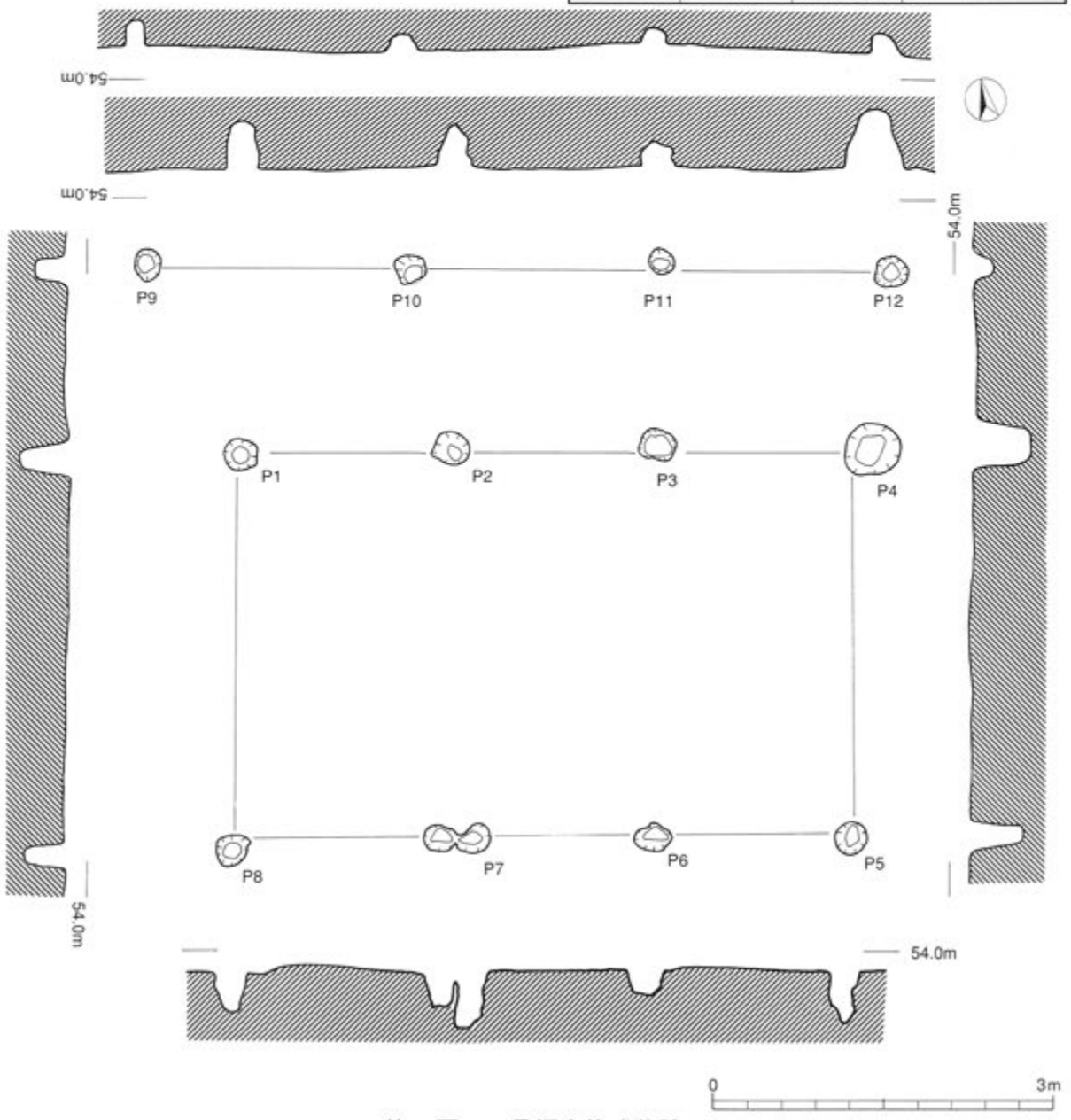


第14図　1号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

	柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
		長径	短径	深さ(最深)
棟　部	1	30	27	42
	2	33	30	39
	3	33	24	24
	4	51	45	51
	5	30	27	48
	6	33	24	24
	7	33	21	48
	8	33	27	36
庇部分	9	30	21	30
	10	30	24	12
	11	24	21	12
	12	30	27	18

	方向	柱穴番号	柱間(単位：cm)
棟　部	桁行方向	1～2	189
		2～3	180
		3～4	186
		1～4	555
		5～6	174
		6～7	162
		7～8	210
		5～8	546
	梁間方向	1～8	357
		4～5	354
庇部分	桁行方向	9～10	231
		10～11	219
		11～12	204
		9～12	654

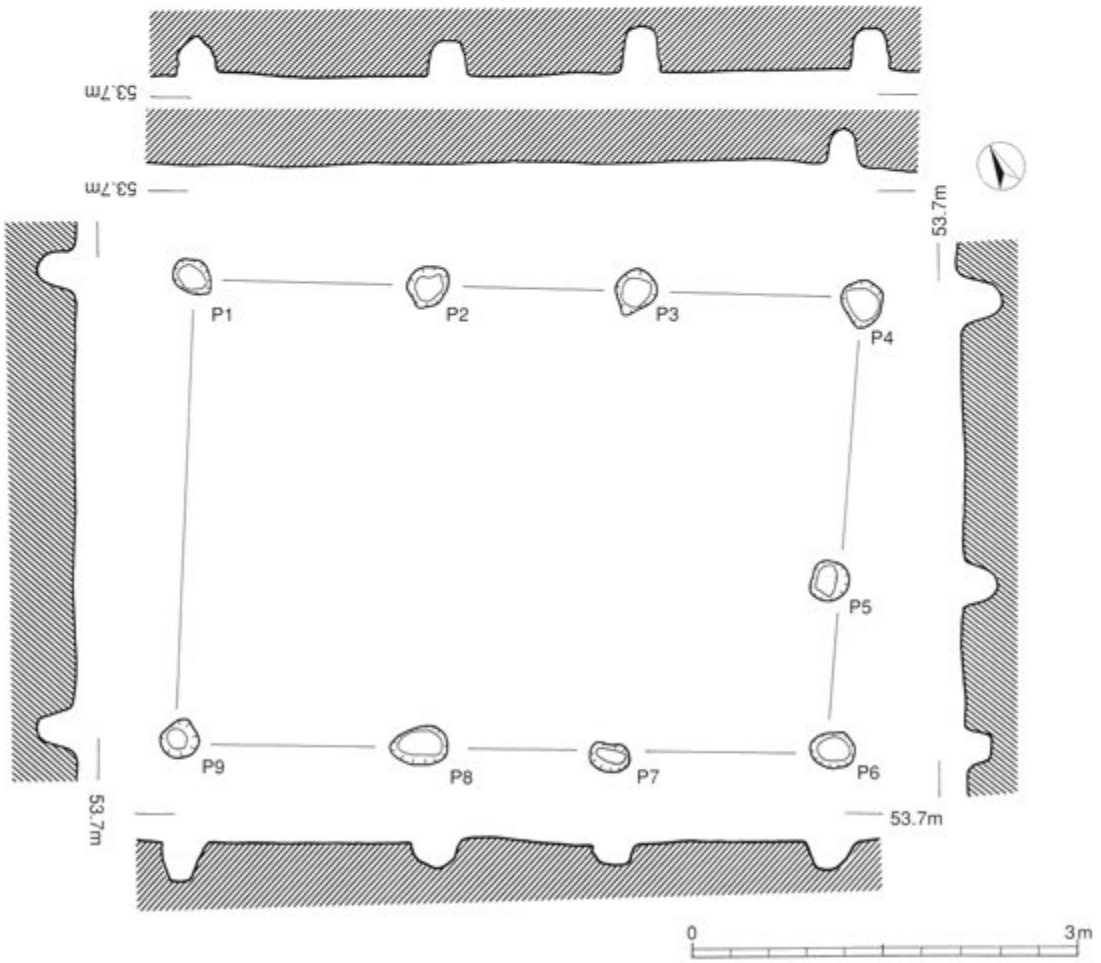


第15図　3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
	長径	短径	深さ(最深)
1	33	24	30
2	33	30	30
3	39	30	36
4	39	33	30
5	33	30	24
6	36	30	24
7	33	21	15
8	45	30	21
9	33	30	30

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1～2	189
	2～3	159
	3～4	183
	1～4	521
	6～7	180
	7～8	150
	8～9	186
	6～9	516
梁間方向	1～9	369
	4～5	225
	5～6	138
	4～6	363

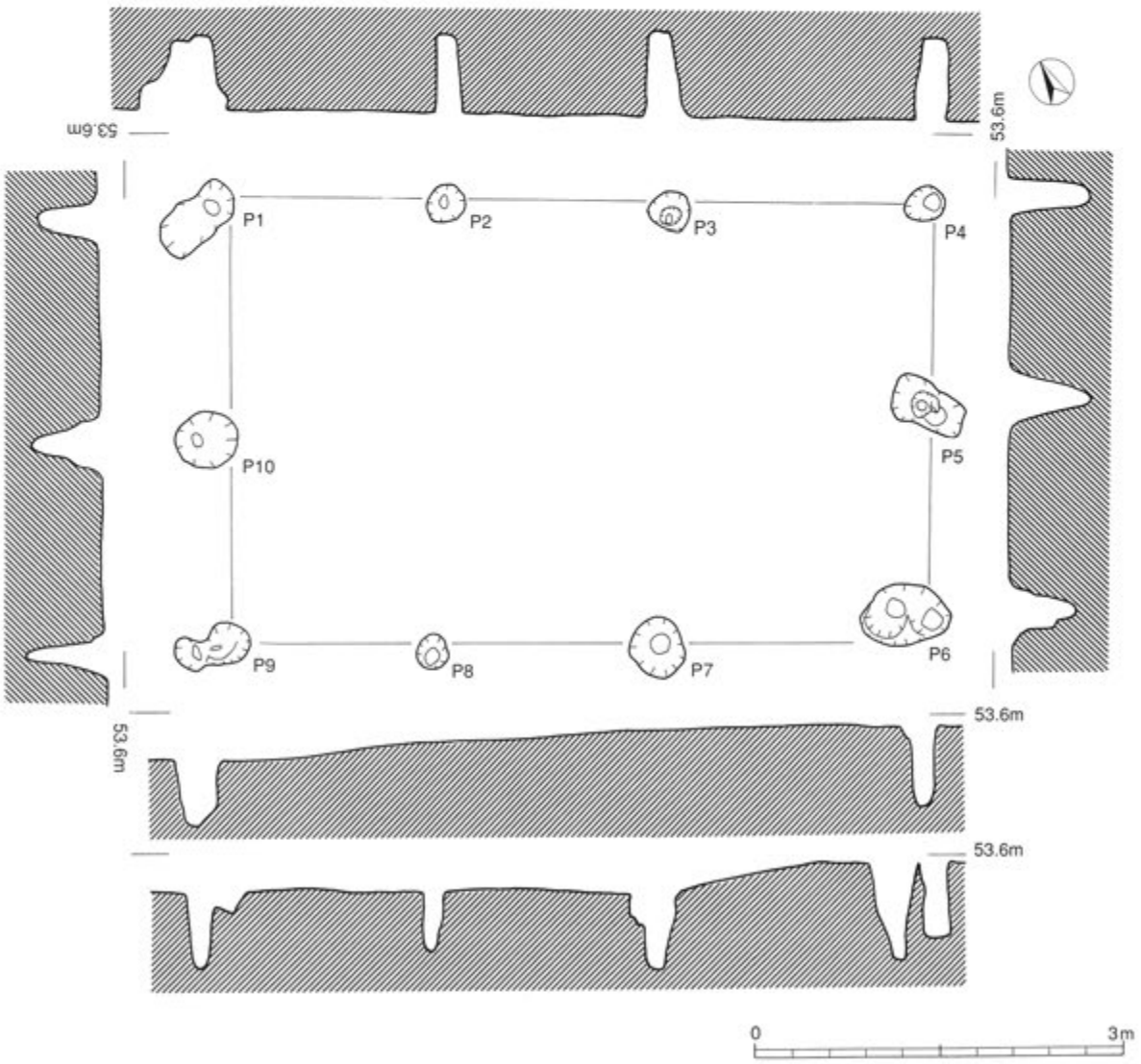


第16図　4号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
	長径	短径	深さ(最深)
1	72	33	60
2	33	30	66
3	33	30	72
4	33	30	69
5	69	33	66
6	72	45	54
7	51	42	66
8	30	24	48
9	42	27	66
10	51	42	54

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1～2	189
	2～3	186
	3～4	213
	1～4	588
	6～7	219
	7～8	186
	8～9	192
	6～9	597
梁間方向	1～10	195
	10～9	177
	1～9	372
	4～5	168
	5～6	180
	4～6	348

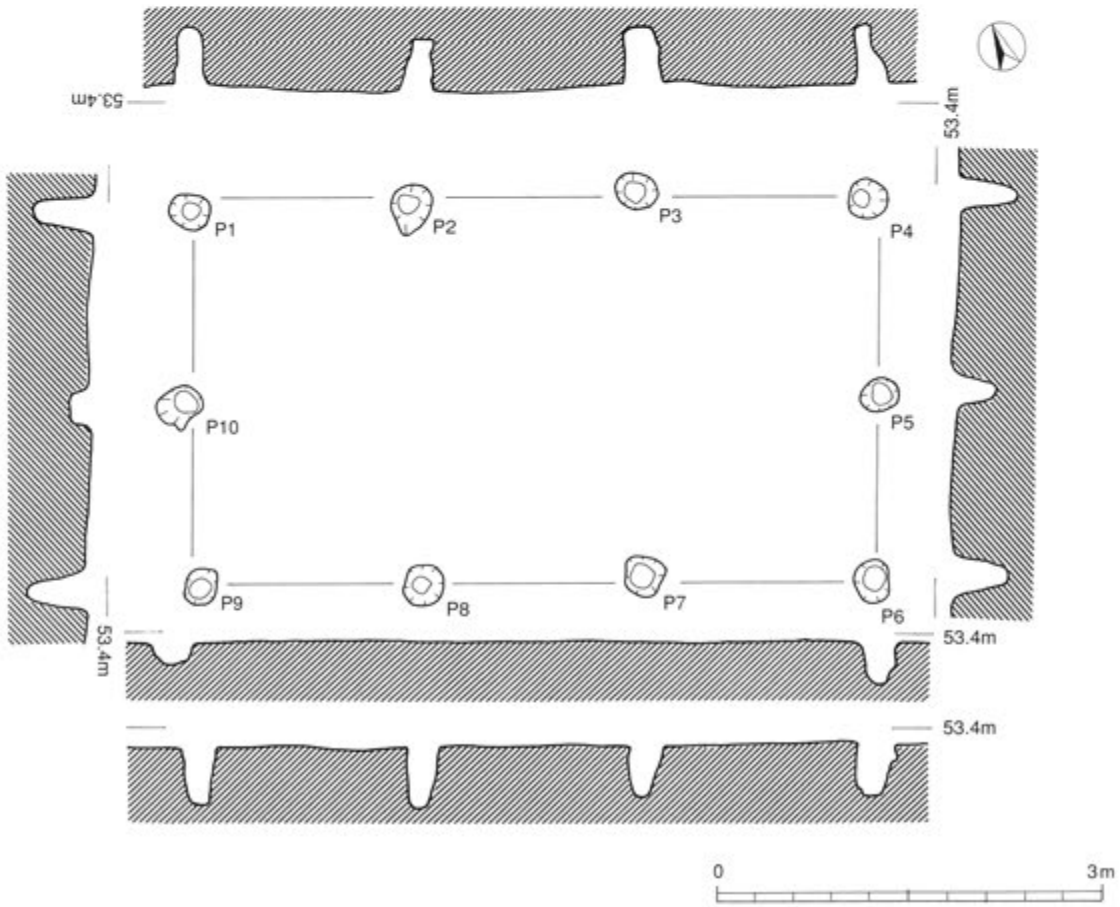


第17図　5号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
	長径	短径	深さ(最深)
1	33	27	48
2	39	30	42
3	33	27	45
4	30	27	45
5	30	27	33
6	36	27	42
7	36	27	42
8	33	27	48
9	33	24	45
10	36	27	15

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1～2	171
	2～3	177
	3～4	180
	1～4	528
	6～7	183
	7～8	174
	8～9	177
	6～9	534
梁間方向	1～10	153
	10～9	150
	1～9	303
	4～5	159
	5～6	147
	4～6	306

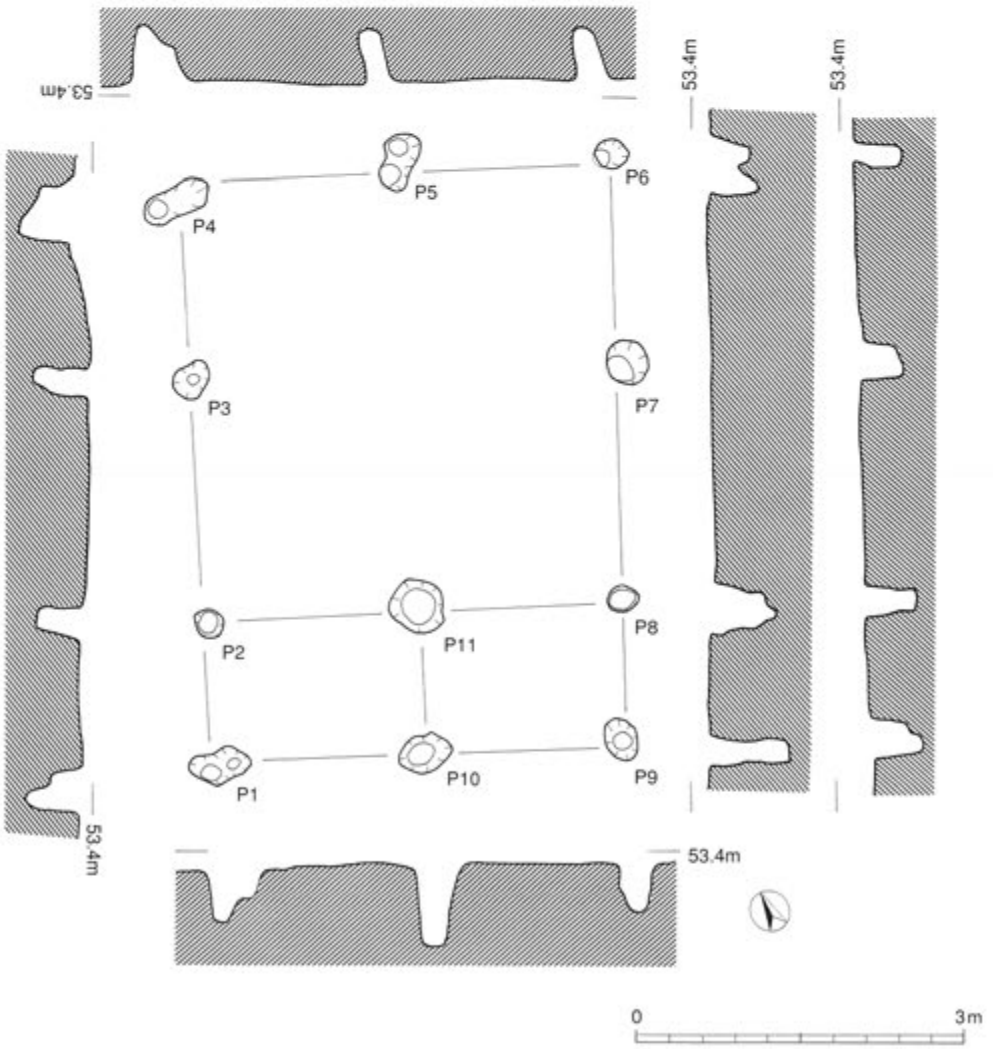


第18図　6号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
	長径	短径	深さ(最深)
1	54	33	48
2	30	24	42
3	39	30	51
4	66	27	48
5	51	27	54
6	27	24	54
7	42	36	36
8	27	24	48
9	42	24	48
10	51	36	72
11	54	42	60

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1～2	138
	2～3	225
	3～4	165
	1～4	528
	6～7	192
	7～8	219
	8～9	138
	6～9	549
	10～11	135
	11～5	411
	10～5	546
梁間方向	1～10	198
	10～9	186
	1～9	384
	4～5	219
	5～6	198
	4～6	417
	2～11	198
	11～8	186
	2～8	384

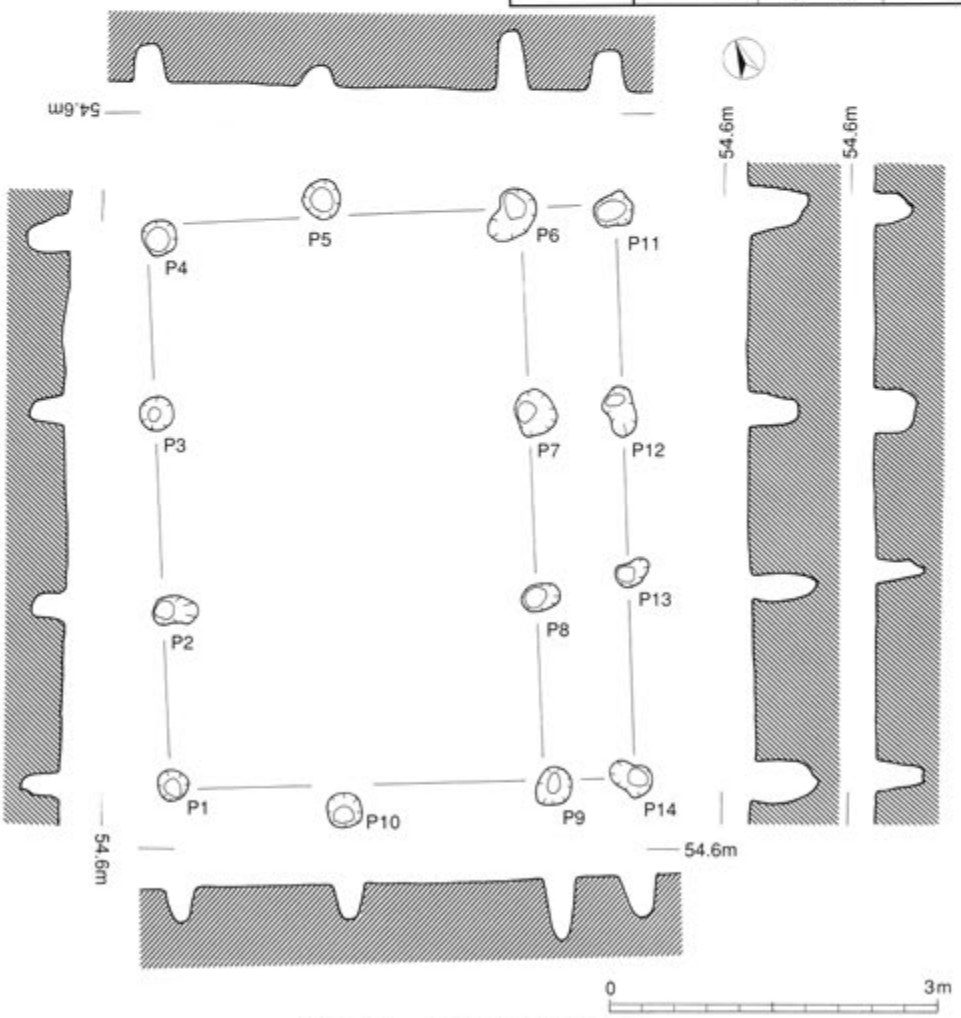


第19図　9号掘立柱建物跡

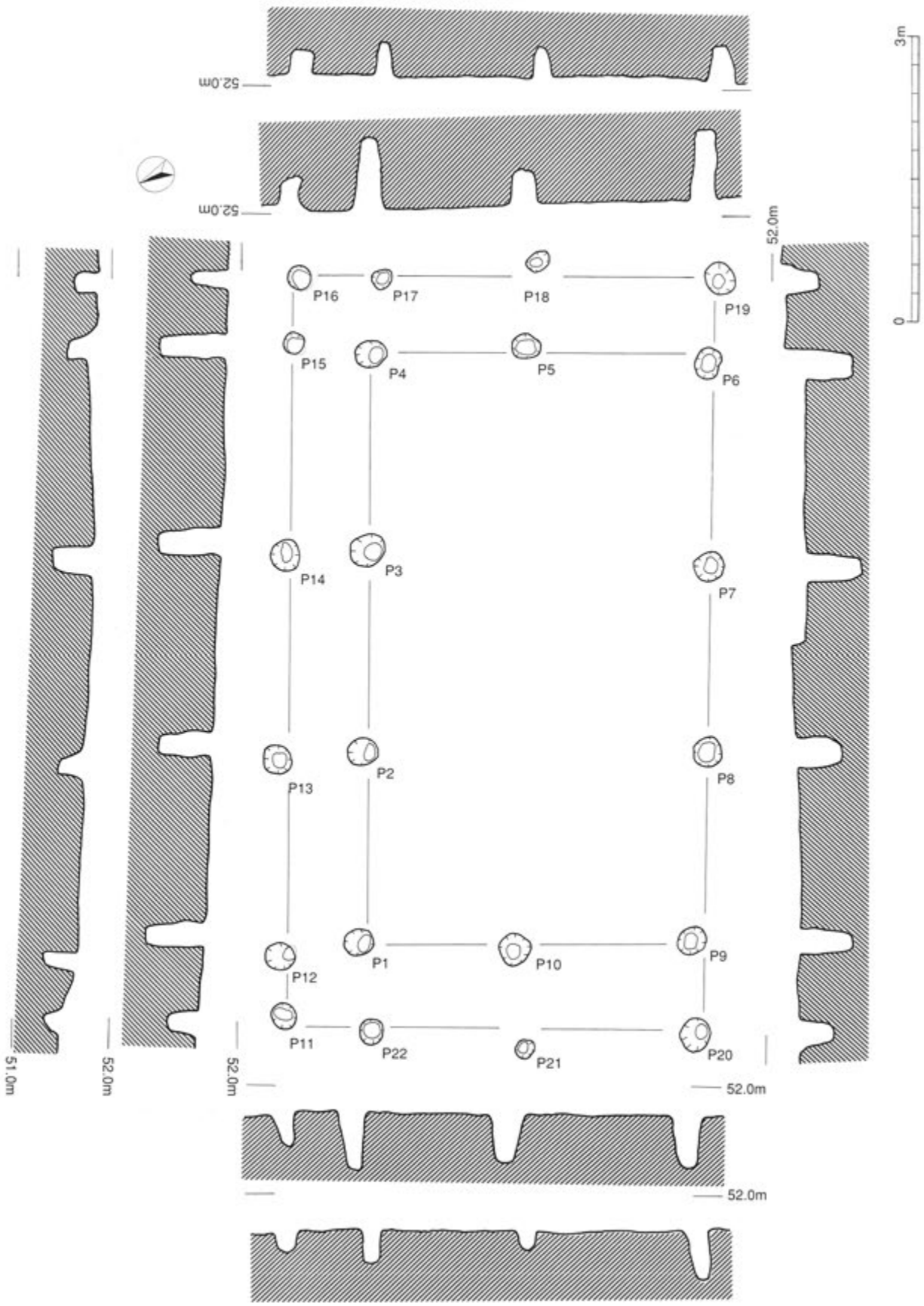
10号掘立柱建物跡柱穴計測表・柱間芯芯間距離計測表

	柱穴番号	柱穴寸法（単位：cm）		
		長径	短径	深さ(最深)
棟　部	1	30	27	30
	2	42	24	30
	3	33	30	30
	4	33	30	36
	5	39	33	18
	6	54	30	54
	7	45	36	45
	8	36	24	57
	9	39	30	60
	10	33	30	30
庇部分	11	54	30	33
	12	48	24	36
	13	48	21	42
	14	42	24	42

	方向	柱穴番号	柱間(単位：cm)
棟　部	桁行方向	1～2	165
		2～3	186
		3～4	162
		1～4	513
		6～7	192
		7～8	174
		8～9	174
		6～9	540
	梁間方向	1～10	159
		10～9	192
		1～9	351
		4～5	162
		5～6	180
		4～6	342
庇部分	桁行方向	11～12	180
		12～13	165
		13～14	189
		11～14	534
	梁間方向	6～11	90
		7～12	84
		8～13	90
		9～14	81



第20図　10号掘立柱建物跡



第21図　12号掘立柱建物跡

2 号掘立柱建物跡柱間芯芯距離

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1 ～ 2	160
	2 ～ 3	200
	3 ～ 4	200
	1 ～ 4	560
	6 ～ 7	200
	7 ～ 8	200
	8 ～ 9	160
	6 ～ 9	560
梁間方向	4 ～ 5	160
	5 ～ 6	160
	4 ～ 6	320
	9 ～10	160
	10～ 1	160
	9 ～ 1	320

7 号掘立柱建物跡柱間芯芯距離

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1 ～ 2	200
	2 ～ 3	200
	3 ～ 4	160
	1 ～ 4	560
	5 ～ 6	160
	6 ～ 7	200
	7 ～ 8	200
	5 ～ 8	560
梁間方向	4 ～ 5	320
	8 ～ 1	320

8 号掘立柱建物跡柱間芯芯距離

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1 ～ 2	168
	2 ～ 3	168
	3 ～ 4	224
	1 ～ 4	560
	6 ～ 7	224
	7 ～ 8	168
	8 ～ 9	168
	6 ～ 9	560
梁間方向	4 ～ 5	200
	5 ～ 6	160
	4 ～ 6	360
	9 ～10	200
	10～ 1	160
	9 ～1	360

11号掘立柱建物跡柱間芯芯距離

方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
桁行方向	1 ～ 2	200
	2 ～ 3	200
	3 ～ 4	200
	1 ～ 4	600
	6 ～ 7	200
	7 ～ 8	200
	8 ～ 9	200
	9 ～ 1	600
梁間方向	4 ～ 5	160
	5 ～ 6	200
	4 ～ 6	360
	9 ～10	200
	10～ 1	160
	9 ～ 1	360

12号掘立柱建物跡柱穴計測表

	柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
		長径	短径	深さ(最深)
棟　部	1	30	27	60
	2	33	27	54
	3	36	33	66
	4	33	27	72
	5	30	24	36
	6	33	24	72
	7	33	30	57
	8	30	27	48
	9	33	27	54
	10	36	33	48

	柱穴番号	柱穴痕（単位：cm）		
		長径	短径	深さ(最深)
庇部分	11	27	24	18
	12	33	30	36
	13	33	30	27
	14	33	30	42
	15	24	21	30
	16	24	24	24
	17	21	18	36
	18	24	18	33
	19	36	33	39
	20	36	33	51
	21	21	18	18
	22	27	24	36

12号掘立柱建物跡柱間芯芯距離

	方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
棟　部	桁行方向	1～2	201
		2～3	213
		3～4	207
		1～4	621
		6～7	219
		7～8	195
		8～9	201
		6～9	615
	梁間方向	1～10	162
		10～9	183
		1～9	345
		4～5	159
		5～6	192
		4～6	351

	方向	柱穴番号	柱間（単位：cm）
庇部分	桁行方向	11～12	66
		12～13	207
		13～14	219
		14～15	222
		15～16	69
		11～16	783
	梁間方向	11～22	93
		22～21	159
		21～20	183
		11～20	435
		16～17	93
		17～18	159
		18～19	186
		16～19	438

イ　溝状遺構（第22図）

本遺跡では中世のものと思われる４条の溝状遺構が検出された。建石ヶ原遺跡の中世遺構配置図を参照すると，溝１と溝２（２ａ・２ｂに枝分かれする）は検出された位置・方向等から西は西原遺跡，東は建石ヶ原遺跡の溝１へぶつかるものと考えられるが確認されていないので断定はできない。溝３は，西側が西原遺跡へ続いていることが，東側は建石ヶ原遺跡の溝の一部とつながっていることが確認された。詳細は小結で述べるが，掘立柱建物跡と切り合っているものがないことなどから道跡としての性格をもつ可能性が最も高いものと思われる。

溝１

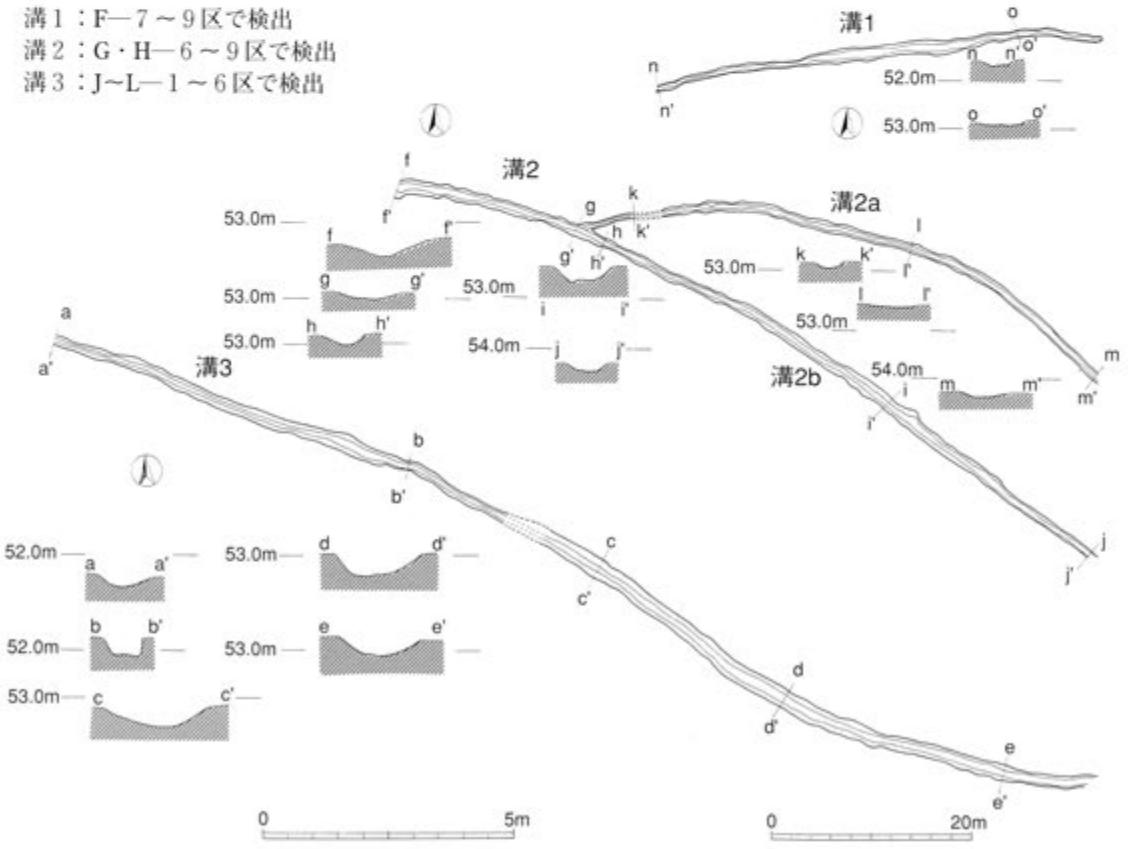
Ｆ－７～９区で検出された。３号掘立柱建物跡の主軸とほぼ平行する位置関係にあると思われる。

溝２

Ｇ～Ｈ－６～９で検出された。Ｇ－７区の途中で２条に分かれ，２ａはＧ－９区まで，２ｂはＨ－９区まで確認できた。２ｂは１号・４～８号・11・12号掘立柱建物跡の各主軸とほぼ平行する位置関係にあると思われる。

溝３

Ｊ～Ｌ－１～６区にわたり検出された。ただし，Ｊ～Ｋ－１～３は西原遺跡の調査区内であり，溝がつながっていることが確認された。また，東は建石ヶ原遺跡の溝１とつながっていることも確認されており，合流の方向性から人々の流れが北へ向かっていることが予想できる。掘立柱建物跡との関係は判断できなかった。



第22図　溝状遺構及び断面図

③　遺物

土師器（第23図）

28～37は糸切底の坏である。28は復元の口径は約11.2㎝，器高は約3.6㎝とやや大型である。外面・内面ともナデ調整による稜線が観察できる。外面の体部中位がやや丸みを帯びている。29は復元口径が約10㎝，復元器高が約３㎝とやや大型である。口縁部がやや外反している。外面・内面ともナデ調整が施されている。特に，体部下半が強くナデ調整が施されており，やや丸みを帯びている。30～35は復元器高が約1.2㎝～1.6㎝とやや低い。いずれも外面・内面ともナデ調整が施されている。また，30は10号掘立柱建物跡の柱穴１から，31は９号掘立柱建物跡の柱穴５から出土した。31・32は体部と底部の境目が窪んでおり，35は底部の内面の端がやや盛り上がっている。36・37は底部である。36は復元底径約８㎝である。外・内面ともナデ調整が施されており，特に，外側面は強いナデ調整が施されている。37は復元底径約6.2㎝である。指によるナデ調整が施されている。38は糸切底の皿である。底面の外側がやや窪んでいる。

青磁（第23図）

39～45はすべて龍泉窯系の青磁碗である。39～43は鎬連弁を施すものである。39・40は全体的に貫入が見られ，41は口縁部に貫入が見られる。復元口径は40が約14㎝，41が約16.6㎝，42が約16.6㎝である。44は無文で，口縁部が外反し平坦な面をもつ。復元口径は約11.6㎝である。45は碗の底部で，高台は断面四角形である。畳付と高台内部は露胎である。９号掘立柱建物跡の柱穴７から出土した。

白磁（第24図）

46～55は灰白色の磁胎に透明の釉が掛かった白磁の皿と思われる。46～52は口縁部の釉が掻き取られた口禿口縁の皿である。46・47は口縁部から底部までの破片である。46は復元の口径が約11.2㎝，底径が約6.2㎝，器高が約2.7㎝で，47は９号掘立柱建物跡の柱穴７から出土したもので，復元の口径が約10.2㎝，底径が約７㎝，器高が約1.8㎝である。48・49は口縁部が外反し，復元口径は48が約9.2㎝，49が約11.4㎝である。50は口縁部がやや外反し，復元口径は約11.6㎝である。51は口縁部は直行し，復元口径は約10.6㎝である。52は口縁部が外反し，復元口径は11㎝である。53～55は底部で，それぞれの底径は53が約6.6㎝，54が約7.8㎝，55が約5.2㎝である。56は碗の底部と思われ，復元底径は約5.2㎝である。５号掘立柱建物跡の柱穴４から出土した。

染付（第24図）

57は16世紀頃，58は近世の染付と思われる。白い素地に青色の顔料で絵付けを行い，その上に透明釉を掛け焼成した磁器である。57は口縁部から底部までの皿の破片で，畳付部は露胎である。外・内面とも貫入が見られる。復元の口径は約12㎝，底径は約６㎝，器高は約3.7㎝である。58は皿の高台部に近い体部片と思われるもので，高台部付近に花文らしきものが描かれている。

須恵器（第25図）

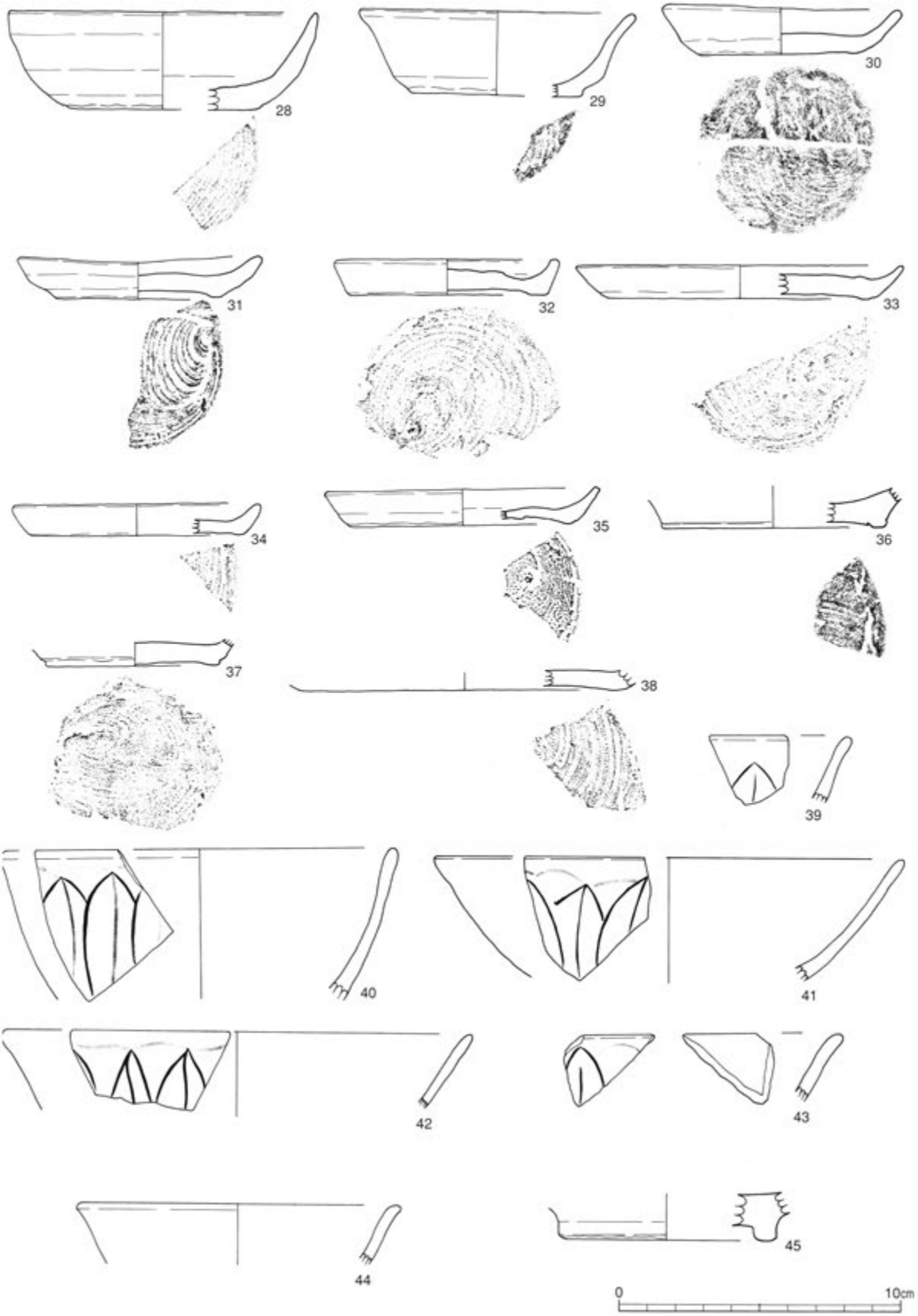
59～62は全て甕の胴部で，59～61は同一個体である。外面は格子目タタキ，内面はナデで器面が調整されている。62は，外面が平行タタキで器面が調整されており，内面は同心円状の当て具痕が見られる。

陶器（第25図）

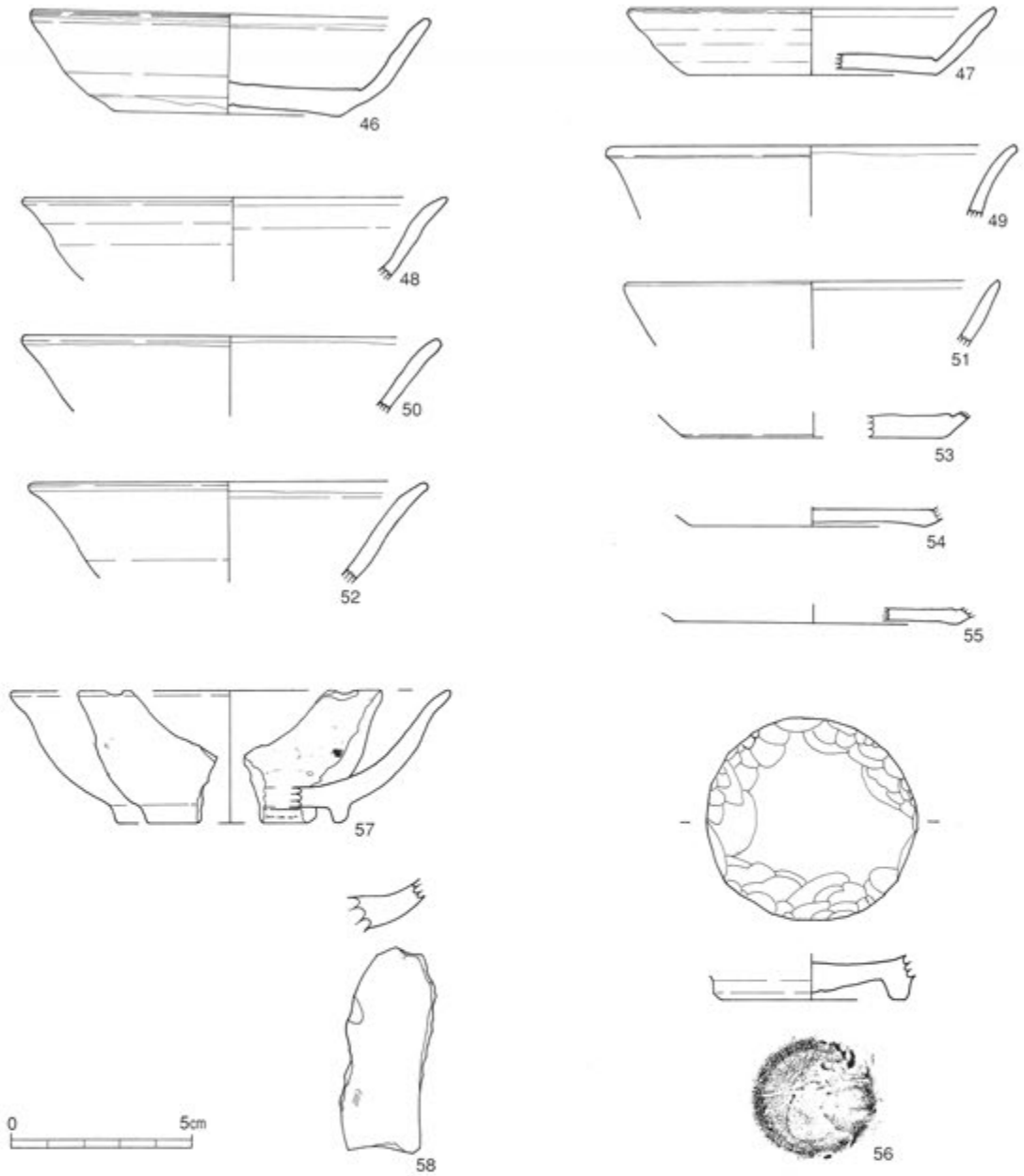
63は色調が灰褐色の鉢の口縁部で，復元口径が約17.1㎝である。64は色調が茶褐色をした東播磨系こね鉢の口縁部で，復元口径が約26.6㎝ある。１号掘立柱建物跡の柱穴８から出土した。65は色調が茶褐色をした備前焼と思われる擂鉢の底部で復元底径が約９㎝である。

土錘・滑石製品（第26図）

66はやや扁平な土製品で両面に紐かけと思われる溝を有するもので，土錘と考えられる。67は外面にススが付着した滑石製石鍋片，68は把手付の滑石製石鍋の二次加工品である。いずれも掘立柱建物跡周辺のⅡ層から出土した。



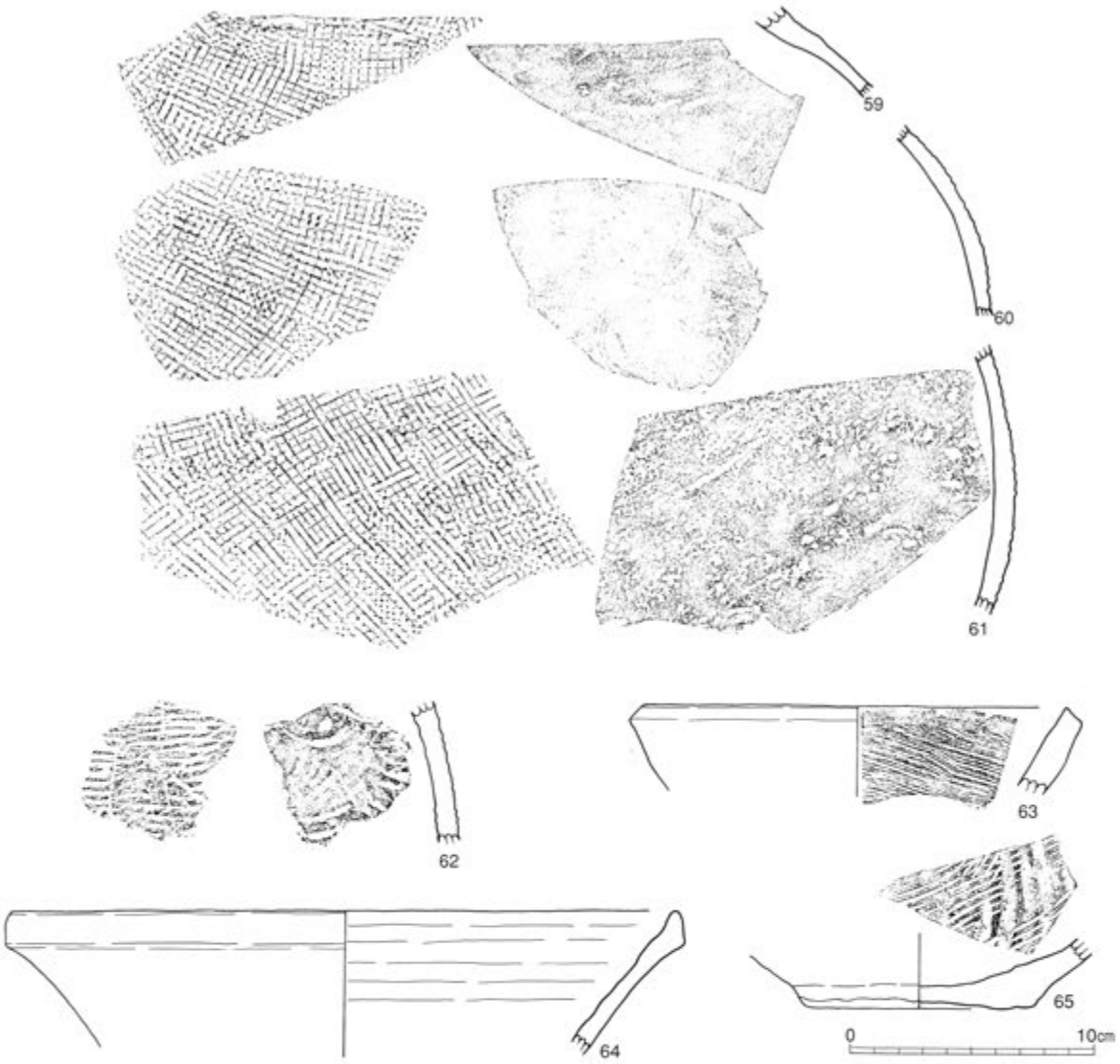
第23図　中世出土遺物１（土師器・青磁）



第24図　中世出土遺物２（白磁・染付）

土師器観察表

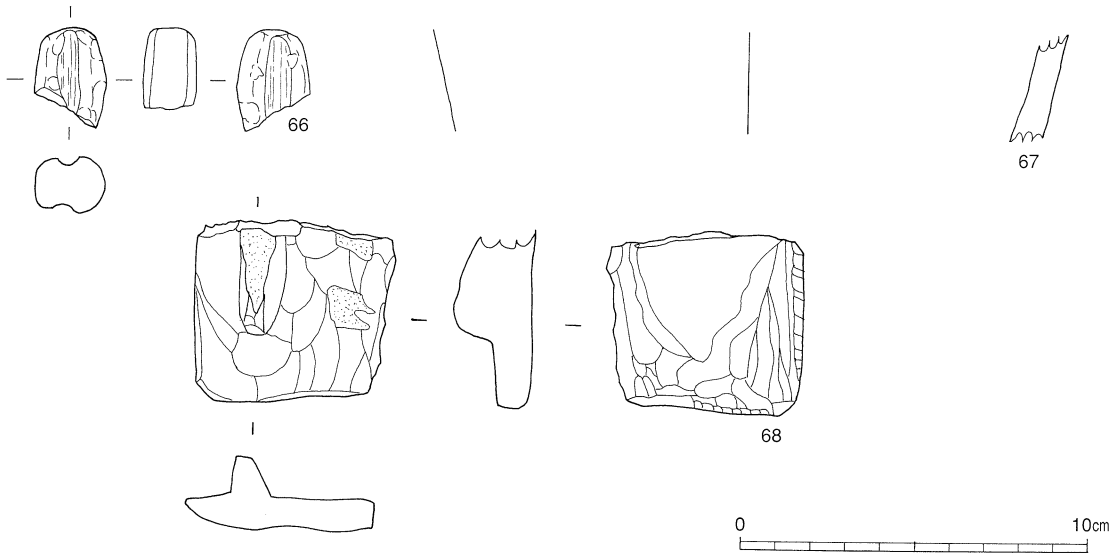
挿図番号	遺物番号	出土区 遺構	層位	色調 外	色調 内	調整 外面	調整 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	焼成	底部	備考
第23図	28	J－6	Ⅱ	白濁	淡黄色	ナデ	ナデ(胴),ケズリ(底)	11.2	7.2	3.6	良	糸切	坏
	29	J－6	Ⅱ	淡黄色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	10	6.4	3	〃	糸切	
	30	SB10P1	－	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	8.4	6	1.6	〃	糸切	
	31	SB09P5	－	明茶褐色	明茶褐色	ナデ(胴),ケズリ(底)	ナデ	8.8	6	1.6	〃	糸切	
	32	I－6	Ⅲ	淡黒褐色	淡黒褐色	ナデ(胴),ケズリ(底)	ナデ	8	7.2	1.2	〃	糸切	
	33	－	一括	淡黄色	淡黄色	ナデ(胴),ケズリ(底)	ナデ	11.6	9.6	1.2	〃	糸切	
	34	H－8	Ⅲ	淡黄色	茶褐色	ナデ(胴),ケズリ(底)	ナデ	8.8	7.6	1.2	〃	糸切	
	35	G－9	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	ナデ(胴),ケズリ(底)	ナデ	10	8	1.2	〃	糸切	
	36	SB09P11	－	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	－	8	－	〃	糸切	
	37	J－6	Ⅱ	茶褐色	茶褐色	底部ケズリ	ナデ	－	6.2	－	〃	糸切	
	38	J－6	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	底部ケズリ	ナデ	－	11.6	－	〃	糸切	Ⅲ



第25図　中世出土遺物３（須恵器・陶器）

青磁観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	法量（cm）			胎土	釉薬	備考
				口径	底径	器高			
第23図	39	J－5	Ⅱ	－	－	－	灰白色	灰褐色	碗，龍泉窯系
	40	G－6	Ⅱ	14	－	－	灰褐色	－	
	41	H－6	Ⅱ	16.6	－	－	灰褐色	－	
	42	J－6	Ⅲ	16.6	－	－	灰白色	－	
	43	I－5	Ⅲ	－	－	－	灰褐色	灰色	
	44	J－6	Ⅱ	11.6	－	－	灰白色	青色	
	45	SB09P7	－	－	7.8	－	灰褐色	－	



第26図　中世出土遺物４（土錘・滑石製品）

白磁・染付観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	法量（cm）			胎土	釉薬	備考
				口径	底径	器高			
第24図	46	Ⅰ－6	Ⅱ	11.2	6.2	2.7	灰白色	—	Ⅲ，口禿
	47	SB09P 7	—	10.2	7	1.8	灰白色	—	
	48	J－6	Ⅱ	9.2	—	—	灰褐色	—	
	49	H－7	Ⅱ	11.4	—	—	灰白色	—	
	50	Ⅰ－8	Ⅱ	11.6	—	—	灰白色	—	
	51	H－7	Ⅱ	10.6	—	—	灰白色	—	
	52	H－7	Ⅱ	11	—	—	灰白色	—	
	53	H－7	Ⅱ	—	7.2	—	灰白色	—	Ⅲ
	54	H－7	Ⅱ	—	6.6	—	灰白色	—	
	55	H－6	Ⅱ	—	7.8	—	灰白色	—	
	56	SB05P 4	—	—	5.2	—	灰白色	—	碗
	57	Ⅰ－8	Ⅱ	12	6	3.7	灰褐色	透明釉	染付，Ⅲ，16世紀頃
	58	—	表採	—	—	—	灰褐色	透明釉	染付，Ⅲ，近世

須恵器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	調整		備考
				外面	内面	
第25図	59	—	表採	格子目タタキ	ナデ	甕
	60	—	表採	格子目タタキ	ナデ	
	61	—	表採	格子目タタキ	ナデ	
	62	J－3	Ⅲ	平行タタキ	同心円状の当て具痕	

陶器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	法量（cm）			色調	備考
				口径	底径	器高		
第25図	63	Ⅰ－5	Ⅱ	17.1	—	—	灰褐色	鉢
	64	SB01P 8	—	26.6	—	—	茶褐色	東播磨系こね鉢
	65	—	表採	—	9	—	茶褐色	擂鉢（備前焼）

土錘・滑石製品観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	備考
第26図	66	土錘	Ⅰ－5	Ⅲ	—
	67	石鍋片	H－6	Ⅲ	滑石製品
	68	石鍋二次加工品	H－7	Ⅲ	滑石製品

第２節　西原遺跡

１　遺跡の立地（第１図）

西原遺跡は，吹上町大字和田字西原に所在し，農業大学校の幹線道路及び校道の建設地である。遺跡の東側は古里遺跡に隣接し，西端及び南端は金峰町との町境となっている。台地の縁辺部に当たるため，起伏の大きい傾斜地形が大半を占める。

２　調査概要

調査は，平成11年度に幹線道路部分の確認調査を行った。幹線道路部分の大半が盛土によって建設されるため，平成10年度に古里遺跡で検出された溝状遺構の延長部を検出する作業と遺物包含層の確認のみで終了した。その結果，溝状遺構の延長部分の調査については，遺構を検出することはできなかったが，校道建設予定地において本遺跡につながっていることが確認された。なお，溝状遺構については，古里遺跡でまとめて述べてある。遺物包含層の調査については，トレンチ３か所を設定し２か所から縄文時代の遺物が数点出土した。しかし，遺物の出土状況と地形から判断して遺跡の中心部である可能性は低いことや，幹線道路建設は盛土工法で行われること等から，関係機関との協議の結果，本調査は実施せず調査は終了した。

第３節　小結

古里遺跡は遺跡の広さにしては遺物の出土範囲が狭く量も多くはなかった。調査の結果，本遺跡は縄文時代早期～中世までの複合遺跡であり，遺構・遺物の主体となるものは中世であった。特に注目すべきは12棟の掘立柱建物跡とそれを取り囲むようにして検出された４条（溝２が途中で２条に分岐，２ａ・２ｂとした）の溝状遺構である。これらの中世の遺構を中心として調査の成果と今後の課題を記しまとめとする。

１　掘立柱建物跡について

掘立柱建物群は，検出面がⅡ層及びⅢ層上面ということ及び周辺や柱穴中から中世の遺物が出土していることから，中世のものであると判断した。また，６～８号掘立柱建物跡が重複した形で検出されたこと，設定した東西方向のグリッド線に対する主軸の傾きが，３号（約６度），１号・６号（約13～18度），４号・５号・７号・８号・11号（約24～26度），12号（約33度），２号・９・10号（約107～110度）に違いがあること等から３～５の時期にわたると思われる。ただし，建物の新旧については判断できなかった。掘立柱建物跡は，本遺跡以外にも馬塚松遺跡（15棟）・諏訪牟田遺跡（11棟）・諏訪前遺跡（1棟）・諏訪脇遺跡（18棟）・小中原遺跡(9棟)・大門口遺跡（15棟）・市堀遺跡（９棟）・頭無迫田遺跡（１棟）・神原遺跡（３棟）と農業開発総合センター遺跡群内のほとんどの遺跡で検出されている。したがって，本遺跡で検出された掘立柱建物跡が遺跡群全体の中でどのような意味や性格をもっているのかは現段階では不明である。今後，農業開発総合センター遺跡群の報告書刊行を経る過程で明らかにしていく必要がある。

２　溝状遺構について

本遺跡の４条の溝状遺構は埋土から遺物が出土していないが，検出面がⅡ層～Ⅲ層上面であることから中世のものと考えた。広がりについては本文で記したとおりであるが，硬化面及び波板状凹凸面を伴っていない。このような溝状遺構を道跡とする１つの基準として考えられていることに，①直角に曲がる部分がカーブを切っている。②バイパスを設けている。③枝分かれがある。④断面形成が円弧状を呈する。⑤ある程度の長さをもつ等がある[1)]。このことから，あくまでもひとつの考えではあるが本遺跡の溝状遺構は，道跡としての可能性が最も高いと考える。

また，掘立柱建物跡の主軸との関係をみてみると，断定はできないが３号掘立柱建物跡と溝１が，１号・４～８号・11・12号掘立柱建物跡と溝２ｂが，２号・９号・10号掘立柱建物跡と建石ヶ原遺跡の溝１がほぼ平行の位置関係にある。このことから３～５の時期にわたり，掘立柱建物群を取り囲むように形成されたと考えられる。この溝状遺構についても，掘立柱建物跡と同様，農業開発総合センター遺跡群内の他の遺跡でも検出されているので，詳細については今後明らかにしていく必要がある。

註

１）東　和幸　2004
「溝状遺構の性格」『縄文の森から』
第３号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

あとがき

平成８年度の確認調査から始まった農業開発総合センター建設に伴う遺跡群の発掘調査が終了したのは平成15年度でした。平成15年度には，農業大学校が開校し，活気あふれる声が聞こえるようになり，農業開発総合センターの大きな一歩が踏み出されました。

発掘調査は24遺跡にわたり行われ，旧石器時代から中世・近世までの多くの貴重な資料が得られました。報告書作成に関わる作業は，平成15年度に発掘調査と平行しながら実施し，今年度から本格的に報告書刊行に取り組むことになりました。

今年度は，吹上町に所在する７遺跡について刊行することになりました。複数の遺跡に取り組んだため，遺物や図面が錯綜するなど思うように作業が進みませんでしたが，何とか刊行にこぎつけました。

最後に，報告書刊行にあたり，整理作業に従事していただいた方々をはじめ多くの方々に御指導・御助言ならびに御支援・御協力をいただいたことに感謝の意を表したいと思います。

鹿児島県立埋蔵文化財文化センター発掘調査報告書（83）

農業開発総合センター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

農業開発総合センター遺跡群Ⅰ

第１分冊

（窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡）

発行日　平成17年３月25日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4461
鹿児島県国分市上之段1175－1
TEL（0995）48-5811
印刷所　株式会社　秀巧社印刷
〒890－0072
鹿児島県鹿児島市新栄町25－７
TEL（099）257-3300